

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	菅井健太
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 248 号
学位授与の日付	2018 年 4 月 25 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	ブルガリア語ブラネシュティ方言における補語の接語重複一言語接触と文法化—

Name	Sugai Kenta
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 248
Date	April 25, 2018
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	Clitic Doubling of Objects in the Bulgarian Dialect spoken in Brănești: Language Contact and Grammaticalization

ブルガリア語ブラネシュティ方言における
補語の接語重複
—言語接触と文法化—

菅井 健太

目次

0. 本論文の構成.....	5
1. はじめに.....	6
1.1. 研究対象.....	6
1.2. 研究の背景.....	6
1.3. 本論文の目的.....	9
1.4. 本論文の意義.....	10
1.5. 研究方法.....	11
1.6. 用語・表記・略語.....	12
1.6.1. キリル文字.....	12
1.6.2. 例文の表記について.....	14
1.7. ブルガリア語について.....	17
1.7.1. ブルガリア語概要.....	17
1.7.2. ブルガリア語の方言.....	18
2. 補語の接語重複.....	21
2.1. 一般的特徴.....	21
2.1.1. 接語重複とは.....	21
2.1.2. 接語重複の研究史.....	24
2.2. 標準ブルガリア語の接語重複.....	28
2.2.1. 接語の一般的特徴.....	28
2.2.2. 人称代名詞接語形と非接語形.....	29
2.2.2.1. 形態と用法.....	29
2.2.2.2. 語順の特徴.....	35
2.2.2.2.1. 概要.....	35
2.2.2.2.2. 例外的な語順.....	40
2.2.3. 接語重複について.....	44
2.2.3.1. 概要.....	44
2.2.3.2. 補語以外の接語重複.....	44
2.2.3.3. 接語重複の義務性.....	46
2.2.3.4. 接語重複の様々な側面.....	53
2.2.3.4.1. 語順と格標示.....	53
2.2.3.4.2. 定性と特定性.....	57
2.2.3.4.3. トピック.....	60
2.2.4. 接語重複の構造.....	67
2.2.4.1. 語順.....	67
2.2.4.2. 動詞前と動詞後.....	69

2.2.4.2.1. 動詞前.....	70
2.2.4.2.1.1. 2つの接語重複構造.....	70
2.2.4.2.1.2. HTLD と CLLD.....	73
2.2.4.2.1.3. Na-drop 現象.....	79
2.2.4.2.1.3.1. 概要.....	79
2.2.4.2.1.3.2. 形式上の特徴.....	80
2.2.4.2.2. 動詞後.....	84
3. ブラネシュティ方言と補語の接語重複.....	88
3.1. ブラネシュティと方言.....	88
3.1.1. ブラネシュティについて.....	88
3.1.2. フィールド調査の概要.....	91
3.1.3. ブラネシュティ方言.....	92
3.1.3.1. 先行研究.....	92
3.1.3.2. 文法と音声の特徴.....	93
3.1.3.2.1. 文法の特徴.....	94
3.1.3.2.2. 音声の特徴.....	96
3.1.3.2.3. 語彙の特徴.....	97
3.1.3.2.4. シリストラ変種とルセ変種.....	97
3.1.3.2.5. まとめ.....	98
3.2. 補語の接語重複の構造.....	99
3.2.1. 人称代名詞接語形.....	99
3.2.1.1. 一般的特徴.....	99
3.2.1.2. 語順.....	102
3.2.1.3. 所有の用法.....	110
3.2.1.3.1. 概要.....	110
3.2.1.3.2. 不一致定語の接語重複.....	113
3.2.1.4. ルーマニア語との対照.....	116
3.2.1.5. まとめ.....	119
3.2.2. 前置詞 <i>пъ/рă</i>	120
3.2.2.1. 基本的な特徴.....	120
3.2.2.2. <i>пъ/рă</i> の用法.....	122
3.2.2.2.1. 代名詞.....	122
3.2.2.2.2. 代名詞以外.....	127
3.2.2.2.3. 分析.....	131
3.2.2.3. <i>пъ/рă</i> と接語重複.....	137
3.2.2.3.1. <i>пъ/рă</i> を伴う直接補語の接語重複.....	138

3.2.2.3.2. пь/pǎ を伴わない直接補語の接語重複.....	142
3.2.2.3.3. 分析のまとめ.....	144
3.2.3. 文法化重複.....	146
3.2.4. 動詞前.....	150
3.2.4.1. 動詞前の補語の接語重複.....	150
3.2.4.2. HTLD.....	153
3.2.4.3. Na-drop 現象.....	156
3.2.4.3.1. 一般的特徴.....	156
3.2.4.3.2. 文中での位置.....	157
3.2.4.3.3. その他の特徴.....	162
3.2.4.4. ルーマニア語の影響.....	162
3.2.4.5. まとめ.....	164
3.2.5. 動詞後.....	165
3.2.5.1. 動詞後の補語の接語重複.....	165
3.2.5.2. RD.....	167
3.2.5.3. まとめ.....	173
3.3. 補語の接語重複の機能.....	174
3.3.1. 動詞前.....	174
3.3.1.1. トピック.....	174
3.3.1.2. フォーカス.....	179
3.3.2. 動詞後.....	184
3.3.3. まとめ.....	193
4. 接語重複と文法化.....	194
4.1. 文法化.....	196
4.1.1. 文法化をめぐって.....	196
4.1.2. 接語重複の文法化.....	202
4.1.2.1. ブルガリア語とマケドニア語.....	202
4.1.2.1.1. 概要.....	202
4.1.2.1.2. 標準マケドニア語の記述.....	203
4.1.2.1.3. 標準ブルガリア語の記述.....	204
4.1.2.1.4. まとめ.....	205
4.1.2.2. 人称代名詞接語形の位置.....	206
4.1.2.3. 他動詞性の標示.....	208
4.1.2.4. 多人称一致動詞.....	212
4.1.2.5. 再分析の過程.....	216
4.1.2.6. まとめ.....	218

4.1.3. 方言と接語重複の文法化.....	219
4.1.3.1. 方言区分.....	219
4.1.3.2. 接語重複の方言分布.....	222
4.1.3.3. 方言地図による分析.....	223
4.1.3.4. バルカンの多言語環境.....	235
4.1.3.5. まとめ.....	237
4.2. 言語接触と文法化.....	239
4.2.1. 理論的背景.....	239
4.2.2. ブラネシュティ方言の場合.....	246
4.2.3. まとめ.....	252
4.3. ブラネシュティ方言の接語重複の文法化.....	253
4.3.1. 文法化のパラメーター.....	253
4.3.2. 文法化の程度—ルーマニア語との対照分析—.....	260
4.3.2.1. ブラネシュティ方言の接語重複の文法化の程度.....	261
4.3.2.2. ルーマニア語の pe を伴う直接補語の接語重複.....	263
4.3.2.3. ブラネシュティ方言との対照.....	266
4.3.3. まとめ.....	271
5. おわりに.....	272
5.1. 結論.....	272
5.2. 今後の課題と展望.....	276
参考文献.....	279
謝辞.....	292
資料.....	294

0. 本論文の構成

はじめに、本論文の構成について述べる。

第1章は、本論への導入部分として位置づけ、ここで本研究の背景や目的、意義について述べる。また、本論文において用いる文字や様々な記号、略語を整理すると同時に、本研究の前提的知識となるブルガリア語についての情報も提示する。

第2章では、本論文で研究対象とする「補語の接語重複」の概要を述べる。先行研究の記述にもとづいて、標準ブルガリア語における「補語の接語重複」の特徴を様々な観点からまとめる。これは、次章以降に展開される本論の前提知識となる。

第3章では、ブルガリア語ブラネシュティ方言とフィールド調査の概要を述べたうえで、ブラネシュティ方言における「補語の接語重複」の構造及び機能の分析を行う。

第4章では、「補語の接語重複」を文法化の観点から分析し、ブラネシュティ方言の「補語の接語重複」の文法化が言語接触を通して推し進められたことを論じる。

第5章では、本論文で行った研究の結果をまとめるとともに、本論文で取り扱えずに残された今後の課題や展望についても述べる。

1. はじめに

第1章では、本研究の対象、背景、目的、意義について述べるとともに、本論文において用いる文字や様々な記号、略語を整理する。

また、1.7. 「ブルガリア語について」では、本研究の前提的知識となるブルガリア語の概要に加え、特にブルガリア語の方言についてまとめる。

1.1. 研究対象

本論文の研究対象は、ルーマニア国内のブラネシュティにおいて話されるブルガリア語方言にみられる補語の接語重複である。

1.2. 研究の背景

20世紀初頭の H. C. Трубецкой による「言語連合¹」の概念の提唱²と、デンマークのロマンス語学者 K. Sandfeld による『バルカン・フィロロジー：その成果と諸問題の概観』(Sandfeld 1930)の出版をもって、言語学の一分野としてバルカン言語学が確立した(cf. 佐藤 1983; 野町 2010)。

バルカン言語学は、バルカン諸語に共通して見られる特徴（以後、バルカニズム、またはバルカン言語圏現象と呼ぶ）の研究を主要な課題としている。バルカニズムは、語彙、音声、文法と多岐にわたるが、そのなかで、補語の接語重複(clitic doubling)³はかなり早い時期からバルカニズムの一つとして数えられ、盛んに研究が行われてきた。接語重複が、国家語・非国家語、標準語・非標準語の別を問わず、広くバルカン諸語に観察される言語現象であることが、その注目の要因の一つであろう。

本論文では、バルカン諸語のうちブルガリア語にみられる接語重複の研究を

¹ 言語連合(Sprachbund; linguistic area)とは、従来の言語系統に基づいた言語のグループ(Sprachfamilien)とは異なり、文化的・地域的に共有される特徴に基づく言語のグループを指す用語である。言語連合の諸言語は、次の(i)にあるような特徴を有する(cf. 野町 2010: 100-101)。

(i) 言語連合の諸言語の特徴（野町 2010: 100）

a) 文構造と造語法において著しい類似を示すが、同系統の言語に見られるような有機的な対応はない。

b) 基礎語彙は大きく異なるが、共通の文化に属する語彙を多く有している。

² 1923年の論文「バベルの塔と言語混合」において初めて言及された(cf. トゥルベツコイ 1992; 佐藤 1983; 野町 2010)。

³ この用語の定義や名称に関する議論については、2.1.1. 「接語重複とは」を参照されたい。

行う。ブルガリア語の接語重複は、ブルガリア本国はもとより、欧米諸国などでも盛んに研究が行われており、当該分野における研究はかなり蓄積されている。しかし、主たる研究対象とされてきたのは標準ブルガリア語のうち、特に書き言葉にみられる接語重複であり、話し言葉やブルガリア語諸方言を対象とした研究は近年になってようやく注目されるようになった。本論文では、ブルガリア語の方言、特に今まで補語の接語重複の研究対象としてほとんど顧みられることがなかったブルガリア国外に孤立的に分布しているブルガリア語方言の一つを研究対象とし、その方言において観察される補語の接語重複の研究を試みる。

ブルガリア語は、ブルガリア国内にとどまらず、周辺バルカン諸国を中心にブルガリア国外でもマイノリティの言語として話されている。なかでも、ドナウ川を挟んで北に隣接するルーマニアには、多くのブルガリア語方言話者がおり、ブルガリア語方言を現在まで保持している。ルーマニアに分布するブルガリア語方言の多くは、集落ごとに孤立的に分布している。特にドナウ川の対岸にあたるルーマニア南部の地域（ワラキア）には、ドナウ川を渡って移住したブルガリア人移民によって数多くの集落が形成された(cf. Младенов 1993: 12-16, 31-47)。

ブルガリア人のルーマニアへの移住の主な要因は、特に 18 世紀から 19 世紀に数度にわたって繰り返された露土戦争であると考えられている。実際に、移住の第一波は、1774 年の露土戦争平和条約（キュチュク・カイナルジ条約）締結後にみられるという(Младенов 1993: 8)。その後も、露土戦争のたびに、戦火を逃れてドナウ川の北へと移るブルガリア人移民の波が見られた。ただし、彼らに移住を決意させた理由は、露土戦争以外にもあり、それは経済的な要因であった。オスマン帝国支配下でブルガリア人農民たちは非常に厳しい生活環境にあったが、ルーマニアではブルガリア人農民の移住者は税制の面で優遇されることから、それを目当てに移住する農民が多かったという(Младенов 1993: 10-11)。

また、先に移住した親戚や同郷の者を頼って、後から移住するものも多く、ブルガリアがオスマン帝国支配から解放される 19 世紀後半までに、相当数のブルガリア人がドナウ川を渡りルーマニア側に移住したと考えられている。その具体的な数は、資料や研究によって差異があるものの、Младенов (1993: 16)によれば、1838 年にワラキアには、7 万から 10 万人近いブルガリア人住民がいたという。とりわけ、イルフォヴ県（ブカレストを含む）におけるブルガリア人住民の割合は最も高く、全 37,491 家族のうち 3,895 家族がブルガリア人である。これは、イルフォヴ県の当時の人口のおよそ 10%をブルガリア人がしめていたことを意味している。

彼らの多くは、ブルガリア人(セルビア人)というアイデンティティを持ち⁴、家庭や仲間内ではブルガリア語を、公共の場ではルーマニア語を使い分けて暮らしてきた。しかし、21世紀初頭の現在では、ルーマニア語話者との同化が進行した集落も少なくなく、ブルガリア語方言を保持するのは概して高齢者に限定される。また、ブルガリア語方言を維持する話者は、ルーマニア語も自由に用いることができる、いわゆるバイリンガルである。それゆえ、彼らの用いるブルガリア語方言には言語接触によって生じたと考えられる言語特徴も見て取ることができる。

本論文筆者はルーマニアに分布するブルガリア語方言の調査を複数回に分けて実施した。その結果、次のような現状が明らかになった(フィールド調査についての詳細は、3.1.「ブラネシュティと方言」を参照のこと)。まず、ルーマニアの首都ブカレスト近郊に位置するブラネシュティという集落では、ブルガリア語方言を維持するのは高齢者に限定される。ただし、若い世代がブルガリア語方言を保持しているような集落もないわけではない。たとえば、バレニ・スルビ(ルーマニア・ドゥンボビッツァ県)がそれに該当し、本論文筆者がインタビューした小学生のインフォーマントは、当地のブルガリア語方言を自由に話すことができた。一方で、もともとブルガリア語話者が居住していたことが知られるキャジュナ(ルーマニア・イルフォヴ県)では、少なくとも本論文筆者の調査では、年配の世代でさえもブルガリア語方言話者を見つけることができなかった。このようにブルガリア語方言の維持の程度は集落によってかなり異なる。このなかでとりわけ、方言保持者が高齢者に限られるような集落における方言の記述や研究は急務である。

⁴ ルーマニア語で *sârbi* 「セルビア人」という自称がいくつかの集落で見られ、彼らが話す言葉もまた *sârbește* 「セルビア語」とよばれる場合がある。もともとは、移住先のルーマニア人住民から「セルビア人」(17世紀頃から南スラヴ人の総称として用いられた)と呼ばれていたが、のちに多くの集落でそれを自称とした(Младенов 1993: 7)。「セルビア人」という名称の由来には様々な説がとらえられているが(Младенов 1993: 24-31; Mihăilă 1960: 68; Цонев 1984: 124)、それが当時のルーマニアにおいて行政文書をはじめ、広く用いられたことは確かである。もっとも、ルーマニアの特に南部地域(ワラキア)において、「セルビア人」と言われていた人々がブルガリア移民であることは、歴史的及び、言語的な観点から明白であり、それが定説となっている。

本論文筆者が調査したバレニ・スルビは、「セルビア人」を意味する「スルビ」を集落の名前としているが、彼らが話す言葉はセルビア語ではなく、ブルガリア語の方言である(Стойков 1970)。あるインフォーマントは、トルコ支配から逃れてきたブルガリア人であることを隠すために、あえてセルビア人と呼ぶようになった、と説明してくれた。

本論文では、以上のような背景から、近い将来に失われてしまう運命にある、ブラネシュティで話されるブルガリア語方言（以下、ブラネシュティ方言と呼ぶ）を対象とした研究を行う。

1.3. 本論文の目的

前節(1.2.)で述べた研究の背景から、本論文の目的は次の2点にまとめられる。

①消滅の危機にある、ブルガリア国外で話されるブルガリア語方言（ブラネシュティ方言）を記述し、分析すること。

②ブラネシュティ方言にみられる補語の接語重複を例に、言語接触による言語変化の仕組みを明らかにすること。

①について、話者が高齢者に限られているという現状から、ブラネシュティ方言は消滅の危機に瀕していると考えられるため、その方言のデータを収集し、記述することは喫緊の課題である。本論文では、筆者のフィールド調査で収集されたデータをもとに(cf. 3.1.2.)、ブラネシュティ方言における補語の接語重複の記述を中心に行う。標準語やブルガリア国内の同系統の方言との比較を通じた分析を行うことで、ブラネシュティ方言の特徴を明らかにする。

②については、ブラネシュティ方言の話者の祖先がルーマニアに移住して以来、ブラネシュティではルーマニア語との二重言語使用が続いている。これは、ブラネシュティ方言がルーマニア語と絶えず言語接触の状態にあるということの意味する⁵。言語接触によって引き起こされうる言語変化の一つとして文法化⁶がある。ブラネシュティ方言にみられる補語の接語重複を例にして、言語接触を通じてどのように文法化が推し進められるかを解明する。

⁵ 本論文では、言語接触は、「二つ以上の言語が同一人物によって二者択一的に用いられている場合、それらの言語は接触しているという。したがって、言語使用者個人が接触の場所である」(Weinreich 1968: 1)と考える（以下、外国語文献の引用の際に行う和訳は、特に指示のない限り、本論文筆者によるものとする）。言語接触については、4.2. 「言語接触と文法化」も参照のこと。

⁶ 本論文では、文法化は、「語彙的な形式から文法的な形式へ、文法的な形式からより高度に文法的な形式への発展のプロセス」(Heine, Kuteva 2005: 14)であると考えられる。文法化については、4.1.1. 「文法化をめぐる」において詳細に述べる。

1.4. 本論文の意義

本論文の意義として、大きく分けて次の3点を挙げることができる。

①危機言語の記述・研究である点

すでに前節までで述べたように、ブラネシュティ方言は、危機言語である。本論文筆者が行ったフィールド調査において収集したデータをもとに(cf. 3.1.2.「フィールド調査の概要」)、危機言語であるブラネシュティ方言を記述・研究することは、言語学的な側面以外においても、極めて重要な意味を持つ。

言語の消滅は、その言語を話す人々の文化や世界観など、文化人類学的な側面から見ても、様々なことが失われることを意味する。つまり、言語そのものだけでなく、それに関係するあらゆることが失われてしまうという事態につながるのである。人類の文化的遺産ともいえる言語文化の多様性が失われることは、人類にとって大きな損失である。言語が消滅する前に、それを記録して残すことは、その言語の話者の文化的な遺産を保存することにつながり、またそれによってその遺産を次の世代に引き継いでいくことができる。

本研究でブラネシュティ方言の記述・研究を行うことは、ブラネシュティの言語文化の保存・記録に大きな意義を持つと言える。

②言語接触と言語変化の具体的な事例を提示する研究である点

本論文は、ルーマニア語との言語接触によってブラネシュティ方言に生じる言語変化の具体的な事例を提示するという点で、バルカニズムの研究はもとより、言語接触と言語変化の研究の分野全体に多大な貢献をなす。なかでも、バルカニズムの研究にとって特に有意義であるのは、補語の接語重複を対象とした言語変化の研究であるためである。

また、本研究が標準語を対象として行われる従来と同じアプローチの研究ではなく、最近まであまり顧みられることのなかった諸方言、特に国外の方言を対象とした新しいアプローチによる研究である点⁷、本論文の学術的意義は大きい。

③ブルガリア語学、特に方言学の研究に貢献するという点

ブラネシュティ方言の話者の祖先がドナウ川を渡ってルーマニアに移住したのは、標準語が形成される前であり、標準語が形成された後も、ブラネシュティで標準語教育が行われることはなく、ブラネシュティ方言と標準語との接触が

⁷ バルカン諸語の補語の接語重複の総合的な研究を行った Лопашов (1978: 125) は、今後の研究課題として、方言を研究対象とすべきであることを述べている。

おこなわれることは基本的になかった(cf. 3.1.3. 「ブラネシュティ方言」)。

そのため、ブラネシュティ方言は、標準語による強い影響を受けているブルガリア国内の諸方言では失われてしまった古い語彙や特徴を保存していることがある。この点において、ブラネシュティ方言のデータは、ブルガリア語の共時的研究（特に方言学）に加え、通時的研究にとっても非常に有意義である。

1.5. 研究方法

本論文では、ブラネシュティ方言の補語の接語重複にみられる言語接触の結果生じる言語変化（文法化）を明らかにするうえで、次のような研究方法をとる。

ブラネシュティ方言のデータは、フィールド調査によって収集する。自然発話によるデータを収集するため、ブラネシュティ方言話者であるインフォーマントと本論文筆者がブルガリア語で直接対話を行い、その対話を IC レコーダーで録音する。このような方法によって得られる自然発話のデータは、アンケートによって収集するデータと異なり、方言本来の自然な姿を記述することを可能とする。対話によるインタビューは、インフォーマントに自由に話してもらうことができるため、自然な発話を得やすい。それに対して、アンケートによる調査は、特定の言語形式や語彙などを知るためには有益であるが、インフォーマントに自由に話してもらうことができないため、自然な発話を得ることを困難なものとしてしまう。そのうえ、高齢なインフォーマントにとって、アンケートは余計な精神的プレッシャーを与えることがあるため、この点でもデータ収集に際して障害となる恐れがある。本研究の対象である補語の接語重複は、自然発話の中で頻繁に用いられる現象であるため、アンケートによってその言語現象を意図的に引き出すよりも、対話によるインタビューを通じたデータ収集のほうがより適切である。

IC レコーダーで録音したブラネシュティ方言の音声データは、文字起こしを行ったうえで研究に用いる。その際、文字起こしする対象を、補語の接語重複が見られる発話とその前後のコンテキストに限定する。書き起こした補語の接語重複の例はすべて、資料として本論文の最後に添付する。

ブラネシュティ方言のデータをもとに、補語の接語重複の記述や分析を丹念に行う。その際に、標準語やブルガリア国内の同系統のブルガリア語方言との比較も行う。このような比較研究は、ブラネシュティ方言独自の特徴を明らかにするうえで有効な研究方法である。

また、ブラネシュティ方言に独特な特徴は、ルーマニア語との言語接触によって生じたと仮定し、ルーマニア語との対照研究も行う。ルーマニア語と対照することによって、ブラネシュティ方言の接語重複の言語変化が、ルーマニア語との

言語接触によってもたらされたかどうか、またどのような仕組みで変化したか、ということをも明らかにすることが可能となる。

以上で述べた研究方法をとることで、本論文の 2 つの目的を達成することができると考えられる(cf. 1.3. 「本論文の目的」)。

1.6. 用語・表記・略語

1.6.1. キリル文字

本論文では、ブルガリア語の表記にキリル文字を用いる。現代ブルガリア語で用いる字母の数は、以下に示す 30 である（それぞれの字母のあとに IPA 表記に基づく音素表記を // に示す）。

ブルガリア語のキリル文字一覧：

А а /a/, Б б /b/, В в /v/, Г г /g/, Д д /d/, Е е /e/, Ж ж /ʒ/, З з /z/, И и /i/,
Й й /j/, К к /k/, Л л /l/, М м /m/, Н н /n/, О о /o/, П п /p/, Р р /r/, С с /s/,
Т т /t/, У у /u/, Ф ф /f/, Х х /x/, Ц ц /ts/, Ч ч /tʃ/, Ш ш /ʃ/, Щ щ /ʃt/,
Ъ ъ /ə/, Ъ ъ (特定の音価を持たない⁸) , Ю ю /ju/, Я я /ja/

ただし、本文や例文で用いるキリル文字表記には、原則としてラテン文字による翻字を添える。このとき用いる翻字法は、国際標準化機構(ISO)によって定められたキリル文字翻字法(ISO 9:1995)を採用する。ただし、従来の研究で慣用的に用いられてきた表記法にしたがって以下の点を変更する⁹。

- ・ ヨット化母音(я, ю)は、語頭や母音字母のあとで ju, ja、子音字母のあとで 'u, 'a で表す。
- ・ щ は、št で表す。
- ・ ъ は、ă で表す。

以上を踏まえて、本論文において用いるキリル文字のラテン文字による翻字表記は、以下の【表 1-1】にある通りとする。

⁸ 母音 o と子音の間でのみ用いられ、先行する子音の口蓋化を表す。
e.g.) синьо/sin'o 「青い」など。

⁹ ISO 9:1995 のキリル文字翻字法では、ラテン文字 1 字母に対して、キリル文字 1 字母で対応することを原則とするため、я, ю, щ はそれぞれ â, û, š で翻字する。また、ъ は"で翻字する。

【表 1-1】 キリル文字とラテン文字の対応表

キリル文字	ラテン文字による翻字
А а	A a
Б б	B b
В в	V v
Г г	G g
Д д	D d
Е е	E e
Ж ж	Ž ž
З з	Z z
И и	I i
Й й	J j
К к	K k
Л л	L l
М м	M m
Н н	N n
О о	O o
П п	P p
Р р	R r
С с	S s
Т т	T t
У у	U u
Ф ф	F f
Х х	H h
Ц ц	C c
Ч ч	Č č
Ш ш	Š š
Щ щ	Št št
Ъ ъ	Ǻ ǻ
Ь ь	,
Ю ю	Ju ju / 'u
Я я	Ja ja / 'a

ラテン文字による翻字は、基本的にスラッシュを用いてキリル文字の後に表記する。必要がある場合には、和訳も「」に入れて添える。

e.g.) ябълка/jabǎlka 「リンゴ」

これ以外の表記の仕方をする場合には、その都度説明する。

1.6.2. 例文の表記について

本論文中で、例文を示す際の表記方法についてまとめる。

まず、標準語については、原則として現行正書法にしたがって表記する。ただし、方言については、正書法に必ずしもよらず、音声になるべく忠実な表記をすることとし、特にブルガリア語方言学の研究で受け入れられている表記法を用いることとする。標準語の正書法と異なるのは以下の点である。

- ・ ヨット化母音字母(я, ю)は用いず、йа, йу、または 'а, 'у で表す。
- ・ щ は用いず、шт で表す。
- ・ [w]または[β]を表す文字として ѱ を用いる（ラテン文字表記は w とする）。
- ・ 子音の口蓋化を表すためには、アポストロフィを子音の右肩につける。

e.g.) т'а

方言の音声学・音韻論的な研究が本論文の主目的ではないので、IPA などを用いた厳密な表記は行わない。

ブラネシュティ方言のデータには、アクセントを持つ語すべてにアクセントをふる（単音節語も含む）。標準ブルガリア語も必要な場合はふることもある。アクセントを持たない接語（クリティック）には、アクセントをふらない。

アクセント記号としては、標準ブルガリア語の正書法の規則にしたがって、グレイヴ・アクセントを用いて表記する(Мурдаров et al. 2012: 104)。ただし、人称代名詞接語形与格女性は、アクセントを持たない接語であるが、標準ブルガリア語における表記の規則にしたがい、グレイヴ・アクセントを添えて ñ/i と書く¹⁰。

全ての例文には、例文番号（章番号 - 章内の通し番号）、英語による逐語訳、文法情報、和訳（あくまでも参考程度であり、必ずしも情報構造まで反映するものではない）を付す。キリル文字の場合には、下の行にラテン文字の翻字を行う。

¹⁰ 接続詞の и/i 「そして」と区別するため、このような表記の仕方が定められている(Мурдаров et al. 2012: 12; 104-105)。

グロスは、必ずしも全ての文法情報を表示せず、議論の上で必要となってくるものを中心につけることとする。グロスの書式は、Leipzig Glossing Rules¹¹の Rule 4: One-to-many correspondences を採用する。要点は以下の通りまとめられる。

- ・英語の逐語訳と文法情報を示す略語の間はピリオド（統合的に表されている場合）かハイフン（複数の形態素に分析可能な場合）でつなぐ。
- ・文法情報が複数ある場合は、ピリオドで結ぶ。
- ・英語の逐語訳が複数の語となる場合には、それらをアンダーバーで結ぶ。

(→Rule 4A)

e.g.) свали

svali

knock_down-AOR.3.SG

ただし、煩雑さを避けるため、以下の点を変更する。

- ・文法情報は、統合的に表されている場合であってもピリオドは用いず、常にハイフンを用いて標示することとする。
- ・しかし、後置定冠詞が用いられている場合に限り、+を用いて別途に後置定冠詞の文法情報を示す。

e.g.) ймиту

imitu

name-N.SG+DEF-N.SG

- ・ある形態素が複数の文法情報を同時に表しうる場合には、スラッシュを用いる。

e.g.) am

have-PRS.1.SG/PL

また、例文には出典情報も表記する。ブラネシュティ方言の例文の出典の表記方法については、3.1.2. 「フィールド調査の概要」にて詳述する。

原則として、ブラネシュティ方言以外の言語の例文には、[] 内に言語名を明記する。ブラネシュティ方言についても、必要に応じて明示することがある。

グロスなどで用いる略語は【表 1-2】の通り。

¹¹ 詳細は、<https://www.eva.mpg.de/lingua/resources/glossing-rules.php> を参照。
(2017年11月19日閲覧)

【表 1-2】略語一覧

ACC: accusative case 「対格」	MK: Macedonian 「マケドニア語」
AM: accusative marker 「対格標識」	N: neuter 「中性」
AOR: aorist 「アオリスト」	NEG: negation marker 「否定標識」
BG: Bulgarian 「ブルガリア語」	NOM: nominative case 「主格」
CL: clitic 「接語 (クリティック)」	O: object 「目的語」
COUN: count form 「個数形」	OBL: oblique case 「斜格」
CLLD: clitic left dislocation 「接語左方転位」	PART: particle 「助詞」
COMP: comparative degree marker 「比較級標識」	PAP: past active participle 「能動過去分詞」
DAT: dative case 「与格」	PPP: past passive participle 「受動過去分詞」
DEF: definite article 「定冠詞」	PL: plural 「複数」
DM: dative marker 「与格標識」	PRS: present tense 「現在」
EVD: evidentiality 「証拠性」	RD: right dislocation 「右方転位」
F: feminine 「女性」	REF: reflexive pronoun 「再帰代名詞」
FUT: future tense marker 「未来時制標識」	REL: relative pronoun 「関係代名詞」
HTLD: hanging topic left dislocation 「ハンギング・トピック左方転位」	Q: question marker 「疑問標識」
IDF: indefinite article 「不定冠詞」	S: subject 「主語」
IMPF: imperfective tense 「未完了過去」	SG: singular 「単数」
IMP: imperative mood 「命令法」	SMP: subordinating modal particle 「従属節を形成する法助詞」
INF: infinitive 「不定形」	V: verb 「動詞」
M: masculine 「男性」	VA: verbal adverb 「副動詞」
	VOC: vocative case 「呼格」
	VP: verb phrase 「動詞句 ¹² 」

本論文で用いるその他の記号の意味は次の通り。

- * 当該の文が非文であることを表す。
ただし、語源についての議論のときには、再建形を表すこととする。
 - ? 当該の文の容認度が低いことを表す。
 - () () 中の要素の使用が随意的であることを表す。
 - [] 発話者とは別の人物（ふつうは対話者）の発話であることを示す。
ただし、本文の引用中では、本論文筆者による補足であることを示す。
 - <...> 省略した場合に用いる。
- ここに挙げた以外の記号を用いる場合には、その都度説明をする。

¹² ただし、本論文では、動詞と人称代名詞接語形の組み合わせのことを意味する。詳しくは、2.2.2.2. 「語順の特徴」を参照のこと。

1.7. ブルガリア語について

本節では、ブルガリア語についての基本的な情報を概略的に述べる。

1.7.1. ブルガリア語概要

ブルガリア語は、ブルガリア共和国の公用語であり、話者人口は国内外を合わせておよそ 1,000 万人に及ぶ。言語系統としては、インド・ヨーロッパ語族のスラヴ語派、南スラヴ語群に属する。マケドニア語とは方言連続体をなしており、1944 年にユーゴスラヴィア連邦内のマケドニア共和国としてマケドニアが独立し、独自の正書法と文法規範をもったマケドニア語が誕生するまでは、ブルガリア語の方言とみなされていた。今でもブルガリア語にとって最も近い関係にある言語である。またブルガリア語は、同じ南スラヴ語群に属するセルビア語、クロアチア語、スロヴェニア語などとも近い関係にある。

ブルガリア語が持つ言語特徴の多くは、他のスラヴ諸語と共通している。その一方で、他のスラヴ諸語とは異なる特徴も少なくない。ブルガリア語に独特な言語特徴として、たとえば以下(1-1)を挙げることができるだろう。

- (1-1) a. 名詞類における格変化の大半が消失
- b. 動詞の不定形の消失
- c. 後置定冠詞の発達
- d. 補語の接語重複
- e. 伝聞形

(1-1a)～(1-1b)が、通時的な変化のなかで失われた文法特徴であるのに対して、(1-1c)～(1-1e)は新たに獲得した文法特徴である。特に(1-1a)と関係して、現代ブルガリア語は、古教会スラヴ語や他の現代スラヴ諸語¹³と比較して、分析的傾向が強いといえる(cf. Ницолова 2008 etc.)。

ブルガリア語は文法特徴の上で、バルカンの諸言語とも多くの共通点を持ち、それらはバルカン言語圏現象（バルカニズム）と呼ばれる。バルカニズムは、長期間にわたる緊密な言語接触や複数言語併用が繰り返されたことによってもたらされたものと考えられている(cf. Lindsted 2000; 野町 2010 etc.)。ブルガリア語も多くのバルカニズムを共有しており、この点でブルガリア語はスラヴ諸語の中で独特な言語のうちの一つであると言える¹⁴。

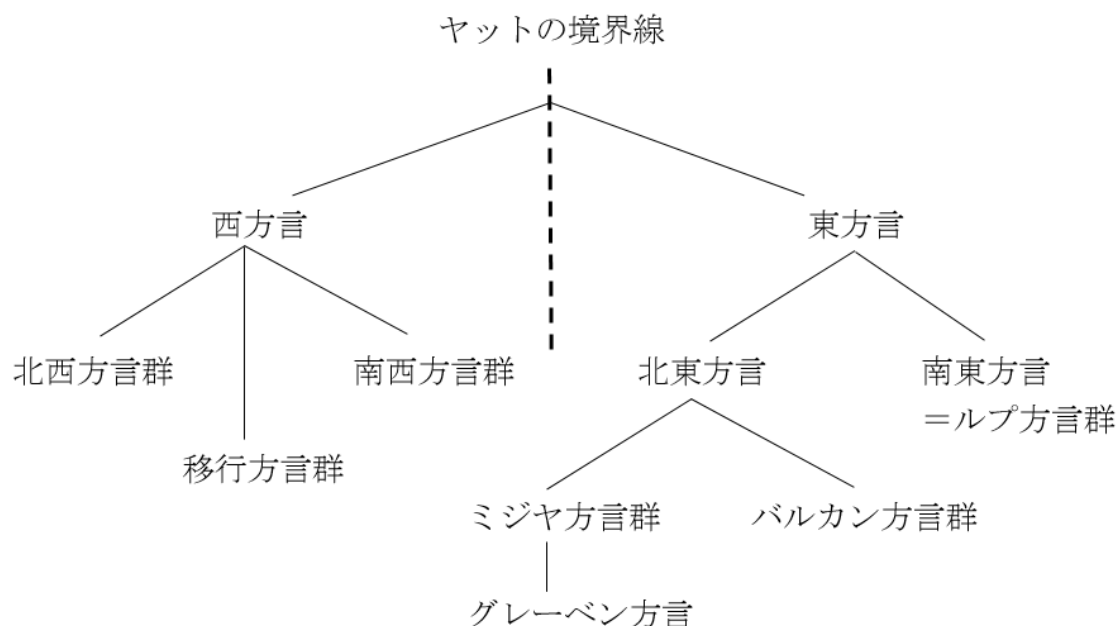
¹³ ただし、マケドニア語は除く。

¹⁴ 近い関係にあるマケドニア語も同様の傾向を有する。

1.7.2. ブルガリア語の方言

ブルガリア語の方言は非常に多様である。その方言区分は、様々な言語現象に基づいて行われている¹⁵。ここでは、もっとも一般的、かつ広く受け入れられている区分について述べる。

以下、【図 1-1】は、ブルガリア語の方言区分を示したものである。



【図 1-1】ブルガリア語の方言区分

まず、ブルガリア語は、東西の二方言に大きく分けられる。両者を分ける境界は、スラヴ祖語の母音*ъ/*ě (ヤット) の音対応の違いに基づいているため、ヤットの境界(ятова граница)と呼ばれる。この境界の西(西方言)では常に e/e で対応するのに対して、東(東方言)では音環境によって я/ja と e/e のいずれかで対応する。東方言は、я/ja と e/e の両方が相補分布的に用いられる北東方言と、常に я/ja のみで対応する南東方言とに下位区分される¹⁶。標準ブルガリア語は北東方言を基盤として整備されたため、音環境によって я/ja と e/e の交替が見られる¹⁷。

¹⁵ スラヴ祖語に存在した母音の現代語における音対応に基づくものや、語彙や形態論的な特徴に基づくものなどがある(cf. Стойков 1993)。

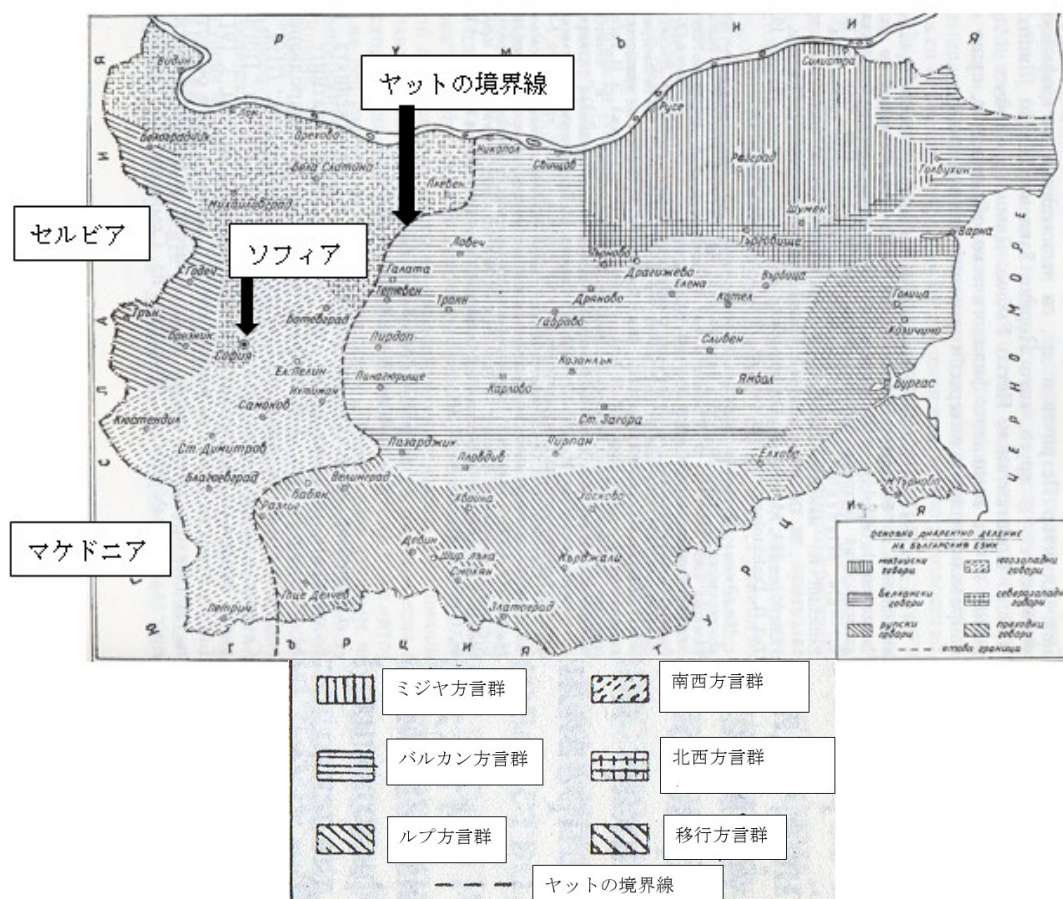
¹⁶ 南東方言はルプ方言群と一致する(Цонев 1984: 307)。北東方言と南東方言の境界線はパザルジックからマリツァ川の右岸に沿って東進し、ブルガスのほうへ北東に進んでいる(Цонев 1984: 307-308; Стойков 1993: 83-84)

¹⁷ 標準語では、*ъ/*ě を起源とする母音は、音環境によって я/ja と e/e の交替がおこる。例えば、*бълъ/*бѣлъ「白い」という語は、現代標準ブルガリア語で

また、東方言と西方言はそれぞれ3つの下位方言群に分類される。東方言は、北からミジヤ方言群、バルカン方言群、ルプ方言群である。そのうち、ミジヤ方言群とバルカン方言群は北東方言を成し、ルプ方言群は南東方言を成す。ミジヤ方言群にはさらに下位方言が存在する。本論文ではその中でも特にグレーベン方言を取り上げることになるが、ミジヤ方言群の下位方言については、3.1.3.「ブラネシュティ方言」の記述を参照されたい。

西方言については、北西方言群と南西方言群に大別され、セルビア語との移行方言が北西のセルビアとの国境付近に分布する。南西方言群は、マケドニア共和国に分布する方言と方言連続体を成す¹⁸。

以下【地図 1-1】は、これらの方言の地理的な分布を表す方言分布地図である。



【地図 1-1】ブルガリア語の方言分布図(Стойков 1993: 418)

は、бял /b'al (M.SG), бяла /b'ala (F.SG), бяло /b'alo (N.SG)であるが、複数形の場合のみ бели /beli (PL)となる。いわゆる前舌母音 i, e を持つ音節が後続する場合に я/ja が e/e に交替する。このほかに、място /m'asto (N.SG)が местà /mestà (PL)のように、別の語形に変化する際に、ヤットを起源とする母音がアクセントを失うことで я/ja から e/e への交替が生じることもある。

¹⁸ 詳細は、4.1.3.「接語重複の方言分布」も参照

東西方言を分け隔てるヤットの境界は南北に伸びており、【地図 1-1】では破線で表されている。

本論文では、ブルガリア語やブルガリア語方言に関して、様々な概念や呼び方を用いるため、ここでそれらを整理する。

まず、標準語については、「標準ブルガリア語」と呼ぶ。このとき、「話し言葉」と「書き言葉」を特に区別しない。もし一方を特に区別して言いたい場合には、明確にその旨を書き添える。話し言葉と書き言葉の区別が問題になるのは、標準ブルガリア語の場合に限られるので（方言には基本的に書き言葉は存在しない¹⁹）、単に「話し言葉」などと書いた場合には、標準ブルガリア語の話し言葉を意図する。

次に、ブルガリア語方言について、ブルガリア共和国内に分布するものを「(ブルガリア) 国内のブルガリア語 (諸) 方言」と呼ぶ。国外に分布するブルガリア語諸方言のうち、ルーマニアに分布するものを、「ルーマニアのブルガリア語諸方言」と呼ぶ。これ以外では、上で述べた具体的な方言の名称にしたがった用語を用いる。

また、これらすべての概念（標準語、諸方言）を含めて、言語全体をさすときには単に「ブルガリア語」と呼ぶ。つまり、「ブルガリア語」と言うときには、ブルガリア語の標準語や様々な諸方言を特に区別することなく、総体を指すものとする。

引用などで、本論文における名称・用法と異なるものが用いられている場合には、その都度指摘することとする。

¹⁹ バナト・ブルガリア語（オスマン帝国の支配を逃れ、18世紀にハプスブルク帝国のバナト地方（現在のルーマニア）に移住したブルガリア人の末裔が話すブルガリア語北西方言を基盤とした言語）は書き言葉を持つが（cf. Стойков 1993: 192-196; see also Стойков 1967; 1968）、本論文では対象としない。また、一部のブルガリア人研究者は標準マケドニア語を、南西ブルガリア語方言をもとに形成された書き言葉であると考えており（cf. Асенова 1989 etc.）、彼らは標準マケドニア語のことをたとえば„писмено-регионалната норма в СР Македонија“「マケドニア社会主義共和国における書き言葉の地域的なノルマ」（Асенова 1989: 83）などと呼ぶ。この考えにしたがうと、標準マケドニア語もブルガリア語方言の「書き言葉」にあたるが、本論文ではそのような見解をとらない。

2. 補語の接語重複

第2章では、本論文の研究対象である補語の接語重複について概観する。

2.1. 「一般的特徴」では、補語の接語重複がどのような現象であるかについて概要を述べたのちに、バルカン言語学の枠内での同現象の研究史を紹介し、バルカン諸語に共通する文法特徴の一つである補語の接語重複について述べる。

2.2. 「標準ブルガリア語の接語重複」では、標準ブルガリア語における接語重複について、先行研究を踏まえつつ、形式的及び機能的な観点から論じる。

2.1. 一般的特徴

2.1.1. 接語重複とは

接語重複(clitic doubling)は、Kallulli, Tasmowski (2008: 1)に従って、「同一文構造中における接語形代名詞による動詞項の二重化」と定義する。本論文では、動詞項の中でも補語の二重化、つまり補語の接語重複を中心に扱う。ただし、主語の場合についても、必要に応じて言及することがある。また、接語重複は名詞句内の要素でも起こる場合がある²⁰。これは、動詞項がないため、Kallulli, Tasmowski (2008: 1)が提示する厳密な定義から外れてしまうことになるが、この現象についても補足的に取り上げる。

それでは、補語の接語重複がいかなる現象であるかについて、以下の標準ブルガリア語の例をもとに具体的に述べることとする。以後、原則として、接語と、同一指示の名詞句にそれぞれ実線を引いて示す。また、対格と与格が同時に接語重複している場合には、対格は実線、与格は点線を用いて区別する。

(2-1) a. Книгата му я подарихме вече.
 Knigata mu ja podarihme veče.
 book-F.SG+DEF.F.SG he-DAT.CL it-F.SG present-AOR.1.PL already
 「(私たちは) その本は彼にもうプレゼントした。」(Джонова 2009: 3)

b. Върнах му книгата на Иван.
 Vărnaħ mu knigata na Ivan.
 return-AOR.1.SG he-DAT.CL book-F.SG+DEF.F.SG DM Ivan
 「(私は) その本をイワンに返した。」(Джонова 2009: 2)

²⁰ 不一致定語の接語重複がこれにあたる。これに該当する標準ブルガリア語の例は2.2.3.2. 「補語以外の接語重複」を参照。本論文の主たる研究対象であるブラネシュティ方言の例については3.2.1.3. 「所有の用法」において言及する。

(2-1a)は直接補語が、(2-1b)は間接補語がそれぞれ同一指示の人称代名詞接語形によって重複している例である。このとき直接補語の *Книгата/Кnigata* 「その本」は人称代名詞接語形対格 *я/ja* と、間接補語の *на Иван/na Ivan* 「イワンに」は人称代名詞接語形与格 *му/mu* とそれぞれ同一指示である。このように同一文構造中で直接補語や間接補語を人称代名詞接語形によって二重化される現象を補語の接語重複と呼ぶ。また、接語重複の結果生じたものを接語重複構造（あるいは単に、構造）と呼ぶこととする。

以後、説明の上での煩雑さを避けるため、接語重複に関与している要素のうち、人称代名詞接語形には *Ncl*、これと同一指示の名詞句（接語ではない）には *N* という略称を、必要に応じて用いる。以後、特に指示のない限り、接語重複が行われている文中では、「補語」と言った場合、*N* のことのみを指し、*Ncl* のことは指さない。ただし、接語重複が行われていない文において人称代名詞接語形（対格・与格）が用いられている場合には、これを「補語」とみなす。つまり、接語形を「補語」とみなさないのは、あくまでも接語重複が行われている場合に限る。以下(2-2)を参照のこと。

- (2-2) a. *V Ncl* ⇒ *Ncl* が「補語」 (接語重複なし)
 b. *V N* ⇒ *N* が「補語」 (接語重複なし)
 c. *V Ncl_i N_i* ⇒ *N* が「補語」 (接語重複あり)

また、直接補語と間接補語が同一文構造中で同時に接語重複することも可能である。以下(2-3)の例では、直接補語の *тази книга/tazi kniga* 「この本を」が *я/ja* によって、間接補語の *на Иван/na Ivan* 「イワンに」が *му/mu* によって接語重複している。

- (2-3) На.....Иван му я подарихме тази книга.
 Na.....Ivan mu ja podarihme tazi kniga.
 DM Ivan he-DAT.CL it present-AOR.1.PL this-F.SG book-F.SG
 「(私たちは) イワンにこの本をプレゼントした。」(Джонова 2009: 3)

補語の接語重複は、義務的に実現する場合もあれば、随意的に実現する場合もあり、また、そもそも実現が不可能である場合もある。また、補語の接語重複がどの場合に義務的となり、どの場合に非文とされるかは言語によっても異なる。以下(2-4a)は標準マケドニア語の例で、(2-4b)はそれに対応する標準ブルガリア

語の例である²¹。(2-4a)の標準マケドニア語の例では、直接補語と間接補語の両方とも接語重複が義務的である(4.1.2.1.「ブルガリア語とマケドニア語」も参照)。その一方で、(2-4b)の標準ブルガリア語においては補語の接語重複が義務的ではない²²。

(2-4) a. My go давам МОЛИВОТ
Mu go davam molivot
 he-DAT.CL it-M.ACC.CL give-PRS.1.SG pencil-M.SG+DEF.M.SG
на.....момчето. [MK]
na.....momčeto.
 DM boy-M.SG+DEF.M.SG
 「(私は) その少年にその鉛筆を与える。」(Friedman 2008: 36)

b. Давам (my go) МОЛИВА
 Davam (mu go) moliva
 give-PRS.1.SG he-DAT.CL it-M.ACC.CL pencil-M.SG+DEF.M.SG
на.....момчето. [BG]
na.....momčeto.
 DM boy-M.SG+DEF.M.SG
 「(私は) その少年にその鉛筆を与える。」

(2-4b)に見られるように、標準ブルガリア語において、接語重複は随意的であり、それが行われるコンテキストは標準マケドニア語に比べて極めて限られる²³。

このように、補語の接語重複が行われるか否かは言語間で大きく異なる場合があるものの、文中の補語を N と Ncl によって重複的に標示する現象であるという点で、本質的に同一の現象である(cf. Лопашов 1973; 1978)。

なお、「接語重複」には、研究者や言語によって様々な用語が用いられている。以下に、英語、ブルガリア語、ロシア語の順で代表的な例を示す(「」内には直

²¹ 以後、標準ブルガリア語や標準マケドニア語の例で、特に引用元が示されていないものは、本論文執筆者によって作例され、母語話者によるチェックをうけたものである。

²² 以後、補語の接語重複の実現が随意的であることを特に示したい場合に限り、随意的に用いられる Ncl は () で囲う(cf. 1.6.2.「例文の表記について」)。

²³ 標準マケドニア語と標準ブルガリア語の補語の接語重複の詳細な対照分析は、4.1.2.1.「ブルガリア語とマケドニア語」の節を参照。

訳した用語を示す)。丸括弧内には、当該の用語を用いる研究者を挙げるが、その研究者が複数の文献で同じ用語を用いている場合、煩雑さを避けるためすべての文献の年号を示すことはしない。

まず英語で書かれた文献では、clitic doubling 「接語の二重化」(J. Leafgren; Zl. Guentchéva; O. Tomić; Franks, King 2000; Kallulli, Tasmowski 2008) や clitic reduplication 「接語の重複」(J. Tiševa; I. Krapova)、object reduplication 「目的語の重複」(V. Friedman)などがよく用いられる。

ブルガリア語では удвояване (на допълнението) 「(補語の) 二重化」(П. Асенова; Й. Тишева; М. Джонова)が一般的である。

ロシア語では様々な呼称が見られる。удвоение (местоимений) 「(代名詞の) 二重化」(Г.А. Цыхун)や、местоименная реприза 「代名詞の反復」(Ю.С. Маслов)、местоименный повтор 「代名詞の反復」(Ю.А. Лопашов)などが代表的である。

一方、日本語において同現象は「人称代名詞の二重使用」(佐藤 1983)、「目的語重複」(服部 1983)、「接語重複」(鈴木 2006)、「目的語の重複使用」(野町 2010)などで呼称されてきており、定まった用語はない。本論文では「接語重複」を一貫して用いることとする。reduplication 「重複」については、語基の全体または一部を繰り返す音韻論的・形態論的プロセスである「重複」でないことに注意すべきである。

2.1.2. 接語重複の研究史

補語の接語重複は、標準マケドニア語や標準ブルガリア語のみにみられるわけではなく、バルカン諸語にも広く観察される現象である。ここで言うバルカン諸語には、アルバニア語、ルーマニア語、現代ギリシャ語、ブルガリア語、マケドニア語が含まれ、これら以外にもそれぞれの言語の諸方言や非国家語(ロマ語など)も含まれる。補語の接語重複が、互いに言語系統を異にするバルカン諸語において共通して見られる現象であるため、接語重複はしばしばバルカン言語圏現象(バルカニズム)の一つに数えられ²⁴、バルカン言語学の枠組みで古くから研究されてきた。

補語の接語重複のもっとも古い指摘は、Miklosich (1861: 7-8)にみられ、ブルガリア語、ルーマニア語、アルバニア語そして現代ギリシャ語における統語的特徴

²⁴ Kallulli, Tasmowski (2008: 9)が指摘するように、バルカン諸語の祖先にあたる言語(すなわち、古教会スラヴ語、俗ラテン語、新約聖書のギリシャ語)には少なくとも現在と同様の接語重複は見られないため、接語重複は後世における多言語環境において発展した地域的な文法現象(=バルカン言語圏現象)であると考えられている(cf. Friedman 2008: 37)。

として、人称代名詞非接語形と接語形対格・与格が共起することが指摘されている。

Селищев (1918: 246-259)は、自身のフィールド調査に基づいて行ったマケドニア地方に分布するスラヴ語方言の研究のなかで、補語の接語重複について多くの例とともに詳しい分析と記述を行っている。人称代名詞非接語形と接語形の共起による接語重複以外に、名詞と人称代名詞接語形による接語重複の存在も指摘している。また、所有をあらわす人称代名詞接語形与格²⁵の接語重複²⁶の存在についても言及している。彼は、補語の接語重複が行われる条件についても述べており、補語が後置定冠詞あるいは指示代名詞を伴うなどして定である必要があるという(Селищев 1918: 247-248)。また、補語の接語重複が頻繁に用いられるかどうかという点で方言差があることを見出している。ヴァルダル川より東に分布する方言では、いくつかの方言を除いて、補語の接語重複などの「典型的なマケドニア的特徴(типично-македонские черты)」が欠如する。特に北東方面ではこのような特徴が見られることは稀であるという(Селищев 1918: 250)。最後に、同様の補語の接語重複が、他のバルカン諸語(現代ギリシャ語やアルバニア語、アルーマニア語やメグレノ・ルーマニア語など)にも存在し、それがおこる条件がマケドニアに分布するスラヴ語方言でみられるものと同様であると述べているということも挙げておく(Селищев 1918: 253-259)。

バルカン言語学の礎を築いたとされる Sandfeld (1930: 191-192)は、補語の接語重複はロマンス諸語に特徴的なものであると考え、本来はバルカン的な現象ではないと述べている。しかし、同じく補語の接語重複がみられるロマンス諸語と比較して、バルカン諸語ではそれがより広範に観察されると指摘している。また Sandfeld (1930: 192-193)は、ルーマニア語やギリシャ語では、接語重複が民衆語で非常に頻繁に用いられるが全く義務的ではないと述べている。バルカン諸語のなかでは、南西ブルガリア語の方言(les parlers bulgares du Sud-Ouest)²⁷で最も頻繁に補語の接語重複が行われることも指摘している。

バルカン諸語の標準語における補語の接語重複の記述と分析を行った Лопашов (1978: 123)は、バルカン諸語における接語重複は概して「同一の現象」であると結論付けている(cf. also Лопашов 1973: 91)。補語の接語重複が行われる条件は、言語ごとに異なる部分もあるが、共通してみられる部分もある。Асенова (2002: 110)は、Лопашов (1978: 26, 57, 58)が挙げたそれらの特徴を、次の(2-5)の5点にまとめている。

²⁵ このような用法については、2.2.1.「接語の一般的特徴」にて詳述する。

²⁶ このタイプの接語重複については、2.2.2.「人称代名詞接語形と非接語形」を参照。

²⁷ マケドニア地方に分布するスラヴ語方言のことを指す。

(2-5) バルカン諸語で接語重複が行われる際の共通の特徴

(Асенова 2002: 110; cf. Лопашов 1978: 56-58)

- a. 後置定冠詞を伴った補語がもっとも頻繁に重複する
- b. 動詞後にある補語より動詞前の補語のほうがより頻繁に重複される
- c. 補語が人称代名詞によって表されるときの重複が最も典型的である
- d. 間接補語の重複のほうが、直接補語の重複より圧倒的に多い
- e. 定でない補語は重複されない

さらに Лопашов (1978: 124)は、それぞれの言語で言語変化の速度こそ異なれ、補語の接語重複は拡大を続けていくだろうと予測しており、理論的に考えられる最終的な段階とは、「すべての直接及び間接補語での[接語重複の]規則的な使用、つまり完全な文法化」であると明言している。ただし、ある言語で実際にその段階まで到達するかどうか予測することは難しいとしている。また、現段階における個々のバルカン諸語にみられる接語重複の文法化²⁸の程度はそれぞれ異なり、次の(2-6)のような順になることも指摘している(Лопашов 1978: 122)。このスケール中では、左にあるものほど文法化の程度が高い。

(2-6) バルカン諸語における接語重複の文法化の程度 (Лопашов 1978: 122)

マケドニア語 > アルバニア語 > ルーマニア語 > 現代ギリシャ語
> ブルガリア語

Лопашов (1978: 124-125)は、補語の接語重複の起源を明らかにすることは難しいと考える一方で、バルカン諸語間での言語接触が接語重複の発展に影響を及ぼした可能性を指摘している。これを踏まえて、Лопашов (1978: 124-125)は、統計を用いた研究や、話し言葉や方言を対象とした研究、バルカン諸語外の接語重複との対照研究の必要性を訴えている。前章でも述べたとおり、本論文はまさにブルガリア語の方言を対象とした研究であるため、補語の接語重複研究の発展にとって意義があると考えられる。

以上のように、Miklosich (1861)によって指摘されて以降、様々な研究者が様々な観点から分析対象としてきたバルカン諸語における補語の接語重複の研究は、

²⁸ このとき、接語重複の文法化とは、接語重複の文法的な形式への変化と考える。文法的な形式への変化のあらわれの一つとして、接語重複が義務的に用いられるようになることがある(cf. Lehman 1995; Heine 2003) (2.2.3.3. 「接語重複の義務性」も参照)。そのため、義務性は文法化を表す一つの指標となることが考えられる。文法化について詳しくは、4.1.1. 「文法化をめぐる」を参照せよ。

Лопашов (1978)において、一般的な共通特徴や文法化の程度の問題などが明らかにされることで、一定の具体的な成果を見ることとなった。

2.2. 標準ブルガリア語の接語重複

2.2.1. 接語の一般的特徴

標準ブルガリア語には、様々な接語(*clitic*)が存在する。標準ブルガリア語の接語はふつうアクセントを持たず²⁹、音韻論的に他の語に依存する。先行する語に依存するエンクリティック(*enclitic*; 前接語)と、後続する語に依存するプロクリティック(*proclitic*; 後接語)の両方が存在する。このような特性のため、エンクリティックは文頭に、プロクリティックは文末に立つことができない。つまり、接語は独立した語ではあるものの、節内での語順は自由ではない。標準ブルガリア語の場合、エンクリティックには *съм/săm* 動詞の現在形³⁰や人称代名詞の接語形、疑問の助詞 *ли/li* などが含まれるのに対して、プロクリティックには動詞の未来形を作る助詞 *ще/šte* や否定の助詞 *не/ne*、前置詞などが含まれる。このうちエンクリティックについては、現代スラヴ諸語のエンクリティックについて分析を行った Jakobson (1971: 16)にしたがうと、屈折エンクリティック(*enclitiques fléchies*)と助詞エンクリティック(*particules enclitiques*)に分類することができる³¹。標準ブルガリア語の場合、屈折エンクリティックには、形態が変化をする *съм/săm* 動詞の現在形と人称代名詞接語形が含まれる。

古ロシア語のエンクリティックを研究した Зализняк (2008: 8-9)も指摘するように、エンクリティックのふるまいには音声的側面と統語的側面の二つがあると考えられる。エンクリティックは、その音声的な特性(アクセントを持たず、音韻論的に他の語に依存する)によって定義づけられるものであることは言うまでもない。しかし、それと同時に「きわめて特別な統語論的なふるまいも特徴的である。すなわち、その節中での位置は厳しい法則によって定められる」(Зализняк 2008: 8)。標準ブルガリア語のエンクリティックもその例外ではなく、人称代名詞接語形も極めて明確な規則によって語順が決められる。このことは、人称代名詞接語形、ひいては接語重複を理解するうえで重要である。したがって、以下では標準ブルガリア語の人称代名詞接語形の特徴を中心に論じる。

²⁹ ただし、人称代名詞接語形が否定の助詞 *не/ne* と結合する場合には、アクセントを持つ。詳しくは、2.2.2. 「人称代名詞接語形と非接語形」において述べる。

³⁰ *съм/săm* 動詞は、いわゆる *be* 動詞にあたる。現在形は次のようなパラダイムを持つ：*съм/săm* (1.SG), *си/si* (2.SG), *е/e* (3.SG), *сме/sme* (1.PL), *сте/ste* (2.PL), *са/sa* (3.PL)

³¹ Jakobson (1971: 16-17)によれば、現代スラヴ諸語の場合、屈折エンクリティックには、1)人称代名詞や再帰代名詞と 2)助動詞の人称形が含まれるという。一方、助詞エンクリティックは、文中で接語が2番目の位置を占めるというヴァッカーナーゲルの法則(*la règle de Wachernagel*)に準じた振る舞いを示すものを指す。

2.2.2. 人称代名詞接語形と非接語形

2.2.2.1. 形態と用法

標準ブルガリア語では、名詞の格変化は呼びかけに用いられる呼格形を除いて失われている。一方で、人称代名詞には、主格と対格と与格が残存する。また、対格と与格に接語形と非接語形³²が存在する³³（主格は常にアクセントを持つ非接語形のみ）。ただし、与格の非接語形に関して、少なくとも現代標準語においては、統合形(synthetic form)が用いられることは非常に稀である³⁴(Андрейчин et al. 1977: 173; Стоянов et al. 1983: 192; Ницолова 2008: 147)。代わりに、与格標識である前置詞 на/na を伴い「на/na+対格の非接語形」という分析形(analytic form)をとる（以下【表 2-1】では、分析的形態を先に示し、スラッシュの後に統合形を示す）。以下【表 2-1】に、人称代名詞及び再帰代名詞の主格・対格・与格のパラダイムを示す。

【表 2-1】「標準ブルガリア語の人称代名詞・再帰代名詞のパラダイム」³⁵

	主格	対格		与格	
	-	接語形	非接語形	接語形	非接語形
1.SG	аз	ме	мен(е) ³⁶	ми	на мен(е) / мене
	az	me	men(e)	mi	na men(e) / mene
2.SG	ти	те	теб(е)	ти	на теб(е) / тебе
	ti	te	teb(e)	ti	na teb(e) / tebe

³² 一般的に、「短形」「長形」や「弱形」「強形」などの用語が用いられる場合もあるが、本論文においては「接語形」「非接語形」というタームを一貫して用いることとする。ブルガリア語で一般的に用いられるのは、кратка форма（短形）と пълна форма（完全形）である。

³³ 以下、本節においては、特に必要な場合（たとえば съм/săm 動詞の接語形と区別する場合）を除いて、人称代名詞接語形と非接語形を単にそれぞれ「接語形」と「非接語形」と呼ぶ。

³⁴ 1人称・2人称単数形は、мене/mene, тебе/tebe という統合的形態が話し言葉などで用いられることがある(Ницолова 2008: 147; Tisheva, Djonova 2002: 236)。

³⁵ 一方で、/ はその前後の形がヴァリエントであることを示す。特に、与格の非接語形については、/ の前には現代語でより一般的に用いられる分析形を、/ の後にはそのヴァリエントである統合形を示す。

³⁶ 1人称・2人称主格形 ний/nij, вий/vij 及び、語末の е が落ちた対格形 мен/men, теб/teb という形は、それぞれ ние/nie, вие/vie, мене/mene, тебе/tebe のヴァリエントで、話し言葉や詩などにおいてよく用いられる形である(cf. Ницолова 2008: 147; Маслов 1982: 299)。ただし、мен/men, теб/teb に関しては、話し言葉の影響で、一定程度において書き言葉にも浸透している。非接語形与格の分析的形態にみられる на мен/na men と на теб/na teb についても同様。

3.SG.M	той toj	го go	него nego	му mu	на него / нему na nego / nemu
3.SG.F	тя t'a	я ja	нея neja	й i	на нея / ней na neja / nej
3.SG.N	то to	го go	него nego	му mu	на него / нему na nego / nemu
1.PL	ние / ний nie / nij	ни ni	нас nas	ни ni	на нас / нам na nas / nam
2.PL	вие / вий vie / vij	ви vi	вас vas	ви vi	на вас / вам na vas / vam
3.PL	те te	ги gi	тях t'ah	им im	на тях / тям na t'ah / t'am
REF	-	се se	себе си ³⁷ sebe si	си si	на себе си / себе си na sebe si / sebe si

人称代名詞と再帰代名詞は語順に関して同じ振る舞いを示すため、以後、人称代名詞と言うとき、再帰代名詞も含むものとする。さて、アクセントを持つ非接語形は、つねに文強勢（論理強勢）(sentence stress; логическо ударение)を伴ってフォーカス³⁸や対照トピック(contrastive topic; контрастен топик)³⁹となる

³⁷ 再帰代名詞の非接語形対格について、現代語ではかつての非接語形対格 *себе/*sebe と接語形与格 си/si が結合した себе си/sebe si という形のみが用いられる。非接語形与格についても同様で、現代の非接語形対格 себе си/sebe si に与格標識 на/na を付した分析的形態が用いられる(Маслов 1982: 299-300)。

³⁸ 本論文では、フォーカス（焦点）について、「主張が前提と異なるような語用論的に構成された命題の意味的な要素」という Lambrecht (1994: 213)による定義に従う。つまり、フォーカスは、形式的ではなく(cf. Rudin 1986)、意味・語用論的に定義される概念と考える(cf. Leafgren 2002: 23)。一般的に、フォーカスは、情報構造上の新情報や対照情報に対応する要素を指し、論理強勢(логическо ударение)を伴う。また、今後、ある語が例文中でフォーカスである場合には、説明上特に必要な際には、大文字を用いて書き表すこととする。

³⁹ トピックは、文において述べられていること、つまりその文の話題を指すものとする。逆にトピックについて述べられている部分をコメントと呼ぶ。この用語の使い方には研究者間で様々な相違があるが、以後本論で行われる議論の結果にいかなる影響も及ぼすものではない。そのため、本論文では一般的に受け入れられているこの定義に従い、トピック/コメントの定義についての詳細な議論は行わない。

トピックが特に対照されているような場合にみられるのが、対照トピックである。非接語形が対照トピックで用いられている例は以下(i)。ここでは、

(Ницолова 2008: 151)。その一方で、人称代名詞接語形は基本的にアクセントを持たず、それゆえ文強勢も持つことはない。それ単独では、フォーカスにもトピックにもならない(Ницолова 1986: 46; 2008: 151)。以下(2-7)は、人称代名詞非接語形と接語形の用法を比較している例である。

(2-7) a. МЕНЕ викат, а не ТЕБЕ.
 МЕНЕ vikat, а ne ТЕБЕ.
 I-ACC call-PRS.3.PL but NEG you-ACC
 「(彼らは)私を呼んでいるのであって、君を呼んでいるのではない。」
 (Ницолова 1986: 46)

b. Викат ме.
 Vikat me.
 call-PRS.3.PL I-ACC.CL
 「(彼らは)私を呼んでいる。」 (Ницолова 1986: 46)

ただし、接語形が、同じく接語である否定の助詞 не/ne とともに用いられる場合には、音律的にひとまとまりのように発音されるが、このときに限って、接語形はアクセントをとる(cf. Маслов 1982: 299)。接語形の3人称単数形対格 го/go 及び与格 му/mu が、否定の助詞 не/ne と組み合わせると、対応する非接語形対格 него/nego と与格(ただし与格は統合形の場合) нему/nemu とそれぞれ同形となってしまう。しかし、Цыхун (1968: 11)や Лопашов (1978: 5)が指摘するように、アクセントの位置の違いにより「не/ne+接語形」は「非接語形」と区別される(see also Guentchéva 1994: 40-41)。以下、「非接語形」の(2-8a), (2-9a)と「не/ne+接語形」の(2-8b), (2-9b)を比較せよ。(2-8)が対格、(2-9)が与格の例である。

(2-8) a. НÈГО видя.
 NÈGO vid'a.
 he-ACC see-AOR.2/3.SG
 「(あなた/彼(女))は彼を見た。」 (Лопашов 1978: 5)

него/nego と нея/neja が対照トピックとなっている。

(i) Него ПОВИШИХА, а нея УВОЛНИХА.
 Nego POVIŠIHA, а neja UVOLNIHA.
 he-ACC promote-AOR.3.PL but she-ACC fire-AOR.3.PL
 「彼は昇級したが、彼女はクビになった。」 (Ницолова 2008: 151)

b. He gò видя.
 Ne gò vid'a
 NEG he-ACC.CL see-AOR.2/3.SG

「(あなた/彼(女)は) 彼を見なかった。」(Лопашов 1978: 5)

(2-9) a. HÈMU каза.
 NÈMU kaza.
 he-DAT tell-AOR-2/3-SG

「(あなた/彼(女)は) 彼に言った。」(Лопашов 1978: 5)

b. He mỳ каза.
 Ne mù kaza.
 NEG he-DAT.CL tell-AOR.2/3.SG

「(あなた/彼(女)は) 彼に言わなかった。」(Лопашов 1978: 5)

また、接語形与格は、所有者を表すことができる。接語形与格のあらわす人称・数は所有者のそれに一致する。したがって、所有者の意味で用いられる接語形与格は被定語⁴⁰の名詞の性・数で変化しない不一致定語である。被定語の名詞句は、ふつう後置定冠詞をとる⁴¹。

(2-10) a. родителите му
 roditelite mu
 parent-PL+DEF.PL he-DAT.CL

「彼の両親」(Franks, King 2000: 55)

⁴⁰ 本論文では、「修飾語」の代わりに、スラヴ語学で一般的に用いられる「定語」(определение)を用いる。

⁴¹ ただし、以下(i)にあるように、一般的に親族を表す名詞は、後置定冠詞をとることができない。一方で、(ii)にあるように親族を表す名詞であっても後置定冠詞をとる語もある(例えば、мъж/măž 「夫; 男性」、син/sin 「息子」)。

(i) дъщеря ми
 dăšter'a mi
 daughter I-DAT.CL
 「私の娘」

(ii) мъжът ми
 măžăt mi
 husband+DEF.M.SG.NOM I-DAT.CL
 「私の夫」

b. многого ти нови книги
 mnogoto ti novi knigi
 many+DEF.N.SG you-DAT.CL new-PL book-PL

「あなたのたくさんの新しい本」 (Franks, King 2000: 56)

所有者をあらわすためには、人称代名詞接語形与格以外に、所有代名詞を用いることもできる。所有代名詞は、以下(2-11)にみるように接語形与格とは異なり、フォーカスの場合に義務的に用いられ、特に対照フォーカス(contrastive focus; контрастен фокус)の場合にもっとも頻繁に用いられる(Ницолова 2008: 169)。

(2-11) Интересува ме ТВОЕТО мнение,
 Interesuva me TVOETO mnenie,
 interest-PRS.3.SG I-ACC.CL your-N.SG+DEF.N.SG opinion-N.SG
 a не НЕГОВОТО.
 a ne NEGOVOTO.
 but NEG his-N.SG+DEF.N.SG

「私に関心を持っているのは、君の意見であって、彼の意見ではない。」
 (Ницолова 2008: 169)

そのほか、接語形は通常、同じくアクセントを持たない前置詞と共に用いることができない。以下(2-12a)にあるように、前置詞と共に起できる人称代名詞は非接語形の対格の形をとる。しかし、主に場所を表し、アクセントを持ついくつかの二次的前置詞(вторичен предлог)の場合には (以下(2-13)では помежду/romeždu 「～の間に」)、接語形と共に起することができる(Ницолова 1986: 47-48; 2008: 154; see also Guentchéva 1994: 41-43; Franks, King 2000: 57-58)。

(2-12) a. Говорих с тебе.
 Govorih s tebe.
 speak-AOR.1.SG with you-ACC

「(わたしは) あなたと話した。」 (Guentchéva 1994: 41)

b. *Говорих с те.
 *Govorih s te.
 speak-AOR.1.SG with you-ACC.CL

(2-13) a. Помежду им имаше преграда.
 Pomeždu im imaše pregrada.
 between they-DAT.CL have-IMPF.3.SG barrier
 「彼らの間には障壁があった。」 (Guentchéva 1994: 41)

b. *Помежду тях имаше преграда.
 *Pomeždu t'ah imaše pregrada.
 between they-ACC have-IMPF.3.SG barrier
 (Guentchéva 1994: 41)

(2-13)の二次的前置詞 помежду/pomeždu「～の間に」は、接語形与格を要求する。一方で、(2-13b)にあるように非接語形とは共起することができない(cf. also Franks, King 2000: 57-58)。

また、以下(2-14)にあるように、接語形は等位接続詞でつなぐことができない。等位接続詞でつなぐ場合には非接語形が選択される。

(2-14) a. *Обичат го и я.
 *Običat go i ja.
 love-AOR.3.PL he-ACC.CL and she-ACC.CL
 (Rudin 1997: 229)

b Обичат него и нея.
 Običat nego i neja.
 love-AOR.3.PL he-ACC and she-ACC
 「(彼らは) 彼と彼女を愛している。」 (Rudin 1997: 229)

また、接語形同士の共起にも制限が存在する。以下(2-15a)にあるように、1人称及び2人称の接語形対格は、接語形与格と共起できない。ただし、非接語形与格とは自由に共起可能である(Ницолова 2008: 155)。

(2-15) a. *Иван му ме представи.
 *Ivan mu me predstavī.
 Ivan he-DAT.CL I-ACC.CL present-AOR.3.SG
 (Ницолова 2008: 155)

b. Иван ме представи на него.
 Ivan me predstavī na nego.
 Ivan I-ACC.CL present-AOR.3.SG DM he-ACC
 「イワンは私を彼に紹介した。」(Ницолова 2008: 155)

一方で、3 人称の接語形対格はどの接語形与格とも共起ができる。

(2-16) Иван му го представи.
 Ivan mu go predstavī.
 Ivan he-DAT.CL he-ACC.CL present-AOR.3.SG
 「イワンは、彼を彼に紹介した。」(Ницолова 2008: 155)

本節でみた接語形と非接語形の特徴は、(2-17)のようにまとめることができる。

(2-17) 人称代名詞接語形と非接語形の特徴

- a. 非接語形はフォーカスや対照トピックになるが、接語形は単独ではフォーカスにもトピックにもなれない
- b. 接語形与格は、所有者をあらわすことができる
- c. 接語形は前置詞と共起できない（二次的前置詞を除く）
- d. 接語形同士は等位接続詞でつなぐことができない
- e. 1 人称及び 2 人称の接語形対格は、接語形与格と共起できない

2.2.2.2. 語順の特徴

2.2.2.2.1. 概要

本節では、接語形の統語論的特徴のうち、特に語順にかかわる特徴について論じる。

まず、人称代名詞接語形は、基本的に動詞に隣接した位置を占める⁴²。接語形は、可能な限り動詞の前に現れる。しかし、接語形は、音韻論的に先行する語に依存する性質を持ったエンクリティックであるため、文頭に立つことはできない。動詞句（ここでは、一般的な用法とは異なり、動詞と接語形の組み合わせを

⁴² つまり、標準ブルガリア語の接語形は、アクセントをもたない語（接語）が文中で 2 番目の位置を占めるというヴァッカーナーゲルの法則にしたがわれない。(cf. Jakobson 1971: 17-18; Franks, King 2000: 60-61)。標準ブルガリア語の接語形はむしろ、中世のロマンス諸語にみられる Tobler-Mussafia の法則(Tobler-Mussafia law)に沿っているといえる(cf. Franks, King 2000: 341-342)。

指して用いることとする) が文頭に立つような場合には、以下(2-18)にあるように動詞の後ろにおかれる。一文中に接語形の与格と対格が同時に用いられる場合には、必ず与格が対格に先行する語順で接語群(clitic cluster)⁴³を形成する。接語群内の語順及び、接語群の動詞に対する語順について論じる本節に限り、動詞に実線を、接語(群)に波線を付す。

- (2-18) Даде ми.....го Вера вчера.
Dade mi.....go Vera včera.
give-AOR.3.SG I-DAT.CL it-ACC.CL Vera yesterday
「昨日ヴェラは私にそれを与えた。」(Franks, King 2000: 63)

(2-18)では、動詞句が文頭に立つため、接語群は動詞に対して後続する。このとき、接語群は、音韻論的にも統語論的にも先行する動詞に関係する。しかし、以下(2-19a)~(2-19c)にあるように、動詞句が文頭に立たないような場合、接語群は、音韻論的には先行する他の語に依存する一方で、統語論的には後続する動詞と関係して動詞句を成す⁴⁴。

- (2-19) a. Вера ми.....го даде вчера.
Vera mi.....go dade včera.
Vera I-DAT.CL he-ACC.CL give-AOR.3.SG yesterday
- b. Вчера ми.....го даде Вера.
Včera mi.....go dade Vera.
- c. Вчера Вера ми.....го даде.
Včera Vera mi.....go dade.

⁴³ 接語群には、人称代名詞接語形のほかに、сѣм/sām 動詞の現在形も含まれる。

⁴⁴ (2-18)と(2-19a)を模式的に表すと以下のようなになる。←は音韻論的な依存の方向を示し、[] は形態統語論的なかたまりである動詞句をあらわす。

(2-18)' [V ← Ncl]

(2-19a)' X ←[Ncl V]

(2-18)'では、Nclは先行するVに音韻論的に依存し、ともに動詞句を形成する。一方、(2-19a)'では、Nclは後続するVと動詞句を形成するが、音韻論的には先行する任意の要素X((2-19a)では主語にあたる名詞Вера/Vera「ヴェラ」)に依存している。

d. *Вера ми го вчера даде.
 *Vera mi go včera dade.

e. *Ми го даде Вера вчера.
 *Mi go dade Vera včera.

f. *Вера даде ми го вчера.
 *Vera dade mi go včera.

「昨日ヴェラは私にそれを与えた。」 (Franks, King 2000: 63)

(2-18)では、動詞句が文頭の位置を占めるため、接語形が動詞に対して後続している。その一方で、(2-19a)～(2-19c)では、動詞句が文中にあるため、接語形は動詞の直前の位置に置かれている。またこれらいずれの例文でも接語群内は、与格の接語形が対格に対して先行している⁴⁵。ゆえに、これらの例は文法的に適格である。しかし、(2-19d)～(2-19f)はいずれも非文である。(2-19d)は接語形が動詞に隣接していない（副詞の *вчера/včera* が動詞句内に入り込んでいる）ために非文となる。(2-19e)は動詞句が文頭の位置であるのに接語形が文頭の位置を占めるために非文となる。そして(2-19f)が非文とされるのは、動詞句が文頭に位置するわけではないのに接語形が動詞に後続する語順となっているためである。

接語形が示す語順の原則は以下(2-20)のようにまとめられる。

- (2-20) a. 動詞に隣接する
 b. 文頭に立つことができない（エンクリティックであるため）
 c. 動詞句（動詞と接語形の組み合わせ）が文頭にたつときは動詞に後続するが、それ以外の場合は動詞に先行する
 d. 接語群内で与格は対格に必ず先行する

以上、語順の特徴を概観したが、ここから具体的な例を見ていく。

まず、接語形が動詞に対して先行するか後続するかという語順の原則に着目する。動詞句に先行する要素がアクセントをもたない語である接続詞の場合であっても、接語形は動詞に対して先行した位置を占める。以下(2-21)は接続詞 *a/a* や *и/i* が先行する場合の例である。

⁴⁵ 対格が与格に先行する以下(i)のような例は非文である。

(i) *Вера го.....ми даде вчера.
 *Vera go.....mi dade včera.
 Vera it-ACC.CL I-DAT.CL give-AOR.3.SG yesterday

- (2-21) a. Тя не ми даде да видя
 T'a ne mi dade da vid'a
 she-NOM NEG I-DAT.CL give-AOR.3.SG SMP see-PRS.1.SG
 писмото. А го скри.
 pismoto. A go skri.
 letter-N.SG+DEF.N.SG but it-ACC.CL hide-AOR.3.SG
 「彼女は私にその手紙を見せなかった。そしてそれを隠した。」
 (Franks, King 2000: 63)

- b. Спрях го, и му казах.
 Spr'ah go, i mu kazah.
 stop-AOR.1.SG he-ACC.CL and he-DAT.CL tell-AOR.1.SG
 「(私は) 彼を止め、彼に言った。」 (Franks, King 2000: 63)

この例から明らかなのは、接語形は一般的にエンクリティックであるが、必ずしも先行する語がアクセントのある語である必要はない⁴⁶。接語形の語順は、あくまでも動詞句が文頭に立つか否か⁴⁷によって決定される。

動詞が命令形である場合も、以下(2-22)にみるように、接語形はこれまでと同様の原則にしたがった語順となる。

- (2-22) a. Донеси ми _____ го!
Donesi mi _____ go!
 bring-IMP.2.SG I-DAT.CL it-ACC.CL
 「私にそれを持ってこい。」 (Franks, King 2000: 64)

- b. Не ми _____ го донасяй!
 Ne mi _____ go donas'aj!
 NEG I-DAT.CL it-ACC.CL bring-IMP.2.SG
 「私にそれを持ってくるな。」 (Franks, King 2000: 64)

⁴⁶ この例から、接語形の文中での位置を規定しているのは、音韻論的にエンクリティックであるということよりも、接語形が文頭にはおかれぬという形式上の語順であることがわかる。

前節 2.2.2.1. 「形態と用法」でも述べたように、否定の助詞 не/ne と結びついた場合に接語形がアクセントを取ることがあるが、このような特徴は接語形が厳密な意味で完全なエンクリティックではないということを示唆している。

⁴⁷ (2-21b)のような等位接続によって結ばれた節は、文頭にあるとは考えない。

c. Коняка ми донеси!
 Kon'aka mi doneſi!
 cognac+DEF I-DAT.CL bring-IMP.2.SG

「そのコニャックは私にもってこい。」 (Franks, King 2000: 64)

まず(2-22a)は動詞命令形を伴った動詞句が文頭にあるため、接語群はこれに後続する。しかし、(2-22b)では動詞句の前に助詞の *не/ne*、(2-22c)では直接補語が文頭を占めており、動詞句はこれらの要素に後続する。それゆえに、接語形は主要部である動詞命令形に対して先行する。

非定形動詞の場合も基本的に(2-20)で挙げた原則（非定形動詞が文頭におかれる場合に接語形は後続し、それ以外では先行する）にしたがう。

(2-23) a. Речено му.....е.
Rečeno mu.....e.
 tell-PPP.N.SG he-DAT.CL be-PRS.3.SG

「彼に告げられた。」 (Franks, King 2000: 65)

b. И му.....е речено.
 I mu.....e rečeno.
 and he-DAT.CL be-PRS.3.SG tell-PPP.N.SG

「そして彼に告げられた。」 (Franks, King 2000: 65)

(2-23a)では、非定形動詞である分詞（受動過去分詞）が文頭に立っているので、人称代名詞接語形 *му/mu* と *съм/săm* 動詞の現在 3 人称単数形である *е/e*（これもエンクリティックである）による接語群は、*речено/rečeno* に後続する位置を占める。その一方で、(2-23b)では、接続詞 *и/i* が分詞に先行するために、接語群はこれに先行する位置を占めている。

ただし、非定形動詞の中でも副動詞(*verbal adverb*; *деепричастие*)の場合、以下(2-24a)にあるように、接語形は副動詞に後続する。しかし、(2-24b)にあるように否定の助詞 *не/ne* など別の要素が文頭の位置を占める場合には、接語形が動詞に先行することもありうるが、あまり好まれない(Franks, King 2000: 65)。

(2-24) a. Не виждайки я, ...
 Ne viždajki ja, ...
 NEG see-VA she-ACC.CL

b. He я виждайки, ...
 Ne ja viždajki, ...
 NEG she-ACC.CL see-VA

「彼女を見ないで」 (Franks, King 2000: 65)

ここまでみてきたように、一般的に接語形は動詞に対して先行するが、動詞句が文頭の位置を占める場合に限り、動詞に後続する語順をとる。この原則に対する唯一の例外は、非定形動詞である副動詞である。とはいえ、副動詞である場合にも原則にしたがった語順も不可能というわけではない。

2. 2. 2. 2. 例外的な語順

接語形は一般的に動詞に隣接した位置を占めるが、これにしたがわないような例も存在する。まず、以下(2-25)にあるように、疑問の助詞 ли/li が用いられる場合には、接語形が動詞に隣接するという規則にしたがわない。

(2-25) a. Каза ли му.....го на него?
Kaza li mu.....go na nego?
 tell-AOR.2.SG Q he-DAT.CL it-ACC.CL DM he-ACC

「(あなたは) 彼にそのことを言ったのか。」 (Guentchéva 2008: 207)

b. He му ли изпратих книга?
 Ne му li izpratih kniga?
 NEG he-DAT.CL Q send-AOR.1.SG book

「(私は) 彼に本を送らなかつただろうか。」 (Franks, King 2000: 60)

(2-25a)では動詞の後に、(2-25b)では接語形の後に ли/li がおかれることで、ли/li が動詞と接語形の間（つまり、動詞句内）に入り込む語順となるため、接語形と動詞は隣接しない。

これに加え、接語形と同様にエンクリティックである съм/săm 動詞が関与する場合⁴⁸にも、動詞（ここではエル分詞⁴⁹の виждал/viždal）と人称代名詞接語形が隣接しない場合がある。以下(2-26)及び(2-27)では、接語群中で人称代名詞接語

⁴⁸ 具体的には、動詞が現在完了形や受動態となる場合に、съм/săm 動詞は助動詞的に用いられることになる。

⁴⁹ 能動過去分詞(PPP)の一種で、現在完了形や条件法などで用いられるほか、限定用法の形容詞としても用いられる。

形だけをイタリックにする。

- (2-26) a. Вчера съм.....го виждал.
 Včera săm.....go viždal.
 yesterday be-PRS.1.SG he-ACC.CL see-PAP.M.SG
 「昨日、(私は) 彼を見かけた。」(Лопашов 1978: 12)

- b. Вчера го.....е виждал.
 Včera go.....e viždal.
 yesterday he-ACC.CL be-PRS.3.SG see-PAP.M.SG
 「昨日、(彼は) 彼を見かけた。」(Лопашов 1978: 12)

(2-26)における動詞は、съм/săm 動詞とエル分詞から成る現在完了形である。(2-26a)では、非定形動詞である виждал/viždal の直前の位置に接語形 го/go がある。一方、(2-26b)では接語形が виждал/viždal に先行する位置をしめているが、それとの間に съм/săm 動詞 e/e が入り込んでいる。前出の(2-23b)の受動過去分詞が関与する例においても同様の語順が見られる。このように、人称代名詞接語形と非定形動詞が隣接しないような語順が見られるのは、съм/săm 動詞が関与する場合である。

すでに述べたように(2.2.1.「接語の一般的特徴」)、съм/săm 動詞の現在形は、人称代名詞接語形と同様にエンクリティックである。それゆえ、両者が共起する場合には一つの接語群を形成する。接語群が、非定形動詞であるエル分詞に対して先行するか否かは、エル分詞が文頭におかれるかどうかによって決まる。さらに、接語群中の語順も厳密に決まっており、съм/săm 動詞は、3人称単数形 e/e である場合に限り人称代名詞接語形(与格、対格の順)に後続し、それ以外の場合では先行する(cf. Avgustinova 1994: 32; Rå Hauga 1999: 103; Franks, King 2000: 61)。

- (2-27) a. Дала си.....му.....ги.
Dala si.....mu.....gi.
 give-PAP.F.SG be-PRS.2.SG he-DAT.CL they-ACC.CL
 「(あなたは) 彼にそれらを与えた。」(Franks, King 2000: 61)

- b. Дала му.....ги.....е.
Dala mu.....gi.....e.
 given-PAP.F.SG he-DAT.CL they-ACC.CL be-PRS.2.SG
 「(彼女は) 彼にそれらを与えた。」(Franks, King 2000: 61)

(2-26)では副詞 *вчера/včera* 「昨日」が文頭にあるため、接語群はエル分詞に対して先行する位置を占めるが、そのような要素がない(2-27)では接語群はエル分詞に対して後続する。接語群中の語順も、*съм/săm* 動詞が3人称単数形である(2-26b)と(2-27b)では、人称代名詞接語形が *съм/săm* 動詞に先行する語順をとる。

また、以下(2-28)の例が示すように、再帰代名詞も人称代名詞と同様に、現れる格に応じた語順をとる。

(2-28) a. Покажи ми.....се!
 Pokaži mi.....se!
 show-IMPR.2.SG I-DAT.CL REF.ACC.CL
 「私に姿を見せよ。」 (Franks, King 2000: 62)

b. Представям си.....я в бяла рокля.
 Predstav'am si.....ja v b'ala rokl'a.
 imagine-PRS.1.SG REF-DAT.CL she-ACC.CL in white dress
 「(私は) 彼女が白いドレスを着ているのを想像する。」
 (Franks, King 2000: 62)

今まで述べたことを総合すると、*съм/săm* 動詞と人称代名詞接語形から成る接語群内の語順は、以下(2-29)のようになる⁵⁰(cf. Franks, King 2000: 61; see also Avgustinova 1994: 32)。

(2-29) 接語群内の語順

съм/săm 動詞 (e/e (PRS.3.SG)を除く) > 与格 > 対格 > e/e

本節で論じた接語群外の語順(定形・非定形動詞に対する接語群の語順)の特徴は、以下(2-30)のようにまとめられる。

(2-30) 接語群外の語順

- a. 基本的に、動詞に隣接する(例外は、*ли/li* や *съм/săm* 動詞が関与するとき)
- b. 文頭に立つことができない(エンクリティックであるため)
- c. 動詞句(動詞と接語形の組み合わせ)が文頭に立つときは動詞に後続

⁵⁰ ここでは、パラダイムを持つ接語である人称代名詞接語形と *съм/săm* 動詞の現在形のみを対象とし、それ以外の接語の語順については考慮していない。

するが、それ以外の場合は動詞に先行する⁵¹

d. 再帰代名詞接語形も、人称代名詞接語形に順じた語順の特徴を示す

⁵¹ 例えば、Franks, King (2000: 66)は、「統語論的にはプロクリティックだが、音韻論的にはエンクリティックである」(cf. also Tomić 2006: 239)と指摘している。

2.2.3. 接語重複について

2.2.3.1. 概要

標準ブルガリア語における補語の接語重複は、一般的に随意的に行われると考えられている(cf. Цивьян 1965: 34; Лопашов 1978: 28; Маслов 1982: 304-305; Franks, King 2000: 251)。また、標準語であっても文体によってその使用頻度は異なる。話し言葉において典型的にみられることはアカデミー文法(Попов et al. 1983: 186-187)をはじめ、多くの研究者によって指摘されている(cf. Попов 1973: 174-175; Андрейчин et al. 1977: 376; Андрейчин 1978: 363; Leafgren 1997: 119)。Leafgren (1997: 119)もまた、書き言葉より話し言葉に頻繁にみられる現象であることを指摘する一方で、書き言葉のなかでは文芸作品において頻繁に見出されると述べている。また、新聞雑誌では文芸作品より稀であるが、学術文献よりは頻繁であるということも指摘している(see also Попов 1973: 174-175)。

接語重複がおこる頻度には方言差もあることが知られている。具体的には、東方言よりも西方言において頻繁にみられるという(cf. Попов et al. 1983: 187; Leafgren 1997: 119)。また、書き言葉における接語重複の使用は、話し言葉や方言の影響によるものであると考えられている(Попов 1973: 174; Андрейчин et al.: 1977: 377; Попов et al. 1983: 187)。そのため、書き言葉では接語重複の使用を避けるべきとされ(Мирчев 1963: 224)、実際に書き言葉では接語重複の使用を避ける傾向が見られるという(Попов 1973: 183)。その一方で、近年の話し言葉研究の立場からは、接語重複の機能面が注目され、接語重複は「文法ノルマからの逸脱というよりも話し言葉のレベルにおけるノルマであるとみなすべき」(Тишева, Джонова 2006: 236)とさえ主張されている。

2.2.3.2. 補語以外の接語重複

本論文では、すでに述べたように(2.1.1. 「接語重複とは」)、補語の接語重複を研究対象とする。しかし、標準ブルガリア語には、補語以外の接語重複も見られる。それは、所有者を表す人称代名詞接語形与格であらわされる不一致定語 *ѝ/i* 「彼女の」が、文中で別の名詞句によってあらわされた定語 *на Таса/na Tasa* 「タサの」と重複的に用いられる「不一致定語の接語重複」である。

- (2-31) а. Мъжът *ѝ* на Таса беше селски бикар.
Măžăt *i* na Tasa beše selski bikar.
husband+DEF she-DAT.CL DM Tasa was village herdsman
(Маслов 1982: 305)

b. На Таса мъжът й беше селски бикар.
Na Tasa mǎžăt i beše selski bikar.
DM Tasa husband+DEF she-DAT.CL was village herdsman
「タサの夫は村の牛飼いであった。」 (Маслов 1982: 305)

(2-31)では、на Таса/na Tasa「タサの」によってあらわされている定語と同一指示の接語形与格 й/i「彼女の」が重複している。Маслов (1982: 305)は、(2-31a)と(2-31b)の両方の語順が可能であるが、いずれの場合も「非常にまれで、俗語的特徴がある」と指摘している。

Цыхун (1968: 82)もまた、不一致定語の接語重複は、方言に特徴的であり、書き言葉では稀であると指摘している。

話し言葉コーパスで集めたデータをもとに標準ブルガリア語の不一致定語の形式上の分類や機能の研究を行った Федорина (2015: 89, 92)は、話し言葉には様々なタイプの不一致定語の接語重複が見られるということを報告している。

この他に、「主語の重複」もある。主語の重複とは、文中の主語と同一指示の人称代名詞主格が重複する現象である⁵²(cf. Попов 1973: 182; Андрейчин et al. 1977: 348-349; Андрейчин 1978: 348)。

(2-32) a. Тя Милена сега е в Пловдив.
T'a Milena sega e v Plovdiv.
she-NOM Milena now is in Plovdiv
「彼女は、ミレナは今プロフディフにいる。」 (Джонова 2009: 1)

b. Той Иво се оплакваше също...
Toj Ivo se oplakvaše sǎšto...
he-NOM Ivo complain-IMPF.3.SG also
「彼は、イヴォもまた不平を言っていた...」 (Тишева 2014: 53)

主語の重複が見られる(2-32)では、人称代名詞主格で標示された主語が、その直後に語彙的な名詞句によって再標示されている。Андрейчин (1978: 348)は、話し言葉においてときおり主語の重複が行われうるが、書き言葉では避けられる傾向にあることを指摘している。

Тишева (2014: 52-56)は、話し言葉の研究の立場から主語の重複の特徴をいく

⁵² 人称代名詞の主格には接語形がないため、厳密には接語重複とは言えない。そのため、本論文では単に「主語の重複」と呼ぶこととする。

つか挙げている(cf. also Rudin 1986; Тишева 2009; 菅井 2015)。まず、人称代名詞主格と重複して用いられる同一指示の名詞句は、固有名詞や定冠詞により限定されている定の名詞句であらわされる。また、重複している名詞句は一般的に隣接してあらわれ、両者のあいだにはイントネーション上の休止は観察されないという⁵³。

不一致定語の接語重複や主語の重複は、重複という操作が行われるという点で、補語の接語重複と似た現象である。その一方で、例えば、主語の重複の場合には(2-32)にあるように語順が異なるなど、必ずしも同一のものとして扱うことはできないと考えられるため、本論文では必要に応じて言及する機会があるものの、中心的なテーマとしては取り上げない。したがって、以後、単に「接語重複」と言うときは「補語の接語重複」を意図して用い、特に指示がない限り不一致定語の接語重複や主語の重複は意図しない。また、Федорина (2015: 87)も指摘するように、とりわけ標準ブルガリア語にみられる不一致定語の接語重複は、補語の接語重複や主語の重複と比べて、十分に記述・研究されてこなかった。不一致定語の接語重複の詳細な検討は今後の課題とする。

2.2.3.3. 接語重複の義務性

すでに2.1.「一般的特徴」でも述べたとおり、標準ブルガリア語における補語の接語重複は随意的に行われる。規範文法の立場からは避けられるべきとされる補語の接語重複は、実際にはどのような場合に行われうるのか。このことについては、多くの研究者が明らかにすることを試みている。例えば、Андрейчин et al. (1977: 377)は、接語重複する補語の主要な特徴として次の3点を挙げている。

- (2-33) a. 主語の位置である文頭に立つ
 b. ふつう、後置定冠詞を伴う
 c. 論理強勢(логическо ударение)を持たない

⁵³ 一方で、Попов (1973: 182)があげている例はどれも文頭にある人称代名詞主格と同一指示の名詞句は隣り合っておらず、話し言葉で頻繁にみられる(2-32)であげているタイプのものとは異なっていると考えられる(cf. Тишева 2014: 55)。この点については、今後の研究の課題としたい。

(i) Той пеел човека!
Toj peel čoveka!
 he-NOM sing-EVID.IMPF.M.SG person+DEF.M.SG

「彼は歌っていたんだって！」(Попов 1973: 182)

また、Попов (1973: 182)は、主語の重複が補語の接語重複の類推により生じた可能性について指摘している。

(2-33a)は補語の語順、(2-33b)は補語の意味的特徴（定性）、(2-33c)は音声的特徴である。このように補語の接語重複は一定の条件下ではおこなわれやすくなる。その一方で補語がこれらの特徴を欠いている場合には接語重複されにくい、あるいはされえない場合もあると考えられる。つまり、補語の接語重複の実現は常に随意的なのではない。接語重複すると非文になる場合もあれば、反対に接語重複しないと非文になる場合もある。

本節では、特に、補語の接語重複が義務的に行われるのはどのような場合であるかについて、先行研究における記述を踏まえて論じる。

まず、存在・不在を表す *има/ima*, *няма/n'ama* などを述語とする非人称文では、非接語形が接語形による重複なしであらわれる例が見られない(Цыхун 1968: 71; see also Маслов 1982: 301)。つまり、当該の述語を伴う非人称文⁵⁴では、以下(2-34)にあるように、接語重複が義務的である⁵⁵。

(2-34) Него и вчера го нямаше.
Nego i včera go n'amaše.
 he-ACC also yesterday he-ACC.CL have-IMPF.3.SG
 「彼は昨日もいなかった」(Цыхун 1968: 71)

存在・不在を表す当該の述語に限らず、非人称文では一般的に接語重複の実現の頻度が高くなることは、Попов et al. (1983: 188)や Стойков et al. (1983: 193)、Андрейчин et al. (1977: 377)、Попов (1973: 180, 186)などでも指摘されている。

義務的な接語重複は、意味の観点から、身体的・心理的な経験または状態を表す述語にも広くみられる。たとえば、Лопашов (1978: 30)は、「身体的・心理的な経験または状態を表す、補語と結びつくような動詞や非人称述語・名詞述語において、[補語の]重複は規則的に用いられる」と述べている。また、「ここに含まれる動詞の大多数は非人称[動詞]である。これらの多くはそもそも接語形なしで用いられることはない」とも指摘している。たとえば、以下(2-35)がこれに該当する。

⁵⁴ この述語の項は、対格であらわれる。

⁵⁵ Академія文法(Стоянов et al. 1983: 193)においても同様のことが述べられているが、そこではさらに、接語重複する補語は後置定冠詞を伴わなくてはならないということも付け加えられている。つまり、普通名詞の時は、(2-33b)の特徴が必要とされていることを指摘している。

(2-35) a. Спи ми ce.
 Spi mi se.
 sleep-PRS.3.SG I-DAT.CL REF.ACC.CL
 「私は眠い。」

b. Ha мене ми ce спи.
Na mene mi se spi.
 DM I-DAT I-DAT.CL REF.ACC.CL sleep-PRS.3.SG
 「私は眠い。」

(2-35)において、спи/spi は非人称動詞である。「眠い」状態を経験している経験者の項は接語形与格 ми/mi であらわされる⁵⁶。このような文において接語形は必須要素であるため、(2-35a)で ми/mi がないと非文となる。非接語形あるいは語彙的な名詞句によって補語が標示される場合であっても、これと同一指示の接語形の使用（つまり、接語重複）は義務的となる。

これと同様の意味特徴（身体的・心理的な経験や状態を表す）をもった述語には、接語形であらわされる経験者の項を必ずしも必要としないものもあるが、非接語形あるいは語彙的な名詞句によって補語が標示される場合には、接語重複は義務的となる(Лопашов 1978: 30-31)。以下(2-36)を見よ。

(2-36) a. Боли (me).
 Boli (me).
 hurt-PRS.3.SG I-ACC.CL
 「(私は) 痛い。」

b. Мене ме боли.
Mene me boli.
 I-ACC I-ACC.CL hurt-PRS.3.SG
 「(私は) 痛い。」

(2-36a)にあるように、боли/boli は非人称動詞であるが、接語形対格であらわされる経験者の項 ме/me は必ずしも明示されなくてもよい。一方で、(2-36b)にあるように、補語が非接語形 мене/mene によって標示されると、接語重複は義務的となり、接語形 ме/me を欠く文は非文となる。

⁵⁶ 経験者の項は、接語形対格か与格のいずれかであらわれる。どちらが選択されるかは、述語の種類によってそれぞれ決まっている。

このように、Лопашов (1978)は、義務的な接語重複が見られるのは、一定の意味特徴（身体的・心理的な状態や経験を表す）を持つ述語（大抵は非人称文であられる）が用いられる場合であることを明らかにしている。

ただし、Лопашов (1978: 31)は、Цыхун (1968)を引用して、存在や不在を表す非人称動詞述語も義務的な接語重複を引き起こすとしている。ゆえに、Лопашов (1978: 30-31)が考える義務的な接語重複は以下(2-37)の2点にまとめることができる。

- (2-37)a. 身体・心理的な経験や状態を表す動詞や非人称述語・名詞述語のとき
b. 存在や不在を表す非人称動詞述語 *има/ima, няма/n'ama* のとき

一方で、Маслов (1982: 304)は、義務的な接語重複を明らかにするうえで、接語重複が観察される文の形式的な特徴にもとづいた分類を行っている。Лопашов (1978)とは異なり、述語の表す意味は排除し、述語がどのような格の項を要求するかという点を分類基準としている。彼は「文法的にほとんど⁵⁷義務的な接語重複」(Маслов 1982: 304)が行われるのは、以下(2-38)の3つのタイプの文であることを述べている。

- (2-38) 文法的にほとんど義務的な接語重複 (Маслов 1982: 304 を元に編集)
a. 対格の項を要求する非人称文
b. 与格の項を要求する非人称文
c. 与格の項を要求する非動詞述語を伴った文⁵⁸

義務的な接語重複を形式的な観点から分類した研究者には、他に Ницолова (2008: 153)がいる。彼女は、義務的な接語重複が行われる述語として、以下(2-39)の4点挙げている。

⁵⁷ Лопашов (1978: 30-31)があげた義務的な接語重複を要求する述語が用いられる文においても、非常にまれながら接語重複が行われない例があるため、Маслов (1983)はここで「ほとんど」としていると考えられる。これには文体や言語意識などの問題と関係がある(cf. Попов 1973)。

⁵⁸ たとえば、以下(i)のようなものを挙げている。

(i) И мене ми е жал...
I mene mi e žal...
also I-DAT I-DAT.CL is sadness
「私も悲しい...」(Маслов 1982: 304)

- (2-39) a. 動詞述語を伴った人称文または非人称文
 b. 名詞述語を伴った非人称文⁵⁹
 c. 述語副詞を伴った非人称文⁶⁰
 d. 間投詞 *ей, его, на* や疑問代名詞 *де* を伴った非動詞文⁶¹

(2-39)の分類は述語の種類を基準としてなされている。この点で、述語が要求する格にしたがって分類している Маслов (1982)とは異なる。(2-39a), (2-39b)は対格または与格の項が要求されるが、どちらとなるかは述語によって決まっている。(2-39c)は与格の項のみが、(2-39d)は対格の項のみが要求される。また、(2-39a)は人称文と非人称文の両方がありうるが、それ以外では非人称文に限定されている。

他方、Arnaudova, Krapova (2007: 1-2)は、文法的に義務的な接語重複を「真の接語重複(genuine clitic doubling)」と呼び特に区別しているが、このタイプの接語重複が、対格または与格であらわされる「経験者述語(experiencer predicates)」と共起することを指摘している。

Krapova, Cinque (2008: 266-267)は、経験者述語も含む、義務的な接語重複を引き起こす述語を意味と形式両方の観点から以下(2-40)のように分類している。そ

⁵⁹ 対格の例としては以下(i)を、与格の例としては以下(ii)を挙げられる。

- (i) Него го е страх.
 Nego го е strah.
 he-ACC he-ACC.CL is fear
 「彼は恐れている。」(Ницолова 2008: 153)

- (ii) На Петра ѝ е жал за детето.
 Na Petra ѝ е žal za deteto
 DM Petra she-DAT.CL is pity about child-N.SG+DEF.N.SG
 「ペトラはその子のことをかわいそうに感じている。」(Ницолова 2008: 153)

⁶⁰ たとえば、以下(i)を挙げることができる。

- (i) На децата ѝм стана весело.
 Na decata ѝm stana veselo.
 DM children-DEF they-DAT.CL become-AOR.3.SG cheerfully
 「子供たちは楽しげになった。」(Ницолова 2008: 153)

⁶¹ たとえば、以下(i)を挙げることができる。

- (i) Ето го селото!
 Eto го сeloto!
 here it-ACC.CL village-N.SG+DEF.N.SG
 「ほら、村だ！」(Ницолова 2008: 153)

れぞれ対応する例を(2-41)に示した(Krapova, Cinque 2008: 268; cf. also Arnaudova, Krapova 2007: 5-6)。

- (2-40) a. 心理・身体的な知覚を表す述語 (経験者＝与格)
 i.動詞、 ii.形容詞、 iii.副詞、 iv.名詞
 b. 心理・身体的な知覚を表す述語 (経験者＝対格)
 i.動詞、 ii.名詞
 c. 与格の所有者を伴った述語
 d. 対格の所有者を伴った述語
 e. 「～したい気がする」を表す構文における述語
 f. (一定の) モダリティーを表す述語
 g. 存在/不在を示す述語

- (2-41) a. 心理・身体的な知覚を表す述語 (経験者＝与格)
 Фильмът му хареса на Иван.
 Filmăt mu haresa na Ivan.
 film-M.SG+DEF.M.SG he-DAT.CL appeal-AOR.3.SG DM Ivan
 「イワンはその映画が気に入った。」

- b. 心理・身体的な知覚を表す述語 (経験者＝対格)
 Яд го е Иван.
 Jad go e Ivan.
 anger he-ACC.CL is Ivan
 「イワンは怒っている。」

- c. 与格の所有者を伴った述語
 Олекна му на него.
 Olekna mu na nego.
 relieve-AOR.3.SG he-DAT.CL DM he-ACC
 「彼は救われた。」

- d. 対格の所有者を伴った述語
 Боли го главата Иван.
 Boli go glavata Ivan.
 hurt-PRS.3.SG he-ACC.CL head+DEF Ivan
 「イワンは頭が痛い。」

e. 「～したい気がする」を表す構文における述語

Спи	<u>му</u>	се	<u>на Иван</u> .
Spi	<u>mu</u>	se	<u>na Ivan</u> .
sleep-PRS.3.SG	he-DAT.CL	REF-ACC.CL	DM Ivan

「イワンは眠い。」

f. (一定の) モダリティーを表す述語

Налож	<u>му</u>	се	<u>на Иван</u>
Naloži	<u>mu</u>	se	<u>na Ivan</u>
was_necessary	he-DAT.CL	REF-ACC.CL	DM Ivan

да	замине	за	София.
da	zamine	za	Sofija.
SMP	leave-PRS.3.SG	for	Sofia

「イワンはソフィアに出発しなくてはならなくなった。」

g. 存在/不在を示す述語

Има	<u>го</u>	<u>Иван</u>	в	списъка.
Ima	<u>go</u>	<u>Ivan</u>	v	spisǎka.
have-PRS.3.SG	he-ACC.CL	Ivan	in	list-DEF

「イワンはリストに (載って) いる。」

(2-40)で挙げた述語に対応する(2-41)の例の接語重複はいずれも義務的である。(2-40)は述語の意味を基準として分類が行われているが、特に(2-40a)と(2-40b)では述語の品詞、(2-40a)～(2-40d)では経験者/所有者の格という形式的な特徴による分類も導入している。Krapova, Cinque (2008)は、このように意味と形式の両方をもとにして、標準ブルガリア語における義務的な接語重複がどのような場合におこなわれるのかを明らかにしている。

本論文では、補語の接語重複が文法的に義務付けられている場合にはその接語重複は文法化していると考え⁶²、Тишева, Кръпова (2009)にしたがい「文法化重複(граматикализирано удвояване)」と呼ぶこととする⁶³。

⁶² 接語重複が義務的に用いられることは、接語重複が文法的な形式へ変化したことを示唆する1つのパラメーターであると考えられる(cf. Lehman 1995; Heine 2003)。文法化については、本論文の第4章「接語重複と文法化」、特に4.1.1. 「文法化をめぐって」を参照されたい。

⁶³ 本論文では、Krapova, Cinque (2008: 266-267)によって示されたリストの述語(2-40)をもつ接語重複が「文法化重複」に該当するものとする。

標準ブルガリア語の接語重複の文法化の程度は、バルカン諸語中でもっとも低いと Лопашов (1978: 122) は論じている (cf. 2.1.2. 「接語重複の研究史」)。しかし、本節で見たように、一般的には随意的とされる標準ブルガリア語における補語の接語重複が文法的に義務付けられている場合は決して少なくない。このことから明らかなように、文法化した接語重複は標準ブルガリア語にも一定程度存在する。

2.2.3.4. 接語重複の様々な側面

補語の接語重複のような余剰にみえる文法現象が、なぜ行われるのかということは、多くの研究者の関心をひく問題であり、事実これまで様々な説明が試みられてきた。本節では、なぜ接語重複が行われるかを明らかにするため、先行研究を踏まえて、どのような場合に接語重複が行われるのかを見る。

2.2.3.4.1. 語順と格標示

標準ブルガリア語では、名詞類の格変化はその大部分が失われたために、名詞自体がその文中での役割を形式の上で示すことができなくなった。しかし、その役割をあらわすために様々な手段が用いられている。例えば、前置詞の使用や動詞における主語との一致、文脈やイントネーションなどである。標準ブルガリア語における語順は比較的自由であるが、例えば次の(2-42)の例のような場合であっても、動詞に主語の数が標示されていることによって、どちらが主語であるかははっきりとしており、曖昧さが生じることはない。

(2-42) Децата посрещна Елена.
 Decata posreštna Elena.
 child-PL+DEF.PL meet-AOR.3.SG Elena
 「子供たちはエレナが出迎えた。」 (Guentchéva 2008: 207)

しかし、以下(2-43)のように、主語も直接補語も同じ人称・数である場合には、動詞の前後のどちらが主語であるのかという点で曖昧さが生じることになる。

(2-43) Мария обича Иван.
 Marija običa Ivan.
 Maria love-PRS.3.SG Ivan
 「マリアはイワンを愛している。 / イワンはマリアを愛している。」
 (Leafgren 1997: 123)

いわゆる SVO 語順は、事実の単なる叙述で、いかなる強調ももたないため、語用論的に最もニュートラルで「無標な」文である(Андрейчин 1978: 393; Попов et al. 1983: 273; see also Тишева 2014)。それゆえ、Мария/Marija が主語、Иван/Ivan が直接補語であるという解釈が一般的に好まれる。しかし、OVS の語順も許容されるため、その逆の解釈も可能であり、曖昧さが残る。

以下(2-44)のように、補語の接語重複が行われるとその曖昧さは取り除かれる。なぜなら、接語重複が行われた場合、接語形は補語と性・数が同一の形になるため、動詞前後にある名詞のうちどちらが補語であるかがはっきりと示されるためである。

(2-44) a. Мария я обича Иван.
Marija ja običa Ivan.
 Maria she-ACC.CL love-PRS.3.SG Ivan
 「マリアはイワンが愛している。」 (Leafgren 1997: 123)

b. Мария го обича Иван.
 Marija go običa Ivan.
 Maria he-ACC.CL love-PRS.3.SG Ivan
 「マリアはイワンを愛している。」 (Leafgren 1997: 123)

接語形の性・数が、(2-44a)では Мария/Marija と、(2-44b)では Иван/Ivan と一致しており、それぞれが直接補語であることがわかる。それゆえ、格変化を失った標準ブルガリア語においても一定の場合に ((2-46a)にあるように、常にではない)、接語重複が格標識の機能を持つ場合があると考えることができる。このような考え方は、アカデミー文法(Попов et al. 1983: 187-188, 282-283)をはじめ、Цыхун (1968: 110)や Попов (1973: 172, 183)、Андрейчин (1978: 363)など多くの研究者によって言及されている(cf. also Иванчев 1968: 164; Асенова 2002: 105, 108-109)。とりわけ Попов (1973: 172)は、「補語の重複の用法は、起源的にも歴史的にもブルガリア語における名詞類の屈折の喪失と定冠詞形の発生と関わっており⁶⁴、また文中で主語・補語の関係をより明確に分ける必要性和論理的に結びついている」とはっきりと述べている。接語重複なしでは、文の意味が不明確または二重の意味になってしまうことが決してまれではない。Попов (1973: 172)は、文学作品から以下(2-45a)の例を引用し、接語重複のない(2-45b)と対比している。

⁶⁴ 定冠詞(定性)との関係については次節 2.2.3.4.2. 「定性と特定性」を参照のこと。

(2-45) a. Странджата изведнџ го свали
Strandžata izvednăž go svali
 Strandžata suddenly he-ACC.CL knock_down-AOR.3.SG
 болестта на леглото.
 bolestta na legloto.
 illness-F.SG+DEF.F.SG on bed-N.SG+DEF.N.SG
 「ストランジヤタは急に病気でベッドに倒れこんだ。
 (=病気がストランジヤタを倒れこませた。)」
 (Попов 1973: 172)

b. ?Странджата изведнџ свали болестта
 ?Strandžata izvednăž svali bolestta
 Strandžata suddenly knock_down-AOR.3.SG illness-F.SG+DEF.F.SG
 на леглото.⁶⁵
 na legloto.
 on bed-N.SG+DEF.N.SG
 (Попов 1973: 172)

(2-45a)では、Странджата/Strandžata が接語重複することで、この語が文中で直接補語の役割を果たすことがわかる。しかし、接語重複がおこなわれない(2-45b)では、どちらが直接補語であるかは文脈からある程度理解されるものの、一般的に不自然と感じられてしまうものと考えられる。このように、補語の接語重複は、「補語が文頭の主語の位置に立っているとき」(Попов 1973: 172)に、補語を明示的に標示することで、曖昧さを取り除く手段であるとたびたび考えられてきた。

しかし、このような説明だけでは不十分であることは、以下(2-46)の例から明らかである。

(2-46) a. Таня я видя Мария.
Тан'а ја vid'a Marija.
 Tanya she-ACC.CL see-AOR.3.SG Maria
 「ターニャはマリアを見た。 / マリアはターニャを見た。」
 (Rudin 1986: 17)

⁶⁵ 引用元の例文に?は付されていないが、?の判定は Попов (1973: 172)の説明から明らかであるので、本論文執筆者が付した。また、母語話者への確認からも同様の意見を得たことを付け加えておく。

b. Него го гледам.
Nego go gledam.
 he-ACC he-ACC.CL watch-PRS.1.SG
 「(私は) 彼を眺めている。」

c. На Иван му подарих тази книга вчера.
Na Ivan mu podarikh тази книга вчера.
 DM Ivan he-DAT.CL present-AOR.1.SG this book yesterday
 「(私は) イワンにこの本を昨日プレゼントした。」
 (Guentchéva 2008: 208)

まず、(2-46a)にあるように、主語と補語の性と数が同一の形をとるような場合には、接語重複が行われたとしても接語形が同形となるために、どちらが補語であるかをはっきりとあらわすことができない。また、(2-46b)のように非接語形が接語重複する場合や、(2-46c)のように与格標識を伴う前置詞句が接語重複する場合には、いずれも格が明確に示されているため、格標示という接語重複の機能は余剰となってしまう。

これらのことをふまえると、接語重複がおこなわれる理由を補語の格標示というものだけに求めることはできないと考えられる。(2-46)の例は、接語重複がおこなわれる理由がほかにもあることを示唆している。その一方で、補語の格標示という機能を完全に否定することもできないであろう。実際に、一定の場合においては、接語重複は純粋に主語と補語を区別するためだけに役立つことを主張する研究者もいる(cf. Vakareliyska 1994; Leafgren 2002 etc.; 本論文の 2.2.4.2.1.3.2. 「Na-drop 現象」も参照のこと)。

2.2.3.4.2. 定性と特定性⁶⁶

Иванчев (1957: 139)は、以下(2-47)の例の対比から明らかなように、「文頭にある後置定冠詞を伴った補語のみ重複する。定冠詞を伴わない補語は決して重複しない⁶⁷。」と述べている。したがって、接語重複は、補語の定性の標示と関係した現象であることが考えられる。

(2-47) a. Крушата я рисува детето.
Krušata ja risuva deteto.
pear-F.SG+DEF.F.SG it-F.SG.ACC.CL draw-PRS.3.SG child-N.SG+DEF.N.SG
「その梨は子供が描いている。」(Иванчев 1957: 139)

b. *Круша я рисува детето.
*Kruša ja risuva deteto.
pear-F.SG it-F.SG.ACC.CL draw-PRS.3.SG child-N.SG+DEF.N.SG
(Иванчев 1957: 139)

しかし、接語重複が行われる補語は、定冠詞を伴うとき以外にもみられる。

⁶⁶ 特定性(specificity)とは、話し手が特定の対象を想定しているかどうかにかかわる概念である(cf. Lambrecht 1994: 80-82)。特定性は不定の場合に関与するものとする。たとえば、以下(i)では、不定の名詞句 a book について、話し手が特定の本を想定している場合と、たんに「本」(どんな本でもよい) というものを探している場合の2通りの解釈が可能である。前者の解釈であれば不定の名詞句 a book は特定であり、後者であれば不特定と考えられる(cf. also Leafgren 1997: 137)。

(i) I am looking for a book. (Lambrecht 1994: 80)

このように、名詞句が不定である場合(定冠詞を伴わない場合)にのみ、特定か不特定かが区別されるものとする。本論文では、特定性について、このような考え方を採用した上で議論を進めていく。

ブルガリア語では、特定は一般的に不定冠詞 един/edin によって標示されるため(Ницолова 1986: 52; Иванчев 1968: 164)、本論文では不定冠詞 един/edin を特定の標識とみなす(数詞として用いられている少数の例を除く(cf. Ницолова 1986: 52))。Vakareliyska (1994: 122)は、един/edin を「特定標示の不定冠詞(specificity-marking indefinite article)」とさえ呼んでいる(cf. also Schick 2000: 266)。

一方で、定性の標識は定冠詞である。

⁶⁷ Иванчев (1968: 164)は、あとになって、重複される補語が必ずしも文頭にある場合に限らないというように考え方を修正している。

Иванчев (1968: 164)は、以下(2-48)にあるように、不定冠詞 *един* の諸形⁶⁸を伴って不定名詞句が補語となる場合にも接語重複が行われることがあると指摘する。

(2-48) *Една котка я гони кучето.*
Edna kotka ja goni kučeto.
 ID.F.F.SG cat-F.SG it-F.SG.ACC.CL drive-PRS.3.SG dog-N.SG+DEF.N.SG
 「ある猫を犬が追い払った。」 (Иванчев 1968: 164)

(2-48)において、*една котка/edna kotka* 「ある猫」は、不定冠詞 *един/edin* を伴って特定であると解釈することができる。Иванчев (1968: 164)自身もまた、「不定名詞も[接語重複は]完全に可能であるが、これらの名詞は必ず特定のものを指し示していなければならない」と述べている。それゆえ、補語が定である場合に限らず、不定である場合にも *един/edin* を伴い特定と解釈される補語は接語重複するといえる。ほかにも、Ницолова (1986: 51-52)は、重複する補語は特定のでなければならないことを明確に指摘しており、標準ブルガリア語の接語重複の実現には、特定性が関与すると考えられる(cf. also Schick 2000: 265-268; Tomić 2006: 266)。

(2-48)の例から、不定の補語の接語重複が行われるためには、その補語は特定性の標識である *един/edin* (cf. Vakareliyska 1994: 122)を伴って特定でなくてはならないことを述べた。しかし、Tomić (2006: 266)はもう一步踏み込んだ指摘をしており、「接語重複がなされる補語は徹底的に特定化(exhaustively specified)されなければならない」と述べている(see also Guentchéva 2008: 290)。

(2-49) a. Рада (?го) търси едно писмо.
 Rada (?go) tǎrsi edno pismo.
 Rada he-ACC.CL look_for-PRS.3.SG ID.F.N.SG letter-N.SG
 「ラダがある手紙を探している。」 (Guentchéva 2008: 210)

b. Търся (го) едно писмо цяла сутрин.
 Tǎrsja (go) edno pismo c'ala sutrin.
 look_for-PRS.1.SG he-ACC.CL ID.F.N.SG letter-N.SG whole morning
 「(わたしは) 朝からずっとある手紙を探している。」
 (Guentchéva 2008: 210)

(2-49a)の補語は *едно/edno* を伴い特定のと考えられるが、Guentchéva (2008: 209)

⁶⁸ 不定冠詞 *един/edin* のパラダイムは次の通り：*един/edin* (M.SG), *една/edna* (F.SG), *едно/edno* (N.SG)。

がクエスチョンマークを付していることからわかるように、(2-49a)の接語重複の実現に対する容認度は低い⁶⁹。(2-49b)のほうは、(2-49a)と比べると、接語重複の容認度が高い一方で、Guentchéva (2008: 290)は、「話者によって判別される指示対象物が存在しない場合、един NP は、標準ブルガリア語における接語重複のための必要条件である特定の解釈を得ることができない」と述べている。

(2-49a)では、この文の主語が3人称であるため、主語と発話者は同一人物ではない(主語 Рада/Rada ≠ 発話者)。そのため、ラダが探している едно писмо/edno pismo 「ある手紙」は、発話者によって具体的に判別されえないため(発話者にとってはラダが探している手紙がどのような手紙であるのかわからない)、直接補語の「ある手紙」は十分に特定のとは言えない。その一方で、(2-49b)は主語が1人称であるため、主語と発話者は同一人物である(主語=発話者)。それゆえ、指示対象である едно писмо/edno pismo 「ある手紙」は、発話者にとって具体的に判別されうるものであるため(発話者にとってそれがどのような本であるのかは頭の中で明確にわかっている)、特定のであると考えられる。このように、同じ「ある手紙」であっても、発話者の視点から指示対象が具体的に判別されうるものか否かによって、接語重複の容認度が変わってくる。要するに、主語が1人称である場合には特定のとなりやすい。(2-49b)は、以上の理由から、(2-49a)と比べて接語重複の容認度があがると考えられる⁷⁰。

また、(2-49b)については、цяла сутрин/c'ala sutrin 「朝の間ずっと」という状況語の副詞句があることによって、この事態が起こっている時間を明確に示している。このようにして、指示対象が「朝の間ずっと私が探していた本」となることで、指示対象はより特定のとなっているものとみることができる。

以上のことから、標準ブルガリア語の接語重複は、一般的に、補語が定冠詞などを伴って定である場合に行われる。ただし、補語が不定である場合も、その指示対象が特定のであれば、接語重複は容認される傾向にある。特定性は標準ブルガリア語ではふつう不定冠詞 един/edin によって標示されるが、不定冠詞を伴っ

⁶⁹ Schick (2000: 266)は(2-49a)と同様の例文を随意的ながら可能としているが、Guentchéva (2008: 209)はその意見に同意できず、非文法的と考えている。しかし、(2-45b)については完全に文法的であると述べており、Schick (2000: 266)と一致した見解である。本論文筆者が母語話者に個別に確認したところ、(2-45a)及び(2-45b)の判断について Guentchéva (2008)と同意見であった。

⁷⁰ ただし、当該の補語が動詞前の位置におかれる場合や、あるいは直接補語の代わりに与格補語である場合などには、3人称が主語であっても容認度はあがる。Лопашов (1978)によって提示された特徴である(2-3b)「動詞前 > 動詞後」、及び(2-3d)「間接補語 > 直接補語」を参照のこと。この点については、次節 2.2.3.4.3. 「トピック」にて詳述する。

ているだけでは、接語重複が行われる条件として不十分であり、指示対象が文脈から十分に特定である必要がある。

以上より、接語重複は定性/特定性の標示と深い関係にあると考えられる。補語が定や特定である場合に限り接語重複が行われるのはなぜであろうか。次節では、接語重複をさらに別の観点、すなわちトピックの観点からみることで、この結びつきの理由を明らかにする。

2.2.3.4.3. トピック

Иванчев (1968)は、マテジウスらプラハ学派による文の現実分析(актуално членение на изречението)を標準ブルガリア語に適用した分析を試みた。彼はその過程で、接語重複が文の現実分析と深い関係にあることを示している。例えば、Иванчев (1968: 166)は、「[人称代名詞には対格形が保持されている]にもかかわらず、[非接語形によって表された]補語がテーマ⁷¹である場合に、それが文頭にあるか文末にあるかに関係なく、接語重複は完全に不可避である」と述べている。また、非接語形と接語形の組み合わせ(接語重複)はテーマである場合にのみあらわれる一方で、非接語形単独ではレーマである場合にのみあらわれると指摘する⁷²(Иванчев 1968: 166)。語彙的な名詞句の接語重複は、主語と補語の区別の必要性から行われると説明する一方で、対格と与格の形を保持する人称代名詞の接語重複については、文の現実分析の観点から、テーマである場合に用いられることを主張している(Иванчев 1968: 166-167)。

このようなテーマ、あるいは本論文で言うところのトピック⁷³と接語重複の結びつきについては、アカデミー文法(Попов et al. 1983: 188)をはじめとした伝統的な文法においても部分的に指摘されている。例えば、Попов (1973: 178)は、定の名詞が接語重複するとき、その定の名詞は心理的主語(психологически подлог)となり、それが発話の出発点の役割を果たすと指摘している⁷⁴。

⁷¹ Иванчев (1968)のテーマ/レーマは、本論文のトピック/コメントと同様のものとして考えることとする。このように考えることで、以後の議論にいかなる影響も与えるものではない。

⁷² Ницолова (1986: 53)が「非接語形はレーマにもなるし(その場合、典型的には非接語形のみであらわされる)、テーマにもなる(その場合、典型的には接語形との組み合わせで用いられる)」と述べていることからわかるように、Иванчев (1968: 166)の主張は非接語形の典型的な用法を示しているにとどまっており、実際には非接語形単独でもテーマになりうる(cf. also Джонова 2004: 108-109; Leafgren 1997: 131-132)。

⁷³ 2.2.1. 「接語の一般的特徴」を参照のこと。

⁷⁴ 「心理的主語」や「発話の出発点」と呼んでいるものは、いわゆるトピック

標準ブルガリア語におけるテーマ化（トピック化）の研究を行った Guentchéva (1994: 159)は、接語重複は目的語をテーマ化するための手段であると結論付け、接語重複とトピックの関係を体系的かつ明確に示した。同様の主張は Асенова (2002: 108)にも見ることができ、彼女は「補語の重複は、補語をテーマ化するための統語的手段と見ることができる（つまり、補語を発話のテーマへ転換すること）」と述べている(cf. also Stanchev 2007: 253-254)。他にも、補語の接語重複とトピックの関係について研究した Leafgren (1997)は、自身が集めた膨大な資料をもとに数値的な裏づけをおこなうことで、接語重複する補語とトピックとの関係性を明確に示した。彼は、以下の【表 2-2】に見るように、接語重複がある場合には補語が必ずトピックとなることを明らかにし、接語重複が「トピック性の随意的な指標」であると結論付けた (Leafgren 1997: 141)。

【表 2-2】 補語とトピック性の関わり⁷⁵(Leafgren 1997: 132)

補語	トピック性
人称代名詞	
非接語形のみ	±
接語形のみ	±
非接語形＋接語形（接語重複）	+
その他の名詞句	
接語重複なし	±
接語重複あり	+

【表 2-2】について、まず人称代名詞が補語となる時、3通りのパターンが考えられる。非接語形あるいは接語形がそれぞれ単独で補語となる場合に加えて、非接語形が接語重複する場合（非接語形＋接語形）である⁷⁶。つまり非接語形と接語形がそれぞれ単独で補語となる場合（接語重複が行われない場合）には、その補語はトピックになることも、ならないこともある。それに対して、接語重複が行われるときには、かならずトピックとなることが【表 2-2】からわかる。人称代名詞以外の名詞句の場合も同じで、接語重複されない場合には補語はトピ

を指す。

⁷⁵ +はトピック性が必ず関係する場合、±はトピック性が関係することも関係しないこともある場合をあらわす。

⁷⁶ 本論文では、接語形と非接語形がそれぞれ単独で用いられている場合、そのそれぞれの形を補語と考えているが、ここでは Leafgren (1997)の議論にあわせるため、「非接語形＋接語形」の組み合わせ（つまり接語重複する場合）も1つの補語の形として考えることとする。

ックになることもならないこともあるが、接語重複がある場合には常にトピックとなる。つまり、接語重複だけが補語のトピック性を標示するものではないので、接語重複は明示的に補語のトピック性を標示する随意的な標識であるという結論に達するのである⁷⁷。

Leafgren (1997)によれば、一般的にトピックが持ちやすい特徴と補語の特徴が一致するということから、接語重複する補語がトピックであることが言えるという。どのような名詞句がトピックになりやすいかに関して、Givón (1976: 152)は以下(2-50)の「トピック性の普遍的階層」を示している。

(2-50) トピック性の普遍的階層 (Givón 1976: 152)

- a. 人間 > 非人間
- b. 定 > 不定
- c. 与格 > 対格⁷⁸
- d. 1 人称 > 2 人称 > 3 人称

接語重複する補語が(2-50)の階層の高い位置を占めやすいかどうかについて、Leafgren (1997)によるデータをもとにまとめる。

まず、普遍的階層の(2-50a)について、Givón (1976: 152)は、「人間が非人間よりも人間についてより多く話したがる傾向の反映」であると指摘する。Leafgren (1997: 136)は、「人間」対「非人間」の枠をひろげて、「有生」対「無生」の対立として、標準ブルガリア語の接語重複のデータでどのように反映されるかを検討している。それによると、有生の補語は 3,141 例中 126 例(4.0%)が重複しているが、無生の補語は 4,244 例中 77 例(1.8%)が重複するにとどまるという。つまり、有生の補語が接語重複する例のほうが約 2 倍多いことがわかる。

次に、(2-50b)について、Givón (1976: 152)は、「旧情報がトピックに、新情報が主張(assertion)になりやすいことを単に反映」していると指摘している。すでに述べたように (2.2.3.4.2. 「定性と特定性」を参照)、標準ブルガリア語では、接

⁷⁷ Георгиева (1974)もまた、直接補語の接語重複とトピック性の関係を指摘しているが、接語重複が行われない場合に直接補語はトピックではないと主張している。実際には、接語重複が行われない場合でも直接補語はトピックとなりうるため、事実にはそぐわない。接語重複は、トピックを標示する義務的な標識ではないからである(cf. Leafgren 1997: 133)。

⁷⁸ この階層はもともと、「より関与的な参加者 > より不関与的な参加者」となっているが、その直後で Givón (1976: 152)自身が「動作主 > 与格 > 対格」と言い換えているため、上記(2-50)ではそのように改めて示した。ただし、ここでは Leafgren (1997)にしたがい意味役割の動作主は考慮せず、「与格 > 対格」の階層のみを検討対象とする。

語重複が行われるのは補語が定である場合が多く、これは Иванчев (1957)をはじめ、多くの研究者によって指摘されている事実である。

Leafgren (1997: 136-137)によれば、定・不定の割合に関して、定の補語 5,279 例中 192 例(3.6%)が重複している一方で、不定の補語は 2,106 例中 11 例(0.5%)が重複しているという。定の補語でさえ接語重複するのは全体の 3.6%に過ぎないことは、標準ブルガリア語における接語重複が「随意的」とみられることを端的に示しているといえよう。一方で、不定の補語で接語重複するのが 0.5%であることを考慮すれば、やはり定の補語のほうが接語重複しやすいという傾向があることを確認することができる。

(2-50c)の階層について、Givón (1976: 152)は、「『動作主』と『与格』は、談話において圧倒的に人間によってあらわされる」ということと、「『対格』と比べて、一般的に人間の項であらわされる『動作主』と『与格』が高い頻度で定である」ということを述べている。このことからわかるように、(2-50c)の階層は、(2-50a)や(2-50b)の階層とも必然的に関係している。Leafgren (1997: 137)のデータによれば、間接補語は 1,406 例中 71 例(5.0%)が重複しているのに対して、直接補語は 5,979 例中 132 例(2.2%)が重複しているに過ぎない。また Leafgren (1997: 137)自身も言及している通り、間接補語の例が多いのには、義務的に行われる接語重複(その多くが与格形を項とする非人称文)が多いことも関係しているものと考えられる⁷⁹。

最後に、(2-50d)について Givón (1976: 153)は、「談話の自己中心的性格(the ego-centric character)」を反映したものであると考えている。Leafgren (1997: 137-138)のデータによれば、1 人称の補語が重複するのは 524 例中 27 例(5.2%)で、2 人称の補語は 391 例中 17 例(4.3%)、3 人称の補語は 6,470 例中 159 例(2.5%)であるという。つまり、1 人称から 3 人称まで(2-50d)の階層と一致した結果が出ているといえる。1 人称と 2 人称だけをみると差異は小さいが、1 人称と 3 人称については 2 倍ほどの差がある。また、3 人称補語は、母数が大きい一方で、実際に接語重複している例はかなり限定的である。

以上で述べたことをまとめると、以下【表 2-3】(Leafgren (1997: 136-138)をもとに本論文筆者がまとめた) のようになる。

⁷⁹ Leafgren (1997: 138)は、人称文と非人称文とで、どちらが接語重複しやすいかも自身のデータを用いて示している。それによると、人称文では 6,944 例中 167 例(2.4%)の接語重複の例が確認される一方で、非人称文では 441 例中 36 例(8.2%)もみられるという。

(i) 非人称文(8.2%) > 人称文(2.4%)

【表 2-3】 補語の接語重複にみられるトピック性の普遍的階層の反映

トピック性の普遍的階層	接語重複が行われる（割合）と[例数/母数]		
有生 > 無生	有生(4.0%) [126 / 3,141]	無生(1.8%) [77 / 4,244]	
定 > 不定	定(3.6%) [192 / 5,279]	不定(0.5%) [11 / 2,106]	
与格 > 対格	与格(5.0%) [71 / 1,406]	対格(2.2%) [132 / 5,979]	
1 人称 > 2 人称 > 3 人称	1 人称(5.2%) [27 / 524]	2 人称(4.3%) [17 / 391]	3 人称(2.5%) [159 / 6,470]

上記の【表 2-3】からもわかるように、トピック性の普遍的階層で高い位置にあるものが補語である場合に接語重複がおこなわれやすい。つまり、少なくともトピックである補語が接語重複しやすいということが示されていると考えられる。このことは、接語重複がトピックと関係した現象であることを示している。

また、すでに 2.1.2. 「接語重複の研究史」でも述べたが、Лопашов (1978: 26, 57, 58)は、バルカン諸語で接語重複が行われる際にみられる一般的な特徴（あるいは接語重複が実現するための条件）を挙げている(cf. Асенова 2002: 110)。

以下で、標準ブルガリア語の接語重複にも適用されるこれらの特徴が、トピック性とかかわりがあるかどうかについて検討する。

(2-51) (=2-5) バルカン諸語で接語重複が行われる際に見られる一般的な特徴
(Асенова 2002: 110; cf. Лопашов 1978: 56-58)

- a. 後置定冠詞を伴った補語がもっとも頻繁に重複される
- b. 動詞後にある補語より動詞前の補語のほうがより頻繁に重複される
- c. 補語が人称代名詞によって表されるときに重複が最も典型的である
- d. 間接補語の重複のほうが、直接補語の重複より圧倒的に多い
- e. 定でない補語は重複されない

Givón (1976)によるトピック性の普遍的階層(2-50)とくらべたとき、(2-51a)は(2-50b)と、(2-51d)は(2-50c)と対応する⁸⁰。つまり、トピック性と関係のある特徴と

⁸⁰ Асенова (2002: 110)も指摘するように、この一般化が当てはまらない場合もないわけではない。たとえば、直接補語の接語重複が義務的であると同時に、間接補語の接語重複が随意的となる場合も存在する。次の例(i)直接補語と(ii)間接補語を比較せよ(Arnaudova, Krapova 2007: 16; Krapova, Cinque 2008: 268)。直接補語の(i)は接語重複が義務的であるが、間接補語の(ii)は随意的である。

(i) Иван всички го познават.
Ivan vsički go poznavat.
 Ivan everybody-PL he-ACC.CL know-PRS.3.PL

「イワンのことは、みな知っている。」(Arnaudova, Krapova 2007: 16)

いうことができる。また、(2-51c)については、人称代名詞が定の代名詞であることと関連して、(2-51a)の定冠詞による定性の標示と関係がある。

(2-51b)はトピック性の普遍的階層には含まれていないが、トピックが典型的に文頭の位置を占めるという特徴(cf. Rudin 1986; Krapova 2004)が関係する。ふつうは動詞後におかれる補語が動詞前におかれることは、接語重複する補語が頻繁にトピックとなることの反映であると考えられる。標準ブルガリア語についても、Leafgren (1997: 138)のデータによれば、(2-51b)の特徴ははっきり見られる。動詞前の補語は 750 例中 116 例(15.5%)が接語重複するのに対して、動詞後の補語は 3,863 例中 87 例(2.3%)しか接語重複していないという(2-52)。

(2-52) 動詞前(15.5%) > 動詞後(2.3%) (Leafgren 1997: 138)

以上の各点を踏まえると、Лопашов (1978)によって示された接語重複の一般的特徴は、いずれもトピック性の普遍的階層と一致していると指摘できる。したがって、この観点からも、接語重複が補語のトピック性を標示する機能と関連しているということを確認することができる。

ただし、(2-51e)については、Лопашов (1978)自身も、不定の補語が接語重複する例を出しており、これを一般的な傾向とするのには注意が必要であるが (cf. Friedman 2008: 40)、本論文でも、2.2.3.4.2. 「定性と特定性」にて、不定であるが特定である場合に接語重複が行われるという例をいくつか出して示している。

最後に、フォーカスである補語の接語重複は基本的に行われえないという事実もまた、接語重複する補語がトピックであることを示唆している。

(2-53) a. ПИСМОТО (*го) написа Иво.
 PISMOTO (*go) napisa Ivo.
 letter-N.SG+DEF.N.SG it-ACC.CL write-AOR.3.SG Ivo
 「その手紙をイヴォが書いた。」 (Schick 2000: 267)

b. НА ИВАН (*му) подарих тази книга.
 NA IVAN (*mu) podarih тази kniga.
 DM Ivan he-DAT.CL present-AOR.1.SG this book

(ii) На Мария аз много съм (ѝ) помагал.
Na Marija az mnogo sām (i) pomagal.
 DM Maria I-NOM very_much be-PRS.1.SG she-DAT.CL help-PAP.M.SG
 「 Марияには、私はたくさん手助けをした。」 (Arnaudova, Krapova 2007: 16)

「(私は) イワンにこの本をプレゼントした。」(Guentchéva 2008: 208)

(2-53)は両方の例とも、直接補語と間接補語がそれぞれ論理強勢をうけて、文のフォーカスとなっている例である。このようなとき、フォーカスとなっている補語の接語重複は行われぬが(cf. Shick 2000: 269-270; Асенова 2002: 112; Krapova 2004: 3; Guentchéva 2008: 208)、このことは接語重複する補語がトピックであることを示唆している。

以上のことを総括すると、格標示や定性・特定性の標示と比べて、標準ブルガリア語の接語重複にとっては、補語のトピック化が最も重要である。ただし、接語重複が補語のトピック化のための唯一の手段というわけではない。実際に、トピック標示は様々な手段で行われうる。したがって、接語重複する補語は必ずトピックだが、その一方で接語重複しない補語であってもトピックとなることがある。そのため、標準ブルガリア語における接語重複は、話者の意向によって選択される随意的な補語のトピック化の手段であるといえることができる。

2.2.4. 接語重複の構造

本節では、まず先行研究における指摘を踏まえて、標準ブルガリア語の語順について述べる。そして、すでに述べたように (2.1.1. 「接語重複とは」)、接語重複の結果生じた接語重複構造の特徴について論じる。

2.2.4.1. 語順

標準ブルガリア語における文の構成要素の語順は比較的自由であることが知られ、実際に様々な語順がみられる。そのなかでも、Георгиева (1974: 6)は、以下 (2-54)にあるような「ほとんど同等に広く用いられる 3つの語順タイプ」が存在することを指摘している。

(2-54) 同等に広く用いられる 3つの語順タイプ (Георгиева 1974: 6)

- a. 主語 — 述語 — (補語) — 状況語
- b. 述語 — 主語 <状況語の配置は様々>
- c.⁸¹ (i) 状況語 — 述語 — (主語)
- (ii) 状況語 — (主語) — 述語

(2-54a)における補語や、(2-54c)における主語はあってもなくてもよいことを意味する。(2-54b)は述語が主語に先行するという特徴を持つ語順であるが、状況語については配置にヴァリエーションがある。(2-54c)では、随意的な要素である主語が述語に対して後続することも(i)、先行することも(ii)もある。これらのうち、(2-54a)が、標準ブルガリア語の単文における主要な構成要素の語順として、形式及び語用の点で最もニュートラルであり、無標な語順と考えられている(Попов et al. 1983: 274; Андрейчин 1978: 393; Георгиева 1974: 6-7; Маслов 1982: 338; Rudin 1986: 15; Тишева 2014: 42)。

その一方で、特に話し言葉においては文の構成要素の語順が比較的自由であるため⁸²、以下(2-55)にみられる語順はいずれも可能となる。ここでは、文の主要な構成要素として、特に主語(S)・動詞(述語)(V)・補語(O)を念頭において考える。

⁸¹ Георгиева (1974: 6)が示す 3つ目の語順タイプ(2-54c)は、引用元の書き方ではわかりづらいため、本論文筆者が、彼女の述べているところをふまえて(i), (ii)にかき分けた。

⁸² 書き言葉と比較して、話し言葉で様々な語順が見られやすい理由として、Rudin (1986: 15)は、書き言葉ではふつう示されないイントネーションなどによってかなりの程度曖昧さが軽減されるためであると指摘している。

(2-55)	a.	Иван	отвори	вратата.	(SVO)
		Ivan	otvori	vratata.	
		Ivan	open-AOR.3.SG	door-F.SG+DEF.F.SG	
	b.	Иван	вратата	отвори.	(SOV)
		Ivan	vratata	otvori.	
	c.	Вратата	отвори	Иван.	(OVS)
		Vratata	otvori	Ivan.	
	d.	Вратата	Иван	отвори.	(OSV)
		Vratata	Ivan	otvori.	
	e.	Отвори	вратата	Иван.	(VOS)
		Otvori	vratata	Ivan.	
	f.	Отвори	Иван	вратата.	(VSO)
		Otvori	Ivan	vratata.	

「イワンはドアを開けた。」 (Rudin 1986: 14-15)

(2-55a)～(2-55-f)は、いずれも文の命題的意味が同じである。しかし、最もニュートラルであるとされる(2-55a)の SVO の語順以外では、文体的にも語用論的にも、またイントネーションの上でも有標な語順である(Rudin 1986: 15)。それゆえ、(2-55b-f)の語順が適切に用いられるうるコンテキストは、(2-55a)の場合と比べて、極めて限定的となる。

これには文の情報構造が関与している。標準ブルガリア語では、一般的にトピックがコメントに先行する(cf. Rudin 1986; Крапова 2004)。そのため、「いわゆる SVO のような基本的な語順のモデルでは、発話の中の第 1 番目の部分は、談話のテーマやトピックの要素<...>のために“とってある”」(Тишева 2014: 37-38)ので、頻繁にこの位置にくる主語はふつうトピックである。Тишева (2014: 42)が、「<...> 動詞後の要素が動詞前に置かれる場合、旧情報、つまりテーマやトピックが標示される」と述べているように、SVO 語順において動詞後の位置におかれる補語が動詞前の位置におかれる場合(つまり、OV)には、以下(2-56)のごとく、その補語は文のトピックとなる。

(2-56) a. Те поканиха Петър на вечеря. (SVO)

Te pokaniha Petăr na večer'a.

they-NOM invite-AOR.3.PL Petăr to dinner

「彼らはペタルを夕食に招待した。」 (Stanchev 2007: 239)

b. (Te) Петър го поканиха на вечеря. ((S)OV)

(Te) Petăr го pokaniha na večer'a.

(they-NOM) Petăr he-ACC.CL invite-AOR.3.PL to dinner

「ペタルは夕食に招待された。」 (Stanchev 2007: 239)

SVO 語順である(2-56a)では、直接補語 Петър/Petăr 「ペタル」は、動詞後の位置を占めている。それに対して、(2-56b)では直接補語が動詞前の位置を占め、対応する接語形 го/go が接語重複している。このとき当該の直接補語 Петър/Petăr は(2-56b)の文のトピックとなる。それがトピックであるということは、このような語順からも明白である。しかし、一般的には、語順による標示のみならず、接語重複も同時に行われることで、その補語がトピックであることが顕在的に示される⁸³(cf. Leafgren 1997)。

以上のことを総括すると、標準ブルガリア語では様々な語順が許容されるが、それらはみな話者が情報をどのように提示したいかという意向と関係がある。典型的に旧情報であるトピックは、一般に文頭(あるいは動詞前)にあらわれる。すでに指摘したように(前節 2.2.3.4.3. 「トピック」)、補語の接語重複はトピック標示に関与している。動詞前の補語のほうが動詞後の補語よりも頻繁に接語重複するという Лопашов (1978)の一般化は(本論文では(2-51b)=(2-5b)が該当する)、トピックが文頭の位置を占めやすいという傾向の反映に他ならない。次節以降、接語重複する補語が、文中のどの位置に立つかということをもふまえて議論を進めていく。

2.2.4.2. 動詞前と動詞後

本論文では、補語の接語重複の構造を論じるにあたり、動詞に対する補語の位置関係から、「動詞前」と「動詞後」の2通りを区別することとする。

⁸³ フォーカスの要素が動詞前を占めることもあるが、この場合は接語重複が行われない(cf. Krapova, Cinque 2008)。

(2-57) a. 動詞前

Иван го обича Мария. (N - Ncl)
Ivan го običa Marija.
Ivan he-ACC.CL love-PRS.3.SG Maria
「イワンはマリアが愛している。」

b. 動詞後

Мария го обича Иван. (Ncl - N)
Marija го običa Ivan.
Maria he-ACC.CL love-PRS.3.SG Ivan
「マリアはイワンを愛している。」 (Leafgren 1997: 123)

(2-57)はいずれも直接補語の接語重複が行われている例である。(2-57a)では直接補語 Иван/Ivan 「イワン」は動詞前の位置にあり、同一指示の接語形がそれに後続する。(2-57b)では直接補語 Иван/Ivan は動詞後の位置にあり、同一指示の接語形はそれに先行している⁸⁴。つまり、(2-57a)が「動詞前」、(2-57b)が「動詞後」である。Лопашов(1978: 14-15)は、(2-57a)のように動詞前の語順で実現する接語重複を реприза 「繰り返し」、(2-57b)のように動詞後の語順で実現する接語重複を антиципация 「先取り」と呼び区別しているが、本論文では、動詞に対する位置関係を重視して、一貫して「動詞前」と「動詞後」を用いる。

2. 2. 4. 2. 1. 動詞前

2. 2. 4. 2. 1. 1. 2つの接語重複構造

動詞前にある補語が接語重複するとき、主に形式の観点から、2つの構造が区別される。

(2-58) a. Иван # видях го вчера.
Ivan # vid'ah го včera.
Ivan see-AOR.1.SG he-ACC.CL yesterday
「(私は) イワンなら昨日見た。」 (Rudin 1986: 34)

b. Иван (го) видях вчера.
Ivan (го) vid'ah včera.
Ivan he-ACC.CL see-AOR.1.SG yesterday

⁸⁴ この場合、接語形の語順は関係ない。

「(私は) イワンなら昨日見た。」(Rudin 1986: 34)

(2-58)はいずれも直接補語 Иван/Ivan「イワン」が動詞前で接語重複している例である。ただし、(2-58a)では文頭の直接補語 Иван/Ivan のあとにはっきりとしたイントネーション上の休止(noticeable pause or intonation break)がある(Rudin 1986: 34)⁸⁵。ここで、接語形の位置に注目すると、(2-58a)では接語形が動詞に対して後続し、(2-58b)では動詞に対して先行している。すでに接語形の語順についてみたように(2.2.2.2. 「語順の特徴」を参照)、ブルガリア語の人称代名詞接語形はエンクリティックであるため、文頭に立つことはできない。(2-58a)で動詞句(=動詞と接語形の組み合わせ)は文頭の位置に立っているわけではないが、文頭の直接補語 Иван/Ivan とそのあとの部分との間に休止があり、両者を音律的に分けだてている。それゆえ、エンクリティックな接語形 го/go は、動詞句が文頭にある場合と同じような語順のふるまいを示し、動詞 видях/vid'ah「(私は) 見た」に対して後続しているのである。それに対して、(2-58b)では文頭の直接補語 Иван/Ivan のあとに休止は介在しておらず、実際に動詞句内の接語形の語順はそのことをはっきりと示していると言える。(2-58)の例は、あくまでもこの2つの構造を区別するうえでの典型的な例である⁸⁶。

また、Rudin(1986: 34)は、(2-58a)と(2-58b)の違いとして、(2-58a)は接語重複が義務的であるのに対して、(2-58b)は随意的であるという事実も指摘している。

そこで、Krapova, Cinque(2008)をはじめ、標準ブルガリア語の接語重複の構造について取り扱う多くの先行研究が用いている用語を本論文でも採用し、(2-58a)のタイプの動詞前の補語の接語重複をもつものを「ハンギング・トピック左方転位(Hanging Topic Left Dislocation, HTLD)」と呼び、(2-58b)のタイプの接語重複をもつものを「接語左方転位(Clitic Left Dislocation, CLLD)」と呼ぶこととする(cf. also Arnaudova 2002; Джонова 2004; Krapova 2004 etc.)。これにしたがい、HTLD 及び CLLD の操作の結果生じる接語重複の構造のことを、それぞれ「HTLD の構造」、「CLLD の構造」と呼ぶ。

HTLD と CLLD は、ともに接語重複をともなう操作であるが、接語重複する補

⁸⁵ 本論文では以後、「イントネーション上の休止」、または単に「休止」と呼ぶ。例文中では、特に議論にかかわる場合に限り、#を用いて示すこととする。

⁸⁶ 必ずしも(2-58)にあるような区別が明確に表れるわけではない。例えば、休止は、(2-58a)の場合に必ずしもみられるわけではない。詳細は本節中で後述している。

語が文中で占める位置はそれぞれ異なると考えられている⁸⁷(Rudin 1986; Krapova 2004 etc.)。HTLD と CLLD の結果生じる構造には、すでに上でも指摘した休止の存在や接語形の語順などの差異がみられるが、これらの形式上の特徴は、両者の補語の位置が異なっていることを示唆する(cf. Rudin 1986: 34)。以下(2-59a)と(2-59b)は、(2-58)の例をもとにそれぞれ HTLD と CLLD の構造を模式的に示したものである(以後、HTLD か CLLD かは、例文横に[]で示す)。

(2-59) a. HTLD の構造⁸⁸

$N_i \# V \quad Ncl_i \quad [HTLD] \quad (\text{Kallulli, Tasmowski 2008: 14})$

b. CLLD の構造

$N_i \quad Ncl_i \quad V \quad [CLLD] \quad (\text{Kallulli, Tasmowski 2008: 14})$

また、以下(2-60)の例からもわかるように、CLLD と HTLD の補語は共起することがある。HTLD の補語は文中で 1 つしか用いられないという特徴を考慮すると(cf. Rudin 1986; Arnaudova 2002; Krapova 2004; Тишева, Джонова 2006; Krapova, Cinque 2008)、このような構造が実現しようということは、CLLD の補語と HTLD の補語の位置が互いに異なった位置を占めることの傍証でもある。(2-61)は(2-60)に対応する構造を模式的に示したものである。

(2-60) a. Иван # него го видях вчера.

Ivan # nego go vid'ah včera.

Ivan he-ACC he-ACC.CL see-AOR.1.SG yesterday

「(私は) イワンなら昨日見た。」(Rudin 1986: 33)

b. Иван # на него му купих една книга.

Ivan # na nego mu kuh'ih edna kniga.

Ivan DM he-ACC he-DAT.CL buy-AOR.1.SG IDF.F.SG book-F.SG

「(私は) イワンには本を買った。」(Rudin 1986: 33)

⁸⁷ ここでは、説明上の煩雑さを避けるため、HTLD と CLLD の構造中で、接語重複する補語が占める位置をそれぞれ「HTLD の補語の位置」、「CLLD の補語の位置」と呼ぶこととする。

⁸⁸ Kallulli, Tasmowski (2008: 14, fn18)では、V と Ncl の語順が逆のものを示しているが、語順の入れ替えは可能であるとされているため、標準ブルガリア語の現実に基づいて本論文筆者が書き換えた。このとき、略語も O の代わりに N を、Clitic の代わりに Ncl を用いて、本論文の用語にあわせた。

(2-61) $N_i \# N_i \text{ Ncl}_i \quad V$

このとき、HTLDがCLLDに先行するという語順の特徴もみられる(Krapova 2004: 13; Krapova, Cinque 2008: 263-264)。このように、HTLDとCLLDの補語の位置は互いに異なるが、それぞれどのようにして補語がその位置に生じたのか(すなわち、補語が移動したのか、基底生成されたのか)やHTLDの補語は文の外なのか中なのかという議論は本論文では扱わない⁸⁹。ここで扱うのはあくまでも接語重複する補語が動詞前で2つの異なった位置を取りうるということ、またそれによって2つの異なった構造を伴った接語重複が存在することのみを考慮することとする。

2.2.4.2.1.2. HTLDとCLLD

標準ブルガリア語のように、接語形の語順によって、HTLDとCLLDの区別が比較的容易にできる言語以外では、HTLDの大きな特徴の一つとして、文頭の補語と残りの文との間にみられる休止が挙げられることが多い。例えば、Kallulli, Tasmowski (2008: 14)は一般論として、休止は扱うのが困難な概念である一方で、HTLDの最もはっきりした特徴の一つであることを指摘している。以下(2-62)はKallulli, Tasmowski (2008: 14)により示された模式であるが、(2-62a)は休止をもつHTLDであり、(2-62b)はCLLDである。

(2-62) (=2-59) a. $N \# [V \quad \text{Ncl}] \quad [\text{HTLD}]$
b. $N \quad [\text{Ncl} \quad V] \quad [\text{CLLD}]$

(2-62)は、標準ブルガリア語の(2-58)の例と対応したものになっている。

しかしながら、標準ブルガリア語では、HTLDの大きな特徴とされる文頭の補語と残りの文の間の休止は、義務的に伴われるものではない。たとえば、Тишева (2014: 64)は、「音韻論的な手段[本論文筆者注：つまり、休止のこと]で左方・右方周辺域(文頭または文末)にある要素を残りの部分から分離することは、英語やイタリア語などの構造とは異なり、非義務的である」と明確に述べている。休止が随意的であるということは、Тишева (2014)以外でも、標準ブルガリア語の接語重複を研究する多くの研究者によって指摘されている(Stanchev 2007: 240;

⁸⁹ この議論については、Rudin (1986)やKrapova (2004)、Arnaudova (2002)などを参照されたい。例えば、Rudin (1986: 33-37)は、HTLD(彼女の用語ではLeft Dislocation)は基底生成されたもので、CLLD(彼女の用語ではTOPIC)は移動によるものと考えている。

Krapova, Cinque 2008: 260)。 (2-62a)の休止が実現しない場合には、それにしたがって、動詞句内の接語形の語順も変わり、(2-62b)と同じ構造が実現することになる⁹⁰。それゆえ、標準ブルガリア語では HTLD と CLLD の区別は多くの場合で曖昧なものとなってしまふ。以下では、HTLD と CLLD にみられる、休止以外の相違点について論じる。

まず、HTLD と CLLD では、動詞前で接語重複する補語の格が異なる。HTLD の場合には、動詞前の補語(N)と接語形(Ncl)は、異なった格であられる。接語形(Ncl)が対格であろうが、与格であろうが、補語(N)は主格であられるのである⁹¹(cf. Rudin 1986; Arnaudova 2002; Джонова 2004; Krapova 2004; Krapova, Cinque 2008 etc.)。その一方で、CLLD では、動詞前の補語(N)と接語形(Ncl)は、同じ格であられる。ゆえに、CLLD では、動詞前の補語(N)とそのあとの文の接語形(Ncl)のつながりがはっきりと形の上であられるのに対して、HTLD ではその結びつきが形の上からはわからない。しかし、このような HTLD と CLLD の違いが顕在的になるのは、標準ブルガリア語の場合、明示的な格標示がされる人称代名詞のときに限られる。

(2-63) a. Той от мъжете го е страх.
Toj ot mǎžete go e strah.
 he-NOM from man-PL+DEF-PL he-ACC.CL be-PRS.3.SG fear
 「彼は男たちを恐れている。⁹²」 (Джонова 2004: 107) [HTLD]

b. Те лексикографите никой не може
Te leksikografite nikoj ne može
 they-NOM lexicographer-PL+DEF.PL nobody NEG can-PRS.3.SG
 да ги разбере.
 da gi razbere.
 SMP they-ACC.CL understand-PRS.3.SG

⁹⁰ ただし、本論文筆者が独自に母語話者に確認を取ったところ、(2-58a)の例に限り、休止があるのがふつうであるという。しかし、同じ母語話者は(2-63)の例やこれ以後にみる HTLD の例については休止がないほうがふつうであると答えている。この差が何によるものなのかについての研究は今後の課題とする。

⁹¹ このように、HTLD の文頭の名詞句(N)は主格であられるため、Nominativus pendens と呼ばれる(cf. Krapova 2004: 5; Krapova, Cinque 2008: 260)。

⁹² 感情を表す名詞を非人称文で用いる場合、対格補語が要求される。

「辞書編纂者たちのことは、誰も理解することはできない。」
 (Джонова 2004: 107) [HTLD]

(2-63)の例では文頭の位置を占める補語(N)はいずれも人称代名詞の主格であらわされている。これと同一指示の接語形(Ncl)はそれぞれ対格であり、主格であらわされている文頭の補語(N)とは明らかに格が異なる。文頭の補語(N)が主格であらわされている(2-63)は HTLD と考えられる。ただし、(2-63b)については、HTLD のトピックである主格の人称代名詞 *te/te* 以外に、CLLD のトピックである *лексикографите/leksikografite* 「辞書編纂者」という名詞句も見られる。

標準ブルガリア語の HTLD では、(2-63)の例もそうであるように、文頭の補語(N)と残りの文との間の休止は随意的である。それゆえ、文頭の補語(N)として人称代名詞以外の名詞句が用いられる場合には、一般的に HTLD と CLLD を形式上区別することはできない(Krapova, Cinque 2008: 262-263)。しかし、名詞句以外の要素が文頭の補語(N)である場合には、HTLD と CLLD のどちらであるかという曖昧さは生じない。なぜなら、前置詞句や節が HTLD の補語の位置にたつことができないためである(cf. Rudin 1986; Arnaudova 2002; Krapova 2004; Krapova, Cinque 2008 etc.)。一方でこれらの要素は、CLLD の補語の位置であれば問題なくあらわれることができる。

(2-64) a. На Иван отдавна не са му плащали.
Na Ivan otdavna ne sa mu plaštali.
 DM Ivan for_a_long_time NEG be-PRS.3.PL he-DAT.CL pay-PAP.PL
 「イワンには、長い間支払われていない。」
 (Krapova, Cinque 2008: 263) [CLLD]

b. Че Русия ни е освободила
Če Rusija ni e osvobodila
 that Russia-F.SG we-ACC.CL be-PRS.3.SG liberate-PAP.F.SG
от турците,⁹³ го знаят и децата.
ot turcite, go znajat i decata.
 from turkish-PL+DEF.PL it-N.SG.ACC.CL know-PRS.3.PL also child-PL
 「ロシアが私達をトルコから解放したことは、子供でも知っている。」
 (Krapova, Cinque 2008: 263) [CLLD]

⁹³ ここで用いられているコンマは休止の存在をあらわすものではない。母語話者に確認を取ったところ、当該の箇所において休止は不要であるという。

また、HTLD と CLLD では、重複する要素が異なる場合がある。CLLD では、文頭の補語(N)と同一指示の重複する要素は接語形(Ncl)に限られる。CLLD の「接語」左方転位という名称はこれに由来する。一方で、HTLD で重複する要素は、接語形(Ncl)に限らず、様々な名詞句が担うことができる。

(2-65) a. Мария никой не я обича.
Marija nikoj ne ja običa.
 Maria nobody NEG she-ACC.CL love-PRS.3.SG
 「マリアのことは、誰も愛していない。」
 (Krapova, Cinque 2008: 261) [HTLD/CLLD]

b. Мария знаеш ли, че никой не говори
Marija znaeš li če nikoj ne govori
 Maria know-PRS.2.SG Q that nobody NEG speak-PRS.3.SG
 с нея от години.
 s neja ot godini.
 with she-ACC for_many_years
 「マリアとは、誰も長い間話していないのを(君は)知っているか。」
 (Krapova, Cinque 2008: 261) [HTLD]

(2-65b)は、重複する要素が非接語形によって標示されているので、HTLD である。接語形(Ncl)が関与しない HTLD である(2-65b)は「接語」重複ではないので、本論文では以後研究の対象として取り上げない。その一方で、(2-65a)は接語形(Ncl)が関与するため接語重複が行われているとみることができるが、人称代名詞以外の名詞句(ここでは Мария/Marija)によって表されているうえ、休止も伴わないことから HTLD と CLLD の区別はできない。

HTLD と CLLD の補語は、従属節中にあらわれるかどうかということでも異なる。HTLD の補語は主節の文頭にしかあらわれないため、従属節中にあらわれることはない。しかし、CLLD の補語は主節、従属節どちらにもあらわれうる(cf. Rudin 1986; Arnaudova 2002; Krapova 2004; Krapova, Cinque 2008 etc.)。

(2-66) a. Той не могат да го прикрепят
Toj ne mogat da go prikrep'at
 he-NOM NEG can-PRS.3.PL SMP he-ACC.CL attach-PRS.3.PL

към никого.
 kǎm nikogo.
 to nobody-ACC

「彼は、誰（のグループ）にも所属させることができなかった。」
 (Krapova, Cinque 2008: 259) [HTLD]

b. *Иван каза, че той не могат
 *Ivan каза, че toj ne mogat
 Ivan tell-AOR.3.SG that he-NOM NEG can-PRS.3.PL
 да го прикрепят към никого.
 da go prikrep'at kǎm nikogo.
 SMP he-ACC.CL attach-PRS.3.PL to nobody-ACC

「彼は、誰（のグループ）にも所属させることができなかった、と
 イワンは言った。」 (Krapova, Cinque 2008: 259) [HTLD]

(2-67) a. На Мария ти с нищо
Na Marija ti s ništo
 DM Maria you-NOM with nothing

не си ѝ помогнал.
 ne si ï pomognal.
 NEG be-PRS.2.SG she-DAT.CL help-PPR.M.SG

「マリアには、君は何も手助けしてやらなかった。」
 (Krapova, Cinque 2008: 260) [CLLD]

b. Иван каза, че на Мария ти с нищо
 Ivan каза, че na Marija ti s ništo
 Ivan tell-AOR.3.SG that DM Maria you-NOM with nothing

не си ѝ помогнал.
 ne si ï pomognal.
 NEG be-PRS.2.SG she-DAT.CL help-PPR.M.SG

「マリアには、君は何も手助けしてやらなかった、とイワンは言った。」
 (Krapova, Cinque 2008: 260) [CLLD]

文頭の補語(N)が主格で表れている(2-66)は HTLD の、文頭の補語(N)が前置詞句で表れている(2-67)は CLLD の例である。このとき、HTLD の補語(N)が従属節中にあらわれる(2-66b)のみが非文である。一方、CLLD の補語(N)は主節にも(2-67a)、

従属節にも(2-67b)あらわれる。つまり、HTLD の補語(N)に限り、主節のみであらわれるという制限がある。

最後に、HTLD と CLLD とでは、一文中で用いられうる補語の個数に違いがあることを指摘できる。HTLD の補語は1つに限られる一方で、CLLD の補語は複数個が共起可能である(Krapova, Cinque 2008: 264)。(2-68a)は HTLD、(2-68b)は CLLD の例である。

- (2-68) a. *Ти, Мария, представил ли те е
 *Ти, Марија, predstavil li те е
 you-NOM Maria introduce-PAP.M.SG Q you-ACC.CL be-PRS.3.SG
 Иван на.....нея?
 Иван на.....neja?
 Ivan DM she-ACC
 「あなたのことは、マリアには、イワンが紹介したのか。」
 (Krapova, Cinque 2008: 264) [HTLD]

- b. На вас тия книги кой
Нa вas тija кnigi koj
 DM you-ACC this-PL book-PL who
ви ги е пратил?
вi гi е pratil?
 you-DAT.CL they-ACC.CL be-PRS.3.SG send-PAP.M.SG
 「あなたがたには、これらの本は、誰が送ったのか。」
 (Krapova, Cinque 2008: 264) [CLLD]

HTLD の補語が2個 (Ти/Ti「あなた」と Мария/Marija「マリア」) 共起する(2-68a) は非文である一方で、CLLD の補語が2個 (На вас/Na vas「あなたがたに」と тия книги/tija knigi「これらの本」) 共起する(2-68b)は適格な文である。

以上にあげた HTLD と CLLD の構造上の相違点をまとめると、以下の【表 2-3】のようになる(cf. Rudin 1986: 36-37; Arnaudova 2002: 27-28; Krapova 2004: 4-6; Krapova, Cinque 2008: 259-264)。

【表 2-3】 HTLD と CLLD の違い

	HTLD	CLLD
a. 休止	あり (随意的)	なし
b. 補語(N)の格	主格	接語形(Ncl)と同じ
c. 重複要素の種類	接語形(Ncl)に限らない	接語形(Ncl)に限る
d. 補語(N)の位置	主節のみ	主節も従属節も
e. 補語(N)の個数	1 個のみ	複数個可能

以上より、動詞前の位置に補語がおかれている場合の接語重複の構造には、HTLD と CLLD という 2 つのタイプが存在し、両者は【表 2-3】にあげた 5 つの点において構造上の違いがある。

一方で、HTLD の大きな特徴と考えられている休止が随意的であること (実際には、ほとんどの場合で実現しない) や、名詞類の格変化の消失によって主格が明示的に表されるのが人称代名詞の場合に限られることから、現状として HTLD と CLLD を区別することが常に可能となるわけではないことも指摘できる (たとえば、(2-65a)の例は HTLD と CLLD を形式上区別することは不可能である)。このように HTLD と CLLD の形式の上での差がほとんどなくなってきていることはまた、接語重複の文法化とも関係があることが推定される。この点については、理論的な整理や裏付けが必要であるため、今後の課題とする。

2.2.4.2.1.3. Na-drop 現象

2.2.4.2.1.3.1. 概要

標準ブルガリア語の話し言葉では、Na-drop と呼ばれる現象が知られる。これは、以下(2-69)にあるように、間接補語の接語重複の構造中で、間接補語の与格標識である *на/na* が随意的に脱落する現象である(Vakareliyska 1994: 121)。

(2-69) a. Мене ми харесва този филм.
Мене mi haresva tozi film.
 I-ACC I-DAT.CL appeal-PRS.3.SG this film

「私はこの映画が気に入っている。」(Vakareliyska 1994: 135)

b. Мене ми помогнаха.
Мене mi pomognaha.
 I-ACC I-DAT.CL help-AOR.3.PL

「私は助けられた。」(Vakareliyska 1994: 130)

(2-69)の例では、文頭の位置に立つ補語(N)は、与格標識 *на/na* を伴った形で表れることが期待されるが、ここではそれが脱落した形であらわれている。そのため、明示的な格標識を持たない文頭の補語(N)がどのような役割をはたすのかが形式の上で曖昧となる。しかし、(2-69)の例では、文頭の補語(N)と同一指示である接語形の *ми/mi* によって、当該の補語(N)が与格であることが明確に示されている。それゆえ、Vakareliyska (1994: 141)は、接語重複が Na-drop した補語の格標示の機能を持つことを指摘している(cf. also Leafgren 1997)。そもそも Na-drop が、接語重複している補語の場合のみに観察されるものであることは、Na-drop が接語重複と密接に関係した現象であることを示唆しているといえる。

文法書や研究書で断片的にみられていた(Talev 1973: 351; cf. also Vakareliyska 1994: 122-123) Na-drop についての体系的な記述は、Vakareliyska (1994)によってはじめてなされた。彼女は、失語症患者の発話にみられる“誤用”に関する研究を出発点とし、Na-drop の一般的特徴をアンケート調査によって明らかにするとともに、同現象の接語重複との関係についても論じている。近年では、話し言葉研究の枠組みからのアプローチも試みられている(cf. Тишева 2014 etc.)。

本節では、Vakareliyska (1994)において明らかにされた Na-drop の形式面での一般的特徴について概観する。その際、ブルガリア語の話し言葉コーパス⁹⁴のデータも用いることで、Na-drop が自然発話のなかでどのように用いられているかを確認する。

2.2.4.2.1.3.2. 形式上の特徴

Vakareliyska (1994: 121)も述べているように、Na-drop は随意的に実現する現象である。Na-drop 自体が、実現に“随意的な”特徴を有する接語重複を伴った構造のみに見られることも、Na-drop が随意的な現象である理由としてあげられるだろう。これ以外にも、以下に見るような当該現象が示す形式上の特徴もまた、Na-drop の実現の随意性に関与していると考えられる(Vakareliyska 1994; Krapova, Cinque 2005; Тишева 2014)。

まず、語順の特徴について述べる。Na-drop を伴う間接補語はいずれも動詞前

⁹⁴ ソフィア大学スラヴ学科ブルガリア語研究室が作成・公開している話し言葉コーパス(<http://www.bgspeech.net/bg/resources/archive/ed/intro-bg.html>)である(最終閲覧日 2017年11月23日)。本節の研究では、発音通りに書いたテキストと標準語の正書法によって書かれたテキストが用意されているパラレルコーパスに含まれるすべてのデータを対象とした。閉じられたコーパスであり、23のテキストから成るが、語数については明言されていない。

の位置にあることがあげられる(Vakareliyska 1994: 136-137; Krapova, Cinque 2005: 359-360; Тишева 2014: 51)。たとえば、Tisheva (2007: 293)は、以下(2-70)のような動詞後の間接補語が Na-drop している例を示し、それが非文となることを示している。

- (2-70) a. Просто не му върви във днешния мач
 Prosto ne mu vărvi vāv dnešnija mač
 simply NEG he-DAT.CL have_luck-PRS.3.SG in today's match
на Роналдо.
na Ronaldo.
 DM Ronaldo
 「ロナウドは今日の試合についてなかっただけだ。」
 (Tisheva 2007: 293)

- b. *Просто не му върви във днешния мач
 *Prosto ne mu vărvi vāv dnešnija mač
 simply NEG he-DAT.CL have_luck-PRS.3.SG in today's match
 Роналдо.
 Ronaldo.
 Ronaldo
 (Tisheva 2007: 293)

話し言葉コーパスのデータ中では、動詞前におかれた間接補語は全部で 23 例見られたが、そのうち 7 例で Na-drop が見られる。その一方で、動詞後におかれた間接補語を伴う文は 15 例みられ、そのすべての例において間接補語は与格標識である на/na を伴っており、Na-drop が観察されることはなかった。この 15 例の文の述語や補語の種類は様々であり、一部のものに限定されるものではなかった。このことは、Na-drop がおこるかどうかが、あくまでも文中の占める位置によって決まっているということを示唆している。

次に、Na-drop と非人称文の関係について述べる。Vakareliyska (1994: 140)は、アンケートの調査結果の分析から、Na-drop は非人称文においてもっとも許容されやすいということを指摘している。この傾向はおそらく、文法化重複(2.2.3.3. 「接語重複の義務性」を参照)が与格の項を伴う非人称文で頻繁に実現することと関係があると考えられる(cf. Тишева 2014: 51)。実際に、Na-drop がおこっている動詞前の間接補語は、話し言葉コーパス中では 7 例見られるが、いずれも文

法化重複を伴う非人称文である。このように、Na-drop が非人称文（特に文法化重複を伴うもの）に特徴的な現象であるということは、話し言葉コーパスのデータからも確認できる。

次に、Na-drop がどのような名詞句で起こりやすいかについて述べる。人称代名詞非接語形の与格のうち 1 人称単数形と 2 人称単数形は統合形を持つため (мене/mene と тебе/tebe)⁹⁵、Vakareliyska (1994)は、統合形与格がある мене/mene と тебе/tebe のときに Na-drop が最も頻繁におこなわれると予測していた。しかし、彼女のアンケート調査の結果、Na-drop が мене/mene や тебе/tebe 以外の人称代名詞の与格形の場合にもみられることが明らかになり、しかも「mene と tebe のときの Na-drop とそれ以外の人称代名詞のときの Na-drop の間では、許容度の点で期待していたほど」ではなかったが(Vakareliyska 1994: 139)、1 人称・2 人称のほうが幾分多いという傾向はみられる。それどころか、Vakareliyska (1994: 139, 141)が指摘するように、人称代名詞以外の名詞句（特に人名）が間接補語であるときでさえも Na-drop が起こることがある。

(2-71) Петър му говоря.
Petăr mu govor'a.
 Petăr he-DAT.CL speak-PRS.1.SG
 「(わたしは) ペータルに話している。」 (Talev 1973: 351)

話し言葉コーパスから抽出された Na-drop を伴う 7 例のうち、6 例はいずれも人称代名詞非接語形であった。しかもそのすべてが 1 人称単数形の人称代名詞である。これは、1 人称単数形と 2 人称単数形が、3 人称単数形及びすべての人称の複数形に許容度の点で幾分優っているという Vakareliyska (1994: 141)による指摘とも合致した結果である。

一方で、残りの 1 例は、以下(2-72)の例にあるように、人名によってあらわされるものであった。

(2-72) Щото Жоро му е неудобно да отказва.
Štoto Žoro mu е neudobno da otkazva.
 because Žoro he-DAT.CL be-PRS.3.SG uncomfortable SMP reject-PRS.3.SG
 「なぜならジョロはことわりづらかったから」 (No.8)⁹⁶

⁹⁵ 人称代名詞のパラダイムを挙げた 2.2.2.1. 「形態と用法」を参照のこと。

⁹⁶ パラレルコーパス No.8(<http://www.bgspeech.net/bg/resources/archive/ed/8.html>)にみられる例であることを意味する（最終閲覧日 2017 年 11 月 23 日）。

最後に、Na-drop する名詞句が HTLD のトピックであるか CLLD のトピックであるかについて検討する。すでに前節で指摘したように、Na-drop は動詞前の間接補語に特徴的な現象である。Na-drop は一般的に HTLD ではなく、CLLD であることが Тишева (2014: 51) などによって述べられている。その理由としては、まず人称代名詞が Na-drop した際にあらわれる形は、与格標識 на/na を欠く形であり、少なくとも人称代名詞の場合には HTLD に特徴的な主格ではないということが挙げられる (たとえば、на мене/na mene の与格標識を欠く形は мене/mene であり、主格の аз/az とは明らかに異なる)。それに加えて、音律的な側面から、Na-drop は CLLD と共通した特徴を有している。すなわち、後続する残りの文との間が休止によって分断されない。

Na-drop した間接補語が HTLD ではないことは、話し言葉コーパスにみられる次の例(2-73)からもわかる。

(2-73) (= 2-72)

Щото	<u>Жоро му</u>	е	неудобно	да	отказва.
Štoto	<u>Žoro mu</u>	е	neudobno	da	otkazva.
because	Žoro	he-DAT.CL	be-PRS.3.SG	uncomfortable	SMP reject-PRS.3.SG

「なぜならジョロはことわりづらかったから」(No.8)

(2-73)で Na-drop している間接補語 Жоро/Žoro は、接続詞 щото/štoto に導かれた従属節内にみられる。すでに述べたように (2.2.4.2.1.2. 「HTLD と CLLD」を参照)、HTLD は従属節内であらわれることはない。従属節内でもあらわれうる動詞前の補語の接語重複は CLLD である。(2-73)の例では、Na-drop が従属節内の名詞句で起こっているため、当該の名詞句 Жоро/Žoro は HTLD のトピックではなく、CLLD のトピックであることがわかる。

その一方で、主節の文頭にある間接補語が人称代名詞以外の名詞句 (主格が顕在的にあらわされない) によってあらわされているとき、それが Na-drop であるのか HTLD であるのかは曖昧となる。しかし、たとえば Тишева (2014: 51-52) は、HTLD のときにも Na-drop が実現しうると考えており、その条件は、以下(2-74)に見るように、文頭にある与格標識を欠く間接補語が休止によって分断されていることであると述べている。

(2-74)	<u>Сашо</u>	#	отдавна	не	сме	<u>му</u>	писали.
	<u>Sašo</u>	#	otdavna	ne	sme	<u>mu</u>	pisali.
	Sašo		for_a_long_time	NEG	be-PRS.1.PL	he-DAT.CL	write-PAP.PL

「サショには、長い間 (手紙を) 書いていない。」(Тишева 2014: 52)

話し言葉コーパスでは、動詞前の接語重複を伴う間接補語の全 23 例中、20 例が CLLD による接語重複であった (Na-drop である間接補語も含む)。残りの 3 例は HTLD であるが、いずれも普通名詞ではなく人称代名詞が補語であった。この 3 例中 2 例は休止を伴う典型的な HTLD である。

本節中で挙げた、話し言葉コーパスからの例数を以下(2-75)にまとめる。

- (2-75) a. 動詞前の間接補語全 23 例中 7 例が Na-drop を伴う
b. Na-drop を伴う間接補語 7 例中 1 例が人名
(それ以外は人称代名詞 1 人称単数形)
c. 動詞前の間接補語全 23 例中 20 例が CLLD
(残り 3 例は HTLD で、そのうちの 1 例のみが休止を伴う)

また、Na-drop の形式上の特徴は、次の(2-76)のようにまとめられる。

- (2-76) Na-drop の形式上の特徴
a. 動詞前のみで見られる
b. 非人称文で見られるのが一般的
c. 人称代名詞 1 人称単数形 (及び 2 人称単数形) が補語であることが最も一般的だが、その他の名詞句 (特に人名) のこともある
d. 一般的に CLLD にみられるが、人称代名詞以外の名詞句が休止を伴うときには HTLD との区別が曖昧となる

2.2.4.2.2. 動詞後

標準ブルガリア語では、すでに 2.2.4.2. 「動詞前と動詞後」において述べた通り、動詞後にある補語の接語重複も見られる。動詞後におかれた補語の場合、その補語が SVO の基本語順の位置にあるのか、もしくはそれより右におかれているのかを判断することが難しい⁹⁷。このため本論文では、仮に後者の位置を「右方転位(RD)の位置」と呼ぶこととする。模式的に表すと以下(2-77)のようになる。

- (2-77) a. 基本語順
S V O

- b. RD の位置⁹⁸
S V t_i O_i

⁹⁷ 語用論的な見地からの議論は、菅井(2012c)を参照されたい。

⁹⁸ このとき、 i は同一指示であることを、 t は移動前の位置をあらわす。

動詞前の補語は、SVOの基本語順と比較したとき、明らかに異なる位置を占めている。また、動詞前においては、さらにHTLDの位置とCLLDの位置が区別される（このときHTLDの位置はCLLDの位置に先行する⁹⁹）。標準ブルガリア語でトピックはコメントに先行し、典型的には文頭の位置（あるいは動詞前）を占めるという事実から、補語が動詞前の位置にくる語順は、その補語のトピック標示と関係があることがうかがえる。しかし、Тишева, Джонова (2006)は、文のトピックとなる要素が文頭だけでなく文末にもおかれることを指摘している。そして文末（あるいは動詞後）におかれる補語の接語重複もまた、当該の補語のトピック標示の機能を持つ（Тишева 2014: 60）。

動詞後の補語の接語重複の構造には、Тишева (2014: 58)によると、2通りの解釈があるという。以下(2-78)はそれぞれの解釈を模式的に表したものである（ただし、Sについては考えないこととする）。

1つ目の解釈(2-78a)では、基本語順(SVO)は変わっておらず、補語(O)は基本語順の位置にとどまっている。このとき、当該の補語と同一指示の接語形(Ncl)は、補語の格標示のため、動詞句を構成している。もう一方の解釈(2-78b)によると、接語形(Ncl)のほうが補語とされ、接語形(Ncl)の指示対象となる名詞句(N)は、表面上は基本語順の位置、つまり動詞後におかれる¹⁰⁰。

(2-78) a. [vp V Ncl_i] O (N_i)

b. V O (Ncl_i) N_i

前者の解釈では、Nが補語であり、Nclは動詞の接辞のような存在と考えられている。その一方で、後者の解釈では、Nclのほうを補語と考え、NはNclと同一指示の語彙的な名詞句であり、表面上、基本語順の位置におかれているものと考えている。本論文では、特に断りのない限り、前者の解釈にしたがって考える¹⁰¹。

動詞後の補語の接語重複の形式的な特徴を2点あげることができる。

まず、1点目は、接語重複が行われなくてもよいという点である。Тишева (2014: 58-59)によれば、(2-79)のように義務的に接語重複する動詞前の補語の場合と異

⁹⁹ 2.2.4.2.1.1. 「2つの接語重複構造」を参照。

¹⁰⁰ Тишева (2014: 58)は、接語形の使用が義務的である文法化重複については、この解釈が適切であることにも言及している。

¹⁰¹ 第4章において文法化について議論する際には、(2-78b)から(2-78a)への言語変化を問題とする。詳細は、4.1.2. 「接語重複の文法化」を参照のこと。

なり¹⁰²、動詞後の補語の接語重複は義務的ではない。動詞後の補語は、接語重複しない場合であっても、(2-80)のように非文とはならない。

(2-79) 動詞前

a. Мишо не сме го виждали.

Mišo ne sme go viždali.

Mišo NEG be-PRS.1.PL he-ACC.CL see-PAP.PL

「(私たちは) ミショとずっと会っていない。」(Тишева 2014: 48)

b. *Мишо не сме виждали.

*Mišo ne sme viždali.

Mišo NEG be-PRS.1.PL see-PAP.PL

(Тишева 2014: 58)

(2-80) 動詞後

a. Ама аз съм го гледала тоя филм.

Ama az съм go gledala toja film.

but I-NOM be-PRS.1.SG it-M.ACC.CL watch-PAP.F.SG this-M.SG film-M.SG

「でも、私はこの映画を見たことがある。」(Тишева 2014: 57)

b. Ама аз съм гледала тоя филм.

Ama az съм gledala toja film.

but I-NOM be-PRS.1.SG watch-PAP.F.SG this-M.SG film-M.SG

「でも、私はこの映画を見たことがある。」(Тишева 2014: 58)

(2-79)にみるように、補語 Мишо/Mišo は、トピックとして文頭 (動詞前) におかれた場合、接語重複が義務的となる(Тишева 2014: 58)。Тишева (2014: 58-59)は、補語が基本語順である動詞後の位置から別の位置にトピック移動した場合には必ず接語重複が行われることを指摘している。それを踏まえると、(2-80b)で接語重複が行われていないのは、動詞後の補語が、他のどの位置でもなく、基本語順の位置にあるためであると考えられる。もし補語がトピックとして基本語順の位置より右の RD の位置におかれているとしたら、動詞前の位置におかれたトピックの補語が接語重複を義務的に行うのと同様に、(2-79a)のような接語重複

¹⁰² (2-79b)のように動詞前の補語の接語重複が行われないと非文となるのは、この動詞前の補語がトピックとなる場合である。

が義務的となるはずである。(2-80b)のような接語重複がないものも完全に文法的とされるのは、動詞後の補語が基本語順の位置にとどまっていると考えられるからである(cf. Тишева 2014)。

また、2点目として、休止がなくてもよいということが挙げられる。(2-80a)のような場合に、動詞後の補語の前にあらわれる休止が義務的ではない(Тишева 2014: 57; cf. also Rudin 1986: 37)こともまた、それが RD の位置ではなく、基本語順の位置にとどまるものであることを示唆している。

これら動詞後の補語の接語重複の構造が示す 2 つの特徴 (接語重複と休止、それぞれが義務的ではないこと) は、動詞後の補語が基本語順の位置、すなわち SVO 語順における O の位置にあり、それよりも右の RD の位置にあるものではないことを示している。つまり、Тишева (2014: 58-60)も指摘するように、動詞後の補語の接語重複が行われる際に、RD は関与しないと考えられるのである。

しかし、以下(2-81)にあるように、休止が実現する場合には、接語重複する補語が動詞後におかれるものであっても、その補語は基本語順の位置より右の RD の位置におかれていることが想定される。

(2-81)	Аз	въобще	не	<u>ги</u>	знаех	<u>тея</u>
	Az	văobște	ne	<u>gi</u>	znaech	<u>teja</u>
	I-NOM	at_all	NEG	they-ACC.CL	know-IMPF.1.SG	this-PL
	#	<u>първите</u> .				
	#	<u>părvite</u> .				
		first-PL+DEF.PL				

「私は、これら最初のやつは全く知らなかった。」(Тишева 2014: 60)

(2-81)では、3 つの同一指示の名詞句が用いられており、そのうち文中で一番右に位置する名詞句は休止によってそれに先行する文の部分から隔てられている。動詞後の補語 тея/teja は基本語順の位置にある補語と考えられる一方で、それよりも右の位置に休止を挟んで用いられている първите/părvite は RD の位置にあると考えられる。

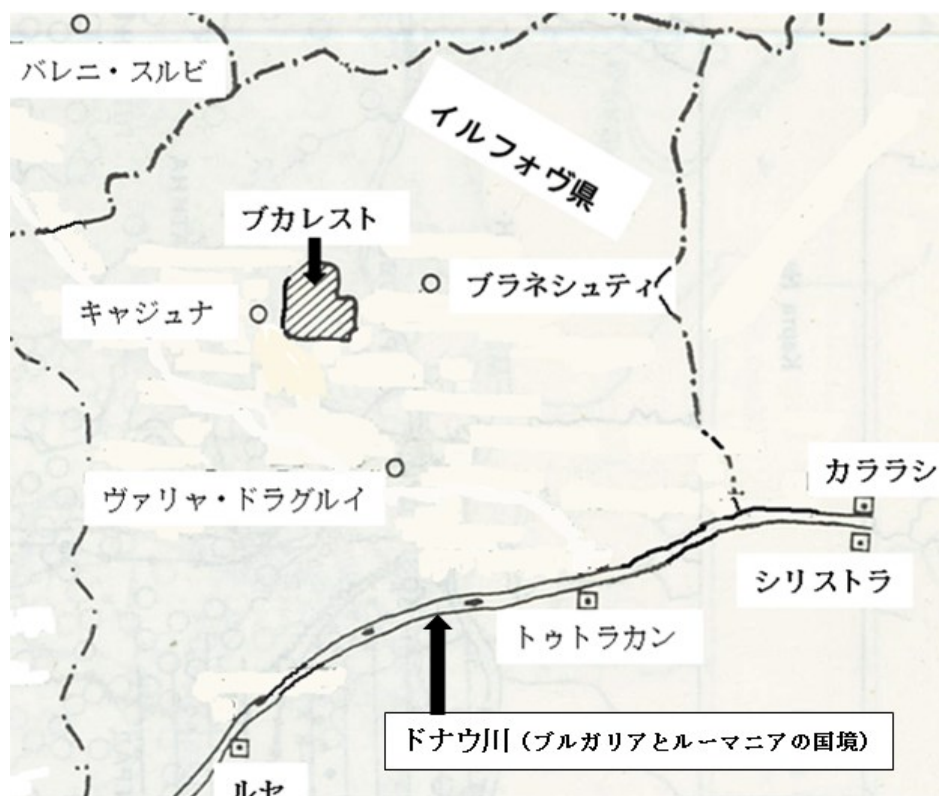
以上のことから、本論文では、Тишева (2014)にしたがい、動詞後の補語の接語重複がおこなわれる場合に、補語は基本語順の位置にあるものとする。一方で、随意的に用いられる休止が関与する場合には RD の位置に補語がおかれているとみなす。また、動詞後の補語が、基本語順の位置を占めようが、RD の位置を占めようが、接語重複している補語は、その文におけるトピックと考える(cf. Тишева, Джонова 2006; Тишева 2014 etc.)。

3. ブラネシュティ方言と補語の接語重複

3.1. ブラネシュティと方言

3.1.1. ブラネシュティについて

ブラネシュティ(Brănești)は、ルーマニアのイルフォヴ県東部、ブカレストから東に23kmの地点に位置する(【地図 3-1】を参照)。ブラネシュティには、ブカレストとドナウ沿岸のカララシ(Călărași) (対岸のブルガリア側の街はシリストラ(Силистра))とを結ぶ幹線道路(国道3号線(DN3))が通っており、都市間の交通の通過点ともなっている。



【地図 3-1】 ブラネシュティとその周辺の都市・集落(Младенов 1993: 447)¹⁰³

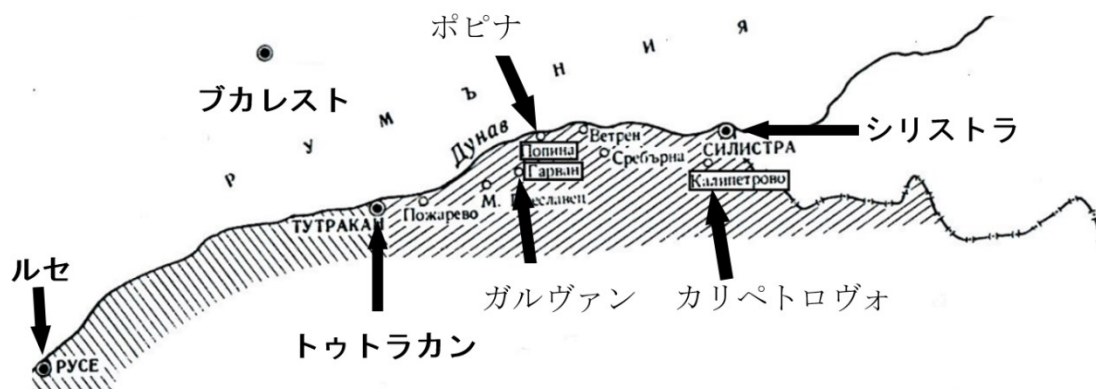
ブラネシュティは、もともとブルガリアからの移住民によって建設された集落である。この地にブルガリア人がやってきた時期についていくつか意見があるが、移住の時期はおおよそ18世紀末から19世紀にかけてであると考えられている(Roman 1984: 137; Младенов 1993: 34)¹⁰⁴。19世紀前半には20~30世帯が

¹⁰³ 日本語などへの改定は本論文筆者による。

¹⁰⁴ Roman (1984: 137)の提示するデータによれば、最初の移住者は18世紀後半に移住してきたという。本論文筆者がフィールド調査の際に、最高齢のインフォーマント(DD)から直接得た情報でも、現在のブラネシュティにブルガリア人

居住していたというが、19世紀の後半になると1,000人近くの住人がブラネシュティに定住しており、しかもその大多数がブルガリア系住民であったという(Младенов 1993: 34)。1950年代の半ばにフィールド調査を行った Bolocan (1958: 491)によれば、その当時、ブラネシュティには2,000人近くのブルガリア人がいたという。

彼らは、ドナウ川沿岸に位置するカリペトロヴォ(Калипетрово)やガルヴァン(Гарван)、ポピナ(Попина)など、ブルガリア共和国北東部の都市シリストラ近郊の集落の出身者の末裔である(【地図3-2】を参照)(Романски 1930: 432; Еников 1983: 12-13; Младенов 1993: 34)。このことは、彼らがいわゆるグレーベンツィ(гребенци)¹⁰⁵であることを示唆している。グレーベンツィとは、シリストラとトゥトラカン(Тутракан)の間のドナウ沿岸に位置する集落に住むブルガリア人住民の名称として用いられる(cf. Милетиц 1989: 64-65; Стойков et al. 1966: 18; Кочев 1969: 5)。言語学者・民俗学者であり、ブルガリア科学アカデミー会員でもあったスタン・ロマンスキは20世紀初頭にワラキア(ルーマニア南部)のブルガリア人集落を訪問した際、ブラネシュティも訪れている。ブラネシュティについて彼は手紙の中で次のように言及している:「ブラネシュティは、真の“グレーベンツィ”のすみかである。<...>村には現在でも466世帯2,110人のブルガリア人がおり、そのうちおよそ10世帯のみワラキア系で、そのワラキア人たちはブルガリア語を知っている」(Жечев 1983: 59)。



【地図3-2】シリストラと周辺の集落(Кочев 1969: 7)¹⁰⁶

が到達したのは1780年代であるという情報が得られた(インフォーマントについては次節3.1.2.「フィールド調査の概要」を参照のこと)。

¹⁰⁵ この名称の由来となっている“グレーベン(гребен)”とは、この地方特有の出産前の女性用民族衣装の帽子についている“櫛(гребен)”状の構成部分を指す名称である。これが転じてグレーベンツィ”がこの地方の住民の呼称となった(Кочев 1969: 5)。

¹⁰⁶ 日本語による改定は本論文筆者による。

また、筆者が現地調査をした際に得たインフォーマント自身や現地住民らの情報によれば、20～30年ほど前まで（1990年代頃まで）は村のいたるところでブルガリア語が話されていたという。しかし、筆者が2012年から2015年にかけてフィールド調査を行った際には、ブルガリア語を話すことができる話者は70歳以上の年配の世代にほとんど限定されていることがわかった。彼らの子供の世代にあたる40～50代はブルガリア語を聞いてある程度理解するが積極的に話すことはできず、さらにその子供の世代である10～20代はブルガリア語を全く解さない。ルーマニアに存在する他のブルガリア人集落とは異なり¹⁰⁷、ブラネシュティでは、ブルガリア語保存のための活動は全く行われておらず、そのことも相まってブルガリア語話者は減少の一途をたどっている。高齢の話者が亡くなることで、ブラネシュティのブルガリア語方言は消滅する。

また、ブラネシュティのブルガリア語方言の話者は誰も標準ブルガリア語を知らない。ブラネシュティへの移住は標準ブルガリア語が形成されるよりも前に行われ、またブルガリア国外であったために、その後も標準ブルガリア語話者と接触する機会は基本的に存在しなかった¹⁰⁸。この事実に加えて、ブラネシュティで標準ブルガリア語の教育活動が行われることはなかったため、ブラネシュティのブルガリア語方言話者は、キリル文字で書いたり読んだりすることもできない。彼らが用いることができる唯一の書き言葉はルーマニア語であり、ブラネシュティのブルガリア語方言は、多くの方言がそうであるように、話し言葉という形でのみ存在する。

¹⁰⁷ まず、同じくルーマニア国内に分布するブルガリア語方言であり、独自の書き言葉を持つバナト・ブルガリア語があげられる(cf. Стойков 1993: 192-196; see also Стойков 1967; 1968)。その他にも、本論文筆者が2012年5月に行ったバレニ・スルビ（ルーマニア・ドゥンボビツァ県）という別のブルガリア人集落でも、子供たちでさえブルガリア語（方言）を話すことができ、言語保存活動の状況はブラネシュティと大きく異なる。

¹⁰⁸ ただし、ここ数年はシリストラ郊外のカリペトロヴォ（ブルガリア側）とブラネシュティ（ルーマニア側）はクケリ（仮面のお祭り）の習慣などを通じて、互いに交流がある。ただし、交流に参加するのはブルガリア語を知らない若者の世代だけである。本論文筆者（菅井）も両集落の交流活動に幾度か参加したが、住民同士の意思疎通にはブルガリア語とルーマニア語の両言語を解する地元の間人による通訳が必要であるというのが現状である。ブラネシュティのブルガリア語方言話者の高齢者は交流の意思を持っているが、体力の面で交流活動への参加が難しく、実際のところ直接交流する機会は皆無に等しい。

3.1.2. フィールド調査の概要

本論文は、ブラネシュティの方言（以下、ブラネシュティ方言と呼ぶ）を主たる研究対象とする。本論文筆者（菅井）は、ブラネシュティ以外に、ヴァリャ・ドラグルイ（ルーマニア・ジュルジュウ県）、キャジュナ（ルーマニア・イルフォヴ県）、バレニ・スルビ（ルーマニア・ドゥンボビッツァ県）においても、現地のブルガリア語方言の調査を実施した（【地図 3-1】も参照）。しかし、ヴァリャ・ドラグルイでは、ルーマニア語話者との同化が著しい傾向があり、研究に必要なだけのインフォーマントやデータを得ることができず、キャジュナではブルガリア語方言を保持する話者を見つけることができなかつた。このような事情で、ヴァリャ・ドラグルイとキャジュナのブルガリア語方言は本論文の研究対象とはしなかつた¹⁰⁹。バレニ・スルビについては、一定数のブルガリア語方言話者がおり、年配の世代に限らず、子供の世代までブルガリア語方言を保持しており、ブラネシュティとは言語状況が明らかに異なっている。またバレニ・スルビのブルガリア語方言は、ブラネシュティ方言とは系統が異なるグループに属するものであったため、本論文の研究対象から除外した（ブラネシュティの言語系統などについては、次節 3.1.3. 「ブラネシュティ方言」を参照）。

本論文の研究で用いるブラネシュティ方言のデータはすべて、本論文筆者（菅井）によって収集されたものである。ブラネシュティでのフィールド調査は、2012 年春（5 月）と秋（10, 11 月）、2013 年秋（9, 10 月）、2015 年冬（2 月）に 4 回にわたって行った。調査のために、ブラネシュティ方言で意思疎通が可能なブラネシュティ出身の男女にインフォーマントの協力を得た。インフォーマントの内訳は、男性 7 人、女性 7 人の合計 14 人である。インフォーマントの出生年と ID は以下【表 3-1】にまとめた。ほとんどのインフォーマントが、調査時に 80 歳代であった。そのうち、最高齢のインフォーマントは調査時に 88 歳であった男性である。

【表 3-1】 ブラネシュティ方言のインフォーマント

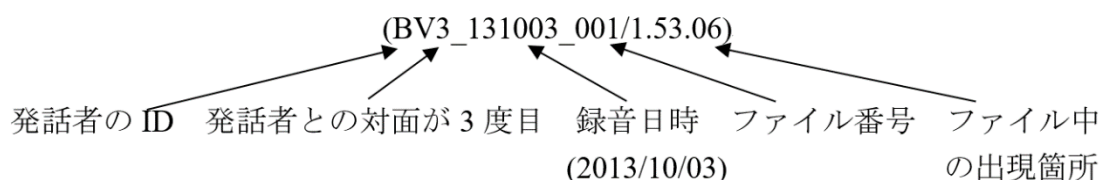
男性	DD (1925 年), DM (1931 年), GG (1932 年), DG (1935 年), AG (1936 年), RUS (1955 年), DF (1934 年)
女性	BP (1930 年), BV (1932 年), TO (1932 年), TM (1939 年), BA (1938 年), TF (1935 年), TMita (1930 年)

調査方法は、調査者である本論文筆者が直接インフォーマントと会って会話

¹⁰⁹ ただし、Сугаи (2015b)、菅井(2014b)では、ヴァリャ・ドラグルイ村について、同系統のブラネシュティ方言と合わせて、人称代名詞接語形の語順について考察している。

し、それを IC レコーダーで録音した。したがって、収集したデータは自然発話により得られたものである。総録音時間は約 48 時間であるが、本研究に関係のある部分を中心に（基本的に、補語の接語重複が見られる箇所及びその前後が中心）書き起こしを行った。

本論文では、ブラネシュティ方言のデータから引用した例文に、以下【図 3-1】にあるように、出典情報を明記している。左から順に、発話者の ID・それが発話者との何回目の対面インタビューであるか（ただし、1 度しか会わなかったインタビューについては数字を表記しない）・録音日時（年月日の順、ただし年については西暦の下 2 桁）・ファイル番号・そのファイル中で当該の例があらわれる時間（時・分・秒の順）を明記している。



【図 3-1】出典の例示

3.1.3. ブラネシュティ方言

3.1.3.1. 先行研究

ブラネシュティ方言の研究は、主にルーマニアのスラヴィストである Gh. Bolocan によってなされた(cf. Bolocan 1958; 1960; 1969; Болочан 1968a; 1968b)。ただし、彼のブラネシュティ方言の研究は音声の分析が中心であるため、形態論や統語論のレベルの研究については、ブルガリア語方言学者 M. Сл. Младенов によるルーマニア国内に分布するブルガリア語諸方言のモノグラフを参照する必要がある(Младенов 1993)。このモノグラフは、ルーマニア（特に、南部のムンテニアやオルテニア地方）に分布するブルガリア語諸方言の総合的な研究であり、音声に限らず、文法体系も記述されている。ただし、これはブラネシュティ方言だけに的を絞った研究ではなく、ブラネシュティ方言については他の同系統の方言とまとめた形での記述がなされている。また、このモノグラフが全体像の体系的な記述を目指した研究書である性格上、補語の接語重複について詳細な研究がなされているわけでもない。とはいえ、極めて示唆的で重要な指摘が散見されることも見逃せない。たとえば、ルーマニアに分布するミジヤ方言群（ブラネシュティ方言もデータに含まれている）にみられる補語の接語重複について、「ほとんど規則的に直接補語と間接補語は重複」し、「...[重複を受ける]名詞類は

常に冠詞形になるか、指示代名詞を伴っている。これが示すのは、接語重複のモデルが、同現象の、ブルガリア語に一般的なモデルから逸脱していないという事だ」(Младенов 1993: 305-306)と述べており、同方言群に観察される補語の接語重複がブルガリア語と共通した特徴を有することを指摘している。また、ルーマニア国内に分布するブルガリア語諸方言にみられる特別な対格標識である *пъ/pă* の問題について論じる中で、「[*пъ/pă* を伴った]直接補語はほとんど常に<...>重複を受ける」(Младенов 1993: 305)と述べ、*пъ/pă* という対格標識が補語の接語重複の実現に関与していることを示唆する重要な指摘を行っている。

3.1.3.2. 文法と音声の特徴

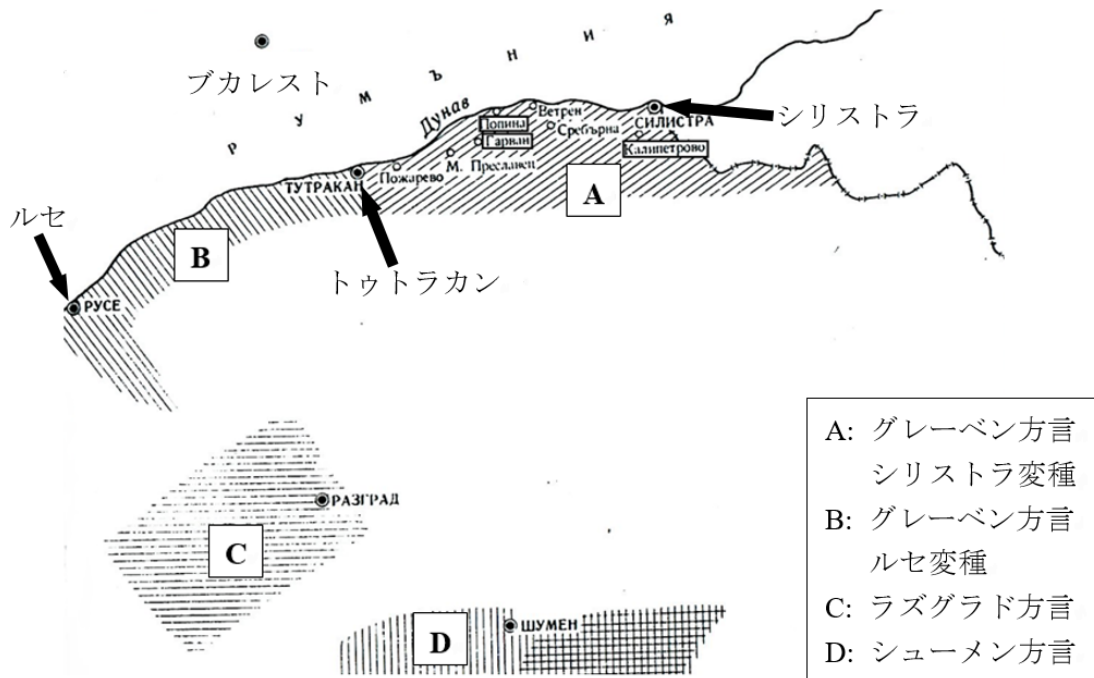
すでに3.1.1.「ブラネシュティについて」で述べたように、現在のブラネシュティ方言の話者の祖先は、シリストラ近郊に点在するドナウ川沿岸の集落から移住してきたグレーベンツィと考えられている。このことは、ブラネシュティ方言が、北東ブルガリアに分布するミジヤ方言群の下位方言¹¹⁰にあたるグレーベン方言シリストラ変種¹¹¹の一種であることを示している。実際にブラネシュティ方言にはグレーベン方言シリストラ変種（及び上位のミジヤ方言群一般）に典型的な諸特徴を見出すことができる。

以下、ミジヤ方言群やグレーベン方言シリストラ変種の方言的特徴を記述した先行研究(Кочев 1969; Тетовска-Троева 1986; Стойков 1993)や各種方言地図(Стойков et al. 1966; Кочев et al. 2001; Тетовска-Троева et al. 2016)のデータと、ブラネシュティ方言に見出せる特徴とを比較する。

¹¹⁰ ミジヤ方言群の下位方言には、グレーベン方言、ラズград方言、シューメン方言があるが（【地図 3-3】を参照）、この中でもグレーベン方言はそのほかの二つの方言に対して言語的統一性が保たれている。(Кочев 1969: 5; cf. also Стойков et al. 1966: карта на населението на североизточна България)。

¹¹¹ Кочев (1969: 5)によって用いられている用語で、彼は「トゥトラカンとシリストラの両町の間でドナウ川沿岸に位置する南ドブルジャの集落に居住している古いミジヤ住民たちの方言」と定義している（【地図 3-3】中の A の部分に分布する）。

“シリストラ方言”ではなく、“グレーベン方言シリストラ変種”という用語を採用した理由には、シリストラ近郊の集落には、ブルガリアの各地から移住してきた人々の集落も点在しており、これらを“シリストラ方言”としてまとめるには、方言が系統的に多様すぎるためである(Кочев 1969: 6)。



【地図 3-3】 グレーベン方言とその他のミジヤ方言群の下位方言の分布
(Кочев 1969: 7)¹¹²

3.1.3.2.1. 文法の特徴

定冠詞男性単数形がアクセントをとるときに-o/-o、アクセントを取らないときに-y/-u となるということは、グレーベン方言シリストラ変種だけでなくミジヤ方言群全体に特徴的な現象として知られている (cf. Стойков 1993: 102; Милетич 1989: 23)。Кочев (1969: 6)によると、グレーベン方言ルセ変種では、この特徴の現れ方が一貫的でないのに対して、グレーベン方言シリストラ変種ではよく保存されているという。この特徴はブラネシュティ方言にも見いだされる¹¹³。例えば、носò/nusò 「鼻」、дъждò/dǎždò 「雨」；чил'аку/čil'aku 「夫、男性」、нарòду/naròdu 「民族」、нашу/našu 「わたしたちの」、нейн'у/nejn'u 「彼女の」、енглийск'у/englijisk'u 「英国の」、гулèмиу/gulèmiu 「大きな」など。

¹¹² 日本語による改定は本論文筆者による。

¹¹³ この特徴は、ミジヤ方言群と隣接するバルカン方言群と分かち大きな特徴であると考えられている (Милетич 1989: 23-24)。なぜなら、バルカン方言群は一般的に-ъ/-ă という後置定冠詞を持つためである。しかし、バルカン方言群にも同様の特徴を持つものが一部見られることが指摘されているため (cf. Цонев 1984; Стойков 1993: 102)、必ずしもミジヤ方言群だけにみられる特徴とは言えない。

また、グレーベン方言シリストラ変種だけにとどまらず、他のミジヤ方言群にも広くみられる別の特徴として、人称代名詞 3 人称単数形対格及び主格の形の指示代名詞への転用を挙げることができる(cf. Милетич 1989: 85; Кочев 1969: 62-63; Младенов 1993: 268-269)。これはブラネシュティ方言においても広くみられる。例えば、*мунчѐту нѐгу* / *munčètu nègu* (= *тѹй мунчѐ / тѹј munčè*) 「その男の子」；*чил'аку тѹй* / *čil'aku tòi* (= *тѹс чил'ак / тѹс čil'ак*) 「その男性」 など。ただし、指示代名詞の機能を持った 3 人称の人称代名詞が、被定語に対して後続するのは、ブラネシュティ方言にのみ特徴的であり(cf. Сугаи 2016a; 菅井 2012b)、ブルガリア国内のグレーベン方言シリストラ変種では被定語に先行する：*нѐгу чисѹник* / *nègu čisòwnik* 「その時計」；*нѐйъ жинà* / *nèjǎ žinà* 「その女性」(Кочев 1969: 62-63)。このような人称代名詞の指示代名詞としての用法については、次節 3.2.1. 「人称代名詞接語形」においてあらためて詳述する。

グレーベン方言シリストラ変種（及びミジヤ方言群）では、定冠詞形るとき名詞の複数形語尾が脱落するのも特徴的である(cf. Кочев 1969: 6, 54; cf. also Стойков et al. 1966: 地図 168¹¹⁴)。ブラネシュティ方言でも同様の例がみられる。例えば、*жѐнте/žènte* 「その女性たち」、*мъгъзѹнте/măgăzinte* 「その店」、*кѹнте/kònte* 「その馬たち」など（それぞれ **женѹнте*/**ženite*, **магазинѹнте*/**magazinite*, **конѹнте*/**konete* の代わりに）。

さらに、前置詞 *в/v* の代わりに *y/u* が一貫して用いられるということもミジヤ方言群全体に広くみられる特徴であるが、ブラネシュティ方言もその例外ではない。例えば、*у нàшту с'ѐлу* / *u nàštu s'èlu* 「私たちの村では」；*у нидѐл'ъ в'ичерѹ* / *u nidèl'ǎ v'ičerò* 「日曜日の夜に」など。

以上で述べた文法上の特徴をまとめると次のようになる。このどれもが、グレーベン方言シリストラ変種はもちろんのこと、ブルガリア北東地域に分布するミジヤ方言群に共通してみられる現象である。

(3-1) グレーベン方言（及びミジヤ方言群）と共通の文法的特徴

- a. 定冠詞男性単数形は、-o/-o (-y/-u)
- b. 人称代名詞 3 人称単数形対格・主格の指示代名詞的用法
- c. 定冠詞形るとき、名詞の複数形語尾が脱落
- d. 前置詞 *в/v* の代わりに、*y/u* が用いられる

¹¹⁴ 本文献は地図集であるため、ここには該当する地図番号を示している。この文献に関しては、以下も同様の方法で示す。

3.1.3.2.2. 音声の特徴

ブラネシュティ方言には、以上の文法的な特徴に加えて、次のようなミジヤ方言群に広くみられる音声的な特徴もみいだすことができる。

まず、ミジヤ方言群を含め、東方言に広くみられる音声的特徴として、アクセントを持たない母音(a, o, e)の弱化をあげることができる。この現象には、東方言のなかでも様々なヴァリエーションがあり、一部の母音のみ弱化が見られるような地域もある一方で、北東地域に分布するミジヤ方言群では、3つの母音とも規則的に母音弱化が見られる。/a/は[ə]、/o/は[u]、/e/は[i]となる完全母音弱化(пълна редукция)は、ミジヤ方言群に特徴的な現象である(Стойков 1993: 97)。ブラネシュティ方言の場合でも、/a/, /o/, /e/のすべての母音が、アクセントを持たない場合に母音弱化しうる。例えば、бъштà/băštà「父親」; òрь/_òrǎ「人々」; житу/žitú「小麦」; гурь/gurǎ「森」; ут/ut「～から」; идін/ìdìn「1」; мумичи/mumiči「女の子」など。

これに加え、アクセントを持つ音節における*ъ/*ěは、音環境によって[e(ɛ)]¹¹⁵または[’a]で対応する。例えば、「大きい」を意味する男性・単数形で гул’ам/gul’amは、複数形で гулеми/gulemi という形を持つ。

また、子音/x/は、音環境や話者によって、脱落するか[w]¹¹⁶または[f]で実現するなど、様々な音声で表出しうる。それゆえ、標準語より[x]の出現は制限的である。例えば、б’йўми/b’iŭmi「(私たちは)叩いた」(標準語 бихме/bihme); видѣф/vidѣf「(私は)見た」(標準語 видях/vid’ah); òрь/_òrǎ「人々」(標準語 хора/hora)など。

/dn/の子音結合は、逆行同化により[nn]または[n]で実現する。例えば、сеңни/seңni「座りなさい」(標準語 седни/sedni); иңнò/iңnò「1(中性形)」(標準語 едно/edno)など。

以上の音声的特徴をまとめると次のようになる。

(3-2) グレーベン方言(及びミジヤ方言群)と共通の音声的特徴

- a. 完全母音弱化(アクセントを持たないとき、/a/は[ə]、/o/は[u]、/e/は[i])
- b. 語源的な*ъ/*ěは、音環境によって[e(ɛ)]または[’a]で対応
- c. 子音/x/は、音環境や話者によって[w]か[f]で頻繁に実現、または脱落
- d. /dn/の子音結合は、逆行同化により[nn]または[n]で実現

¹¹⁵ [e]と[ɛ]の対応のうち、広母音[e]による対応はミジヤ方言群に特徴的とされるが、現在では狭母音[e]に置き換わるというプロセスが進行している(Стойков 1993: 102; Теговска-Троева 1986: 36)。ブラネシュティ方言においては、両方の音対応が見られるが、自由変異であると考えられる。

¹¹⁶ 本論文のキリル文字表記では[w]に対してŷを用いる。

3.1.3.2.3. 語彙の特徴

最後に、ブラネシュティ方言で用いられる語彙に着目すると、ミジヤ方言群やグレーベン方言に特徴的な語彙が多く用いられている。それらのなかには、ルーマニア語からの借用語や翻訳借用も多く含まれており、他の国内のブルガリア語方言と比較して、この点が非常に特徴的である。

例えば、ブラネシュティ方言では гълъби/gălăbi という語が「とうもろこし」の意味で用いられる。標準語では гълъб/gălăb は「ハト」の意味である¹¹⁷。ブルガリア語方言地図によれば(Кочев et al. 2001: 423)、「とうもろこし」の意味で гълъб/gălăb が用いられるのはグレーベン方言だけであり、それゆえ Младенов (1993: 239)は、この語の存在がグレーベン方言の弁別の特徴であるとさえ考えている。ブラネシュティ方言において、гълъби/gălăbi が「とうもろこし」の意味で用いられていることは、同方言がグレーベン方言起源であることを強く示唆する。

3.1.3.2.4. シリストラ変種とルセ変種

グレーベン方言は、二つの下位方言グループに分類される。一方はシリストラ変種で、もう一方はルセ変種である(cf. Кочев 1969) (【地図 3-3】も参照)。先行研究(Кочев 1966; Стойков et al. 1966; Стойков 1993; Кочев et al. 2001; Тетовска-Троева et al. 2016)のデータを用いて、両変種の言語特徴を概観すると同時に、ブラネシュティ方言と比較する。

ブラネシュティ方言で動詞の未来形を形成する際に用いられる助詞は ше/še または шъ/să である。この助詞はシリストラ変種では ше/še であられるが、ルセ変種では же/že である(Стойков et al. 1966: 地図 191 及び Тетовска-Троева et al. 2016: 142-143 を参照)。

このほかに、シリストラ変種では、語末に口蓋化子音[kʰ]が現れることができるが、ルセ変種ではできない(Стойков et al. 1966: 地図 61, 62 及び Кочев et al. 2001: 162 を参照)。ブラネシュティ方言では、език/ezik という語の語末の子音は口蓋化した[kʰ]で現れる。当該の口蓋化子音は、後置定冠詞を持ったり、複数形語尾を持ったりする場合であっても保持され、それぞれ из'ик'/iz'ik'は、定冠詞

¹¹⁷ Младенов (2008: 311) によれば、гълъби/gălăbi を「とうもろこし」の意味で用いるのは、ルーマニア語からの翻訳借用である。なぜなら、ルーマニア語の「とうもろこし」を意味する語は porumb で「ハト」を意味する語は porumbel であり、「とうもろこし」と「ハト」を意味する語に同じ語根(porumb-)を用いる。グレーベン方言において、「ハト」を意味する гълъби/gălăbi が「とうもろこし」をも意味することは、ルーマニア語の影響であると考えられる。

形で из'ик'о/iz'ik'o, 複数形で из'ик'е/iz'ik'e となる。

標準語の動詞 вървя/värv'a 「歩いて行く」は、ブラネシュティ方言では вър'ь/vär'ǎ (PRS.1.SG), вър'ьт/vär'ăt (PRS.1.PL) という形であられる。標準語と違って、語幹末の子音 „в/в“ [v] が脱落するため、語幹は вър'-/vär'- となる。このとき、ブラネシュティ方言では、現在語幹末の子音は口蓋化子音となるが、シリストラ変種も同様の特徴を持つ。一方で、ルセ変種は非口蓋化子音となる(Стойков et al. 1966: 地図 122, 124 及び Тетовска-Троева et al. 2016: 130 を参照)。

最後に、「リンゴ」を意味する語は、ブラネシュティ方言で абълка/äbälka という語頭のヨットが脱落した形で現れる。同様の特徴を持つのはシリストラ変種に限られる(Стойков et al. 1966: 地図 84 を参照)。

以上に述べたことは、以下(3-3)のようにまとめられる。

(3-3) ブラネシュティ方言にみられるシリストラ変種の特徴

- a. 動詞の未来形を形成する助詞は ше/še, шь/šǎ
- b. език/ezik などの語における語末の子音 к は、口蓋化子音[k']で現われる
- c. вървя/värv'ǎ 「歩いて行く」の現在語幹末子音は口蓋化子音で現われる
- d. ябълка/jäbälka 「リンゴ」は、語頭のヨットが脱落した形 абълка/äbälka

以上より、ブラネシュティ方言は、グレーベン方言シリストラ変種と同じ特徴を持っていることが言える。

3.1.3.2.5. まとめ

3.1.1. 「ブラネシュティについて」で述べた歴史的な移住のデータに加えて、ここで概観したブラネシュティ方言の言語的特徴によって、ブラネシュティ方言は、ミジャ方言群、より正確にはグレーベン方言シリストラ変種に属するものであることが示唆されている。より詳細で多くの言語データの比較が必要であるのは言うまでもないが、ここでは先行研究において挙げられている特に代表的と考えられる方言的特徴をブラネシュティ方言のデータと比較したという点で一定程度の意味があるものと考えられる。

3.2. 補語の接語重複の構造

3.2.1. 人称代名詞接語形

本節では、ブラネシュティ方言の人称代名詞接語形の特徴を記述しながら、必要に応じて標準ブルガリア語のそれと対照を行う。これを通して、ブラネシュティ方言に独特な特徴を明らかにする。

3.2.1.1. 一般的特徴

ブラネシュティ方言における人称代名詞のパラダイムは、【表 2-1】にある標準ブルガリア語のパラダイムと基本的に同じである。以下【表 3-2】にブラネシュティ方言の人称代名詞のパラダイムを示す¹¹⁸。

【表 3-2】 ブラネシュティ方言の人称代名詞¹¹⁹

	主格	対格		与格	
	-	接語形	非接語形	接語形	非接語形
1.SG	àc	мъ	mène	ми	(нъ) mène
	às	mă	mène	mi	(nă) mène
2.SG	тй	тъ	tèbe	ти	(нъ) tèbe
	tì	tă	tèbe	ti	(nă) tèbe
3.SG.M/N	tòй/tò	гу	nèгу	му	(нъ) nèгу
	tòj/tò	gu	nègu	mu	(nă) nègu
3.SG.F	т'а	йъ	nèйъ	й	(нъ) nèйъ
	t'а	jă	nèjă	i	(nă) nèjă
1.PL	ний	ни	nàc	ни	(нъ) nàc
	nij	ni	nàs	ni	(nă) nàs
2.PL	вий	ви	vàc	ви	(нъ) vác
	vij	vi	vàs	vi	(nă) vàs
3.PL	тий	ги	t'àф	им	(нъ) t'àф
	tij	gi	t'àf	im	(nă) t'àf
REF	-	съ	? ¹²⁰	си	?

¹¹⁸ 実際には、人称代名詞のそれぞれの形式は、音環境や話者によって様々なヴァリエーションが確認できる。【表 3-2】では、最も標準的と考えられる形を代表して載せてある。

¹¹⁹ 表中の () は、その中の要素の使用が随意的であることを意味する。

¹²⁰ 再帰代名詞の非接語形は、対格と与格ともに、本研究のデータ中では確認が取れなかった。

ブラネシュティ方言は標準ブルガリア語と異なり、アクセントのない音節で規則的に母音弱化が起きる(「3.1.3. ブラネシュティ方言」を見よ)。人称代名詞接語形はもちろんのこと、非接語形であっても、アクセントを持たない音節では母音弱化が起こる。また、1人称単数対格、2人称単数対格、それから再帰代名詞の対格がそれぞれ、*мъ/mă*, *тъ/tă*, *съ/să* の形をとる点でも標準ブルガリア語と異なる。これは東方言に一般的な特徴であり(cf. Стойков 1993: 250-255; Тетовска-Троева 2016: 86)、その起源は中期ブルガリア語における鼻母音の混同、あるいは東方言特有の母音弱化のいずれかであると考えられている(cf. Мирчев 1963: 164)¹²¹。

同じくアクセントをもたない否定の助詞 *не/ne* も当方言では母音弱化により *ни/ni* となるので、人称代名詞接語形 3人称単数と同時に用いられた場合であっても、標準ブルガリア語の場合にみられる非接語形との混同は起きない(2.2.1. の「接語の一般的特徴」を見よ)。また、標準ブルガリア語と異なり、アクセントは否定の助詞 *ни/ni* のほうに置かれる。以下、本節(3.2.1.1.)に限って、例文中で問題となる個所には二重線を引いて示す。

(3-4) a. Но ни му харèсѹъ, ни йъдè.
 No ni mu harèswă, ni jădè.
 but NEG he-DAT.CL like-PRS.3.SG NEG eat-PRS.3.SG
 「でも、彼は気に入らず、食べない。」(TM2_121029_001/2.07.01)

b. Калинь Рада ни гу штè
 Kalină Răda ni gu štè
 Kalina Rada NEG he-ACC.CL want-PRS.3.SG
 дъ съ ужèни.
 dă să użèni.
 SMP get_married-PRS.3.SG
 「カリナ・ラダは彼と結婚したくない。」(BV3_131003_001/1.53.06)

また、非接語形与格には、*нъ/nă* のない形が用いられることもある。例えば、

¹²¹ 中期ブルガリア語期において、語源的な **мА*/**mɛ* の形が、**мЖ*/**mɔ* と混同される。その後、この鼻母音(ж/ɔ)の北東方言における反映形である *ъ/ă* による対応で *мъ/mă* となる。*тъ/tă*, *съ/să* についてもこれと全く同様の説明が成り立つ。標準語は *А/ɛ* の反映形 *e/e* を伴う形を持つ *ме/me*, *те/te*, *се/se* である。もう一つの可能性は、標準語と同じく *e/e* の反映を持つが、母音弱化により *ъ/ă* となったというものである。

Младенов (1993: 267)ではルーマニア国内のミジヤ方言群について「ときに前置詞なしで、頻繁に前置詞 **нѣ/nă** を伴って」とあり、**нѣ/nă** を伴う形が一般的ではあるが、必須ではないことが指摘されている。ブラネシュティ方言でも、前置詞を伴う場合と伴わない場合の両方がある。**нѣ/nă** がないと与格と対格は同形になる。ただし、**нѣ/nă** の脱落については、標準ブルガリア語でもみられる **Na-drop** 現象との関係性も窺える(cf. Vakareliyska 1994; Тишева 2014)。同現象の標準ブルガリア語でのふるまいについては、2.2.4.2.1.3. 「**Na-drop** 現象」を参照されたい。一方で、ブラネシュティ方言にみられる同現象の詳細については、3.2.4.3 「**Na-drop** 現象」において論じる。

北東方言（特にミジヤ方言群）の人称代名詞のもう一つの特徴として、3人称対格非接語形及び主格を指示代名詞として用いる用法を挙げることができる(Кочев 1969: 63; Младенов 1984: 109; 1993: 268-269; Милетич 1989: 122-123)。人称代名詞の中でも3人称の形のみに見られるが、このことは人称代名詞3人称の形がいずれも歴史的に指示代名詞に由来している¹²²ことと関係があるという指摘もある(Младенов 1993: 269)。ブラネシュティ方言においても3人称の人称代名詞がこの用法で用いられている例がよく見られる。次の例は、人称代名詞3人称対格非接語形が指示代名詞の代わりに用いられていることを明確に示す例である。

(3-5) Дърши	легатѹръ	съз	мунчѣту	<u>нѣгу</u> ...	Дърши
Dărši	legatŭră	săz	munčetu	<u>něgu</u> ...	Dărši
hold-IMP.2.SG	connection	with	boy-N.SG	he-ACC	hold-IMP.2.SG
	легатѹръ	съз	мунчѣту	<u>унѹй</u> .	
	legatŭră	săz	munčetu	<u>unŭj</u> .	
	connection	with	boy-N.SG	that-N.SG	

「あの男性と連絡を取り続けなさい。あの男性と連絡を取り続けなさい。」(TO1_131006_001/1.37.15)

この例は、最初の発話を聞き取れなかった対話者に対して、ほぼ同じ内容の発話を一つ目の発話の直後に繰り返したときの例である。前後の発話で異なるのは、**мунчѣту/munčetu** 「男の子」の後ろからかかっている定語だけである。前者は人称代名詞3人称対格非接語形である一方で、後者はふつうの指示代名詞である。

¹²² ブラネシュティ方言だけでなく、現代ブルガリア語の人称代名詞3人称単数形の主格は指示代名詞*тъ/*tăの諸形、斜格は前方照応的な代名詞*и/*iの諸形が起源である。3人称複数形は、斜格の接語形が*и/*i起源であるのを除きその他すべての形で*тъ/*tăの諸形を起源に持つ(cf. Мирчев 1963: 164-166)。

ブラネシュティ方言でも人称代名詞 3 人称が指示代名詞の役割を果たしうること、そしてそれがふつうの指示代名詞と言い換えが可能であるということ(cf. Младенов 1993: 269)がこの例からはっきりとわかる。

3.2.1.2. 語順

接語形は動詞に隣接した位置に置かれる。標準ブルガリア語では疑問の助詞 *ли/li* が用いられる場合に、接語形と動詞の間にこの *ли/li* が入り込むことがあるが、ブラネシュティ方言ではこの疑問の助詞 *ли/li* が存在しないため¹²³、接語形は必ず動詞に隣接するといつてよい。以下、本節中 (3.2.1.2. 「語順」) では、動詞に実線を、接語(群)に波線を付す。

標準ブルガリア語では、疑問詞のない疑問文では疑問の助詞 *ли/li* がふつう用いられるが、ブラネシュティ方言では疑問の助詞は用いられず、疑問文であることはイントネーションのみで表される。以下(3-6a)はブラネシュティ方言の例であり、(3-6b)はそれに対応する標準ブルガリア語の例である。

(3-6) a. <u>Разбѝрате</u>	<u>съ</u>	съз	мунчѝту	тѝй
<u>Razbirate</u>	<u>să</u>	săz	munčetu	tuj
understand-PRS.2.PL	REF.ACC.CL	with	boy-N.SG+DEF.N.SG	this-N.SG
по енглис'ики'у		изѝк'?		
po englis'iki'u		izik'?		
in English-M.SG+DEF-M.SG		language-M.SG		

「この子と英語で理解しあえたのか。」 (DD1_120504_003/3.14.33)

b. Разбирате	ли се ...	[標準ブルガリア語]
Razbirate	li se ...	
understand-PRS.2.PL	Q REF.ACC.CL	

標準ブルガリア語では、疑問の助詞 *ли/li* は動詞と人称代名詞接語形の間におかれる¹²⁴。一方で、ブラネシュティ方言では、疑問の助詞がないため、接語形が動詞に必ず隣接する。

¹²³ Младенов (1993: 382)は、ルーマニア国内のブルガリア語諸方言について、疑問の助詞 *ли/li* が用いられず、代わりにイントネーションのみで疑問を表す方法が普及しているのは、ルーマニア語の影響によるものと論じている。

¹²⁴ 2.2.2.2.2. 「例外的な語順」を参照のこと。

ブラネシュティ方言では、人称代名詞接語形の与格と対格が同時に用いられる場合、接語群内で与格が対格に先行する。

(3-7) a. Дъ ми.....ги дъдѐш нъ мѐне.
 Dă mi.....gi dădêš nă mène.
 SMP I-DAT.CL they-ACC.CL give-PRS.2.SG DM I-ACC
 「私にそれらをください。」 (RUS_130927_002/1.54.38)

b. Ѐште дъ ти.....гу дăм на тѐбе.
 Îšte dă ti.....gu dăm nă tēbe.
 want-PRS.1.SG SMP you-DAT.CL he-ACC.CL give-PRS.1.SG DM you-ACC
 「あなたにそれをあげたい。」 (TM1_120509_003/1.20.47)

c. Ми.....ги кўпи непоўагъ ми.
Mi.....gi kùpi nepowătă mi.
 I-DAT.CL they-ACC.CL buy-AOR.3.SG granddaughter I-DAT.CL
 「私の孫娘が私にそれらを買ってくれた。」 (TM1_120509_003/1.16.35)

d. Как ви.....съ стрўўѣ?
 Kăk vi.....să strùwă?
 how you-DAT.CL REF.ACC.CL it_seems-.PRS.3.SG
 「あなたにはどのように思われますか。」 (DD2_121102_001/2.40.19)

そして、ブラネシュティ方言で特筆すべきことは、文中での位置にかかわらず、接語形は動詞に先行する位置におかれる傾向が強いということである。文頭に立つ場合も例外ではない。つまり、標準ブルガリア語と異なり、ブラネシュティ方言では、以下(3-8)、及び(3-9)にみられるように、接語形が文頭に立つことができる。

(3-8) 対格

a. Мъ бѐш страф ут тѐс ут примърійгъ.
Mă bêš stráf ut tês ut primărijătă.
 I-ACC.CL be-IMPF.3.SG fear from this-PL from municipality
 「私は村役場の人たちを恐れていた。」 (DM_130927_002/1.23.05)

b. Мъ були кръка̀тъ.
Мă buli krăkàtă.
 I-ACC.CL hurt-PRS.3.SG leg-PL+DEF.PL
 「私は足が痛い。」 (TM1_120509_003/15.45)

c. Ги вѝкъф тѹкъ.
Gi vikăf tükă.
 they-ACC.CL call-AOR.1.SG here
 「(私は) 彼らをここへ呼んだ。」 (DM_130927_002/2.14.32)

d. Съ разбѝръм ѹбе съз нѣгу.
Să razbirăm ùbe săz nègu.
 REF.ACC.CL understand-PRS.1.SG well with he-ACC
 「(私は) 彼と互いによく理解しあっている。」 (TM1_120509_003/18.32)

(3-9) 与格

a. Ми да̀ди пѣтлѣджѣни зелѣни такѝс.
Mi dădi pătłădžèni zelèni takis.
 I-DAT.CL give-AOR.3.SG tomato-PL green-PL such-PL
 「(彼は) 私にそのような緑のトマトを与えた。」 (BP_13004_001/23.47)

b. Ви благу̀дар'а̀ ут сѣту сѣрци.
Vi blagudar'ă ut sētu sărci.
 you-DAT.CL thank-PRS.1.SG from all-N.SG heart-N.SG
 「心からあなたに感謝する。」 (DD2_121102_001/04.33)

c. Му ка̀зьф фсѣту.
Mu kăzăf fsētu.
 he-DAT.CL tell-AOR.1.SG everything
 「(私は) 彼にすべて言った。」 (BA_131004_001/22.29)

d. Ми арѣсѣѹ дѣ пуйѣ.
Mi arêsăw dă puĵă.
 I-DAT.CL like-PRS.3.SG SMP sing-PRS.1.SG
 「私は歌うのが好きだ。」 (BV2_121031_001/1.13.35)

以上(3-8), (3-9)の例では、接語形が明らかに文頭の位置を占めている。ブラネシ

ユティ方言において、接語形が文頭の位置を占めることはごく一般的であるとさえ言える。すでに 2.2.1. 「接語の一般的特徴」において見たように、標準ブルガリア語の場合、接語形がこの位置に置かれることは決してないので、これは標準ブルガリア語と大きく異なる特徴である¹²⁵。したがって、ブラネシュティ方言の接語形の語順の特徴として、文中で占める位置に関係なく、接語形は動詞に対して前置されるということを指摘することができる。

ただし、動詞が命令形である場合には動詞に後続する。

(3-10) a. Дай ми.....йъ ба̀бо.
Daj mi.....jă babo.
 give-IMP.2.SG I-DAT.CL it-F.SG.ACC.CL grandmother-F.SG.VOC
 「私にそれをちょうだい、おばあちゃん。」 (BV3_131003_001/09.37)

b. Читай гу пъ чув'еку.
Čitaj gu pǎ čuv'eku.
 respect-IMP.2.SG he-ACC.CL AM person-M.SG+DEF.M.SG
 「その人を敬いなさい。」 (DD2_121102_001/3.10.32)

c. Нърижи си пътлъдженте,
Năriži si pǎtlădžente,
 cut_up-IMP.2.SG REF.DAT.CL tomato-PL+DEF.PL
нърижи ги.
năriži gi.
 cut_up-IMP.2.SG they-ACC.CL
 「トマトを切りなさい、切りなさい。」 (BV2_121031_001/19.53)

d. Зънни мъ ти пъ мѐне.
Zănni mǎ ti pǎ mène.
 take-IMP.2.SG I-ACC.CL you-NOM AM I-ACC
 「あなた、私を連れて行きなさい。」 (BV3_131006_001/2.31.55)

次の(3-11)は、動詞の命令形が助詞 йъ/jă のあとで用いられており、命令形が文頭におかれていない例である。ここでは、接語形は動詞の命令形に対して後続

¹²⁵ Кочев (1969: 8)によれば、同様の特徴は、グレーベン方言シリストラ変種においても観察される。

する。

- (3-11) a. Йъ́ къжѝ му, кòлку гòдин ймъш.
Jă kăži mu, kòlku gòdin imăš.
PART tell-IMP.2.SG he-DAT.CL how_many year-PL have-PRS.2.SG
「ほら彼に言ってごらんなさい、あなたが何歳なのか。」
(TF2_150219_001/4.49)

- b. Хайди дъ май стувѝм съз Гòгу.
Hajdi dă maj stuvim săz Gògu.
PART SMP more stay-PRS.1.PL with Gogu
Йъ́ глѝй гу.
Jă glèj gu.
PART look_at-IMP.2.SG he-ACC.CL
「ゴグともっと一緒にいましょう。ほら彼をごらんなさい。」
(BA2_150212_002/1.30.05)

(3-11)の例では、助詞 йъ/jă 「ほら、さあ」が文頭で用いられているにもかかわらず、接語形の му/mu 「彼に」や гу/gu 「彼を」は命令形の動詞に後続した位置を占めている。標準ブルガリア語では、動詞が命令形であったとしても、それよりも前に別の語（同じ助詞 я/ja (=йъ/jă)の場合も）が文頭に立っている場合には、接語形は動詞の命令形に対して必ず先行する。以下標準ブルガリア語の例(3-12)を(3-11)と比較せよ。

(3-12) 標準ブルガリア語

- a. Я ми.....го донеси. [標準ブルガリア語]
Ja mi.....go donesi.
PART I-DAT.CL it-ACC.CL bring-IMP.2.SG
「ほら私にそれを持ってきて。」 (Franks, King 2000: 64-65)

- b. Ела и ми кажи. [標準ブルガリア語]
Ela i mi kaži.
come-IMP.2.SG and I-DAT.CL tell-IMP.2.SG
「来て、私に言いなさい。」 (Franks, King 2000: 64-65)

このように、標準ブルガリア語の接語形は、文頭に立たない限り動詞に対して前

置される規則があり、動詞の命令形もその例外ではない (2.2.2.2. 「語順の特徴」もあわせて見よ)。命令形に先行する要素が(3-12a)のように助詞の *я/ja* であっても、(3-12b)のように接続詞 *и/i* であっても、人称代名詞接語形は動詞に対して前置される。一方で、ブラネシュティ方言の(3-11)の例はこれとは異なり、命令形に対して後置されており、しかも *йъ/jă* のあとでイントネーション上の休止が欠如していることも指摘できる。

以上のことを総合すると、ブラネシュティ方言の接語形は語順について次のような規則が存在する。

(3-13) ブラネシュティ方言の接語形の語順の規則

- a. 動詞に必ず隣接する
- b. 文頭に立つことができる
- c. 動詞が命令形でない限り、動詞に対して前置される
- d. 与格は対格に先行する

(3-13)で示された規則はほとんどすべての話者の発話で確認できる。しかしながら、インフォーマントの中で最年長 (88 歳) の男性話者(DD)の発話を中心に¹²⁶、特に(3-13c)で示した一般的にみられる規則とは異なる語順が確認された。

(3-14) a. Дунѐсъѳ гу пъ тѳй детѐ.
Dunѐsăw gu pă tuj detè
bring-AOR.1.SG he-ACC.CL AM this-N.SG child-N.SG
「(私は) この子を連れてきた。」 (DD1_120504_003/2.38.25)

b. Mѐne кăзѳ ми гуспудѳн Флѳрин.
Mѐne kăză mi guspudin Flòrin.
I-DAT tell-AOR.3.SG I-DAT.CL Mr Florin
「私にフロリン氏が言った。」 (DD1_120504_003/3.34.46)

c. Мѳл'ѳ сѳ нѳ гѳспуд'ѳ.
Mòl'ă să nă gòspud'ă.
pray-PRS.1.SG REF.ACC.CL DM God-M.SG+DEF.M.SG
「(私は) 神に祈ります。」 (DD1_120504_003/3.46.01)

¹²⁶ ほかには、DD と比べると少ないが DM の話者にもごくわずかに見られる ((3-32a)など)。話者 DM は DD と並び最年長のグループに入る話者であり、DD と同様に村の中で最も古いバジナリ地区に住んでいる。

d. Тòй, стрѹвъ ми.....съ,
 Tòj, strùvǎ mi.....sǎ,
 he-NOM it_seems-PRS.3.SG I-DAT.CL REF.ACC.CL
 чи и рудѣн у Българийъ.
 čì i rudèn u Bǎlgàrijǎ.
 that be-PRS.3.SG born-M.SG in Bulgaria

「私には、彼がブルガリア生まれであったように思われる。」

(DD1_120504_003/2.46.36)

(3-14)はいずれも接語形が動詞に後続する位置を占めている。これは、(3-13c)で挙げたブラネシュティ方言の接語形の語順の規則に反する例であるといえる。一方で、この話者(DD)は必ずしもここでみるような語順しか用いないというわけではない。つまり動詞句(動詞と接語形の組み合わせ)が文頭にあるときでも、接語形が動詞に先行するような例が多数みられる。

この話者は、ブラネシュティの中でもブルガリア語をもっともよく記憶している人物として広く知られており、実際にきわめて多くのブルガリア語の語彙や音声的特徴を保持していることが本研究の調査からも確認された。たとえば、ほかの話者であればルーマニア語の語彙で代用するところを、本来のブルガリア語の語彙を覚えていることが極めて多い。これらのことから、(3-14)で示された接語形の語順は、古い特徴を残したものである可能性がある。一方で、もしこれらが“元来の”語順であるとするならば、この話者以外が用いている語順(すなわち(3-13)でまとめた語順の規則)は、ブラネシュティ方言において新しく発達した特徴であると考えられる。この点については、3.2.1.4.「ルーマニア語との対照」において考察する。

また、これと関係して、別の話者(BV)が歌った古い民謡の歌詞にみられる接語形の語順も注目に値する。

(3-15) Калинъ Радъ рече „нй штъ гъ“.
 Kalinǎ Radǎ rěče „ni štǎ gu“.
 Kalinǎ Radǎ say-AOR.3.SG NEG want-PRS.1.SG he-ACC.CL

「カリナ・ラダは『彼はほらない』と言った。」(BV3_131003_001/1.52.25)

この例でみられる接語形の語順は、接語形が動詞に後続する位置にたっていることから、話者(DD)の発話で見られる例外的な語順と同じである。しかし、この話者は歌を歌った後に歌詞の内容を対話者に説明するために、歌わずに歌詞を

一通りもう一度言い直すのだが、この自然発話のなかでは、以下(3-16)にみられるように、接語形が動詞に先行する(3-13)で示した規則通りの語順が観察されるのである。

(3-16) (=3-4b) Калинь Ра̀да нї гу штè
 Kalinã Ràda nì gu štè
 Kalina Rada NEG he-ACC.CL want-PRS.3.SG
 дь съ ужèни.
 дã sã užèni.
 SMP get_married-PRS.3.SG
 「カリナ・ラダは彼と結婚したくない。」
 (BV3_131003_001/1.53.06)

歌のなかで見られた語順(3-15)については、2つの解釈がありうる。

まず1つ目の解釈は、歌の場合、リズムの問題など純粋に言語的な要因とは別の要因から、通常発話時とは異なる語順が見られる可能性があるために、(3-15)のような語順となったというものである。

2つ目の解釈は、民謡のような歌は言語の古い特徴を示す場合があるので、(3-15)のように動詞に後続する語順は、ブラネシュティ方言の古い特徴であるという解釈である。もしこの解釈にしたがうならば、(3-15)の例は、話者 DD の発話で見られる語順が古い特徴であることを示唆する例と考えることも可能であろう。

これらのデータだけからでは、どちらとも断定できない。しかし、同じ内容の文で、歌と自然発話時とで異なった語順が用いられているという点は注目に値する。なぜなら、(3-15)と(3-16)の対比は、(3-16)のように接語形が動詞に先行する語順のほうが、少なくとも話者(BV)にとっては自然発話でも用いるようなふつうの語順となっていることを読み取ることができるからである。

3.2.1.3. 所有の用法

3.2.1.3.1. 概要

すでに2.2.2.1.「形態と用法」で述べたように、標準ブルガリア語の人称代名詞接語形の与格には所有者を表す用法がある¹²⁷。ブラネシュティ方言においてもこの用法がみられる。本節では、所有者を表す人称代名詞接語形の与格に実線を引く。

(3-17) a. Ше пла̀чѣтъ м̀айкѣ ти и тѣйку ти.
Še plàčăt m̀ajkă tì i tějku tì.
FUT cry-PRS.3.PL mother you.DAT.CL and father you.DAT.CL
「あなたの母と父が泣くでしょう。」(BV3_131003_001/3.26.09)

b. Тѣйку му бѣши нѣ примѣрийѣтъ.
Tějku mù bėši nă primărijătă.
father he-DAT.CL be-IMPF.3.SG at municipal_office-F.SG+DEF.F.SG
「彼の父は町役場にいた。」(BV2_121031_001/2.16.21)

c. Жин̀а му, ж̀енкѣтъ нѣ гуспудин̀ Фл̀орин,
Žiǹa mù, žènkătă nă guspudiǹ Flòrin,
wife he-DAT.CL little_wife-F.SG+DEF.F.SG DM Mr Florin
т'̀а б̀и л'̀екар.
t'̀a b̀i l'̀ekar.
she-NOM be-AOR.3.SG doctor
「彼の妻、フロリン氏の奥さんは医者だった。」
(DD2_121102_001/2.45.36)

d. Зѣ пѣ д̀ѣштер'̀атѣ нѣ веришоу̀арѣ ми.
Zė pă dăšter'̀ată nă verišowară mì.
take-AOR.3.SG AM daughter-F.SG+DEF.F.SG DM cousine-F.SG I-DAT.CL
「(彼は) 私の従妹の娘を娶った。」(TO1_121108_001/1.21.24)

これらの例からわかるように、接語形与格は、所有の意味で用いられる。このとき、被定語である名詞はふつう定冠詞を伴うのだが、(3-17)の例ではいずれも定冠詞を伴っていない。これはどの名詞も親族を表す名詞であるためであり、標準

¹²⁷ たとえば、Stateva (2002)や Pancheva (2004)、Avram, Coene (2008)などは、この用法を「所有の接語(possessive clitic)」と呼んでいる。

ブルガリア語においてもこの場合に定冠詞が用いられることはない。また、語順に注目すると、ここで挙げた例はどれも、接語形与格が、被定語の直後におかれている。

一方で、ブラネシュティ方言では、この語順が守られないことが少なくない。つまり、不一致定語である所有を表す人称代名詞接語形与格は、必ずしも被定語である名詞句に後続するわけではない。

(3-18) a. Зъбраѝф какъ му бѣши имѝту.
 Zăbrăjf kàk mu bēši imītu.
 forget-AOR.1.SG how he-DAT.CL be-IMPF.3.SG name-N.SG+DEF.N.SG
 「彼の名前が何であったか忘れてしまった。」
 (TO2_150211_002/1.49.20)

b. Ъа дъ пѝшеш тѹкъ какъ ти и
 Jà dă pišeš tŭkă kàk tī i
 PART SMP write-PRS.2.SG here how you-DAT.CL be-PRS.3.SG
 имѝту.
 imētu.
 name-N.SG+DEF.N.SG
 「ほら、ここにあなたの名前はどういうのか書きなさい。」
 (TM2_121029_001/07.17)

c. Ми ръзбул'а мунчѝту.
Mi răzbul'ă munčētu.
 I-DAT.CL become_sick-AOR.3.SG boy-N.SG+DEF.N.SG
 「私の子が病気になった。」 (DM_130927_002/1.29.27)

d. Дъ ми уткрàннеш врътѝте!
 Dă mi utkràneš vrătite!
 SMP I-DAT.CL steal-PRS.2.SG language-PL+DEF.PL
 「私の言葉を盗みなさい（学びなさい）！」 (TF1_150217_003/10.50)

これらの例では、所有を表す人称代名詞接語形与格は、被定語である名詞に後続する位置には置かれず、動詞の前の位置を占めている。(3-18)の例における所有者を表す接語形与格は、(3-13)で挙げた語順の規則にしたがっている。所有者を表す接語形与格が示すこのような振る舞いは、標準ブルガリア語でも知られる

(cf. Franks, King 2000: 276; Stateva 2002; Pancheva 2004; Cinque, Krapova 2008; Ницолова 2013)。

ただし、標準ブルガリア語と異なるのは、ブラネシュティ方言ではその使用が頻繁であることと、(3-18c)にみられるように、文頭の位置も占めうるということである。標準ブルガリア語では、以下(3-19)にあるように、人称代名詞接語形は文頭に立つことができない。

(3-19) 標準ブルガリア語

a.	Видях	книгата	<u>му</u> .	
	Vid'ah	knigata	<u>mu</u> .	
	see-AOR.1.SG	book-F.SG+DEF.F.SG	he-DAT.CL	
b.	Видях	<u>му</u>	книгата.	
	Vid'ah	<u>mu</u>	knigata.	
	see-AOR.1.SG	he-DAT.CL	book-F.SG+DEF.F.SG	
c.	*Му	видях	книгата.	
	*Mu	vid'ah	knigata.	
	he-DAT.CL	see-AOR.1.SG	book-F.SG+DEF.F.SG	
d.	Аз	<u>му</u>	видях	книгата.
	Az	<u>mu</u>	vid'ah	knigata.
	I-NOM	he-DAT.CL	see-AOR.1.SG	book-F.SG+DEF.F.SG
	「私は彼の本を見かけた。」			

所有者を表す接語形が、被定語である名詞の直後におかれる(3-19a)が、いわば“普通の”語順であるが、(3-19b)のように接語形が名詞に後続しないような語順も可能である。しかし、標準ブルガリア語では、(3-19c)のように文頭に置かれるものは許容されない。一方で、文頭におかれぬ限り(3-19d)のように動詞に先行することも可能である。

このように、所有者を表す接語形が、名詞の直後以外の位置も占めうるということ自体は、標準ブルガリア語とブラネシュティ方言に共通する特徴であるといえる。しかし、ブラネシュティ方言にみられる所有者を表す接語形は文頭の位置も占めることが可能であるという点で、標準ブルガリア語とは異なる。

3.2.1.3.2. 不一致定語の接語重複

ブラネシュティ方言では、所有者を表す前置詞句¹²⁸は、人称代名詞接語形与格によって、頻繁に接語重複される。ここでは、いわゆる不一致定語の接語重複に限って見ることにする。

まず、接語形与格と非接語形与格が二重使用されている例を見る。以下本節中(3.2.1.3.2.)では、不一致定語の接語重複をしている N と Ncl に実線を引く。

(3-20) a. Как ти и имѣту нѣ тебе?
 Как tj i imitu nǎ tēbe?
 how you-DAT.CL be-PRS.3.SG name-N.SG+DEF.N.SG DM you-ACC
 「あなたの名前はなんというのか。」 (BV3_131003_001/01.25)

b. Ас тр'абѣ дѣ му утòр'ѣ
 Ас tr'abǎ dǎ mu utòr'ǎ
 I-NOM be_necessary-PRS.3.SG SMP he-DAT.CL open-PRS.1.SG
нѣ нѣгу учите.
nǎ nēgu učite.
 DM he-ACC eye-PL+DEF.PL
 「私は彼の眼を開けてやらねばならない。」 (DD1_120504_003/2.38.25)

c. Нѣ нѣйѣ и имѣту и Йѣмѣлийѣ.
Nǎ nējǎ i imitu i Jǎmilijǎ.
 DM she-ACC she-DAT.CL name-N.SG+DEF.N.SG be-PRS.3.SG Yamiliya
 「彼女の名前はヤミリヤという。」 (TM1_120509_003/1.54.34)

d. Пѣ мѣне ми имѣту Флуѣаре.
Pǎ mene mi imitu Fluware.
 AM I-ACC I-DAT.CL name-N.SG+DEF.N.SG Floare
 「私の名前はフロアレだ。」 (TF2_150219_001/3.42)

(3-20)の例では、いずれも人称代名詞非接語形が接語重複している。このとき、(3-20a)や(3-20b)のように文中で接語形が非接語形に先行する例も、(3-20c)や(3-20d)のように後続する例もある。ただし、(3-20d)については、非接語形が、期待される与格標識 нѣ/nǎ の代わりに、対格標識 пѣ/pǎ を伴った形で表されており、

¹²⁸ 標準ブルガリア語と同様に、所有者を表す名詞は、必ず前置詞 нѣ/nǎ によって導かれるため前置詞句となる。

結果的に接語形と格が異なっている¹²⁹。

次に、人称代名詞非接語形以外の前置詞句が接語重複している例を見る。

- (3-21) a. Му имѝту нъ мунчѣту тѝй
Му imitu nă munčetu tùj
he-DAT.CL name-N.SG+DEF.N.SG DM boy-N.SG+DEF.N.SG this-N.SG
Кѣнт.
Kènt.
Kent

「この子の名前はケントだ。」 (BV3_131006_001/12.02)

- b. Тѣйку му нъ тѣтѝку мѝйу, тѝй
Тѣйку му nă tătiku mōju, tòj
father he-DAT.CL DM father my-M.SG+DEF.M.SG he-NOM
сѣд'а мл'òгу нъ бългàр'.
săd'а ml'ògu nă bălgar'.
stay-AOR.3.SG for_a_long_time at Bulgarian

「私の父の父は、長い間ブルガリア人のもとにいた。」

(TMita_150212_004/05.43)

- c. Сѝстрѣ му нъ мунчѣту ѝ̀онзи
Sistrè му nă munčetu wònzi
sister he-DAT.CL DM boy-N.SG+DEF.N.SG that-M.SG[sic]
спà тѝкѣ.
spà tùkă.
sleep-AOR.3.SG here

「あの人の姉はここに泊まったんだ。」 (GA2_150212_002/2.13.24)

¹²⁹ おそらく、ルーマニア語の名前の述べ方（対格を用いて、pe mine mă cheamă...となる(cf. ロシア語 меня зовут...と同様の構造))とブルガリア語のそれとが混同することによって、生じたものと考えられる。ここでは、補語の接語重複ではなく、不一致定語の接語重複と考えることとし、詳細な議論は行わない。

d. Систеръ му нъ другàру нъ мунчèту
 Sistră mu nă drugàru nă munčètu
 sister he-DAT.CL DM friend-M.SG+DEF.M.SG DM boy-N.SG+DEF.N.SG
 туй <...> т'а гувàри със йапòнците.
 tuj <...> t'а guvàri sās japòncite.
 this-N.SG she-NOM speak-PRS.3.SG with Japanese-PL+DEF.PL
 「この子の友人の姉は、日本人と話せる。」(DD2_121102_001/2.23.27)

(3-21a)は、被定語の名詞に先行する文頭の位置で接語形 му/mu 「彼の」が用いられている。他方、(3-21b)～(3-21d)では、接語形は被定語の名詞のすぐ後ろに置かれており、それに後続する位置に接語形と同一指示の前置詞句が置かれている。所有者を表す接語形与格を伴う不一致定語の接語重複は標準語でも知られる(2.2.3.2. 「補語以外の接語重複」も参照)。

(3-22) 標準ブルガリア語

a. НОВИТЕ МУ книги НА ИВАН.
 novite mu knigi na Ivan.
 new-PL+DEF.PL he-DAT.CL book-PL DM Ivan
 「イワンの新しい本」(Pancheva 2004: 203)

b. МЪЖЪТ Ї НА ТАСА беше
 Măžăt i na Tasa beše
 husband-M.SG+DEF.M.SG she-DAT.CL DM Tasa be-IMPF.3.SG
 селски бикар.
 selski bikar.
 village's herdsman
 「タサの夫は村の牧夫であった。」(Маслов 1982: 305)

Маслов (1982: 305)によれば、標準語における不一致定語の接語重複は「非常にまれであり、俗語的特徴を持つ」とされるが、ブラネシュティ方言では決してまれではない。

3.2.1.4. ルーマニア語との対照

前節までの記述を通して、ブラネシュティ方言に見られる人称代名詞接語形には、標準ブルガリア語と共通する特徴のほかに、ブラネシュティ方言に特異な特徴もあることを明らかにした。

まず、共通する特徴としては、接語群内での語順（与格が対格に先行する）や接語群自体が基本的に動詞に隣接するという点を挙げるができる。

その一方で、標準ブルガリア語と明らかに異なる特徴として、接語形が文頭に立つということを指摘できる。標準ブルガリア語では、接語形が文頭に立つことができないという厳格な規則がある（2.2.2.2.1.「概要」を参照）。しかし、ブラネシュティ方言では、文中での位置に関係なく、接語形は動詞の直前におかれるという強い傾向がみられる。

本節では、ブラネシュティ方言に独特な語順の特徴を、ルーマニア語との対照の観点から論じる。なぜなら、ブラネシュティ方言の話者はルーマニア語も自由に用いることができるバイリンガルなので、ルーマニア語との言語接触による変化の可能性も考えられるためである。

ルーマニア語の人称代名詞接語形は、以下(3-23)にみられるように、文頭の位置であっても、動詞の直前に置かれる。以後、接語形(Ncl)及び、接語重複している場合には重複している名詞句(N)にも実線を引く。また、以後ルーマニア語の例を出す場合は、ルーマニア語の正書法にしたがって表記する。

(3-23) a. Îi spun.
 he-DAT.CL say-PRS.1.SG
 「(私は) 彼に言う。」

 b. Îl aștept.
 he-ACC.CL wait-PRS.1.SG
 「(私は) 彼を待つ。」

ルーマニア語にみられるこのような接語形の語順の特徴は、ブラネシュティ方言と共通している。Младенов (1993: 382-383)は、ルーマニア国内のブルガリア語諸方言でも同様の特徴が広く観察されることを示したうえで、これらがルーマニア語との言語接触によって生じた特徴であると論じている。しかし、Кочев (1969: 8)は接語形を文頭に置く用法が、ブルガリア国内のグレーベン方言シリストラ変種でも見られることに言及している。ただし、これがどの程度許容されるものなのかなどについては述べておらず、例もほとんど挙げていないことから

b. Fața- i roșie ca focul
 face-F.SG+DEF.F.SG she-DAT.CL red-F.SG like fire-N.SG+DEF.N.SG
 strălucea de bucurie.
 shine-IMPF.3.SG from happiness
 「彼女の赤い顔は、幸せで炎のように輝いていた。」
 (Avram, Coene 2008: 362)

(3-24)のように、接語形与格が被定語に後続する語順はあまり好まれず、むしろ以下(3-25)にあるように名詞句の外に接語形与格がおかれる語順が一般的であり、場合によってはそれが唯一可能な語順となることさえあるという(Pancheva 2004: 180)。以下(3-25)では、所有者を表す接語形与格は文頭に立っている。

(3-25) a. Ti- am văzut cartea.
 you-DAT.CL have-PRS.1.SG seen book-F.SG+DEF.F.SG
 「あなたの本を見た。」 (Guțu-Romalo et al. 2008: 202)

b. Ne felicităm copiii.
 we-DAT.CL congratulate-PRS.1.PL child-M.PL+DEF.M.PL
 「私たちの子供をお祝いする。」 (Стойнова 2008: 74)

所有者を表す接語形与格の用法について、ブルガリア国内のグレーベン方言シリストラ変種では、被定語の名詞の後に置かれるような語順の例は見られるが、それ以外の語順については示されていない(Кочев 1969: 62)。ブラネシュティ方言において、接語形与格が被定語の名詞の後ろ以外(名詞句の外)に置かれる語順が広く観察されることは、このような語順が好まれるルーマニア語との言語接触によってその用法が拡大した可能性を指摘することができるだろう¹³¹。

さらに、ブラネシュティ方言では、標準ブルガリア語ではまれな現象とされる、所有者を表す接語形与格が関与する不一致定語の接語重複も頻繁に観察される。ルーマニア語でもこのタイプの接語重複は見られる。以下(3-26)を見よ。

(3-26) a. Copilului i- au căzut
 child-M.SG+DEF.M.SG.DAT he-DAT.CL have-PRS.3.PL fallen

¹³¹ 言語接触による言語変化には往々にして、もともとはまれながら用いられる形式であったものが、その形式が広く用いられている接触言語の影響でその用法を拡大していくケースが多く見受けられる(cf. Heine, Kuteva 2005)。詳細は、本論文の4.2.1.「理論的背景」を見よ。

dinții de lapte.
tooth-PL+DEF.PL from milk

b. I- au căzut dinții de lapte
he-DAT.CL have-PRS.3.PL fallen tooth-PL+DEF.PL from milk
copilului.
child-M.SG+DEF.M.SG-DAT

「その子は乳歯が抜けた。」 (Guțu-Romalo et al. 2008: 470)

(3-26)では、定冠詞与格形¹³²をもった *copil* 「子供」という名詞が人称代名詞接語形与格によって二重に標示されている。このとき、(3-26a), (3-26b)の両方の語順が許容される。しかも、少なくとも(3-26a)の場合は、接語重複が義務的である。ブラネシュティ方言における不一致定語の接語重複の用法の拡大はルーマニア語の影響によって促進された可能性がある。

本節では、ブラネシュティ方言にみられる接語形の独特なふるまいを、ルーマニア語との対照を通して分析を試みた。標準ブルガリア語には見られない特徴が、ルーマニア語では一般的な用法として用いられている。これらのことから、ブラネシュティ方言の接語形の用法は、ルーマニア語との言語接触によって変化をこうむった可能性が指摘できる。しかし、より多くのデータを用いた緻密で詳細な対照研究が必要であることは明白である。これは今後の課題とする。

3.2.1.5. まとめ

ブラネシュティ方言における人称代名詞接語形の特徴の多くは、標準ブルガリア語と共通している。しかしその一方で、特に語順の点でブラネシュティ方言に特有の特徴が見いだされた。それは、接語形が、文中で占める位置に関係なく、動詞(ただし、命令形である場合を除く)に対して前置されるということである。したがって、文中で占める位置によって接語形の語順が規定される標準ブルガリア語とは異なり、ブラネシュティ方言では動詞の形態的特徴(命令形かそれ以外か)が接語形の語順を規定する要因となる。

また、ブラネシュティ方言の所有者を表す接語形与格は、標準ブルガリア語と比較して、語順に関して多くのヴァリエーションを許容する傾向がある。そして、その多くがルーマニア語と共通するという事実は、ルーマニア語の影響による言語変化の可能性を示唆しており、注目に値すると言える。

¹³² ルーマニア語では、属格と与格は同形である。もっとも、これは標準ブルガリア語でも同様である(いずれも前置詞 *na/nă* によって標示される)。

3.2.2. 前置詞 пь/pǎ

3.2.2.1. 基本的な特徴

ブラネシュティ方言には、対格を表す前置詞 пь/pǎ がある。本節(3.2.2.)では、前置詞 пь/pǎ の基本的な特徴を記述して、その用法についての分析を行う。

前置詞 пь/pǎ は、ブラネシュティ方言に限らず、ルーマニア国内のブルガリア語諸方言にも広く見られる(cf. Младенов 1993)。その起源については諸説あるが、Димчев(1974)や Младенов(1993)は、ルーマニア語との言語接触¹³³の結果、ルーマニア語の前置詞 pe¹³⁴がルーマニア国内のブルガリア語諸方言に借用されたとする説をとる。同様の前置詞は、現在のマケドニア共和国やギリシャなどに分布するブルガリア語南西方言¹³⁵においても見られる¹³⁶(Топалова-Симеонова 1965:

¹³³ ブラネシュティ方言の話者は皆、ルーマニア語とのバイリンガルであり、言語接触によると考えられるルーマニア語の影響が随所に見られる。(cf. Сугаи 2015a; 2015b; 2016a)

¹³⁴ ルーマニア語のムンテニア方言（ブラネシュティが位置するルーマニア南東部のムンテニア地域に分布する方言）では、前置詞(pe, din)の母音 e, i は、それぞれ ä, î になるという母音弱化がみられる(Алексова 2004: 59)。したがって、ブラネシュティで話されるムンテニア方言において、前置詞 pe は[pǎ]と発音される。ブラネシュティ方言にはこの音形がそのまま借用されたと考えられる。

¹³⁵ ブルガリア科学アカデミーなどの公式見解では、現在のマケドニア共和国やギリシャ北部、アルバニア南東部などに分布する南スラヴ語の方言もブルガリア語の方言としているが（例えば、Стойков(1993)やアカデミーが出版している様々な方言地図(Кочев et al. 2001; Антонова- Василева et al. 2014; Тетовска-Троева et al. 2016)を参照せよ)、実際にはマケドニア語の方言と取る向きもある(cf. Видоевски 1998; 1999ab)。これには、歴史的な経緯や政治的な問題が絡んでくる。この議論は本論文の内容と直接関係しないため、ここでは便宜上、仮にブルガリア語南西方言と呼ぶが、どちらの言語の方言であるかについて本論文で詳細に検討はしない。

¹³⁶ たとえば、Шклифов(1973: 123-124)によれば、コストゥル方言（現在のギリシャ北西部にあり、アルバニアやマケドニア共和国との国境に近いカストリア（ブルガリア語名はコストゥル）という町を中心とした地域で話されるブルガリア語南西方言）では、「直接補語が定冠詞形の[普通]名詞、人称代名詞の対格形、人名である場合に、ほとんどの場合でその前に定性を強調する na/nǎ という前置詞が立つ」とある。Sobolev(2008: 116-118)は、同じくギリシャ北西部のクラニヤやトゥリヤに分布するアルーマニア語の南方言では、「～の上に」を意味する prǎ / pri / pi という前置詞が直接補語を標示するために用いられることを指摘している。それゆえ、コストゥル方言に見られる na/nǎ（「～の上に」という意味を持つ）は、アルーマニア語の南方言で用いられる直接補語標示の前置詞 prǎ / pri / pi の「翻訳借用であることに疑いはない」とさえ述べている(Sobolev 2008: 118)。

93; Koneski, Vidoevski, Jašar-Nasteva 1968: 521; Шклифов 1973: 123-124; Тополињска 1995: 93-98; Sobolev 2008: 116-118)。この地域にはルーマニア語も分布しており、ブルガリア語南西方言と分布が重なっている。ルーマニア語やルーマニア語との接触がある地域のブルガリア語諸方言にのみ当該の前置詞が見られることは、前置詞 *pe* とその用法が、ルーマニア語からそれらのブルガリア語諸方言に借用されていることを強く示唆している (cf. Младенов 1993: 381-382; see also Sobolev 2008: 116-118)。この点について、Гълъбов (1986: 555-557) は、ルーマニア語における *pe* とその用法が、逆にブルガリア語からの影響でルーマニア語に生じたと主張しているが、この説は妥当とは考えられず、Младенов (1993: 382) はこの説を受け入れがたいとしている。

前置詞 *пъ/pă* は、ルーマニア語の *pe* がそうであるように、ブラネシュティ方言でも、一種の対格標識の役割を持つと考えられる。実際に、Младенов (1993: 381) は、この前置詞について、対格 (直接補語) の文法的な標識と呼んでいる。しかしながら、*пъ/pă* が用いられないということは珍しくなく、*пъ/pă* の使用は全体的に見て随意的である。その一方で、人称代名詞非接語形対格とは、義務的に共起する。対格が形式の上で明示的に表されている人称代名詞非接語形対格に対して、対格標識である *пъ/pă* を用いることは冗長的である。それにもかかわらず、人称代名詞非接語形対格に対して *пъ/pă* が義務的に用いられている事実は、前置詞 *пъ/pă* が、従来から指摘されてきた対格標示以外にも機能があることが推定される。したがって、本節(3.2.2.)では、*пъ/pă* がどのような場合に用いられるのか、具体的にはどのような名詞句と共起しうるのかを分析することを通して、*пъ/pă* の用法と機能について明らかにすることを目指す。

ところで、使用がより制限的ではあるが、*пъ/pă* の翻訳借用によるヴァリエントとして *нъ/nă* の存在が知られる (Младенов 1993: 381; cf. also Sobolev 2008: 116-118)。ルーマニア語の前置詞 *pe* がブルガリア語では *нъ/nă* にあたるため、音形をそのまま借用した形である *пъ/pă* の代わりに、*нъ/nă* が対格標識として用いられている。ブラネシュティ方言でも制限的であるが対格標識の *нъ/nă* を伴った例が観察される (cf. also Сугаи 2014: 118)。以後、本節(3.2.2.)中では、「*пъ/pă* (または *нъ/nă*) を伴った名詞句 (= 前置詞句)」に実線を引く。ただし、3.2.2.3.節に限っては、接語重複している接語形にも実線を引く。

- (3-27) a. Г'а бърдж' вѝкнѝ нъ непòту,
 Г'а бърдѝж' вѝкнă нă непòту,
 she-NOM soon call-AOR.3.SG DM grandson-M.SG+DEF.M.SG
 「彼女はすぐに孫を呼んだ。」 (TMita2_150217_001/1.52.54)

b. ...тѣй дѣ помниш нѣ д'аду Данчу.
 ...tāj dā pòmniš nǎ d'adu Dànču.
 ... so SMP remember-PRS.2.SG DM grandfather Danču
 「(あなたが) ダンチュじいさんを覚えていられるように。」
 (DD1_120504_003/3.47.25)

c. Àс, нѣ тès, койèтту ни в'арўт у Гòспот, <...>
 Às, nǎ tès, kojèttu ni v'arwăt u Gòspot, <...>
 I-NOM AM this-PL REL-PL NEG believe-PRS.3.PL in Lord
 нѣ ги штѣк.
 ni gi štāk.
 NEG they-ACC.CL want-PRS.1.SG
 「私は、主を信じない人々は、望まない。」 (BV4_150217_002/11.05)

d. Àмъ дѣ дòдеш дѣ ни слугўўш и...
 Àmă dă dòdeš dă ni slugùwăș i...
 but SMP come-PRS.2.SG SMP we-ACC.CL serve-PRS.2.SG also
 и пѣ нàс, нѣ тўрци.
 i pǎ nàs, nǎ tũrci.
 also AM we-ACC DM Turkish-PL
 「我々トルコ人にも仕えに来るがよい。」 (DD1_120504_003/26.15)

特に最後の(3-27d)の例では、пѣ/pǎ を伴う名詞の直後で、нѣ/nǎ を伴う前置詞句で言い換えられており、нѣ/nǎ が пѣ/pǎ と同様に対格標識の機能を持っていることを示唆している¹³⁷。

3.2.2.2. пѣ/pǎ の用法

3.2.2.2.1. 代名詞

まず、前置詞 пѣ/pǎ が代名詞と共起する場合についてみる。

ブラネシュティ方言では、前置詞 пѣ/pǎ は人称代名詞非接語形対格と義務的に共起する。ただし、人称代名詞非接語形対格が単独で用いられる例は、本研究のために収集されたブラネシュティ方言のデータ中で 1 つだけ見られる。この例

¹³⁷ 「仕える」を意味する動詞は、標準ブルガリア語では与格支配であるが、ブラネシュティ方言では、пѣ нас/pǎ nas が用いられていることから、対格支配の動詞であるものと考え、нѣ турци/nǎ turci も対格補語とする。

は、他にはなかったため、今後の課題とし、本研究では義務的に共起するものとみなす¹³⁸。

(3-28) a. Ти мь пйтъш пь мѐне зь н'ѐшту.
 Ti mă pităş pă mène ză n'ěštu.
 youNOM I-ACC.CL ask-PRS.2.SG AM I-ACC about something
 「あなたは私に何かについて尋ねる。」 (DD1_120504_003/3.41.00)

b. Кой ть дунѐсь пь тѐбе тук?
 Kòj tă duněsă pă tèbe tük?
 who-NOM you-ACC.CL bring-AOR.3.SG AM you-ACC here
 「誰があなたをここに連れてきたのか。」 (BP_120503_003/14.50)

c. Гу вѝкъм и пь нѐгу.
 Gu vikăm i pă nègu.
 he-ACC.CL call-PRS.1.SG also AM he-ACC
 「(私は) 彼も呼びます。」 (BA_131004_001/20.55)

d. Мл'òгу ги пумòгнѝф¹³⁹ пь т'àф.
 Ml'ògu gi pumògnăf pă t'ăf.
 much he-ACC.CL help-AOR.1.SG AM they-ACC
 「(私は) 彼らをたくさん助けた。」 (DD1_120504_003/3.05.31)

また пь/pă をともなった非接語形対格が補語となる場合には、ごくわずかな例外を除いて、接語重複も義務的となる¹⁴⁰。

¹³⁸ 以下(i)が、非接語形対格に対して対格標識が用いられていない唯一の例である。

(i) И т'àп, ги зѐю, прàйю нѐшту...
 I t'ăp, gi zèwo, prăjwo nèštu...
 also they-ACC they-ACC.CL take-AOR.3.PL do-AOR.3.PL something
 「彼らも連れていかれ、何かされた。」 (DD2_121102_001/2.14.50)

¹³⁹ 標準ブルガリア語では与格補語を要求する動詞であるが、ブラネシュティ方言では常に対格補語を要求する。これは、ルーマニア語で同じ意味の動詞(a ajuta)が対格補語を要求することから、その影響によると思われる。

¹⁴⁰ この点については、пь/pă と接語重複の関係をとり上げた次節の 3.2.2.3. 「пь/pă と接語重複」において取り上げる。

次に、人称代名詞以外の代名詞では、指示代名詞、定代名詞 (cete 「すべての人・物」など)、不定代名詞、否定代名詞、疑問代名詞、所有代名詞が пъ/рă と共起する例が見られた。ただし、人称代名詞の場合と異なり、これらの代名詞の場合には пъ/рă の使用は義務的ではない。

まず指示代名詞について、Младенов (1993: 305)は、直接補語が指示代名詞によってあらわされるときに пъ/рă を伴うのは非常にまれであると指摘している。しかし、ブラネシュティ方言では指示代名詞で表された直接補語が пъ/рă を伴う例は決してまれではない。例えば、以下(3-29)は指示代名詞と пъ/рă が共起する例である。

(3-29) a. Ги вѝкъф ѝ пъ унѝс.
 Gi vĭkăf i ră unĕs.
 they-ACC.CL call-AOR.1.SG also AM that-PL
 「(私は) 彼らも呼んだ。」 (DM_130927_002/2.14.32)

b. Кăтѹ ѹчиш пъ тѹс, ше учѝш
 Kătù ùčiš ră tăs, še učiš
 as study-PRS.2.SG AM this-F¹⁴¹-SG FUT study-PRS.2.SG
 и пъ ромѡнѹ.
 i ră romănă.
 also AM Romanian-F.SG
 「この (言葉を) 学んだら、ルーマニア語も学べるでしょう。」
 (BV3_131003_001/3.06.18)

c. Амѹ пъ тѹс <...> ни мужѝѹ
 Amă ră tôs <...> ni mužiw
 but AM this-M.SG NEG can-AOR.1.SG
 дѹ гу рѹзбирѹ.
 dă gu răzbiră.
 SMP he-ACC.CL understand-PRS.1.SG
 「でもこの (人) のことは (私は) 理解できなかった。」
 (DD2_121102_001/4.05.49)

¹⁴¹ ルーマニア語で「言語」を表す語が女性名詞であることから女性形となっていると考える。

d. Пйшеў пѣк пѣ ўѡнзи, пѣ ўѡнзи, пѣ ўѡнзи...
 Pišew pǎk pǎ wònzì, pǎ wònzì, pǎ wònzì...
 write-IMPF.1.SG but AM that-M.SG AM that-M.SG AM that-M.SG
 「(私は) あの (人の名前) もあの (人の名前) も書いた。」
 (BV1_120509_003/1.05.33)

пѣ/pǎ と共起している指示代名詞の指示対象は人間であることが多い。しかし、(3-29b)のように人間を指さない指示代名詞が пѣ/pǎ と共起する例もある。また(3-29a), (3-29c)のように、пѣ/pǎ を伴った指示代名詞が接語重複することもある。定代名詞 (cète 「すべての人・物」)¹⁴²については、次のような例が見られた。

(3-30) a. Ги нѣр̀ани пѣ cète.
 Gi nǎr̀ani pǎ sète.
 they-ACC.CL feed-AOR.3.SG AM all-PL+DEF.PL
 「(彼は) すべて (の動物) に餌をやった。」(BV3_131003_001/2.23.26)

b. Рун̀ните, ги пйшеў пѣ cète.
 Ruǹninte, gi pišew pǎ sète.
 parents-PL they-ACC.CL write-IMPF.1.SG AM all-PL+DEF.PL
 「親戚 (の名前) は全員書いたものだ。」(BV1_120509_003/1.05.36)

c. Дѣк̀у ги уст̀аш, ше ги зѣ
 Dǎk̀ù gi ust̀aš, še gi zè
 if they-ACC.CL leave-PRS.2.SG FUT they-ACC.CL take-PRS.3.SG
пѣ cète зѣ венѣшки.
pǎ sète zǎ venǎški.
 AM all-PL+DEF.PL for once

「もしそれ (お菓子) を置いておいたら、(彼は) いっぺんにそれを全部たべて しまうでしょう。」(TM2_121029_001/06.58)

d. Ше вѣдим ўтре д̀аку м̀оже <...>
 Še vidim ùtre d̀aku mòže <...>
 FUT see-PRS.1.PL tomorrow if can-PRS.3.SG

¹⁴² ブラネシュティ方言では、語頭の **в**-/v-が脱落し、定冠詞-te/-te を常に伴うため、もっぱら cète/sète という形で用いられる。

дъ	ги	дунсè	<u>пъ</u>	<u>cète</u>	tàm.
dă	gi	dunsè	<u>pă</u>	<u>sète</u>	tàm.
SMP	they-ACC.CL	bring-PRS.3.SG	AM	all-PL+DEF.PL	there

「そこへ全員連れていけるかどうか明日様子を見ましょう。」
(Rus_131005_002/29.47)

ブラネシュティ方言において、定代名詞は常に定冠詞を伴った形で用いられる。また、пъ/pă と共起する定代名詞の指示対象は、ふつう人間などの有生物であることが多いが、(3-30c)の例のように無生物である場合もある。また пъ/pă を伴った定代名詞は接語重複も頻繁に行われる。上の(3-30)の例はいずれも接語重複を伴っている。

以下(3-31)にみるように、不定代名詞や否定代名詞、疑問代名詞が пъ/pă と共起する例もある。

(3-31) a. 不定代名詞

Тй	чакъш	<u>пъ</u>	<u>н'ăкуй?</u>
Ti	čăkăš	<u>pă</u>	<u>n'ăkuj?</u>
you-NOM	wait_for-PRS.2.SG	AM	someone

「(あなたは) 誰かを待っているのか。」 (DD1_120504_003/57.51)

b. 否定代名詞

Кăдъ	н'ăмъш	<u>пъ</u>	<u>нйкуй,</u>	фўарт'е	т'ешку.
Kădă	n'ămăš	<u>pă</u>	<u>nikuj,</u>	fwart'e	t'ěšku.
when	not_have-PRS.2.SG	AM	nobody	very	hard

「誰もいないときは、とても大変だ。」 (TO_121108_001/1.25.03)

c. 疑問代名詞

<u>Пъ</u>	<u>кòгъ</u>	дъ	пуз'ăскъ?
<u>Pă</u>	<u>kògă</u>	dă	puz'ăskă?
AM	who-ACC	SMP	take_a_picture-PRS.1.SG

「(私は) 誰を撮ったらいいのか。」 (BV3_131003_001/1.28.11)

今まで見てきた人称代名詞、指示代名詞、定代名詞の場合と異なるのは、不定代名詞や否定代名詞、疑問代名詞が пъ/pă と共起する場合であっても接語重複が行われることはない。

このほかに、以下(3-32)にあるように、所有代名詞が直接補語となって пъ/pă

と共起する例もわずかだが見られる。

- (3-32) a. ... ши купи ги пъ мойте.
 ... ši kupi gi pă mōjte.
 and buy-AOR.3.SG they-ACC.CL AM my-PL+DEF.PL
 「それで (彼は) 私の (馬) を買った。」 (DM_130927_002/1.21.13)

- b. Гйт утгадеф дъ зъннъ пъ мойу.
 Git uttādef dă zănnă pă mōju.
 when go-IMPF.1.SG SMP take-PRS.1.SG AM my-M.SG+DEF.M.SG
 май играиу там деца̀тъ.
 māj igrāiu tām decā́tă.
 yet play-IMPF.3.PL there child-PL+DEF.PL
 「私の(息子)を迎えに行ったとき、子供達はそこでまだ遊んでいた。」
 (TMita2_150217_001/2.19.34)

пъ/pă と共起している所有代名詞 мойте/mojte 「私の」や мойу/moju 「私の」は、定冠詞を伴っている。また、文脈上明らかであるため共起する名詞（ここではそれぞれ「馬」と「息子」である）が省略されている。(3-32a)の例では、接語重複が見られることも指摘できる。

以上を踏まえると、пъ/pă と共起する代名詞のなかで、人称代名詞のみが特別な地位を占めていると考えることができる。なぜなら、人称代名詞だけが пъ/pă と義務的に共起するからである。それ以外の代名詞は пъ/pă と共起することはできるが、義務的ではない。また、義務的な接語重複がみられるという点でも、人称代名詞は他の代名詞と異なっている。指示代名詞や定代名詞は接語重複する場合もしない場合もあるが、不定代名詞や否定代名詞、疑問代名詞にいたっては、接語重複する例は一切見られない。

3.2.2.2.2. 代名詞以外

пъ/pă は代名詞以外の名詞を伴った時にも用いられる。ただし、一般にその使用は随意的である。

まず、固有名詞については、以下(3-33)や(3-34)のような例がみられる。このとき、(3-33)は人名を表す固有名詞で、(3-34)は人名以外を表す固有名詞である。

(3-33) 人名

a. Гу вѝдеф пъ Йòн.
Gu vïdef pǎ Iòn.
he-ACC.CL see-AOR.1.SG AM Ion
「(私は) イオンに会った。」 (DG2_121029_001/1.26.54)

b. Когàгу гу убѝю пъ Чаушѝска...
Kogàtu gu ubìwo pǎ Čaušèska...
when he-ACC.CL kill-AOR.3.PL AM Čaušeska...
「チャウシェスクが殺されたとき...」 (DD2_121102_001/1.56.39)

c. Пък тòй йъ иштеш пъ Дòбръ.
Pǎk tòj jǎ išteš pǎ Dòbrǎ.
but he-NOM she-ACC.CL want-IMP.3.SG AM Dobrǎ
「でも彼はドブラを欲していた。」 (BV1_120509_002/19.28)

d. Гу пузнàвъш пъ Вѝлев?
Gu ruznàvǎš pǎ Vǎlev?
he-ACC.CL know-PRS.2.SG AM Vǎlev
「ヴァレフを知っているか。」 (RUS_131005_002/46.52)

(3-34) その他の固有名詞

a. Тѝ дъ нѝ учѝш пъ Сòфийъ!
Tì dǎ nѝ učìš pǎ Sòfijǎ!
you-NOM SMP NEG study-PRS.2.SG AM Sofia
「あなたがソフィア（で話される言葉）を学ばないように！」
(BV3_131003_01/16.29)

b. Пъ „Дòбръ зъннѝ мъ“ йъ нъучѝ?
Pǎ „Dòbrǎ zǎnnì mǎ“ jǎ nǎučì?
AM Dobrǎ take-IMP.2.SG I-ACC.CL she-ACC.CL learn-AOR.2.SG
「『ドブラ・ザンニ・マ（歌の名前）』を覚えたか。」
(BV2_121031_001/55.13)

一方、普通名詞については、以下(3-35)や(3-36)の例がみられる。пъ/pǎ と共起する普通名詞が共通して持つ特徴は、後置定冠詞(3-35)か代名詞（指示代名詞、

所有代名詞、定代名詞) (3-36)を伴うことである。

(3-35) 定冠詞を伴うもの

a. Гу йуб'аскъ и пъ дѣтту.
 Gu jub'askă i pă dĕttu.
 he-ACC.CL love-PRS.3.SG also AM child-N.SG+DEF.N.SG
 「(彼は) その子を愛している。」 (TM1_120509_003/25.41)

b. Приказвѣй съз ид'йн чув'ек, чѣтѣй гу
 Prikazvāj sāz id'in čuv'ek, čitāj gu
 talk-IMP.2.SG with IDF.M.SG person-M.SG respect-IMP.2.SG he-ACC.CL
пъ чув'екѹ.
pă čuv'ekŭ.
 AM person-M.SG+DEF.M.SG
 「人と話すとき、その人を敬いなさい。」 (DD2_121102_001/3.10.32)

c. Утѣф съз нѣъ нъ чѣркѹъ, чи гу
 Uttif sāz nĕă nă čĕrkwă, čī gu
 go-AOR.1.SG with she-ACC to church and he-ACC.CL
 нъмѣриф пъ пѣпу тѣм.
 nămĕrif pă pĕpu tām.
 find-AOR.1.SG AM priest-M.SG+DEF.M.SG there
 「(私は) 彼女と教会へ行って、その司祭を見つけた。」
 (TO_121108_001/1.21.26)

d. Ги дѣрпѹъ нъ дрѹгийъ стрѣни пъ хѣрѣтъ.
 Gi dĕrpăw nă drŭgijă străni pă hĕrătă.
 they-ACC.CL pull-AOR.3.PL to other-PL+DEF.PL side-PL AM person-PL
 「その人たちは別の所に連れていかれた。」 (DD1_120504_003/1.02.13)

(3-36) 指示代名詞や所有代名詞を伴うもの

a. Дѣку вѣждѣте пъ тѣс чув'ек...
 Dăku viždăte pă tĕs čuv'ek...
 if see-PRS.2.PL AM this-M.SG person-M.SG
 「もしこの人を見たら...」 (DD2_121102_001/08.49)

b. Нй гу пузнàф пъ туй мунчè.
 Ni gu puznàf pă tuj munčè.
 NEG he-ACC.CL recognize-AOR.1.SG AM this-N.SG boy-N.SG
 「この子のことがわからなかった。」 (GG_131005_002/19.35)

c. Нй йь рьчи суўàкрътъ
 Ni jă răci suwàkrătă
 NEG she-ACC.CL like-PRS.3.SG mother_in_law-F.SG+DEF.F.SG
пъ мòйтъ дьштерè.
pă mòjtă dăšterè.
 AM my-F.SG+DEF.F.SG daughter-F.SG
 「義母は私の娘を気に入らなかった。」 (TO_121108_001/33.10)

d. Тъй учàйо пъ тейнте детèтъ.
 Tăj učawo pă tėjnte detetă.
 so teach-AOR.3.PL AM their-PL+DEF.PL child-PL
 「そのように彼らの子供たちに教えた。」 (DD1_120504_003/20.24)

以上の(3-35), (3-36)の例にあるように、普通名詞が пъ/pă と共起するとき、その名詞は何らかの限定詞を伴って定でなくてはならない。このとき、ミジヤ方言群（グレーベン方言シリストラ変種）では、所有代名詞は必ず定冠詞とともに用いられるが¹⁴³、ブラネシュティ方言もこの点で同様である(cf. 菅井 2012b)。したがって、(3-36c), (3-36d)も пъ/pă と共起する名詞句は明確に定となっている。

また、代名詞と定冠詞が一つの名詞句内で二重に用いられる例も多くみられる。これは、指示代名詞が被定語である名詞に後続する語順をとるときに、先行する名詞が定冠詞をとることによって生じる¹⁴⁴。よって、以下(3-37)のように пъ/pă と共起する名詞句では“二重の”定性標示がなされることになる。

(3-37) a. З'àф пъ чил'àку тòз.
 Z'àf pă čil'aku tòz.
 take-AOR.1.SG AM person-M.SG+DEF.M.SG this-M.SG
 「この人を娶った。」 (BA_131004_001/27.36)

¹⁴³ ブルガリア国内のグレーベン方言シリストラ変種については Кочев (1969: 61)を、ルーマニアのミジヤ方言群については Младенов (1993: 274)を見よ。

¹⁴⁴ このような語順については、菅井 (2012b)や Сугаи (2015b)も参照のこと。

b. Удд'è пузнàвѣш пъ чил'àку ѳòнзи
 Udd'è ruznàvəš pă čil'aku wònze
 from_where know-PRS.2.SG AM person-M.SG+DEF.M.SG that-M.SG
 уд Брѣнѣш?
 ud Brăneš?
 from Brănešti

「どこでブラネシュティのあの人を知ったか。」 (TO_121108_001/3.12)

c. И àс мàй ни устàўѣ
 I às māj ni ustāvā
 also I-NOM more NEG leave-PRS.1.SG
пъ дѣтту тѳй.
pă dëttu tūj.
 AM child-N.SG+DEF.N.SG this-N.SG

「私ももうこの子を一人にさせない。」 (TM2_121029_001/35.36)

以上から、пъ/pă は固有名詞とも普通名詞とも共起するが、普通名詞の場合はなんらかの限定詞を伴って、定であるときに限って共起するということができる。また、接語重複は随意的である。

3.2.2.2.3. 分析

前節までの記述を踏まえて、пъ/pă がどのような名詞句と共起しうるのかについて分析を行い、対格標示以外の機能があるか検討する。

пъ/pă と共起する名詞句に共通している特徴としてまずあげることができるが、定性である。пъ/pă と共起するほとんどすべての名詞句は定である。人称代名詞や固有名詞はその意味特徴から定であるし、普通名詞は定冠詞や指示代名詞などの限定詞を伴って定となっている。

例えば、次の例は一文の中で見られる定の名詞句と不定の名詞句の対比から、пъ/pă の用法の特徴を垣間見ることができる。

(3-38) Зѳкò зѳмѣш пъ тѣз дѣрт'ит'е, чи ни зѳмѣш
 Zăkò zămăš pă tēz dărt'it'e, či ni zămăš
 why take-PRS.2.SG AM this-PL old-PL+DEF.PL and NEG take-PRS.2.SG
ини млăд'и?
ini mlăd'i?
 IDE.PL young-PL

「どうしてこの年寄り (の馬) を買って、若い (馬) を買わないんだ。」
(DM_130927_002/1.21.23)

この例にみられる二つの直接補語のうち、最初の直接補語は、名詞化した複数形の形容詞 *дърт'и/därt'i* 「年老いた (馬)」が定冠詞 *-г'е/-t'e* と指示代名詞 *тез/tez* を伴った形で表されている。もう一方の直接補語は、やはり名詞化した複数形の形容詞 *млад'и/mlad'i* 「若い (馬)」が不定冠詞の役割を持つ *ини/ini*¹⁴⁵ を伴った形で表されている¹⁴⁶。このとき、前者は *пъ/pă* と共起しているが、後者はそうでない。

しかし、定冠詞を伴わない名詞句であっても *пъ/pă* と共起する例が見られる。これらの場合、その名詞句は所有の意味を持つ人称代名詞接語形与格によって限定されているので定である。親族をあらわす名詞については、標準ブルガリア語と同様に、定冠詞は使用されない (3.2.1.3. 「所有の用法」も参照)。

(3-39) a. Ши ас думъм нь мойту сервит'ор дъ вйкъ
 Ši às dùmăm nă mòjtu servit'òr dă vikă
 and I-NOM say-PRS.1.SG DM my+DEF waiter SMP call-PRS.3.SG
пъ дъштер'а му дъ йди тукъ.
pă dăšter'а му dă idi tükă.
 AM daughter-F.SG he-DAT.CL SMP come-PRS.3.SG here
 「それで私はウェイターに自分の娘がここに来るよう呼ぶように言っている。」 (RUS_131005_001/18.46)

b. Ас не чакъф пъ жинъ ми.
 Às ne čakăf pă žină mi.
 I-NOM NEG wait_for-IMPF.1.SG AM wife-F.SG I-DAT.CL
 「私は妻のことを待っていなかった。」 (GG_131006_19.45)

以上のように、*пъ/pă* と共起する名詞句は基本的に、元来から定である固有名詞か、定冠詞や指示代名詞などの限定詞を伴う普通名詞に限られる。

しかし、定冠詞や指示代名詞など定性を標示する要素を伴わない普通名詞が

¹⁴⁵ ブラネシュティ方言では、性・数にしたがって次のように変化する：
идйн(M.SG), *инъ(F.SG)*, *инò(N.SG)*, *инй(PL)*

¹⁴⁶ *един/edin* の複数形にあたる *едни/edni* が用いられるときは、*pluralia tantum* の名詞との共起を除き、不定代名詞や不定冠詞として用いられていることを示す(Ницолова 2008: 79)。

пъ/рă を伴っている例も少数ながら見られる。それらは、いずれも不定冠詞 един/edin を伴っている。

(3-40) Дъ ни тъ удари мъшйнтъ.
 Dă ni tă udari măšintă.
 SMP NEG you-ACC.CL hit-PRS.3.SG car
Пъ инъ жинъ йъ удари тукъ.
Ră ină žină jă udari tükă.
 AM IDF.F.SG woman-F.SG she-ACC.CL hit-AOR.3.SG here
 「車にひかれないように気をつけなさい。ある女性がここでひかれた。」
 (BV3_131003_001/2.43.03)

この例では、不定冠詞 един/edin を伴った名詞句は、特定¹⁴⁷を標示していると考えることができる(cf. Ницолова 1986: 52)。すなわち、指示対象である инъ жинъ/ină žină 「ある女性」は、話し手にとって具体性を持ったものであるが（ひかれた女性が誰であるかを話し手は知っているが）、聞き手にとってはそうではない。このような場合、един/edin を伴った名詞句は特定であると考えられる。пъ/рă は名詞句が不定冠詞で標示され不定であっても、それが特定である場合に限ってその名詞句と共起しうるものと見ることができる。

一方で、次の例(3-41)では不定冠詞 ино/ino が用いられているが、пъ/рă とは共起していない。

(3-41) Дъ ни зъниш инò ут питнайс, шиснайс гòдин.
 Dă ni zăniš inò ut pitnajs, šisnajs gòdin.
 SMP NEG take-PRS.2.SG IDF.N.SG from 15 16 year-PL¹⁴⁸
 T'à ни знай нйшту.
 T'à ni znaj ništu.
 she-NOM NEG know-PRS.3.SG nothing
 「15 歳、16 歳（の女の子）を（恋人として）選ぶことのないように。
 （そんな年齢の子は）何もわからないのだから。」
 (BV2_121031_001/2.05.42)

¹⁴⁷ 特定性については、2.2.3.4.2. 「定性と特定性」を参照せよ。

¹⁴⁸ 期待される複数形は*години/*godini であるが、複数形語尾の-и/-i が脱落している。数詞の後でこのような例が見られることから、複数属格形の残存形と見ることができる(cf. Младенов 1993: 260)。

これは話者 BV が、未婚である対話者に対して女性との出会いや結婚のアドバイスをしている場面で、15 歳や 16 歳のような若い女の子を選ばないようにと忠告しているときの発話である。この例文中で、不定冠詞 *ино/ino* を伴う名詞句の主要部は明示的にあらわされていないが、不定冠詞が中性形となっていることから、ここで省略されている名詞がコンテキストからも中性名詞の *момиче/moniče* 「女の子」であることがわかる。このとき、聞き手はもちろんのこと、話し手にとっても 15, 16 歳の女の子に関して具体的な指示対象があるわけではない (15, 16 歳の女の子であればだれでもよい)。したがって、この場合は特定とは解釈できないため、当該の名詞句が *пъ/pă* と共起していないと考えられる。

以上のことから、直接補語の名詞句が *пъ/pă* と共起する条件として、名詞句が定であることのほかに、不定の場合には特定であるということもあげることができる。

次に、*пъ/pă* と共起する名詞句が持つもう一つの特徴として有生性を挙げることができる。今までの例で見た名詞句は、人間をあらわすものがほとんどであった。しかし、以下の例(3-42)にあるように、実際には動物をあらわす名詞句が直接補語である場合にも *пъ/pă* は使われうる。

- (3-42) a. Дăўѳ и àс пъ дв'ète кòнчи.
 Dàwǎf i às pă dv'ète kònčĭ.
 give-IMPF.1.SG also I-NOM AM two-PL+DEF.PL horse-PL
 「私も二頭の馬を与えていた。」 (DM_130927_002/1.43.36)

- b. Àмъ àс ше гу пукрййъ т'ъй дъ ни вйди
 Āmǎ às še gu pukrĭjǎ mǎj dǎ ni vĭdĭ
 but I-NOM FUT he-ACC.CL hide-PRS.1.SG so SMP NEG see-PRS.3.SG
пъ мèчу.
pă mèču.
 AM bear-M.SG+DEF.M.SG
 「でも私は (犬が) 熊を見ないように (熊を) 覆い隠す。」
 (DD2_121102_001/4.01.15)

上の(3-42a)では馬、(3-42b)では熊が直接補語である。そのため、*пъ/pă* と共起する名詞句には、人間性ではなく、有生性という特徴が関与していると考えられる。また、どちらも定冠詞を伴って定の名詞句となっていることも指摘できる。

以上の議論をまとめると、пъ/рăの使用と関係するパラメーターは定性（及び特定性）と有生性であると言える。

ここであげたパラメーターがどのようにかかわっているかについて、直接補語が普通名詞であらわされるときと、代名詞であらわされるときとに分けて考えることとする。

まず、пъ/рăと共起する、代名詞以外の名詞が持つ特徴を表にまとめると次の【表 3-3】のようになる。

【表 3-3】 пъ/рăと共起する名詞（代名詞以外）が持つ特徴¹⁴⁹

	定	不定	
		特定	不特定
有生	+/-	+/-	-
無生	+/-	-	-

пъ/рăは、直接補語にあたる名詞句が定でかつ有生である場合に共起しうる。пъ/рăを伴う名詞句のほとんどがこれに該当する。ただし、名詞句が無生である場合には、固有名詞であるか、定冠詞などの限定詞を伴って明示的に定である場合に限り¹⁵⁰、пъ/рăと共起しうる。

一方で、直接補語に当たる名詞句が不定である場合には、特定と判断される有生の指示対象を持つときに限り、пъ/рăが用いられる例があるが(3-40)、特定でなければ、пъ/рăはその名詞句が有生であろうがなかろうが用いられない。

次に、пъ/рăと共起する代名詞については【表 3-4】のようにまとめられる。

¹⁴⁹ 【表 3-3】と【表 3-4】について、+ は пъ/рăと共起できることを、- は пъ/рăと共起できないこと、+/-は、пъ/рăの使用が随意的であることを表す。

¹⁵⁰ 無生である定の名詞句に対して пъ/рăが用いられた例としては例えば次を挙げることができる。

- (i) Àмь пъ нѣтѹрътъ тѣс кѡй йъ нѣпрàй?
- Àmă ră nătŭrătă tăs kŏj jă năpraj?
- but AM nature-F.SG+DEF.F.SG this-F.SG who it-F.SG.ACC.CL make-AOR.3.SG
- 「でもこの自然界は誰が創造したのか。」(DD2_121102_001/3.50.33)
- (ii) Дунѣсь пъ пишкѣру чàк тàm нъ вàс, не?
- Duněsă ră piškiru čàk tàm nă vàs, ne?
- bring-AOR.2.SG AM cloth-M.SG+DEF.M.SG all_the_way_to there at you no
- 「布はあなたのうちまで持って帰ったか。」(TM2_121029_001/03.34)

【表 3-4】 пь/рă と共起する代名詞が持つ特徴

	定			不定		
	人称代名詞	定代名詞	指示代名詞	不定代名詞	否定代名詞	疑問代名詞
有生	+	+/-		+/-		
無生		+/-		-		

人称代名詞は、語彙的に定・有生であるため¹⁵¹、定性と有生性の両方のパラメーターを満たす。そのため、人称代名詞は、пь/рă と義務的に共起する。

指示代名詞と定代名詞は、語彙的に定であるが¹⁵²、有生物も無生物も指示しうる。有生物を指す場合には、пь/рă と共起するが、無生物を指す場合には пь/рă と共起しない場合もある。

一方で、語彙的に不定である不定・否定・疑問代名詞については、これらの代名詞の指示対象が有生である場合に限って、пь/рă と共起することがある(3-31)。しかし、無生物を指す場合に пь/рă と共起することはない。

【表 3-4】にみるように、пь/рă の使用は、人称代名詞のように定・有生のハイエラルキーで高い位置にある代名詞の場合に義務的となり、ハイエラルキーで低い位置にある代名詞の場合には限定的となる。【表 3-4】では、左に行くにしたがって定・有生のハイエラルキーが高くなるような連続体が示されており、代名詞と一緒に用いられる際の пь/рă の用法もこれと一致しているということが言える。

以上の議論から、ブラネシュティ方言で用いられる前置詞 пь/рă は、人称代名詞を除いて、定で有生である直接補語を標示する随意的な対格標識であるということが言える。

随意的であるといえるのは、以下(3-43)にみられるように、定で有生の名詞句であっても пь/рă と共起しないような例は決して珍しくないためである。

- (3-43) a. Ний пїтаўми нашть майкъ и тейку.
 Nij pıtawmi našťä mäjkä i tėjku.
 we-NOM ask-IMPF.1.PL our-F.SG+DEF.F.SG mother-F.SG and father
 「私たちは、母や父に尋ねたものだった。」(TO1_121108_001/17.24)

¹⁵¹ 人称代名詞はいわゆる有生性階層において最も高い位置を占めるため、何を指しているかにかかわらず（たとえ無生物を指示していたとしても）、語彙的に有生であると考えられる。(cf. also Silverstein の名詞句の階層 (角田 1991: 41))

¹⁵² ブラネシュティ方言では、定代名詞は常に定冠詞を伴うため、定代名詞も語彙的に定であると考えられる。

b. Ше	нъмèриш	тѣс,	тѣс,	тѣс...
Še	nămèriš	tăs,	tăs,	tăs...
FUT	find-PRS.2.SG	this-F.SG	this-F.SG	this-F.SG

「(あなたは) こんな女の子やこんな女の子を見つけるだろう。」

(BV2_121031_001/2.05.38)

(3-43a)では定冠詞を伴った所有代名詞によって限定された名詞句が、(3-43b)では有生の指示対象を持った指示代名詞が直接補語となっているのにもかかわらず、пъ/рă は用いられていない。пъ/рă は、定で有生である名詞句と共起しやすいだけであって、必ず共起するわけではない。それゆえ、直接補語が人称代名詞非接語形対格で表される場合を除いて、пъ/рă の使用は一般に随意的であると言えるのである。また、定と有生の二つの特徴を有する名詞句とは共起しうるが、そのいずれも持たない名詞句とは一切共起しない。

Младенов (1993: 305)は、この前置詞がブルガリア語文法の観点からは「なんら意味がなく、余剰的であるとさえ言えるだろう」と述べているが、本節の分析から、この前置詞は、対格を明示的に標示しない名詞句に対する対格標識としての機能はもちろんのこと、特に定で有生である直接補語を標示するという随意的な文法手段となっているといえる。しかも、ブラネシュティ方言では、語彙的に定・有生である人称代名詞が直接補語である場合に限り、前置詞 пъ/рă の使用が文法化していると言える。

3.2.2.3. пъ/рă と接語重複

ルーマニア国内のブルアリア語諸方言の研究を行った Младенов (1993: 381-382)と Димчев (1974: 256-257)は、これらの諸方言にみられる前置詞 пъ/рă の使用は、ルーマニア語とブルガリア語のバイリンガリズムによりもたらされたものであると結論付けている。そして、3.2.2.1. 「基本的な特徴」でも既述のように、そもそも пъ/рă という前置詞自体も、ルーマニア語の前置詞 pe の借用語である。また、ルーマニア語の pe もそうであるように、ルーマニア国内のブルガリア語諸方言でも пъ/рă は、対格標識である。Младенов (1993: 305)は、対格標識としての пъ/рă の使用はブルガリア語の統語論の観点から言うと完全に余剰であると述べる一方で、「[пъ/рă を伴った]直接補語はほとんど常に<...>重複を受ける」といった指摘をしている。実際に、ブラネシュティ方言の場合でも、直接補語が人称代名詞非接語形対格であらわされるとき、接語重複がほとんど義務的となることはすでに3.2.2.2. 「пъ/рă の用法」の節で見た。以上のことから、пъ/рă を伴う場合とそうでない場合との間で、接語重複が行われるかどうかの違いが

生じる可能性が考えられる。

本節(3.2.2.3.)では、ブラネシュティ方言における、前置詞 *пъ/pă* と直接補語の接語重複のかかわりに焦点を当てた分析を行う。このとき、直接補語となる名詞句が *пъ/pă* を伴う場合と伴わない場合に分けて計量的分析を行い、*пъ/pă* の使用の有無が接語重複の振る舞いに何らかの影響を与えるのかについて検討する。

3.2.2.3.1. *пъ/pă* を伴う直接補語の接語重複

まず、*пъ/pă* を伴った直接補語の接語重複に着目する。

以下の【表 3-5】が示すように、*пъ/pă* を伴った人称代名詞は、本論文筆者のデータ中でほとんどの場合に接語重複するが（全 114 例中 108 例、約 95%）、重複が見られない例もわずかにある（全 114 例中 6 例、約 5%）¹⁵³。

【表 3-5】 *пъ/pă* を伴った人称代名詞の接語重複の有無

	接語重複あり	接語重複なし
例数	108 例	6 例
百分率	約 95%	約 5%

以下、接語重複を伴うのは(3-44)、接語重複を伴わないのは(3-45)である。

(3-44) 人称代名詞（接語重複あり）

a. Мъ zè и пъ mène нь Букуреш. (動詞後)
Mă zè i pă mène nă Bukurësh.
 I-ACC.CL take-AOR.3.SG also AM I-ACC to Bucharest
 「私もブカレストに連れて行かれた。」(TO2_150211_002/9.32)

b. Кòй тъ дунèsъ пъ tèbe тỳк? (動詞後)
 Кòj tă dunèsă pă tèbe tùk?
 who-NOM you-ACC.CL bring-AOR.3.SG AM you-ACC here
 「誰があなたをここに連れてきたか。」(BP_120503_003/14.50)

c. А, пъ нейъ йъ иштеш? (動詞前)
 А, pă nejă jà išteš?
 Ah AM it-F.SG.ACC it-F.SG.ACC.CL want-PRS.2.SG
 「ああ、それ（歌）を（歌って）欲しいのか。」(BV2_121031_001/53.49)

¹⁵³ 以後、小数点以下は四捨五入する。

d. Àm, pǎ tèbe kàt ni tǎ пузнàўт... (動詞前)
Àm pǎ tèbe kàt ni tǎ puznàjāt...
 but AM you-ACC since NEG you-ACC.CL know-PRS.3.PL
 「あなたは知られていないのだから...」 (TF2_150219_001/1.38.12)

(3-45) 人称代名詞 (接語重複なし)

a. И ўбе дь рьзбирьш и пǎ т'аф.
 I ùbe dǎ rǎzbirǎš i pǎ t'af.
 be-PRS.3.SG good SMP understand-PRS.2.SG also AM they-ACC
 「(あなたが) 彼ら (の言葉) も理解できるのは良いことだ。」
 (BV3_131003_001/39.57)

b. ... мунчèту йште пǎ нèйь.
 ... munčètu ište pǎ nèjǎ.
 boy-N.SG+DEF.N.SG want-PRS.3.SG AM she-ACC
 「その男の子は彼女を (結婚相手として) 望んでいる。」
 (TM1_120509_003/22.52)

接語重複が行われている(3-44)については、直接補語(N)が動詞後に置かれる(3-44a), (3-44b)と、動詞前に置かれる(3-44c), (3-44d)の両方が見られる¹⁵⁴。

人称代名詞以外の名詞句が пǎ/pǎ を伴う場合、接語重複は随意的である。接語重複が行われるとき、直接補語(N)が動詞前に置かれる(3-46a), (3-46b)と、動詞後に置かれる(3-46c), (3-46d)の両方がみられる。

(3-46) 人称代名詞以外

a. Пǎ тòйтǎ мàйкь, пǎ тòй тèйку (動詞前)
Pǎ tòjtǎ mǎjkǎ pǎ tòj tèjku
 AM your-F.SG+DEF.F.SG mother-F.SG AM your-M.SG father-M.SG
 дь ми гѝ дунсèш тьн пузà.
 dǎ mi gi dunsèš ǎn puzà.
 SMP I-DAT.CL they-ACC.CL bring-PRS.2.SG in photo
 「あなたの母と父の写真を持ってきなさい。」 (BV2_121031_001/46.21)

¹⁵⁴ N が占めうる文中の位置については、2.2.4.2. 「動詞前と動詞後」を参照。

b. Пък пъ Мърчу, пъ бѣйату гу ньпрайф
 Păk pă Mırču, pă bǎjātu gu năprăjf
 while AM Mırču AM boy-M.SG+DEF.M.SG he-ACC.CL make-AOR.1.SG
 нь двайсе чѣтер гòдин. (動詞前)
 nă dvăjse čèter gòdin.
 at 20 4 year-PL
 「一方で、ミルチュは、男の子のほうは 24 歳の時に生んだ。」
 (BA1_131004_001/53.22)

c. Пък тòй йъ йштеш пъ Дòбрь. (動詞後)
 Păk tøj jǎ išteš pǎ Dòbrǎ.
 but he-NOM she-ACC.CL want-IMPF.2.SG AM Dobrǎ
 「でも彼はドブラを欲していた。」 (BV1_120509_002/19.28)

d. И ýбе, чи ги ймъми (動詞後)
 I ùbe, či gī imămi
 be-PRS.3.SG good that they-ACC.CL have-PRS.1.PL
 и пъ пърите тѣс.
 i pă părite tès.
 also AM money-PL+DEF.PL this.PL
 「このお金も持っていることは良いことだ。」
 (TMita2_150217_001/32.40)

пъ/pă を伴った直接補語が接語重複する例は全部で 200 例ある。そのうち直接補語(N)が動詞前に置かれるのは 48 例(24%)で、動詞後に置かれるのが 152 例(76%)ある (以下【表 3-6】を参照)。動詞前と比較して、動詞後の例数のほうが多い。つまり、пъ/pă を伴う直接補語(N)は、動詞後の位置にあるときにより頻繁に接語重複する。

【表 3-6】 пъ/pă を伴った直接補語の接語重複 (動詞前 / 動詞後)

	動詞前	動詞後
例数	48 例	152 例
百分率	約 24%	約 76%

ブラネシュティ方言にみられるこの傾向 (動詞後の補語の接語重複が頻繁であるという傾向) は、ブルガリア語全体で一般的に見られる傾向とは異なる。

ブルガリア国内のブルガリア語諸方言にみられる補語の接語重複を分析した Krapova, Tisheva (2006: 417)と Тишева, Кръпова (2009: 212)によれば、動詞前の補語と動詞後の補語とでは接語重複が行われる度合いが異なり、動詞前の補語が接語重複している例がより広くみられるという。このような一般的な傾向は、ブラネシュティ方言では、少なくとも **пъ/рă** を伴う場合にはみられない。【表 3-6】にもあるように、動詞後の補語が接語重複している例のほうが広くみられるためである。したがって、**пъ/рă** を伴う場合にみられる直接補語の接語重複に関して、ブラネシュティ方言は、ブルガリア国内のブルガリア語諸方言に観察される一般的な傾向から逸脱した傾向を示していると言える。

次に、接語重複する名詞句の種類に着目すると、さらにもう一つブラネシュティ方言に特有な特徴を見出すことができる。

Krapova, Tisheva (2006: 417)と Тишева, Кръпова (2009: 213)によれば、ブルガリア国内のブルガリア語諸方言では、接語重複する動詞前の補語(N)になることができるのは次のような名詞句であるという。すなわち、定名詞句や **един/edin** を伴って特定の名詞句、様々なタイプの数量詞や **все/vse** 「すべての」などの定代名詞である。このように、様々な名詞句が動詞前の補語になりえる。

一方、動詞後で接語重複することができる名詞句の種類には制限がある (Krapova, Tisheva 2006: 417; Тишева, Кръпова 2009: 213)。人称代名詞非接語形(N)が動詞後にあるときに接語重複する例は極めて稀であり、**все/vse** などの定代名詞の例は、彼女たちが検討した資料では皆無であるという。

ブラネシュティ方言では、**пъ/рă** を伴った人称代名詞非接語形(N)が動詞後の位置にあるときに接語重複する例が非常に多くみられる。動詞前の 22 例(約 20%)に対して、動詞後で接語重複が実現している例は 86 例(約 80%)に及ぶ。つまり、動詞前よりも動詞後にあるときに接語重複が頻繁にみられる。

【表 3-7】 **пъ/рă** を伴った人称代名詞の接語重複 (動詞前 / 動詞後)

	動詞前	動詞後
例数	22 例	86 例
百分率	約 20%	約 80%

これに加え、**пъ/рă** を伴った定代名詞 **cere/sete** によってあらわれている直接補語は全部で 15 例確認できるが、そのうち接語重複が実現している例が 11 例も確認され、しかもそのすべてが動詞に対して後置されている。以下にいくつか例を示そう。

(3-47)a. Ги вѣкъши пъ сѣте млади укѣшти.
Gi vikăši pă sète mlădi ukăšti.
they-ACC.CL call-IMPF.3.SG AM all-PL+DEF.PL young-PL at_home
「若い人みなを家に呼んだものだった。」 (DM_130927_002/2.17.11)

b. Ни ги нѣучиф пъ сѣте
Ni gi năučif pă sète
NEG they-ACC.CL learn-AOR.1.SG AM all-PL+DEF.PL
「(私は) 全部 (の歌) を学んだわけではなかった。」
(BV2_121031_001/1.43.32)

以上より、接語重複される名詞句の種類に関しても、ブラネシュティ方言には、Krapova, Tisheva (2006)や Тишева, Кръпова (2009)により示されたブルガリア語全体にみられる傾向と異なる部分があると言える。人称代名詞非接語形や定代名詞 *все/vse* が動詞後の位置にある場合、ブルガリア国内のブルガリア語諸方言では接語重複することがほとんどないが、ブラネシュティ方言では *пъ/pă* を伴って頻繁に接語重複する。

3. 2. 2. 3. 2. *пъ/pă* を伴わない直接補語の接語重複

前置詞 *пъ/pă* を伴わない直接補語については、以下にあるように、直接補語(N)が動詞前に置かれる場合と動詞後に置かれる場合の両方とも接語重複する例が見られる。しかし、その例数には大きな差が見られる。

(3-48) a. Тѣс тр'абъ дѣ ги (動詞前)
Tês tr'abă dă gi
this-PL it_is_necessary-PRS.3.SG SMP they-ACC.CL
 углѣдѣтъ мѣйките.
 uglêdăt măjkite.
 look_after-PRS.3.PL mother-PL+DEF.PL
「この子たちは、母親が面倒を見なければならない。」
(DD1_120504_003/1.13.40)

b. И п'ѣс'инте тѣй ги знам. (動詞前)
I p'ês'intē tij gi znăm.
also song-PL+DEF.PL they-NOM they-ACC.CL know-PRS.1.SG
「それらの歌も (私は) 知っている。」 (BV2_121031_001/2.32.42)

c. Ги вѝде т̀ам # к̀онте нѝ н̀егу?
Gi ṽide t̀am # k̀onte ñă ǹegu?
they-ACC.CL see-AOR.2.SG there horse-PL+DEF.PL DM he-ACC
「あそこで彼の馬を見たか。」(GA1_131004_001/1.31.53) (動詞後)

d. Нѝ м̀ѝй р̀ьчѝй, чи нѝ г̀у ѝскѝ (動詞後)
Ñi m̃ăj r̃ăč̃i č̃i ñi g̀u isk̃ă
NEG more like-PRS.3.SG because NEG he-ACC.CL want-PRS.3.SG
Р̀усѝ.
R̀usi.
Rusi
「(彼は)気に入っていない、ルシがいやだから。」(BA1_131004_001/1.49.12)

пѝ/п̃ă を伴わない直接補語が接語重複している例は全部で 51 例見られた。動詞前の位置にある補語(N)は 45 例 (約 88%) で、動詞後の位置にある補語(N)は 6 例 (約 12%) である。

【表 3-8】 пѝ/п̃ă を伴わない直接補語の接語重複
(動詞前 / 動詞後)

	動詞前	動詞後
例数	45 例	6 例
百分率	約 88%	約 12%

また、動詞前にある直接補語(N)が接語重複するとき、その直接補語(N)は様々な名詞句によって表される。固有名詞や定の普通名詞などに限らず、指示代名詞や人称代名詞 (主格で表される HTLD の例に限る) もみられる。един/edin を伴って特定である名詞句が補語(N)となる例も 4 例見られた。

その一方で、動詞後にある直接補語については、6 例中 5 例が代名詞以外の名詞であり、1 例が人称代名詞である¹⁵⁵。

以上より、ブラネシュティ方言にみられる пѝ/п̃ă を伴わない直接補語の接語重複が示す特徴は、ブルガリア国内のブルガリア語諸方言が持つ特徴と合致する。なぜなら、動詞前の直接補語(N)が接語重複する例が 45 例あるのに対して、動詞

¹⁵⁵ ただし、この人称代名詞(cf. (3-66f)の тѝй/tij)は、ミジヤ方言群によく見られるように、指示代名詞として用いられていると考えられる。例えば、3.2.1. 「人称代名詞接語形」を見よ。

後の直接補語(N)が接語重複する例は 6 例あり、動詞前のほうが多いからである。

3.2.2.3.3. 分析のまとめ

本節では、ここまでの分析を整理する。

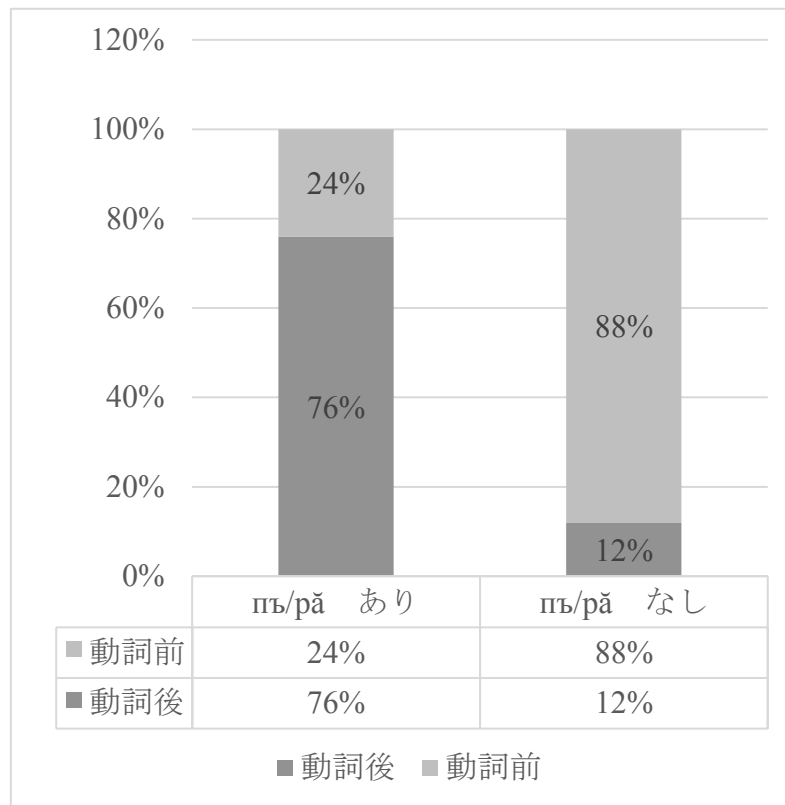
まず、Krapova, Tisheva (2006)や Тишева, Кръпова (2009)が提示した、ブルガリア国内のブルガリア語諸方言の接語重複にみられる一般的特徴を再確認する。彼女たちによれば、一般的に接語重複は動詞後にある補語(N)よりも、動詞前にある補語(N)の場合に行われることが多い。また、重複される要素については、動詞前で接語重複する補語(N)は、様々な名詞句によってあらわされうるのに対して、動詞後で接語重複する補語(N)は人称代名詞非接語形であらわされる例はごくわずかで、定代名詞 *vse/vse* の例はみられない。

以上のようなブルガリア国内のブルガリア語諸方言が持つ一般的特徴は、ブラネシュティ方言の *пъ/pǎ* を伴う直接補語(N)の接語重複には見られない。その一方で、*пъ/pǎ* を伴わない直接補語(N)の接語重複にはみられる。

пъ/pǎ を伴う直接補語(N)の接語重複の場合、動詞前の位置を占める例が 48 例 (約 24%) あるのに対して、動詞後の位置を占める例は 152 例 (約 76%) である。その一方で、*пъ/pǎ* を伴わない直接補語(N)の接語重複の場合、動詞前の位置を占める例が 45 例 (約 88%) あるのに対して、動詞後の位置を占める例は 6 例 (約 12%) である。これをまとめると、【表 3-9】、【図 3-2】のようになる。

【表 3-9】 *пъ/pǎ* の有無による接語重複の例数

	<i>пъ/pǎ</i> を伴う	<i>пъ/pǎ</i> を伴わない
動詞前	48 例 (約 24%)	45 例 (約 88%)
動詞後	152 例 (約 76%)	6 例 (約 12%)



【図 3-2】 пъ/рă の有無による接語重複の頻度

このように、ブラネシュティ方言では、пъ/рă と共起する直接補語が接語重複する場合にだけ、ブルガリア国内のブルガリア語諸方言が持つ一般的な特徴を見出すことができない。つまり、前置詞 пъ/рă が用いられる場合に限り、接語重複のふるまいに違いが生じていると言えよう(cf. 菅井 2014c)。

以上に述べたことをまとめると、ブラネシュティ方言にみられる пъ/рă を伴わない直接補語の接語重複が示す特徴は、ブルガリア国内のブルガリア語諸方言における特徴と合致する。その一方で、пъ/рă を伴う直接補語の接語重複が示す特徴は、Krapova, Tisheva (2006)や Тишева, Кръпова (2009)が示すブルガリア国内のブルガリア語諸方言が示す一般的な特徴から逸脱していると言える。

3.2.3. 文法化重複¹⁵⁶

すでに 2.2.3.3. 「接語重複の義務性」でみたように、標準ブルガリア語では、すべての補語が接語重複するわけではない一方で、一定の場合においては接語重複が文法的に義務的に要求されることもある。

接語重複が義務的に行われるものと、そうでないものとは、ブラネシュティ方言においても混在している。

本節では、文法化重複がブラネシュティ方言においてどのような特徴を持ち、またどのように分布しているかについて述べる。

標準ブルガリア語で文法化重複が見られるのは、主として対格あるいは与格で表される経験者の項を要求する、身体・心理的な感覚や状態をあらわす述語やいくつかのモーダルな述語 (трябва ми/tr'abva mi「~しなければならない」など) が関与する場合(Маслов 1982: 291-292; Тишева, Кръпова 2009: 213-214)である (2.2.3.3. 「接語重複の義務性」も見よ。)。このような述語では、ふつう人称代名詞接語形(Ncl)が必須構成要素となるため、人称代名詞非接語形やその他いかなる名詞句(N)を項として持つときであっても、人称代名詞接語形(Ncl)が義務的に共起することになる。したがって、標準ブルガリア語では、これらの述語を伴う文において人称代名詞接語形(Ncl)を欠くものは、(3-49b)にあるように一般的に非文とみなされる¹⁵⁷。

(3-49) 標準ブルガリア語

a. На мене ми харесва. (非接語形+接語形)

Na mene mi haresva.

DM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG

b. *На мене харесва. (非接語形のみ)

*Na mene haresva.

DM I-ACC like-PRS.3.SG

¹⁵⁶ この用語については、2.2.3.3. 「接語重複の義務性」を参照せよ。

¹⁵⁷ 一方で、(3-49a)のように接語重複がある例は、人称代名詞接語形だけを持つ(3-49c)とはどのように異なるのであろうか。(3-49a)と(3-49c)の命題的な意味は同一である。しかし、両者の違いはそれぞれが生み出す語用論的な効果に見出すことができる。(3-49a)では、接語重複は補語をトピックとして標示する機能を持つだけでなく、フォーカスとして標示する機能も持つ。このように、文法化重複は、もっぱらトピックの標示機能を持つ語用論的重複とこの点で大きく異なる。

c. Харесва ми. (接語形のみ) [標準語]
 Haresva mi.
 like-PRS.3.SG I-DAT.CL
 「私は気に入っている。」

ブルガリア語諸方言においても文法化重複は広く観察されるが、ブルガリア語が分布する領域¹⁵⁸の周辺域では、身体・心理的感覚や状態を表す述語を伴う場合であっても接語重複が制限される方言があるという (Krapova, Tisheva 2006; Тишева, Кръпова 2009)。

しかし、ブラネシュティ方言には、身体・心理的な感覚や状態を表す述語を伴った例は多く確認され、そのどれもが接語重複を伴う。接語重複が欠如する例は、少なくとも筆者のブラネシュティ方言のデータ中では見られない。つまり、ブラネシュティ方言にも、身体・心理的な感覚や状態を表す述語を伴った文法化重複が存在する。このとき、補語が対格で表されるか、与格で表されるか、また動詞前におかれるか、動詞後におかれるかということに、接語重複の有無は関係しない。頻度に差はあるが、どの場合でも接語重複が見られる。

(3-50) a. Пъ мѐне мъ булѝ. (動詞前; 対格)
Pă mène mă buli.
 AM I-ACC I-ACC.CL hurt-PRS.3.SG
 「私は痛い。」 (RUS_150211_001/9.38)

b. Нъ мѐне ми харѐсѹъ чорбѣ съз бѡп. (動詞前; 与格)
Nă mène mi harèswă čorbă săz bòp.
 DM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG soup with beans
 「私は豆入りのチョルバ(スープ)が好きだ。」 (RUS_150211_001/5.08)

c. Нѝ ни тр'абѣ нѝшту нъ нàс. (動詞後; 与格)
 Ni ni tr'abă ništu nă nàs.
 NEG we-DAT.CL it_is_necessary nothing DM we-ACC
 「私たちには何も必要ない。」 (DD1_120504_003//1.26.04)

補語が動詞後よりも動詞前にある方が、また、対格よりも与格の方がより頻繁に接語重複すると言える。以下の【表 3-10】を見よ。動詞前の補語が与格の経験者

¹⁵⁸ 現在のブルガリア共和国の国境線に関係なく、ブルガリア語話者が存在する領域を指す。

である場合がもっとも頻繁である。動詞前で接語重複している与格補語全 88 例中 77 例がそれに該当し、全体の約 83%を占める。他方、動詞後におかれた与格の経験者は 12 例であり、接語重複している動詞後の与格補語全体（全 79 例）の約 15%を占めるに過ぎない。接語重複している対格の経験者の例は全体で 2 例であり、それも動詞前におかれた場合に限る¹⁵⁹。

これらの数値の比較から、頻度数における動詞前及び与格の明らかな優位性を読み取ることができる。特に語順の問題について、Krapova, Tisheva (2006: 418) は、ブルガリア国内のブルガリア語諸方言全体において、「語用論的重複と同様に、文法化重複においても動詞後よりも動詞前のほうがはるかに頻繁である」と述べており、文法化重複が動詞前で行われやすいという、動詞前の頻度の点における優位性を指摘している (cf. also Тишева, Кръпова 2009: 214; Arnaudova, Krapova 2007: 7)。

【表 3-10】 文法化重複（動詞前 vs.動詞後；対格 vs.与格）の例数

	対格		与格	
動詞前	2 例 (93 例中)	約 2%	77 例 (88 例中)	約 83%
動詞後	0 例 (158 例中)	—	12 例 (79 例中)	約 15%
合計 (対/与格)	2 例 (91 例中)	約 2%	89 例 (91 例中)	約 98%

【表 3-10】では、それぞれ動詞前の対格／与格、動詞後の対格／与格でどれだけの例数が見られるかをまとめたものである。たとえば、動詞前の対格は全部で 93 例見られ、そのうち文法化重複の例は 2 例であった。しかし、動詞後の対格は 158 例ある中で文法化重複の例は 1 例も見られなかった。動詞前と動詞後ともに対格の例数が少ないのは、接語重複している場合 (N と Ncl の両方が用いられている場合) に話を限っているためである。人称代名詞接語形対格(Ncl)のみが用いられている例は数多く見出せる。一方、与格のほうは、動詞前で 88 例あるうち 77 例が文法化重複にあたり、おおよそ 8 割を占める。それに対して、動詞後の与格は 79 例中 12 例のみが文法化重複であり、動詞前のほうが明らかに多いということがわかる。

以上のことから、ブラネシュティ方言には、身体・心理的な感覚や状態を表す述語などが関与する場合に文法化重複が観察され、その特徴は標準ブルガリア語と一致していることがわかる。

¹⁵⁹ ただし、対格の経験者の項が動詞後に置かれる例はそもそも見られなかった。だからといって、この場合に接語重複しないというわけではない。

また、前節(3.2.2. 「前置詞 *пъ/pǎ*」) でみた前置詞 *пъ/pǎ* を伴う直接補語の接語重複は、接語重複がほとんど義務的となっているという点で、身体・心理的感覚や状態を表す述語が関与した場合にみられる文法化重複と似ているといえる。しかし、統語面で見せる特徴は、両者を比較すると、明らかに異なっていると言える。なぜなら、*пъ/pǎ* を伴う直接補語の接語重複は、直接補語が動詞後にある場合に頻繁に起こるためである (3.2.2.3. 「*пъ/pǎ* と接語重複」を参照)。それでもなお、*пъ/pǎ* を伴う直接補語の接語重複は、ほとんど義務化するという状態まで推し進められている点において、ここで見た文法化重複に近いものであることを示唆する¹⁶⁰。

¹⁶⁰ 統語面でのあらわれかたの違い（動詞前が頻繁か、動詞後が頻繁か）は、*пъ/pǎ* を伴う直接補語の接語重複が、純ブルガリア語的なものとは別の要因（ルーマニア語による影響）によって生じていることを想定させるが、この点については次の第4章において詳細に論じることとする。

3.2.4. 動詞前

3.2.4.1. 動詞前の補語の接語重複

本節(3.2.4.1.)では、動詞前におかれた補語の接語重複の構造上の特徴を記述し、標準ブルガリア語との比較による分析を行う。

まず、ブラネシュティ方言では、動詞前に置かれた直接補語(3-51a), (3-51b)と間接補語(3-51c), (3-51d)のどちらも接語重複される。

(3-51) a. Пъ мене мъ пузнàваџо мл'òгу хòрџ.
Pă mène mă puznàvawo ml'ògu hòră.
AM I-ACC I-ACC.CL know-IMPF.3.PL many people
「私のことは、たくさんの人が知っていた。」(DD2_121102_001/23.41)

b. Къштътъ тъс тòй йџ ньпràи.
Kăštătă tăs tøj jă năprài.
house-F.SG+DEF.F.SG this-F.SG he-NOM it-F.SG.ACC.CL make-AOR.3.SG
「この家は、彼が建てた。」(TM1_120509_003/1.04.03)

c. Нъ мене ми дџмъ „дèтту“.
Nă mène mî dùmă „dèttu“
DM I-ACC I-DAT.CL say-AOR.3.SG child-N.SG+DEF.N.SG
「私は『子供』と言われた。」(BV2_121031_001/2.52.45)

d. И нъ мунчèту, àс му кàзџьм сè
I nă munčètu, às mu kàzwăm sè
also DM boy-M.SG+DEF.M.SG I-NOM he-DAT.CL tell-PRS.1.SG always
бългърцки¹⁶¹.
bălgărcki.
Bulgarian
「その子にも、私はいつもブルガリア語で話す。」
(TF1_150217_003/13.05)

このとき、接語重複している補語(N)は、固有名詞、普通名詞、様々な代名詞、名詞化した形容詞など多様な名詞によって表されうる。このように、いろいろな種類の名詞句が接語重複できるのは、動詞前の補語に特徴的な現象である(cf.

¹⁶¹ ミジャ方言群では、関係形容詞の語尾は、-ски/-ski の代わりに-цки/-cki の語尾が用いられる(Младенов 1993: 264)。

Тишева, Кръпова 2009)。

また、これら接語重複している名詞句に共通する特徴として、定性を挙げることができる。固有名詞や人称代名詞、指示代名詞などはもとより定であるが、これ以外の普通名詞などであっても、後置定冠詞(あるいは指示代名詞)によって、当該名詞句が定であることが形式上ははっきりと示される。このような特徴は、よく知られているように、文頭の位置が、旧情報やトピックの要素によって占められやすいということと密接に関係している。

一方で、不定冠詞 *един/edin* を伴った名詞句が動詞前の位置で接語重複している例も、比較的まれではあるが見られる。本研究のデータ中では、以下(3-52)にあげた4例のみ確認できる。ただし、このとき *един/edin* を伴った名詞句は、特定の指示対象を持っていると考えられる(cf. Ницолова 1986; 2008)。*един/edin* を伴い不定ではあるが、特に特定と判断されうる名詞句が接語重複している例を以下に示す。

- (3-52) a. Дѣ нѣ тѣ удари мѣшѣнтѣ.
 Dă ni tă udari mășintă.
 SMP NEG you-ACC.CL hit-PRS.3.SG car-F.SG+DEF.F.SG
Пѣ инѣ жинѣ ѣ удари тѣкѣ.
Pă ină žină ĵă udari tũkă.
 AM IDF.F.SG woman-F.SG she-ACC.CL hit-AOR.3.SG here
 「あなたが車にはねられないように。ある女性はここではねられた。」
 (BV3_131003_001/2.43.03)

- b. Идин рѣс, тр'абѣѣо дѣ гу
Idin rũs, tr'abăwo dă gu
 IDF.M.SG Russian it_is_necessary-IMPF.3.SG SMP he-ACC.CL
 жудѣкѣ тѣкѣ.
 žudikă tũkă
 judge-PRS.3.PL here
 「あるロシア人は、ここで裁かれなければならなかった。」
 (TM2_121029_001/1.10.19)

- c. Ино мунчѣ, <...> гѣспуд'ѣ дѣ
Ino munčë, <...> gũspud'ă dă
 IDF.N.SG boy-N.SG Lord-M.SG+DEF.M.SG SMP

гү прустї.
 гу prusti.
 he-ACC.CL forgive-PRS.3.SG

「ある男の子を、主よ許したまえ。」 (DD1_120504_003/1.25.21)

d. Ино̀ мумиченцѐ малку̀ тѣй,
Inò mumičencè mǎlkù tǎj,
 IDf.N.SG little_girl-N.SG small-N.SG so

пұснаџо гү съз инò съмун хл'ап.
 pùsnwo gu sǎz inò sǎmùn hl'ap.
 let_go-AOR.3.PL it-N.SG.ACC.CL with a loaf bread

「ある小さな女の子は一斤のパンをもって行かされた。」

(DD1_120504_003/2.01.39)

(3-52)で接語重複している補語はいずれも *един/edin* の諸形を伴っている。(3-52a)における *инѣ жинѣ/inǎ žinǎ* 「ある女性」が指す指示対象は、この発話の話者にとっては明確だが、聞き手にとってはわからない。このように、不定ではあっても、特定である名詞句の場合、ブラネシュティ方言では接語重複しうる。ただし、特定である名詞句が接語重複する例は、本研究のブラネシュティ方言のコーパスデータ中では、動詞前の位置に置かれている場合に限られる。標準ブルガリア語でも *един/edin* を伴った名詞句は、動詞前の位置にある場合に限って見られ、動詞後にある場合には非文となることが *Krapova, Cinque (2005)* によって指摘されている。この点でブラネシュティ方言は、標準ブルガリア語の特徴と合致している。

このほかに、動詞前にある間接補語が接語重複している例については、その大半 (88 例中 77 例、およそ 88%) が文法化重複に該当するということも指摘できる (3.2.3. 「文法化重複」も参照のこと)。また文法化重複している間接補語のすべてが、人称代名詞非接語形であらわされており、さらにそのうちの大半 (全 77 例中 66 例) が 1 人称単数形であることも注目に値する。

また、接語重複する動詞前の補語のなかには、前置詞 *пъ/pǎ* と共起しているものもある。しかし一般的に言って、動詞前の直接補語に対して *пъ/pǎ* を使用することは随意的である。なぜなら、3.2.2.2. 「*пъ/pǎ* の用法」の節でもすでに述べたように、*пъ/pǎ* は定・有生の名詞句に対して用いられうるが、その一方で、動詞前の直接補語がこの条件を満たしているにもかかわらず *пъ/pǎ* を伴わない例も少なくないためである。これは次節で述べる HTLD との関係も考えられる。他方、ほとんど常に *пъ/pǎ* と共起する人称代名詞非接語形はこの例外であり、文中

で直接補語が占める位置に関係なく пь/pǎ との共起が実現する(cf. 3.2.2.2.1.)。

пь/pǎ というブラネシュティ方言に独特な前置詞の用法が、動詞前におかれた直接補語に対しても用いられうることを除いて、動詞前の補語の接語重複の特徴は標準ブルガリア語と全体的に共通するといえる(cf. Сугаи 2014; 2015a)。

3.2.4.2. HTLD

本節(3.2.4.2.)では、ブラネシュティ方言に見られる HTLD について分析する (HTLD については、2.2.4.2.1.2. 「HTLD と CLLD」も参照のこと)。ブラネシュティ方言にみられる HTLD の例を以下(3-53)に示す。

(3-53) a. На̀с[sic!]¹⁶² # нѝ мь бѣши стрѣм¹⁶³.
На̀с[sic!] # нѝ мя бѣши стрѣм.
 I-NOM NEG I-ACC.CL be-IMPF.3.SG shame
 「私は恥ずかしくなかった。」(BV3_131003_001/1.45.55)

b. Ас # ми харѣсьѹ зь тѡйту мумѝчи.
Ас # ми харѣсѡw зѧ тѡjtu мумѝчи.
 I-NOM I-DAT.CL like-PRS.3.SG about your-N.SG+DEF.N.SG girl-N.SG
 「私はあなたの娘が気に入った。」(TMita1_150212_004/13.46)

c. Тѡй # му съ стѡри, чи стѣм[sic!]¹⁶⁴
Тѡй # му сѧ стѡри, љи стѣм[sic!]
 he-NOM he-DAT.CL it_seem-PRS.3.SG that be-PRS.1.SG
 н'ѧкуй крѣд'ѣц'.
 н'ѧкуј крѣд'ѣс'.
 some thief

「彼には、(私が)なんらかの泥棒と思えた。」(DD1_120504_003/57.41)

d. Т'ѧ # кѧк дѣ ви кѧжѣ # ѝ
Т'ѧ # кѧк дѧ vi кѧжѧ # ѝ
 she-NOM how SMP you-DAT.CL say-PRS.1.SG she-DAT.CL

¹⁶² 期待される形は、主格形の Ac/As である。

¹⁶³ = срам/sram. ブラネシュティ方言では、*sr の子音結合には挿入音 t が介在する。ほかに見られる例としては、стр'адѣ/str'adѧ ([標] сряда/sr'ada 「水曜日」), стрешту/streštu ([標] срещу/sreštu 「～に対して」)など。

¹⁶⁴ 期待される 1 人称単数形は、сѣм/sѧm である。

харѣсѹъш	мл'òгу	убичаите	българе...
harèswăš	ml'ògu	ubičàite	bălgars...
like-IMPF.3.SG	so_much	custom-PL+DEF.PL	Bulgarian-PL

「彼女は、何と言ったらいいか、ブルガリアの習慣をととても気に入っていた。」 (DD2_121102_001/4.22.38)

(3-53)の例には HTLD に特有な 2 つの現象をみてとることができる。

1 つ目は、格の形式である。文頭にある補語(N)はいずれも主格で表されているが、これと同一指示の人称代名詞接語形(Ncl)は対格や与格で表されているので、同一指示の名詞句間で格が異なる。CLLD の場合には両者が同じ格で現れるということを考慮すると、これは HTLD に独特な特徴であるといえる。

2 つ目は、イントネーション上の休止の存在である。いずれの例にも文頭にある主格で表された補語(N)の直後でイントネーション上の休止が見られる。

また、HTLD は、標準語において文法化したと考えられる身体・心理的感覚や状態を表す述語を伴った場合に多く見られる傾向がある。(3-53)で挙げた例はいずれもそれに該当する。

次に、同一指示の名詞句が文中の様々な位置において、重複を 2 回繰り返しているような次の例(3-54)に注目したい。

(3-54) Цѣркѣ # тѣ ѣъ пузнáвъш пѣ Цѣркѣ?
 Cirkă # ti jă ruznávăš ră Cirkă?
 Tsirka you-NOM she-ACC.CL know-PRS.2.SG AM Tsirka
 「ツイルカは、お前はツイルカは知っているか。」
 (GA2_150212_002/1.37.36)

(3-54)の例では、文頭におかれた名詞句 Цѣркѣ/Cirkă 「ツイルカ (人名)」 (N)は、そのあとの文中で直接補語の役割を果たす人称代名詞接語形 ѣъ/jă(Ncl)及び пѣ/ră を伴った名詞句 пѣ Цѣркѣ/ră Cirkă(N)とそれぞれ同一の指示対象を持つ。また文頭の名詞句と後続の文との間にはイントネーション上の休止が見られる。

このとき、文頭の名詞句は有生で定の名詞句であるが、対格標識の пѣ/ră を伴っていない。当該の対格標識を欠くことで、主格と同形になっているとみることができ、イントネーション上の休止とあわせて、一見すると、(3-54)が HTLD のように思われる。しかしその一方で、пѣ/ră の随意的な用法ゆえに、(3-54)の例が HTLD であると断定することはできない。ただし、1 文中で接語重複が 2 回繰り返される(3-54)のような例は、пѣ/ră の用法とあわせて、HTLD の構造を見るうえ

で示唆的であると言える。

イントネーション上の休止については、標準ブルガリア語と同様に、ブラネシュティ方言でも義務的ではないと考えられる。

- (3-55) a. Àc ми харèсѹъ.
 Às mi harèswă.
 I-NOM I-DAT.CL like-PRS.3.SG
 Màj jàm мѡмѡлигѡ, гѡт нѡпрàйм.
 Màj jàm mămăligă, git năpràjm.
 yet eat-PRS.1.SG mamaliga when make-PRS.1.SG
 「私は好き。ママリーガ（トウモロコシ粥）を作ったら、今でも食べます。」 (TF2_150219_001/40.36)

- b. Àc ми харèсѹъ. Àc приказѹъм
 Às mi harèswă. Às prikàzwăм
 I-NOM I-DAT.CL like-PRS.3.SG I-NOM talk-PRS.1.SG
 със сѡчките.
 săs sičkite.
 with everyone
 「私は（ブルガリア語で話すのが）好き。みんなとお話する。」
 (BV2_121031_001/37.17)

(3-55)の例ではいずれも文頭の人称代名詞 Ac/As (N)と、そのあとの文との間にイントネーション上の休止が欠如している。休止が欠如しているにもかかわらず、文頭の人称代名詞がはっきりと主格標示されていることから、当該の例はHTLDに特徴的な構造を持つものとみることができる。ただし、このように休止が明確に欠如している例は(3-55)の2例以外にない。またこの2例とも文法化重複にあたる。したがって、ブラネシュティ方言の場合、少なくとも本研究のために収集した全データ中では、標準ブルガリア語と異なり(cf. Тишева 2014)、休止が欠如するHTLDの例は制限的であるといえることができる。

以上のことをまとめると、HTLDは、ブラネシュティ方言でもみられる。(cf. Сугаи 2014)、標準ブルガリア語のように休止が欠如する例もあるが、ブラネシュティ方言では通常、イントネーション上の休止を伴うといえる(cf. Сугаи 2016b)。

3.2.4.3. Na-drop 現象

3.2.4.3.1. 一般的特徴

Na-drop 現象とは、接語重複の際に、与格標識である *на/na* が随意的に脱落する現象を指す(Vakarelyiska 1994: 121)。

(3-56) 標準ブルガリア語

<u>Мене</u>	<u>ми</u>	харесва	този	филм.
<u>Mene</u>	<u>mi</u>	haresva	tozi	film.
I-ACC	I-DAT.CL	like-PRS.3.SG	this	film

「私はこの映画を気に入っている。」(Vakareliyska 1994: 121)

(3-56)の例では、文頭の *мене/mene* は与格標識 *на/na* を伴わない。このような現象は標準ブルガリア語の話し言葉に特徴的であるが、ブルガリア国内のブルガリア語諸方言でも広く観察されている(cf. Vakareliyska 1994; Тишева 2014)。

Na-drop は、接語重複する間接補語が与格標識である *на/na* を欠くことによって生じる現象であるため、動詞前の補語(N)と同一指示の人称代名詞接語形(Ncl)は、性・数で同形だが、格ではそうではない。*на/na* が脱落した間接補語は、(3-56)の *мене/mene* のように、対格と形が同じになってしまう。なぜなら、標準ブルガリア語は一般的に¹⁶⁵、非接語形与格は、対格に与格標識の *на/na* を付した分析的な形で表されるためである。

一方で、明示的な与格標識である *на/na* を持たない補語を間接補語として標示する役割をもっていると考えられるのが、統合的な与格形を持つ人称代名詞接語形である。接語形は、Na-drop した名詞句が、文中で間接補語としての統語的な役割を担っていることを示しているともみることできる。それゆえ、Na-drop の際に行われる接語重複は、格標示の機能を持っていると考える研究もある(cf. Leafgren 1997)。

Na-drop 現象を最初に体系的かつ詳細に研究したのは、アンケート調査を通して当該現象の一般的な特徴を明らかにしようと試みた Vakareliyska (1994)であるが、彼女もまた、Na-drop と接語重複の関係性にも言及している。

¹⁶⁵ ブルガリア語諸方言の中には、人称代名詞非接語形はもとより、普通名詞においても統合的な与格形を持つものもある。たとえば、ロドピ方言や南西方言などに見られる：*син-у/sin-u*「息子に」、*Минчо-ти/Minčo-ti*「ミンチョに」；*майц-и/majc-i*「母に」、*сестр-и/sestr-i*「姉妹に」など(Стойков 1993: 229)。また、標準語であっても、現代はすでに廃れた形になっているが、少なくとも人稱代名詞非接語形には統合的な与格形がある(Tiševa, Džonova 2002: 236)。

3.2.4.3.2. 文中での位置

Na-drop が起こるのは動詞前の間接補語に限られるということは、これまでの研究において明らかにされている(cf. Vakareliyska 1994; Krapova and Cinque 2005; Тишева 2014)。

Тишева (2007: 293)は、Na-drop 現象が動詞後では非文法的であることを以下(3-57)の例をもとに示している。

(3-57) 標準ブルガリア語 (Tisheva 2007: 293)

a. Просто не му върви във днешния
 Prosto ne mu vărvi vāv dnešnja
 only NEG he-DAT.CL go-PRS.3.SG in today's-M.SG+DEF.M.SG.OBL
 мач на Роналдо.
 mač na Ronaldo.
 match DM Ronaldo

「ロナウドは今日の試合で単についていないだけだ。」

b. *Просто не му върви във днешния
 *Prosto ne mu vărvi vāv dnešnja
 only NEG he-DAT.CL go-PRS.3.SG in today's-M.SG+DEF.M.SG.OBL
 мач Роналдо.
 mač Ronaldo.
 match Ronaldo

ブラネシュティ方言では、間接補語が与格標識 нъ/nă を伴わない例は動詞前の場合に頻繁に見られる。動詞前にある間接補語 88 例中 62 例にあたる約 70%が нъ/nă を欠いている。

(3-58) a. Мене ми харесуъ и мумичиту.
Mene mi harèsuă i mumičitu.
 I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG also girl-N.SG+DEF.N.SG
 「私はその女の子のことも好きだ。」 (Rus_131004_001/5.25)

b. Негу му харесуъ дъ рабути.
Negu mu harèsuă dă rābuti.
 he-ACC he-DAT.CL like-PRS.3.SG SMP work-PRS.3.SG
 「彼は働くのが好きだ。」 (DD1_120504_003/1.03.25)

c. Mène ми и дрàгу зь нèгу.
Mène mi i dràgu ză nègu.
 I-ACC I-DAT.CL be-PRS.3.SG pleased about he-ACC
 「私は彼のことをうれしく思っています。」
 (BV3_131003_001/2.18.20)

d. Mène ми съ стрùвъ, чи тì
Mène mi să strùvă, ĉi ti
 I-ACC I-DAT.CL it_seems-PRS.3.SG that you-NOM
 ни йède сигàнъ.
 ni jède sigànă.
 NEG eat-AOR.2.SG now
 「あなたは今食べなかったように思える。」 (BV2_121031_001/32.47)

(3-58)の例で、文頭にある補語はいずれも нъ/nă を欠いているが、接語重複している接語形はすべて与格形であることからわかるように、文頭の補語は Na-drop した間接補語である。(3-58)の例は、ブラネシュティ方言に Na-drop があることを示している。

ただし、ブラネシュティ方言では、このような与格標識の脱落は動詞前に限らず、以下(3-59)にあるように、動詞後の間接補語でも与格標識を欠くものがみられる。

(3-59) a. Ти харèsűь тèбе бългàръ?
Ți harèswă tèbe bălgàră?
 you-DAT.CL like-PRS.3.SG you-DAT Bulgarian
 「あなたはブルガリア語が好きか。」 (BV3_131003_001/3.09.18)

b. Какту ти съ стòри тèбе...
 Kàktu ti să stòri tèbe...
 as you-DAT.CL it_seems-PRS.3.SG you-DAT
 「あなたが思うように...」 (BV3_131003_001/2.15.08)

このように動詞に対して後置される間接補語が与格標識 нъ/nă を伴わない例は、動詞後の間接補語 79 例中で 9 例見られた。つまり、与格標識 нъ/nă を欠くような現象は、ブラネシュティ方言の場合、補語が動詞前に置かれる場合に限らない。しかし、この問題を考えるうえでもう一つ考慮すべきことがある。それは、ブラ

「この私たちの村はそういう名前なんですよ。」
(TF1_150217_003/16.26)

b. Нашт'е _____ румънци # им дàде
Năšt'e _____ rumănci # im dàde
our-PL+DEF.PL Romanian-PL+DEF.PL they-DAT.CL give-AOR.3.SG
гòспуд'ъ и з'им'ъ...
gòspud'ă i z'im'ă...
Lord-M.SG+DEF.M.SG also land

「我らがルーマニア人たちに、主は土地をお与えになった。」

(DD1_120504_003/1.21.18)

これらの事実を総合すると、ブラネシュティ方言にも Na-drop 現象はあると考えられる。しかし、人称代名詞非接語形の対格形が与格形を兼ねるといった方言的な特徴も考慮する必要があるため、動詞前で与格標識を伴わない人称代名詞非接語形（たとえば、мене/mene など）は、Na-drop 現象によるものとも、対格・与格同形の形が用いられていることによるものとも、とれるだろう。ただし、動詞後で与格標識を持たない間接補語を伴った(3-59)のような例は、Na-drop 現象とはそもそもいえないだろう。

また、Na-drop 現象は、Тишева (2014: 51)によると、CLLD で実現するという。ブラネシュティ方言でも、Na-drop した補語が CLLD の位置におかれることが、以下(3-61)にあるような接語重複の例からわかる。

(3-61) a. Àс... Àс # мèне нì ми харèс'уъ Сòфийъ.
Àс... Àс # mèне nì mì harèswă Sòfijă.
I-NOM I-NOM I-ACC NEG I-DAT.CL like-PRS.3.SG Sofia
「私は、私はソフィアが好きではない。」 (BV4_150217_002/13.43)

b. Àс # мèне ми харèс'уъ.
Àс # mèне mì harèswă.
I-NOM I-DAT I-DAT.CL like-PRS.3.SG
「私は、気に入っている。」 (DD2_121102_001/3.54.26)

この例では、同一の指示対象が一文中で人称代名詞によって3回表されている。文頭にある人称代名詞の主格形 Ac/As は、その直後に後続するイントネーショ

ン上の休止という特徴もあわせて考えると、HTLD の位置にあると考えられる。そのあとにはこの HTLD と同一指示である人称代名詞の非接語形 *мене/mene* と接語形 *ми/mi* が続く。人称代名詞非接語形の *мене/mene* は、与格標識を伴わない Na-drop である。そもそも *мене/mene* が主格の *ac/as* ではないということに加え、一文中に一度しか用いらない HTLD のトピックがすでに文頭にあることから、この *мене/mene* は CLLD の位置にあるものと考えることができる。

ただし、全く同じ CLLD の位置で *нъ/nă* を伴った形が現れる例も見られることを付け加えておく。以下(3-62)のような例の存在は、Na-drop があくまでも随意的におこなわれるものであることを示している。

- (3-62) *Àз...* *нъ мене ми* *арèsűь* *бèре.*
Àз... *нă мене ми* *arèswă* *bère.*
 I-NOM DM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG beer
 「私は、ビールが好きだ。」 (Rus1_130927_002/10.20)

他方、HTLD の位置で与格標識 *нъ/nă* を欠いた間接補語が現れることもありうる。Тишева (2014: 52)によれば、この場合の判定基準となるのはイントネーション上の休止であるという。彼女は標準ブルガリア語の話し言葉の例として次を示している。

(3-63) 標準ブルガリア語

- Сашо # отдавна* *не сме му* *писали.*
Sašo # otdavna *ne sme mu* *pisali.*
 Sasho for_a_long_time NEG be-PRS.1.PL he-DAT.CL write-PAP.PL
 「サショには、もうずいぶんと（手紙を）書いていない。」
 (Тишева 2014: 52)

文頭の *Сашо/Sašo* 「サショ」は、統語的役割としては間接補語であるが、与格標識を持たず、またイントネーション上の休止によって後続の部分と分断されている。このとき、*Сашо/Sašo* は HTLD の位置にある Na-drop と見ることができるということである。ブラネシュティ方言において、HTLD の位置でおこる Na-drop は、(3-60b)が当たるだろう。一方で(3-60a)の与格標識を伴わない間接補語は、イントネーション上の休止が欠如しているため、CLLD の位置におかれていると見るのが妥当である。

3.2.4.3.3. その他の特徴

Na-drop が起こる際に見られるその他の特徴として、Vakareliyska (1994: 140)は非人称文の場合に Na-drop がもっとも許容されやすいということを指摘している。

ブラネシュティ方言で、動詞前にある与格標識を伴わない間接補語の 62 例中 57 例が非人称文にみられる。この点でも、ブラネシュティ方言に見られる当該現象は、Na-drop 現象の一般的な特徴とも合致すると言える。文法化重複が、一般的に非人称文によって実現することもこれと関係していると考えられる。

また、Vakareliyska (1994: 141)は、普通名詞より人称代名詞のほうが Na-drop が許容されやすいということを指摘している。

ブラネシュティ方言でもこれと同じ傾向がみられる。なぜなら、Na-drop している普通名詞は(3-60)にあげた 2 例 (全 62 例中)に限られるからである。

Na-drop 現象が実現する際に示す形態統語論上の 2 つの階層 (人称代名詞 > 普通名詞 ; 非人称文 > 人称文) が、ブラネシュティ方言においても有効であることは、ブラネシュティ方言に見られる与格標識の脱落現象が Na-drop と関係していることを示唆している。

3.2.4.4. ルーマニア語の影響

動詞前の補語の接語重複が行われる際に、稀ではあるが、ルーマニア語の影響によって生じたと考えられる“誤用”を伴った例が散見される。

(3-64) a. Miè mi e dràgy...
 Miè mi e dràgy...
 I-DAT I-DAT.CL be-PRS.3.SG pleased
 「私はうれしい。」(BA1_131004_001/1.56.08)

b. Нъ миè ми харèsűь тòплу.
 Nă miè mi harèswă tòplu.
 DM I-DAT I-DAT.CL like-PRS.3.SG warm
 「私は暖かいのが好きだ。」(Rus1_130927_002/35.36)

c. Пъ мèне ми имѝту Флуўàре.
 Pă mèне mi imitu Fluwàre.
 AM I-ACC I-DAT.CL name-N.SG+DEF.N.SG Floare

(3-64a)と(3-64b)の例では、ブルガリア語の мене/mene の代わりに、ルーマニア語の人称代名詞非接語形与格の mie が用いられている。ルーマニア語の人称代名詞非接語形は、対格と与格で異なった形式がある（対格 mine、与格 mie）。特に(3-64b)が注目に値するのは、ルーマニア語の非接語形与格 mie に対して与格標識の前置詞 нь/nă が用いられている点である。ルーマニア語の与格形 mie は、ブルガリア語と異なり、統合的な形である。与格標識を本来必要としないルーマニア語の借用語 mie に対してさえ нь/nă が用いられていることは、ブラネシュティ方言において、人称代名詞非接語形の与格に対して与格標識 нь/nă を用いることが、Младенов (1993: 267)が述べているように、決して制限的ではないことを示している。

一方、(3-64c)の例については、接語重複する N と Ncl の間で格が異なる。文頭の пъ мене/pă mene (N)は、対格標識である пъ/pă を伴い対格標示されている一方で、それに後続する人称代名詞接語形 ми/mi (Ncl)は与格形である。話者はおそらく名前を名乗るときに用いる言い方を“誤った”と考えられる。ルーマニア語のほうは pe (ブラネシュティ方言の пъ/pă にあたる) を伴う対格が用いられるのに対して、ブルガリア語では与格が要求される。与格の代わりに пъ/pă を伴った対格を用いるという“誤用”にもかかわらず、接語重複する接語形によって、“正しい”格が示され、文意が十分に理解される。つまり、接語重複は文頭の補語の格標示の役割を果たすことを通じて、聞き手に対する理解の保障を行っているともみることができよう。

このように、ルーマニア語の影響で生じたと考えられる“誤用”もまた、動詞前の補語の接語重複の構造を明らかにするうえで有用である。

3.2.4.5. まとめ

ブラネシュティ方言にみられる動詞前の補語の接語重複は、全体として標準ブルガリア語と同じ特徴を持っている。

まず、定あるいは、不定であるが特定である名詞句のみが接語重複される。直接補語の場合、様々な種類の名詞句が重複されるが、間接補語の場合、人称代名詞非接語形が重複する例が圧倒的多数を占める。これには与格補語を要求する身体・心理的感覚や状態を表す述語を伴った文法化重複が関与していることが考えられる。

それから、CLLDに加え、HTLDも観察される。標準ブルガリア語の話し言葉において広く見られる Na-drop 現象も、ブラネシュティ方言に存在している。Na-drop した補語が CLLD の位置を占め、非人称文の場合に最もよく見られることも標準ブルガリア語の話し言葉と共通する。

他方、ブラネシュティ方言に独特な特徴もある。まず前置詞 *пъ/pă* が動詞前の直接補語に対して用いられることが挙げられる。これによって、動詞前において普通名詞によって表される直接補語の格標示を可能とし、対格標識を持たない標準ブルガリア語で形式上区別が困難な CLLD と HTLD を可能とする。ただし、*пъ/pă* の使用が随意的であるため、常に区別が可能になるわけではない。また、ルーマニア語との言語接触によって生じた“誤用”も、ブラネシュティ方言の動詞前の補語の接語重複にみられる特徴の一つであると言える。

3.2.5. 動詞後

3.2.5.1. 動詞後の補語の接語重複

ブラネシュティ方言では、動詞後の直接補語(3-65a), (3-65b)と、間接補語(3-65c), (3-65d)のいずれも接語重複することができる。

(3-65) a. Гу знàм пь дъртиу.
Gu znàm pǎ dǎrtiu.
he-ACC.CL know-PRS.1.SG AM old-M.SG+DEF.M.SG
「(私は) その老人を知っている。」 (TMita2_150217_001/40.59)

b. Нй ги знàм пь т'аф т'й убе.
Ni gi znàm pǎ t'af tǎj ube.
NEG they-ACC.CL know-PRS.1.SG AM they-ACC so well
「彼らのことはそんなによく知らない。」 (Rus1_131005_001/35.52)

c. Ше му кàжеш нь Флорин.
Še mu kàžeš nǎ Florin.
FUT he-DAT.CL tell-PRS.2.SG DM Florin
「あんたはフロリンに言うでしょう。」 (TM1_120509_003/1.20.47)

d. Àс му д̀умьм нь негу т'й.
Às mu dùmǎm nǎ negu tǎj.
I-NOM he-DAT.CL say-PRS.1.SG he-DAT so
「私は彼にそう言っている。」 (TF2_150219_001/54.30)

このとき、接語重複する動詞後の補語は様々な名詞句によって表される。普通名詞や固有名詞に加え、人称代名詞や指示代名詞、定代名詞、名詞化した形容詞(3-65a)などの例が見られる。

ブラネシュティ方言では、人称代名詞が動詞後の位置で接語重複する例が非常に多いという点が特徴的である(3.2.2.3. 「пъ/pǎ と接語重複」を参照)。Krapova, Tisheva (2006)や Тишева, Кръпова (2009)は、ブルガリア国内のブルガリア語諸方言の一般的な傾向として、動詞後にある補語が代名詞である場合に接語重複することは稀であると指摘している。しかし、この一般的な傾向とは異なり、ブラネシュティ方言では、動詞後の補語が人称代名詞である場合に頻繁に接語重複する。直接補語について言えば、全 152 例中人称代名詞が 86 例を占めるのに対して、それ以外の名詞句は 66 例である。他方、間接補語の場合、全 79 例中、人

称代名詞が 59 例であるのに対して、その他の名詞句は 20 例である（以下【表 3-12】も参照）。

【表 3-12】動詞後の補語の接語重複

	人称代名詞	それ以外の名詞句
直接補語	86 例 /152 (約 56%)	66 例 /152 (約 44%)
間接補語	59 例 /79 (約 75%)	20 例 /79 (約 25%)

また、普通名詞が接語重複する場合、必ず定冠詞か指示代名詞（またはその両方）を伴って定となっている。不定（及び един/edin を伴って特定）の例は一例も確認できない。この点は、動詞前で接語重複する補語とは異なる。そして、直接補語に限って言えば、以下【表 3-13】にも示されているように、ほとんどの例で пь/рă を伴うということも独特である（全 159 例中 152 例、約 96%）。

【表 3-13】動詞後の補語の接語重複（пь/рă の有無）

	пь/рă あり	пь/рă なし
例数	152 例	5 例
百分率	約 96%	約 4%

次に、イントネーション上の休止についてみる。ブラネシュティ方言にみられる動詞後の補語の接語重複では、ほとんどの場合で休止を伴わない。標準ブルガリア語の話し言葉では同様の場合に休止が義務的ではないことが知られるが(cf. Тишева 2014: 57)、ブラネシュティ方言でも同じ状況にあると考えられる。その一方で、休止を伴うことができないというわけではない(cf. Krapova, Tisheva 2006)。ブラネシュティ方言でも同様に、休止を持つ例も比較的まれではあるが見られる。しかしながら、観察される例の頻度数を考慮すると、ブラネシュティ方言ではイントネーション上の休止を伴わない構造のほうが一般的であると言える。

イントネーション上の休止は、類型論的な見地から想定される右方転位(RD)の典型的な特徴とされる(cf. Givón 2001)。ブラネシュティ方言において、動詞後の補語が接語重複する際に休止が伴わないことは、これが RD ではないということを示唆している。しかし、その一方で、ブラネシュティ方言には、動詞後の補語の前にイントネーション上の休止を伴う場合がわずかながら見られる。このとき、当該の補語は RD の位置¹⁶⁶にあるものと考えられることができる。

¹⁶⁶ 2.2.4.2.2. 「動詞後」を参照せよ。

ブラネシュティ方言はもとより、標準ブルガリア語の話し言葉に広くみられる休止の欠如は、接語重複というある意味で有標な現象が高い頻度で用いられることを通して無標化していく過程にあることを示唆する特徴と考えることもできる。休止の欠如は、文中の構成要素の語順の変化を示唆する重要な特徴である。人称代名詞接語形が統語的な補語としての役割を失い、格標示の機能をもった接辞的な要素に変化する一方で、同一指示のトピック化された名詞句は動詞の補語として再分析される。このような再分析の結果、イントネーション上の休止の欠如がもたらされると考えられる (cf. Givón 1976; Сугаи 2015a; see also Hopper, Traugott 2003; Heine, Kuteva 2005)。この点については、第4章において詳細に論じる。

以上で述べたことをまとめると次のようになる。ブラネシュティ方言では接語重複する動詞後の補語が人称代名詞であらわされる例が、直接補語・間接補語ともに多い。また、直接補語については、ほとんどの場合で *пъ/pǎ* を伴う。

しかし、動詞後の補語は休止を伴わずに接語重複することが一般的である。休止の欠如は、動詞後の補語が *RD* の位置ではなく基本語順の位置にあることを示している。

3.2.5.2. *RD*

ブラネシュティ方言において、動詞後の補語が休止をともなって接語重複する *RD* の例は、直接補語と間接補語あわせて 10 例みられる。そのうち、前置詞 *пъ/pǎ* を伴う直接補語の例は 4 例、前置詞 *пъ/pǎ* を伴わない例は 5 例、間接補語の例は 1 例である。

まず、直接補語の例を見る。前節で指摘したように、接語重複する動詞後の補語は、その圧倒的大多数が *пъ/pǎ* を伴っている。しかし、それらの例では、ふつうイントネーション上の休止も伴わない。他方、*пъ/pǎ* を伴う動詞後の補語が、イントネーション上の休止を伴う例も稀ながら見られる。動詞後の *пъ/pǎ* を伴う直接補語全 152 例中で以下(3-66)に示す 4 例がそれに該当する。

(3-66) a.	<u>Ги</u>	дърпа̀ю	нъ	дру̀гийъ	стръ̀ни
	<u>Gi</u>	dǎrpa ^w o	nǎ	drùgijǎ	strǎni
		they-ACC.CL	pull-AOR.3.PL	to	other-PL+DEF.PL
				side-PL	
	#	<u>пъ</u>	<u>хòрътъ.</u>		
	#	<u>pǎ</u>	<u>hòrǎtǎ.</u>		
		AM	person-PL+DEF.PL		

「その人々はほかの場所に連れていかれた。」

(DD1_120504_003/1.02.07)

b. Ше тъ чакъм ÀС # пъ тебе
Še tǎ čakām ÀS # pǎ тебе
FUT you-ACC.CL wait-PRS.1.SG I-NOM AM you-ACC
дъ дòдиш там.
dǎ dòdiš tām.
SMP come-PRS.2.SG there

「私があなを待っていよう、あなたがそこへ来るのを。」

(DG2_121029_001/1.26.30)

c. Àз гу зèф... пъ Нèлу.
Àz gu zèf... pǎ Nèlu.
I-NOM he-ACC.CL take-AOR.1.SG AM Nelu

「私はネルを連れ出した。」 (BV2_121031_001/22.10)

d. Уттàдем дъ гу вйд'ъ # пъ нèгу.
Uttàdem dǎ gu vid'ǎ # pǎ nègu.
go-PRS.1.SG SMP he-ACC.CL see-PRS.1.SG AM he-ACC

「(私は) 彼に会いに行く。」 (DD2_121102_001/29.43)

このうち(3-66b), (3-66d)は補語(N)が人称代名詞非接語形であらわされ、(3-66a)は普通名詞、(3-66c)は固有名詞であらわされる。補語は休止のあとにおかれているが、いずれも対格標識である пъ/pǎ を伴う。

その一方で、接語重複する動詞後の直接補語のうち пъ/pǎ を伴わない例は、以下(3-67)にある5例が見られる。

(3-67) a. А чи тугиснь гүждь гу... # брышнòту.
A čì tugisnǎ gǔždǎ gu... # brǎšnòtu.
and then then put-PRS.3.SG it-ACC.CL wheat-N.SG+DEF.N.SG
「それから小麦粉を入れて...」 (DD1_120504_003/2.15.29)

b. Ше утйўъ нь грòбиштъ дъ гу вйдиш
Še utiwǎ nǎ gròbištǎ dǎ gu vidiš
FUT go-PRS.1.SG to graveyard SMP he-ACC.CL see-PRS.2.SG

nègyŭty _____ munčè.

nèguwtu _____ munčè.

his-N.SG+DEF.N.SG boy-N.SG

「墓場へ行って、彼の息子を見に行こう。」

(Rus1_130927_002/1.28.47)

- c. Чи учì тàm из'ик'у, càŭ
Či učì тàm iz'ik'u, sàw
so study-AOR.3.SG there language-M.SG+DEF.M.SG or
гy знàйŭ пò-нъпрèд, # бългърци.
gu znàjw pò-năpred, # bǎlgărcki.
it-M.SG.ACC.CL know-EVID.M.SG earlier Bulgarian-M.SG
「そこでその言葉を勉強したのか、あるいはそれを以前から知っていたのか。ブルガリア語を。」 (BV3_131003_001/1.47.44)

- d. Ги вйде тàm # кòнте нь nègy?
Gi vide тàm # kònte nă nègu?
they-ACC.CL see-AOR.2.SG there horse-PL+DEF.PL DM he-ACC
「彼のところで馬を見たか。」 (AG1_131004_001/1.31.53)

- e. Нй м̂й р̂чй, чи нй гy йскъ
Ni m̂j r̂čì čì nì gu iskă
NEG more like-PRS.3.SG because NEG he-ACC.CL want-PRS.3.SG
Р̂си.
R̂si.
Rusi

「(彼は) 気に入っていない、ルシがいやだから。」

(BA1_131004_001/1.49.12)

これらの例では、補語の直前で休止が実現しており、また補語がいずれも代名詞以外の名詞によってあらわされていることを指摘できる。このような特徴は類型論的見地から想定されている RD の特徴と合致すると言えよう (cf. Givón 2001: 267)¹⁶⁷。したがって、これら 5 例は、類型論的な見地から想定される RD と見ることができるであろう。

¹⁶⁷ 3.3.2. 「動詞後」も参照せよ。

以上のように、ブラネシュティ方言では RD の例を確認できるが、極めて限定的である。しかし、標準ブルガリア語はもちろんのこと¹⁶⁸、ブルガリア国内のブルガリア語諸方言においても、動詞後の補語の接語重複よりも動詞前の補語の接語重複がより一般的であることは、Krapova, Tisheva (2006)や Тишева, Кръпова (2009)も指摘している。むしろブラネシュティ方言にとってもっと重要な特徴は、пъ/păを伴う直接補語が休止なしで接語重複する例が極めて多いということだろう。補語の前でイントネーション上の休止を伴わないこと自体は、標準ブルガリア語話し言葉でもふつうにみられることであるが(cf. Тишева 2014 etc.)、ブラネシュティ方言の場合、その動詞後の直接補語が пъ/pă を頻繁に伴うという点が独特な特徴となっている。

次に間接補語についてみる。

間接補語も、直接補語と同様に、休止を伴うことなく接語重複する。

(3-68) a. Му дѹмъ нъ Г'òрги.
Му dùmă nă G'òrgi.
 he-DAT.CL say-PRS.1.SG DM Georgi
 「(私は) ゲオルギに言う。」 (BV3_131003_001/1.54.25)

b. Пѣк às... Àс ѝ рѣкъф нъ мамъ.
 Păk às... Às ì rĕkăf nă mămă.
 but I-NOM I-NOM she-DAT.CL tell-AOR.1.SG DM mum
 「一方で、私はママに言った。」 (DM_130927_002/1.38.43)

c. Ми купѹѹѹт <...> кòту ми тр'абъ
 Му купѹѹѹт <...> кòту ми тр'абă
 I-DAT.CL buy-PRS.3.PL what I-DAT.CL it_is_necessary-PRS.3.SG
нъ мѣне.
nă mène.
 DM I-ACC
 「私に必要なものは買ってきてくれるの。」 (BA2_150212_002/1.28.38)

¹⁶⁸ 例えば、Андрейчин et al. (1977: 377)は、主語の位置 (=動詞前)にある補語が接語重複しやすいことを述べている。このように動詞前の補語の接語重複が頻繁であることは、多くの研究者によって指摘されている。本論文の 2.2.3. 「接語重複について」も参照。

d. Дѣ ти дѣдѣ Гѡспот нѣ тебе здравѣ,
 Dă tî dădê Gòspot nă tebe zdrăvi,
 SMP you-DAT.CL give-PRS.3.SG Lord DM you-ACC health
 инѣ жинѣ умовѣтъ...
 ină žină umovită...
 IDF.F.SG woman-F.SG clever-F.SG
 「主がおまえに健康と賢い妻をお与えになるように。」
 (TMita2_150217_001/2.21.10)

(3-68a), (3-68b)にあるように代名詞以外の普通名詞や固有名詞で表される場合も、(3-68c), (3-68d)にあるように人称代名詞非接語形が動詞後にある場合も、間接補語はイントネーション上の休止を伴わない。

ただし、休止を伴う例については、次の1例だけ見られた。

(3-69) Гѣй му дѣмѣ Кѡра
 Tăj mu dômă Kòra
 so it-DAT.CL say-PRS.3.SG Kora
 # нѣ мѣгѣзѣну нѣгу.
 # nă măgăzînu nêgu.
 DM store-M.SG+DEF.M.SG he-ACC.CL
 「あのお店はコラっていうのよ。」
 (TM2_121029_001/45.51)

以上(3-69)の例では、与格標識 нѣ/nă を持つ動詞後の補語はイントネーション上の休止を伴っている。すでに 3.2.4.3. 「Na-drop 現象」で指摘したように、与格標識 нѣ/nă の脱落は動詞前の間接補語に特徴的な現象で、動詞後の間接補語はふつう与格標識を伴う。実際に、ブラネシュティ方言では、ほとんどの場合（動詞後で接語重複する間接補語全 79 例中 70 例、約 89%）で間接補語は与格標識である нѣ/nă を伴う（以下【表 3-14】も参照）。与格標識を持たない例は、対格・与格同形の形を持つ人称代名詞非接語形に限られる。実際に、(3-69)の例で、与格標識 нѣ/nă が用いられているのは、間接補語が普通名詞によって表されているからであると考えることができる。

【表 3-14】 動詞後の間接補語の接語重複（与格標識 **нѣ/nă** の有無）

	нѣ/nă あり	нѣ/nă なし
例数	70 例 /79	9 例 /79
百分率	約 89%	約 11%

一方で、**нѣ/nă** をもたない動詞後の間接補語の例は 9 例確認できるが、いずれも休止を伴わない。

- (3-70) a. **Нѣ** з^на^м какъ̀ф, ам какъ̀ф
Ni znà^m kakà̀f, am kakà̀f
 NEG know-PRS.1.SG what_kind_of-M.SG but what_kind_of-M.SG
 т'арѣсѣѣ̀ тѣ̀бе?
 t'arès^{wă} tèbe?
 you-DAT.CL+like-PRS.3.SG you-DAT
 「どんなのかわからないけど、あんたはどんな（お茶）が好きなの？」
 (BV1_120509_002/27.30)

- b. **Кòй** т^и кàзъ̀ тѣ̀бе?
Kòj tⁱ kàzằ tèbe?
 who-M.SG you-DAT.CL tell-AOR.3.SG you-DAT
 「誰があんたに言ったのか。」 (BV3_131003_001/1.45.04)

- c. **Кàкту** т^и сѣ̀ стòри тѣ̀бе...
Kàktu tⁱ sằ stòri tèbe...
 as you-DAT.CL it_seems-PRS.3.SG you-DAT
 「あなたが思うように…」 (BV3_131003_001/2.15.08)

- d. **Пò-бър̀джи** м^и идѝ мѣ̀не
Pò-bărdži mⁱ idì mène
 faster I-DAT.CL come-PRS.3.SG I-DAT
 дѣ̀ прикàзѣ̀ми бъл̀гър̀цки ут ула̀шки.
 dằ prikàzwămi bălgărcki ut ulăški.
 SMP talk-PRS.1.SG Bulgarian than Romanian
 「ルーマニア語よりブルガリア語の方が話すとき早く頭に浮かぶ。」
 (TF2_150219_001/55.46)

以上の(3-70)の例は、(3-70b)を除いて、文法化重複の例であることも指摘することができる。

3.2.5.3. まとめ

以上で見たように、ブラネシュティ方言においても、動詞後の補語の接語重複が行われる。

直接補語は、対格標識である前置詞 **пъ/pă** を伴うことが一般的である。**пъ/pă** を義務的に要求する人称代名詞非接語形が動詞後においてよく用いられることは、ブラネシュティ方言に独特な特徴と見ることができる。一方、**пъ/pă** の使用以外では、標準ブルガリア語話し言葉やブルガリア国内のブルガリア語諸方言と比較して、際立った相違点はなく、むしろ共通しているといえる。

たとえば、イントネーション上の休止は、そのような共通特徴の一つである。ブラネシュティ方言では、接語重複する動詞後の補語はふつう休止を伴わない。この事実は、標準ブルガリア語話し言葉と同様に、これらの補語が文中の基本語順(SVO)の位置にあり、RD の位置にあるものではないことを示唆していると言える。

一方で、ブラネシュティ方言で、類型論的見地から想定される RD が行われないうわけではない。ごくわずかではあるが、RD の位置にある補語が接語重複する例もみられる。

しかし、RD の例が制限的であることは、動詞後の補語の接語重複に関して、ブラネシュティ方言が、標準ブルガリア語やブルガリア国内のブルガリア語諸方言と共通していることを示している。

3.3. 補語の接語重複の機能

本節(3.3.)では、ブラネシュティ方言における補語の接語重複がどのような機能を持つかについて、特に語用論的な観点から分析する。

3.3.1. 動詞前

本節(3.3.1.)では、動詞前の補語の接語重複を語用論的な見地から分析し、ブラネシュティ方言の動詞前の補語の接語重複が持つ機能を分析する。ブラネシュティ方言のデータはいずれも自然発話から収集されたものであることを改めて指摘しておく。

3.3.1.1. トピック

まず、2.2.3.4.3.「トピック」でも検討したように、標準ブルガリア語において、動詞前の補語の接語重複は文のトピックを標示する(Givón 2001: 265; see also Асенова 2002; Guentchéva 1994)。それゆえに、動詞前の補語となる名詞句は定であるか、不定であっても特定となる。また、トピックの要素が文中で占める位置の違いによって、HTLD と CLLD という 2つの接語重複の構造が存在するが(cf. 2.2.4.2.1.2. 「HTLD と CLLD」)、いずれもトピック標示の機能を持つ。両者が異なるのは、あくまでも構造と使用領域 (HTLD は話し言葉に特有) である。

前後の文脈中に明らかに指示対象があり旧情報である次の例(3-71)¹⁶⁹を見る。

(3-71) a. Мисл'ъ съ нь тѣс ма̀лките, дѣту<...>съ руд'ѣт.
Misl'ă să nă tēs mǎlkite, dētu<...>să rud'ă.
think-PRS.1.SG REF DM this-PLlittle-PL+DEF.PL REL REF bear-PRS.3.PL
「生まれてくるこの小さい(子供たち)のことを想っている。」

Бòже, как ше жувѣйт тѣс ма̀лки.
Bòže kàk še žuvějāt tēs mǎlki.
God-VOC how FUT live-PRS.3.PL this-PL little-PL
「神よ、この小さい(子供たち)はどうやって生きていくのか。」

¹⁶⁹ これ以降、談話機能の分析の際に引用する例では、接語重複が見られる文に加えて、前後の文脈を明示する。このとき、便宜上、発話中の複数の文を a., b., c....などのように記号をふって区別する。また、問題となる接語重複を含む文は太字で示し、接語重複する名詞句(N)と同じ指示対象を持った名詞句が前後の文脈に出てくる場合、波線を用いてそれ(と対応する訳語)を特に強調することがある。

b. Tèc tr'ábъ дъ ги
Tes tr'ábă dă gi
this-PL it_is_necessary-PRS.3.SG SMP they-ACC-CL

углèдът мայките,
uglèdăt mājkite,
take_care_of-PRS.3.PL mother-PL+DEF.PL

「彼らのことは、母親たちが面倒を見なければならないし、」

c. tr'ábъ им пьрй.
tr'ábă im pǎri.
it_is_necessary-PRS.3.SG they-DAT.CL money

「彼らはお金だって必要だ。」

(DD1_120504_003/1.13.36)

最初の文(3-71a)で tes mǎlkite/tes mǎlkite 「この小さい (子供たち)」という指示対象が談話に導入されているので、(3-71b)の文ではその指示対象は旧情報である。このことは、当該の名詞句が指示代名詞 tèc/tès によって標示され、定であることからわかる。(3-71b)では、動詞前に置かれた指示代名詞 tèc/tès (N)が接語重複しており、指示対象が当該の文のトピックとして明示的に標示されている。これに続く(3-71c)の文では、同じ指示対象の名詞句は接語重複せず、人称代名詞接語形 им/im 「彼らには」だけで補語(N)があらわされている。直前の(3-71b)における接語重複により指示対象はすでにトピックとなっているため、(3-71c)では接語重複による明示的なトピック標示はされていないと考えられる。

以上の(3-71)のように前後の文脈中に明確に指示対象が示されることがあれば、以下(3-72)のようにそうでない例もある。

(3-72) a. Ймъм инè пòзи. Илà нъсàм дъ вйш. <...>
Īmām inè pòzi. Pà nāsàm dă viš. <...>
have-PRS.1.SG IDF.PL photo-PL come-IMP here SMP see-PRS.2.SG

「写真がいくつかあるわ。こちらに来て見てみなさい。<...>」

Тукъ àс кат бèши Ирйнь мàлкъ. <...>
Tũkǎ às kat bèši Irinǎ mǎlkǎ. <...>
here I-NOM when be-IMPF.3.SG Irina small-F.SG

「これはイリーナが小さかったころの私よ。<...>」

[Колко годин имахте тогава?] Кòй? Àс?
 [Kolko godin imahte togava?] Kòj? Às?
 how_many year-PL have-IMPF-2.PL then who-NOM I-NOM
 「[そのときはおいくつでしたか?] 誰が? 私が?」

b. Нъ трийси гòдин àс йъ ньпràйф <...> пь Ирìнь.
 Nă trijsi godin às jă năpràjf <...> pǎ Irinǎ.
 at 30 year-PL I-NOM she-ACC.CL make-AOR.1.SG AM Irina
 「30歳の時に私はイリーナを生んだの」

c. Пък пъ Мирчу, пъ байàту гү ньпràйф
 Pǎk pǎ Mirču, pǎ bajàtu gu năpràjf
 but AM Mirču AM boy-M.SG+DEF.M.SG he-ACC.CL make-AOR.1.SG
 нь двàйсе чèтер гòдин.
 nă dvàjse čèter gòdin.
 at 24 year-PL
 「ミルチュのほうは、あの子は24歳のとき (に生んだの) よ。」
 (BA1_131004_001/53.27)

(3-72c)において、接語重複する動詞前の補語 байàту/bajàtu 「男の子」は、定冠詞を伴い定であるが、これより前の文脈で明示的に言及されていないため、旧情報ではないように見える。しかし、この話者に男性と女性の子供が一人ずついるということは、話し手はもちろんのこと、聞き手にとっても既知の情報であり、話し手と聞き手にとって共通の背景的知識となっている。それゆえ、байàту/bajàtu 「男の子」は談話上で明示されていないが、対話者同士にとって実質上旧情報となっている。

また、その直前の(3-72b)では動詞後の補語 Ирìнь/Irinǎ 「イリーナ」が接語重複によってトピック標示されており、それに続く(3-72c)の文でこれとは異なる新しいトピックを標示する必要性が生じる。前のトピックである Ирìнь/Irinǎ とのコントラストのために、Мирчу/Mirču (=байàту/bajàtu) 「ミルチュ (=その男の子)」を動詞前において接語重複することで、これを新しいトピックとして明確に標示している。

前後の文脈で指示対象が明確に用いられていても、潜在的にトピックとなることができる指示対象が複数ある場合には、動詞前の補語の接語重複が行われる例がある。

(3-73) a. Ъмѣф две мунчѣтъ, две мунчѣтъ.
 Ъmăf dve munčĕtă, dve munčĕtă.
 have-IMPF.1.SG two-N.PL boy-N.PL two-N.PL boy-N.PL

Ний рѣбутиўми двѣмъ,
 Nij răbutiwmi dvămă,
 we-NOM work-AOR.1.PL two_persons

「息子が二人いたんだ、二人の息子が。我々二人は働いて、」

b. ам пѣ т'ѣф ги гўждѣф дѣ, дѣ учѣт.
 am pă t'ăf gi gŭždăf đă, đă učĕt.
 but AM they-ACC they-ACC.CL put-AOR.1.SG SMP SMP study-PRS.3.PL

「彼らは (息子たちは) 学校にやったんだ。」

(DM_130927_002/1.28.06)

(3-73b)で、接語重複する動詞前の補語が指示する対象は旧情報である。なぜなら、その指示対象である две мунчѣтъ/dve munčĕtă 「二人の息子」は、先行する(3-73a)で談話にすでに導入されているためである。実際、(3-73b)の接語重複を伴う直接補語は語彙的に定である人称代名詞非接語形で表されている。

また、(3-73a)では、две мунчѣтъ/dve munčĕtă 「二人の息子」が談話に導入された後で、Ний... двѣмъ/Nij... dvămă 「私たち二人 (=夫婦)」が新たに談話に導入されており、トピックとして標示されうる指示対象が2つ存在することになる。(3-73b)において пѣ т'ѣф/pă t'ăf 「彼らを」が動詞前に置かれることによってトピック化されているのは、潜在的にトピックとなりうる指示対象が複数あり、指示対象を明確にするうえで明示的なトピック標示が必要なためであると考えられる。

次に間接補語の例についても見る。

(3-74) a. Тугѣс ѧс <...> у грѣдѣнкѣтъ тѣйнта,
 Tugĕs ăs <...> u grădĕnkătă tĕjnta,
 then I-NOM in garden-F.SG+DEF.F.SG their.F.SG-DEF.F.SG

сѣд'ѣф тѣй.
 săd'ăf tăj.
 sit_down-IMPF.1.SG so

「そのとき、私は彼らの庭で座っていたんだ。」

Идѝн полицàй вид'ъ мъ т'ѝ.
 Idin policàj vid'ă mă tăj.
 IDF.M.SG policeman-M.SG see-AOR.3.SG I-ACC.CL so
 「一人の警官が私を見て、」

b. Тòй # му съ стòри, че ст'ъм[sic!]¹⁷⁰
Тòй # му сã stòri, че st'ãm[sic!]
 he-NOM he-DAT.CL it_seems-PRS.3.SG that be-PRS.1.SG

н'àкуй крад'èц'.
 n'akuj krad'èc'.
 some-M.SG thief-M.SG

「彼は（私が）なんかの泥棒だと思ったようなんだ。」
 (DD1_120504_003/57.41)

(3-74b)において、動詞前で接語重複している補語は、語彙的に定である人称代名詞で表されている。その指示対象である идѝн полицàй/idin policàj 「一人の警官」は、先行する(3-74a)において用いられており、旧情報となっている。このとき、補語が当該の文のトピックとして標示されていることがわかる。

また、期待される与格形の代わりに主格形 Тòй/Тòй で現れていることや、そのあとにイントネーション上の休止を伴っていることから、当該の接語重複は HTLD であることが確認できる。

次の(3-75)の例でも、動詞前で接語重複する間接補語はトピックとなっている。

(3-75) a. Àмъ àс хòдиф съз бàбъ Васѝль у Бьлгàрийъ.
 Àmă às hòdif sãz băbă Vasilă u Bălgàrijă.
 but I-NOM go-AOR.1.SG with grandma Vasilă in Bulgaria
 「私はヴァシラばあさんと一緒にブルガリアへ行ったんだ。」

Т'à знàй дъ пèе. <...>
Т'à znàj dă pèе. <...>
 she-NOM know-PRS.3.SG SMP sing-PRS.3.SG
 「ばあさんは歌えるんだ。」

¹⁷⁰ 期待される 1 人称単数形は、сьм である。

Хòдиў съз нѣйъ у Българийъ, пѣе тàm.
 Hòdiw sǎz nĕjǎ u Bǎlgarijǎ, pĕe tàm.
 go-AOR.1.SG with she-ACC in Bulgaria sing-PRS.3.SG there
 「彼女とブルガリアに行って、(彼女は)そこで歌ったんだ。

b. <...> t'ǎ # kàk dь vi kàжъ # ѝ
 <...> t'ǎ # kàk dǎ vi kàžǎ # ì
 she-NOM how SMP you-DAT.CL say-PRS.1.SG she-DAT.CL
 харѣсѹъш мл'òгу убичаите българс...
 harĕswǎš ml'ògu ubičàite bǎlgars...
 like-IMPF.3.SG so_much custom-PL+DEF.PL Bulgarian-PL
 「彼女は、何と言ったらいいか、ブルガリアの習慣をととても気に入っていた。」 (DD2_121102_001/4.22.38)

(3-75b)では、主格形で表された補語が HTLD の位置で接語重複する例がみられる。(3-75a)の冒頭の文で бàба Василǎ/bàba Vasilǎ 「ヴァシラばあさん」は談話に導入されており、それに後続する(3-75b)を含む文において談話のテーマとなっている。(3-75b)の文頭におかれた補語の指示対象は旧情報であり、語彙的に定である人称代名詞で標示されている。(3-75a)のあとで、いったん別の話題が導入されているため (<...>であらわされている)、(3-75b)の冒頭に当該の指示対象を持つ補語をおくことでトピックとして明確に標示しなおしている。

3.3.1.2. フォーカス

以上までで見たように、動詞前の補語の接語重複が持つ語用論的な機能は、トピックの標示である。補語が動詞前に置かれることで、当該の補語をトピックとしてあらわす。

しかし、Тишева, Джонова (2006: 233)も指摘するように、動詞前の補語は、接語重複するとき、トピックだけではなく、フォーカス¹⁷¹を表す場合もある。それは、身体・心理的な感覚や状態を表す述語などをとものなつた文法化重複の場合に見られる。このとき、重複以外にも語順や論理強勢、フォーカス化標識なども考慮に入れる必要がある。たとえば、標準ブルガリア語の次の例を見よ。

¹⁷¹ フォーカスについては、2.2.2.1. 「形態と用法」の脚注 38 を見よ。

(3-76) 標準ブルガリア語 (Arnaudova, Krapova 2007: 3)

a. HA KOGO *(my) стана жал?
NA KOGO *(mu) stana žal?
 DM who-ACC he-DAT.CL become-AOR.3.SG sorry
 「誰が残念な気持ちになったか。」

b. HA DETETO *(my) стана жал.
NA DETETO *(mu) stana žal.
 DM child-N.SG+DEF.N.SG he-DAT.CL become-AOR.3.SG sorry
 「その子が残念な気持ちになった。」

c. Стана *(my) жал HA DETETO.
 Stana *(mu) žal NA DETETO.
 become-AOR.3.SG he-DAT.CL sorry DM child-N.SG+DEF.N.SG
 「その子が残念な気持ちになった。」

疑問代名詞である部分((3-76a)の HA KOGO/NA KOGO)に対する答えとなる部分((3-76b)と(3-76c)における HA DETETO/NA DETETO)がそれぞれ論理強勢を伴ってフォーカスとなっていると考えられる。この例では、フォーカスとなっているそれぞれの補語が、語順(動詞前であるか動詞後であるか)にかかわらず義務的に接語重複する。つまり、標準ブルガリア語の(3-76)の例から、身体的・心理的感覚や状態を表す述語を持った文における接語重複は補語がフォーカスである場合でも義務的であるということが分かる。

このように、標準ブルガリア語では、文法化重複が関与する場合、補語がフォーカスであるときも接語重複が可能となる。このとき、動詞前の補語の接語重複が、積極的なフォーカス標示の機能を持っているというよりは、必ずしもトピックとして補語を表すわけではなくなることで、結果的に補語がフォーカスの場合でも使えるようになっているものと考えられる。

一方で、身体的・心理的感覚や状態を表す述語が用いられない場合、動詞前の補語の接語重複はフォーカスをあらわすことができない(cf. Сугай 2012)。それにもかかわらず、ブラネシュティ方言では、以下(3-77)にあるように、身体的・心理的感覚や状態を表す述語が用いられない文において、接語重複する補語がフォーカスとなっている例が見られる。

(3-77) a. Тук и Пèрник. Тук иди́н гул'ам пра̀зник
 Tùk i Pèrnik. Tùk idin gul'am pràznik
 here be-PRS.3.SG Pernik here IDF.M.SG big-M.SG festival-M.SG
 б̀ългарски зь к̀керите... <...>
 bălgarski ză kùkerite... <...>
 Bulgarian-M.SG for kukeri-PL

「(地図を見せながら) ほら、ここがペルニクだ。ここでクケリに関するブルガリアの大きなお祭りがあるんだ。」

[Освен от Румъния откъде бяха хора?]
 [Osven ot Rumănija otkăde b'aha hora?]
 except from Rumania where_from be-IMPF.3.PL person-PL
 「[ルーマニア以外からはみなさんどちらから?]」

Hè! Ут Румъния нѝ пукàниўо.
 Nè! Ut Rumănija ni pukàniwo.
 No from Rumania NEG invite-AOR.3.PL
 「いや! ルーマニアからは(誰も)招待されていないんだ。」

Мъ пукàниўо сàму пь м̀ене. [А, само вас...]
 Мă pukàniwo sàmu pã m̀ene. [А, samo vas...]
 I-ACC.CL invite-AOR.3.PL only AM I-ACC Ah only you-ACC
 「招待されたのは私だけだ。[ああ、あなただけが...]」

b. Да! Сàму ПЬ М̀ЕНЕ мь пукàниўо.
 Да! Sàmu PĂ M̀ENE mă pukàniwo.
 yes only AM I-ACC I-ACC.CL invite-AOR.3.PL
 「そうだ! 私だけが招待されたんだ。」 (DD1_120504_003/37.30)

(3-77b)の例では、直接補語 ПЬ МЕНЕ/PĂ MENE 「私を」は動詞前の位置で接語重複が行われている。当該の補語は論理強勢を伴うばかりか、フォーカス化標識である сàму/sàmu をも伴っている¹⁷²。これらのことは、(3-77b)の動詞前の直接補語がフォーカスであるということを示している。

¹⁷² само/samo (標準ブルガリア語の形) 「～だけ」は、フォーカス標識であると考えられる(cf. Ницолова 2008: 152)。

間接補語についても同様で、次の例では動詞前の補語がフォーカスとして表されていると考えられる。

- (3-78) a. *Ѐште* *дѣ* *ти* *гу* *дѣм*
ĭšte *dă* *ti* *gu* *dăm*
 want-PRS.1.SG SMP you-DAT.CL it-ACC.CL give-PRS.1.SG
нѣ *тѣбе...* [Вѣе?]
nă *těbe...* [Vie?]
 DM you-ACC you-NOM
 「(私は) あなたにそれをあげたいの。[あなたが?]

- b. *Дѣ*, *Нѣ Тѣбе* *дѣ* *ти* *гу* *дѣм*.
Dă, *Nă Těbe* *dă* *ti* *gu* *dăm*.
 yes DM you-ACC SMP you-DAT.CL it-ACC.CL give-PRS.1.SG
 「そうよ、あなたにそれをあげたいの。」
 (TM1_120509_003/1.20.47)

このとき、(3-78b)では動詞前におかれた間接補語 *Нѣ Тѣбе/Nă Těbe* が接語重複している。話者は、指示対象をはっきりと表すために、(3-78a)で述べたのとほとんど同じ内容の文を(3-78b)で繰り返している。このような文脈から(3-78b)における動詞前の補語はフォーカスとして表されていることがわかる。フォーカス化標識は用いられていないが、当該の補語が論理強勢を伴っていることからそのことが確認できる。このように、(3-78b)では身体的・心理的感覚や状態を表す述語が用いられていないにもかかわらず、動詞前の補語の接語重複はフォーカスを表していると考えられる。

以上の分析から次のことが明らかになった。すなわち、ブラネシュティ方言では、一般的に、動詞前の補語の接語重複の語用論的機能は、補語のトピック標示である。つまり、標準ブルガリア語と同様の語用論的な機能がみられるということがいえる。

その一方で、動詞前の補語の接語重複は、トピックだけではなく、フォーカスをあらわしている例も見られる。これは、接語重複のトピックを表すという語用論的機能が失われ、その結果フォーカスをあらわしているものと考えられるわけだが、それが身体的・心理的感覚や状態を表す述語が用いられる文以外の場合にみられるという点で注目に値する。このような例の存在は、動詞前の補語の接語重複が、語用論的に無標化していく（つまり、トピック標示という機能を失

っていく) 過程にあることを示唆する例と見ることができるであろう(cf. Sugan 2015ab)。この点については、第4章において詳細に論じる。

3.3.2. 動詞後

本節(3.3.2.)では、動詞後の補語の接語重複を語用論的な観点から分析することで、その語用論上の機能について明らかにする。

標準ブルガリア語において補語の接語重複は、補語のトピック標示のための手段であり(cf. Guentchéva 1994; Асенова 2002)、それは文中における補語の位置に関係ない(Тишева, Джонова 2006: 236-237)。つまり、補語が動詞後に置かれる場合も、それが基本語順の位置にあるか RD の位置にあるかに関係なく、トピックの標示にかかわっている。

動詞後の補語の接語重複は、語用論的な見地からは、指示対象をトピックとして明確に標示することで、聞き手の理解を助ける機能をもつが、とりわけ聞き手にとって指示対象が十分に予測可能な場合に用いられる(cf. Krapova, Tisheva 2006: 417; Givón 1989: 222-226; Leafgren 2002)。つまり、Ncl による標示だけで、指示対象が何であるかを聞き手が十分に予測できる文脈において、Ncl と同一指示の内容を N によって改めて示し、聞き手の理解を補う場合に用いられる。このような特性ゆえに、N は代名詞以外の名詞句であることが一般的となる¹⁷³(cf. Krapova, Tisheva 2006; Тишева, Кръпова 2009)。

動詞後の補語の接語重複にみられるこのような語用論的な機能は、類型論の見地から次のように説明されている：「[話者は、]指示対象が十分に予測可能であると考え、それゆえにその指示対象が前方照応的に標示される。しかし、短い内省(休止によって表される)のあとに、その指示対象が十分に予測可能ではないかもしれないので、完全な名詞句によって再標示されるほうがよいと判断する」(Givón 2001: 267)。

一方、動詞前の補語の接語重複は、旧情報であるが予測が比較的困難な指示対象を、明示的にトピックとしてあらわす場合に用いられる。つまり、文脈から様々な指示対象が想定されるような場合、Ncl だけではどれを指示しているかが聞き手にとっては予測できなくなってしまうことがある。このようなとき、文頭で N によって指示対象を明示的にトピックとして標示することで聞き手の理解を助ける語用論的な機能を持つ。

動詞前と動詞後の補語の接語重複は、共にトピック標示という語用論的機能を持つという点では共通するが、聞き手にとって指示対象が予測困難であるかどうかによって使い分けられる。

以上で述べた点を踏まえて以下具体例を検証していく。

¹⁷³ ブラネシュティ方言の場合については、3.2.5.1. 「動詞後の補語の接語重複」を見よ。

(3-79) a. RUS: Ûtre, нъ ч̀етер, нъ п̀ет, ше д̀оди...
 Ûtre, nă ç̀eter, nă p̀et, še d̀odi...
 tomorrow at 4 at 5 FUT come-PRS.3.SG

В̀икъф àс ид̀ин б̀ьлг̀рин, В̀ьлев.
 Vikăf às idìn bălgarin, Vălev.
 call-AOR.1.SG I-NOM IDF.M.SG Bulgarian Vălev.

Т̀ой жув̀ей нъ К̀ьлип̀етрово.
 Tòj žuvèj nă Kălipètrovo.
 he-NOM live-PRS.3.SG at Kalipetrovo

「明日、4時か5時に来る...あるブルガリア人と呼んだんだ、
 ヴアレフという。彼はカリペトロヴォに住んでいる。」

b. BV: Н̀ий х̀одиўми т̀ам нъ К̀ьлип̀етрово.
 Nij hòdiwmi tàm nă Kălipètrovo.
 we-NOM go-AOR.1.PL there at Kalipetrovo.

「私たちはカリペトロヴォに行ったわよ。」

c. RUS: Òди... Гу пузн̀авьш п̀ь В̀ьлев?
 Òdi... Gu puznàvăš pă Vălev?
 go-AOR.2.SG he-ACC.CL know-PRS.2.SG AM Vălev

「行ったね... ヴアレフを知っているか。」

d. BV: Н̀и гу пузн̀ам.
 Ni gu puznàm.
 NEG he-ACC.CL know-PRS.3.SG

「知らないわね。」

(Rus1_131005_002/46.46)

この例では(3-79c)の RUS の発話のなかに動詞後の補語(N)が接語重複する例が見られる。指示対象の В̀ьлев/Vălev 「ヴァレフ」は固有名詞であり、(3-79a)の発話に新情報として導入され、(3-79c)では旧情報となっている。(3-79b)の BV の発話でいったん主題がそれてしまったが、聞き手にとって十分に予測可能であると考えられるその指示対象は、動詞後の位置で接語重複している。

- (3-80) a. Удд'è пузнàвъш пь чил'àку òнзи
 Udd'è ruznàvš pǎ čil'aku ònzi
 from_where know-PRS.2.SG AM man-M.SG-DEF.M.SG that-M.SG
 уд Бр̀нèш? [mmm?]
 ud Brǎnèš? [mmm?]
 from Brǎnešti

「どうしてブラネシュティのあの人を知っているのか。[えっ?]

- b. Как гү пузнà пь чил'àку òнзи
 Как гу ruznà pǎ čil'aku ònzi
 how he-ACC.CL know-AOR.2.SG AM person-M.SG+DEF.M.SG that-M.SG
 уд Бр̀нèш...
 ud Brǎnèš...
 from Brǎnešti

「どうやってブラネシュティのあの方は知ったのか。」

(TO1_121108_001/3.17)

(3-80a)と(3-80b)はほとんど同じ内容を含む文となっているが、(3-80b)のほうにだけ動詞後の補語の接語重複が確認できる。定冠詞と指示代名詞の両方を伴った名詞句 чил'àку òнзи/čil'aku ònzi 「あの人」は(3-80a)で導入され、(3-80b)では全く同じ名詞句であらわされている。そのため、予測は容易であり、トピック標示の必要もなさそうであるが、動詞後の補語を再標示することによって明示的なトピック標示がなされている。

このように同じ内容の文を繰り返すような場合には、Ncl が指示する対象の予測は容易である。それにもかかわらず、このとき二文目において Ncl だけでなく、一文目と同じ補語(N)を用いて接語重複しているのは、聞き手の理解を補うという動詞後の補語の接語重複の語用論的機能が故である。これと似た例として次の(3-81)を見よ。

- (3-81) a. Ше зьнъ пь Мйми.
 Še zǎnǎ pǎ Mimi.
 FUT take-PRS.1.SG AM Mimi

- b. Йште дь йъ зьнъ пь Мйми.
 Ište dǎ jǎ zǎnǎ pǎ Mimi.
 want-PRS.1.SG SMP she-ACC.CL take-PRS.1.SG AM Mimi

「(私は) ミミをめとります。ミミならめとりたい。」
(TO2_150211_002/1.25.51)

(3-81a)では、最初の文で直接補語である名詞 **Мими/Mimi** 「ミミ」は接語重複していないが、その直後の(3-81b)では同じ名詞が接語重複している。(3-81b)では、Ncl だけでも指示対象が十分に予測できるが、聞き手の理解を補うため、全く同じ名詞(N)を動詞後に置くことで、明確にトピックとして標示している。その結果、動詞後の補語の接語重複が実現している。

旧情報である指示対象のトピック標示のほかに、Ncl が潜在的に複数の指示対象を表す場合に、そのうちの一方を特に指し示すために、N による再標示をすることで接語重複が行われている例もある。次の(3-82)を見よ。

(3-82) a. Мòйтү..... мумйчи зè инò мунчè.
Mòjtu..... mumiči zè inò munčè.
 my-N.SG+DEF.N.SG girl-N.SG take IDF.N.SG boy-N.SG
 「私の娘はある男と結婚した。」

b. Пѣк нй съ рѣзбрàўу със суўàкратъ.
 Pàk ni sã rãzbràwy sãs suwàkratã.
 but NEG REF understand-EVID.3.N.SG with mother-in-low+DEF.F.SG
 「けど、姑とおりがあわなかったみたいなの」

c. Нй йѣ рѣчй суўѣкрѣтъ
 Ni jã rãči suwàkrãtã
 NEG she-ACC.CL like-PRS.3.SG mother-in-low+DEF.F.SG
пѣ мòйтѣ дѣштерè.
pã mòjtã dãšterè.
 AM my-F.SG+DEF.F.SG daughter

「姑は私の娘のことを気に入らなかった。」(TO1_121108_001/33.04)

(3-82c)にて接語重複している名詞句 мòйтү дѣштерè/mòjtu dãšterè 「私の娘」は定冠詞を伴う所有代名詞を伴っており、定である。これは(3-82a)の発話で最初に用いられており、(3-82c)では旧情報である。

一方で、(3-82b)では、同じ性・数で表される суўàкратъ/suwàkuratã 「姑」も談話に導入されており、(3-82c)で人称代名詞 йѣ/jã 「彼女を」(Ncl)によって標示さ

れた指示対象が、「私の娘」と「姑」のどちらを指すのかが曖昧である。それゆえ、名詞句(N)を動詞後でトピックとして再標示することによって、Ncl の指示対象を明確にするという語用論的な機能を果たしていると考えられる。また、当該の N は対格標識 пъ/pă が伴われていることで、動詞後に置かれる二つのトピックの名詞句のうち、「私の娘」のほうが直接補語であることが明確に表されているということも指摘できる。

次にイントネーション上の休止を伴う RD の構造を持つ例を、語用論的観点から分析する。

(3-83) a. DM: Ймъф две..... мунчѐтъ, две..... мунчѐтъ.
 Ìmăf dve..... muncĕtă, dve..... muncĕtă.
 have-IMPF.1.SG two-N.PL boy-N.PL two-N.PL boy-N.PL
 「息子が二人いたんだ、二人の息子が」

Ний р̀абутиўми дв̀амъ, ам пъ т'̀аф
 Nij r̀abutiwmi dv̀amă, am pă t'̀af
 we-NOM work-AOR.1.PL two_persons but AM they-ACC
 「我々二人は働いて、」

ги г̀уждѐф дѐ, дѐ учѐт.
 gi g̀uždăf dă, dă učĕt.
 they-ACC.CL put-AOR.1.SG SMP SMP study-PRS.3.PL
 「彼らは (息子たちは) 学校にやったんだ。」

b. DM: Сѐне мунчѐту..... гул'̀амуту учѐ,
 Sĕne muncĕtu..... gul'̀amutu učĕ,
 later boy-N.SG+DEF.N.SG big-N.SG.+DEF.N.SG study-AOR.3.SG
 「それで、兄は勉強してから、」

cĕne идѐш пудѐр мѐне, нѐ н̀иўѐ. <...>
 sĕne idĕš pudĕr mĕne nă niwă
 later come-IMPF.3.SG after I-ACC on field
 「私のもとで畑仕事をしに来た。」

Ймъ <...> egzàmen. Trǎgnǎ ut niǔǔ,
 Ìmǎ <...> egzàmen. Trǎgnǎ ut niwǎ,
 have-PRS.3.SG exams start-AOR.3.SG from field
 「試験<...>があって、畑から出て、」

zè mǎšintǎ <...> ši uttìdi dǎ
 zè mǎšintǎ <...> ši uttìdi dǎ
 take-AOR.3.SG car.F.SG+DEF.F.SG and go-AOR.3.SG SMP
 「車に乗って<...>それで行った」

дадè egzàmen и кàт дòди нǎзǎт,
 dadè egzàmen i kàt dòdi nǎzǎt
 give-PRS.3.SG exams and when come-AOR.3.SG back
 「試験を受けに。それで帰ってきたら」

пàк нǎ niǔǔ. Tòj и пàк нǎ niǔǔ.
 pàk nǎ niwǎ. Tòj i pàk nǎ niwǎ
 again on field he-NOM be-PRS.3.SG again on field
 「また畑に出た。彼はまた畑に出たんだ。」

c. RUS: Ше утйў нǎ грòбиштǎ дǎ гү вйдиш
 Še utiwǎ nǎ gròbištǎ dǎ gu vidiš
 FUT go-PRS.1.SG to graveyard SMP he-ACC.CL see-PRS.2.SG

нèгүўтү мүнчè.

nèguwtu munčè.

his-N.SG+DEF.N.SG boy-N.SG

「墓場へ行って、彼の息子を見に行こう。」

d. DM: Дà, дàку штèш.

Dà, daku štèš.

yes if want-PRS.2.SG

「ああ、もしおまえさんが望むなら。」

RUS: Умр'а.

Umr'а.

die-AOR.3.SG

「死んだんだ。」

(Rus1_130927_002/1.28.47)

(3-83c)で接語重複している *nègyŭtu munčè/nèguwtu munčè* 「彼の息子」は、定冠詞付きの所有代名詞を伴った定名詞句である。この名詞句の指示対象は、(3-83b)で談話に導入された *munčetu gul'amutu/munčètu gul'àmutu* 「大きい息子 (=兄)」である。それに続く(3-83b)のDMの発話中ではすべてゼロ主語で表されている。ゼロ主語が文脈から予測が十分に可能な場合に実現することを考慮しても、ここで談話上のトピックとなっているのは、*munčetu gul'amutu/munčètu gul'àmutu* 「兄」であることがわかる。

それに続く(3-83c)のRUSの発話中でも、それは旧情報であるため、人称代名詞接語形 *gy/gu* 「彼を」(Ncl)による標示で、その指示対象が *munčetu gul'amutu/munčètu gul'àmutu* であることが、聞き手にも十分に予測できる。しかし、話者RUSは *nègyŭtu munčè/nèguwtu munčè* という名詞句(N)を、イントネーション上の休止のあとに付け足すことで、そのNclが指示している内容を補足的に説明している。それゆえ、ここでも聞き手の理解の補足という、語用論的な機能が働いているとみることができる。したがって、(3-83c)は、構造上の観点からのみならず、語用論的な観点からも、類型論的見地から想定されるRDの特徴を示す例であると言える。

以下(3-84)もまた、RDの位置にある補語の接語重複を伴う例である。

(3-84) a. *Sène... i òdiŭmi nŭ čèrkŭťť tàm. <...>.*
Sène... i òdiwmi nă čerkwătă tàm. <...>
later... and go-AOR.1.PL DM church.F.SG+DEF.F.SG there
「それで(私たちは)そこ(カリペトロヴォ)の教会へ行ったの。」

pòpu, tòj tàm, dètu služàskŭ, bŭl y Bukurèš.
pòpu, tòj tàm, dètu služàskă, bìl u Bukurèš.
priest he-NOM there REL serve-IMP.3.SG be-EVID.M.SG in Bucharest
「そこにいたお坊さんはブカレストにいたことがあるらしいの。」

Pò-nŭprèt služàskŭ y Bukurèš. <...> utidi tàm.
Pò-năprèt služàskă u Bukurèš. <...> utidi tàm.
earlier serve-IMP.3.SG in Bucharest go-AOR.3.SG there
「以前ブカレストで仕えていたの。<...>そこへ行ってから」

Чи учї бълг... [На Калипетрово?] Еў.
 Či uči bălg... [Na Kalipetrovo?] Ew.
 and study-AOR.3.SG Bulgarian in Kalipetrovo yes
 「ブルガリア語を勉強...[カリペトロヴォへ?] そうよ。」

b. Чи учї тàm из'ик'у, càў
 Či uči tàm iz'ik'u, sàw
 so study-AOR.3.SG there language-M.SG+DEF.M.SG or
гү **знàйў** **пò-нъпрèд, # бългърци.**
gu **znàjw** **pò-năpred, # bălgărcki.**
 it-M.SG.ACC.CL know-EVID.M.SG earlier Bulgarian-M.SG
 「そこでその言葉を勉強したのか、あるいはそれを以前から知っていたのか。ブルガリア語を。」 (BV3_131003_001/1.47.44)
 (BV3_131003_001/1.47.44)

(3-84b)で接語重複されている бългърци/bălgărcki 「ブルガリア語」は、(3-84a)の発話の最後で、話者 BV が途中まで言いかけたところで、対話者の発話に阻まれている。その後、同一の指示対象は、(3-84b)にて из'ик'у/iz'ik'u 「その言葉」という定冠詞を伴った別の語で言い換えられている。当該の指示対象は旧情報であり、(3-84b)で人称代名詞接語形 гү/gu 「それを」(Ncl)が指示する対象は、聞き手にとっても十分に予測可能であると考えられる。しかし、(3-83)の例と同様に、イントネーション上の休止のあとに、名詞句 бългърци/bălgărcki 「ブルガリア語」(N)を補うことで、直前で用いられている同一指示の人称代名詞接語形 гү/gu (Ncl)の意味内容を補完しており、ここでも RD の語用論的機能を見て取ることができる。

与格補語の例についても見る。

(3-85) a. Нъ край нъ Букуреш имъ идйн мъгзйн
 Nă krāj nă Bukurëš imă idin măgăzin
 at outskirts DM Bucharest have-PRS.3.SG IDF.M.SG store-M.SG
 гул'ам, дèту гү[sic!]¹⁷⁴ имйту Кòра.
 gul'àm, dètu gu[sic!] imitu Kòra.
 big-M.SG REL it-M.SG.ACC.CL name-N.SG+DEF.N.SG Kora

¹⁷⁴ 期待される形は与格形 му/mu である。

「ブカレストの郊外に、コラという名前の大きなお店がある。」

b. Тъй му дѹмъ Кòра
 Тăј му дѹмă Кòра
 so it-DAT.CL say-PRS.3.SG Kora
 # нѣ мѣгѣзѣну нѣгу.
 # нă măgăzînu nĕgu.
 DM store-M.SG+DEF.M.SG he-ACC

「それはコラっていうんだよ、そのお店は。」

(TM2_121029_001/45.51)

話者はある店の名前を聞き手に伝えるに際して、(3-85a)で言ったことを、(3-85b)で言い換えて述べている。(3-85b)で動詞後の位置を占める与格補語の **нѣ мѣгѣзѣну нѣгу/nă măgăzînu nĕgu** 「そのお店」は、それ自体が定冠詞を伴うだけでなく、指示代名詞の役割をもった人称代名詞非接語形である **нѣгу/nĕgu** 「その」によっても限定されており、定である。この与格補語の前置詞句が指し示している対象は、(3-85a)にて不定冠詞 **идѣн/idin** を伴って新情報として談話に導入されており、旧情報である。そのため、(3-85b)で話者はいったん人称代名詞接語形 **му/mu (Ncl)** だけで指示対象を標示するが、イントネーション上の休止のあとに、改めて与格標識 **нѣ/nă** を伴った前置詞句を再標示することで、当該の名詞をトピック標示している。このようにして、(3-85)の例にみられる **RD** による接語重複もまた、聞き手の理解を助けるという語用論的機能を果たしている。

以上の分析から、動詞後の補語の接語重複は、動詞前と同様に、トピックをあらわすと考えられる。また、指示対象が文脈から容易に予測されるような場合に、一旦 **Ncl** によって標示した指示対象を、**N** によって再標示することで、聞き手の理解を助けたり、指示内容を補完したりするような語用論的な機能も見出すことができる(cf. Сугаи 2017)。

3.3.3. まとめ

ブラネシュティ方言にみられる動詞前及び動詞後の補語の接語重複は、語用論的観点から、トピックを標示するという機能を持っていると言える。

動詞前は、動詞後と比べて、聞き手にとってその指示対象の予測がより困難な場合に用いられる傾向がある。また、ブラネシュティ方言では、一般的に文のトピックをあらわすために用いられる補語の接語重複が、フォーカスをあらわしている例も観察される。そのような例が観察されることは、補語の接語重複がトピックを標示するという機能を失い、フォーカスの補語とも共起できるようになるプロセスにあることを示唆している。これは補語の接語重複が持つ語用論的有標性が失われる過程にあり、補語の接語重複の文法化が拡大する方向に進んでいることを暗示しているともいえる。

また、動詞後の接語重複については、指示対象を Ncl だけでなく名詞句(N)で再標示することで、Ncl の指示対象を明確に示し、聞き手の理解を補うという語用論的機能もみられる。ただし、ブラネシュティ方言では、人称代名詞非接語形が動詞後で接語重複する例が頻繁に見られるが、この場合、N による再標示は、当該の語用論的機能を十分に果たしているとは言えない。このような例（動詞後の補語が人称代名詞非接語形である場合にも接語重複する）が頻繁に見られることは、ブラネシュティ方言の動詞後の補語の接語重複が示す独特な特徴であるといえる。動詞後の補語の接語重複もまた、本来の語用論的機能を失いつつあり、それによって接語重複が語用論的に無標化するプロセスにあるとみることができる。

4. 接語重複と文法化

本章では、ブラネシュティ方言にみられる補語の接語重複を文法化の観点から分析する。

すでに前章で見たように、ブラネシュティ方言における補語の接語重複の構造が示す特徴は、全体としては、標準ブルガリア語やブルガリア国内のブルガリア語諸方言と大きく変わらない。その一方で、対格標識の役割を持つ前置詞 *пъ/pă* が関与する場合の補語の接語重複は、明らかに異質な特徴を示している。このとき、*пъ/pă* が、やはり対格標識の役割も果たすルーマニア語の前置詞 *pe* の借用語であることを踏まえると、ブラネシュティ方言の *пъ/pă* を伴う補語の接語重複の特徴はルーマニア語の影響を受けて変化したという仮説を立てることができる。言語接触によって生じやすい言語変化が語彙や音韻論の面のみならず、言語構造のあらゆる側面、特に文法的意味や文法構造においてもおこりうることは、近年の類型論の研究が明らかにしているところである (cf. Thomason, Kaufman 1988; Heine, Kuteva 2005; Matras 2011 etc.)。それゆえ、ルーマニア語において前置詞 *pe* が持つ文法的意味とそれを伴った文法構造自体が、ブラネシュティ方言に言語転移 (linguistic transfer)¹⁷⁵した可能性も十分にあると考えられる。

文法的意味や文法構造の転移に基づく言語変化のプロセスには、文法化が関与する。文法化が言語の内的発展の結果ばかりではなく、外的要因である言語接触によってもたらされうることはよく知られており (cf. Hopper, Traugott 2003, Heine, Kuteva 2005; Matras 2011 etc.)、たとえばピジンやクレオールの研究はそのことをよく示している (cf. Thomason, Kaufman 1988; Hopper, Traugott 2003; also Givón 1976 etc.)。また、バルカンなどの言語圏 (linguistic area) における相互の言語接触によってもたらされる言語圏現象の大半が、文法化という普遍的なプロセスを経て生じていることもその一例である (cf. Friedman 1994; Heine, Kuteva 2005; Кръпова 2016 etc.)。ブラネシュティ方言においても、ルーマニア語から *pe* が言語転移される過程で、*пъ/pă* を伴った補語の接語重複の文法化が生じていることが考えられる。

本章では、補語の接語重複の文法化について論じる。

まず 4.1.1. 「文法化をめぐって」では、先行研究をもとに文法化について概観する。

4.1.2. 「接語重複の文法化」では、補語の接語重複がどのように文法化されるのかということについて、方言連続体を成すが同現象の文法化の程度につい

¹⁷⁵ 主にバイリンガルの話者の場合に、言語 A から言語 B へ言語特徴が転移すること。言語 A に固有である特徴を、言語 B にも適用することで生じる。

で対極の位置にあると考えられる、標準ブルガリア語と標準マケドニア語をもとに論じる。

また、4.1.3. 「方言と接語重複の文法化」では、接語重複が方言レベルではどのような実態をもっているのかということについて方言地図を用いて分析する。これによって、ブラネシュティ方言の起源であるブルガリア語北東方言における補語の接語重複の文法化の程度について明らかにする。

4.2. 「言語接触と文法化」では、いかに言語接触が文法化を引き起こすかということについて理論的背景を概説したのちに、ブラネシュティ方言の場合ではどのような実態がみられるかについて分析する。

4.3. 「ブラネシュティ方言の接語重複の文法化」では、ルーマニア語との言語接触という要因¹⁷⁶を念頭に置きながら、どのように、またどの程度において文法化が推し進められているのかということについて論じる。

¹⁷⁶ ブラネシュティ方言にみられるルーマニア語との言語接触の影響による言語変化として、補語の接語重複のほかには、定語の語順の変化があげられる。詳しくは菅井(2012b)及び Суган (2016a)を見よ。

4.1. 文法化

4.1.1. 文法化をめぐる

文法化理論の関心の対象は、ある文法的な形式や構造の誕生と発展である。それゆえ、文法化理論が目指すのはいかにして文法的な形式や構造が時間と空間を通して誕生し、発展するかを記述することであり、さらにはなぜ現在のような構造になっているのか、ということの説明することでもある(Heine, Kuteva 2002: 4-5; Heine 2003)。

文法化の研究の萌芽は、Heine (2003: 575-576)や Hopper, Traugott (2003: 19-21)によると、18世紀から19世紀にかけて見られ、具体性から抽象性、または語彙的な形式から文法的な形式への発展などに関する言及が見られるという。

20世紀初頭、Meillet (1912)が、現代まで用いられることになる「文法化(grammaticalisation)」という用語を初めて用いており、それを「かつての自立語への文法的特性の付与(l'attribution du caractère grammatical à un mot jadis autonome)」と定義している。Meillet (1912: 131-132)は、文法的な形式の誕生には、類推と文法化という二つのプロセスが関わっていることを指摘しているが、類推は新しい形式が同化できるような核となる形式が別に存在している場合にのみ適用されるので¹⁷⁷、類推よりも、自立語に文法的な役割を付与する文法化のプロセスのほうがこそが新しい文法形式の誕生の主要な源となっていると考えている。

Meillet (1912)以降、文法化は大きな注目を浴びることがなかったが、1970年代に入って Talmy Givón の研究とともに文法化に関する研究は大きな進展を見ることがになる。共時的な言語構造を理解するためには、その発展の前段階について知らなくてはならないという Givón (1971)の主張は、「今日の形態論は昨日の統語論である(Today's morphology is yesterday's syntax)」(Givón 1971: 413)という著名な言葉に集約されている。彼は後にこの考えを推し進め、文法(形態論や統語論)が、初期の談話レベルの段階から最終的なゼロの段階に至るまでの循環的な発展中の単なる一部分、つまり移行段階の一部を成しているに過ぎないことを以下(4-1)のように示している(Givón 1979: 209)。

(4-1) Discourse > Syntax > Morphology > Morphophonemics > Zero
(Givón 1979: 209)

本論文では、文法化とは、「語彙的な形式から文法的な形式へ、文法的な形式からより高度に文法的な形式への発展のプロセス」(Heine, Kuteva 2005: 14)であ

¹⁷⁷ Hopper, Traugott (2003: 22)は、類推による文法的な形式の誕生の一例として、英語において *shoen* という複数形が、*stones* にあるような複数形からの類推で *shoes* という複数形に置き換わる例を示している。

ると考える。換言すると、文法化とは、より具体的な意味をあらわす言語表現が、特定のコンテキストにおいて、より抽象的な意味（文法的な意味）を表すようになるプロセスである。つまり、具体的な意味を持った言語形式が、意思疎通の場面において、より抽象的できほど明確でない意味を表すために用いられるようになることを通して、語彙的な言語形式が文法的な機能を獲得していくと考えられている。それゆえ文法化の背景には、成功裏に意思疎通を行うことがあると仮定されている(Heine 2003: 578; cf. also Friedman 1994: 110; Givón 1976: 156)。

また、ある言語形式が文法化を経験する際には、特定のコンテキストや構造が関与するため、このプロセスがおこる語用論的及び形態統語論的な環境も文法化と関係がある。さて、言語形式の文法化には、次に挙げる4つのメカニズムが関与し、それぞれが互いに関係しあっている。文法化の程度を示す、形式の上でのパラメーターには様々なものがあるが、これらのメカニズムはそのパラメーターとして役に立つ。

(4-2) 文法化のパラメーター (Heine, Kuteva 2007: 34; 2005: 80)

- a. 拡張、すなわち言語表現が新たな文脈で用いられるときに、新しい文法的意味が台頭すること
- b. 脱意味化（あるいは「意味的漂白」）、すなわち意味内容の喪失（あるいは一般化）
- c. 脱カテゴリー化、すなわち単語あるいは文法化の程度が低い形式が形態統語的な特徴を消失
- d. 浸食（あるいは「音声的弱化」）、すなわち音声的実体の消失

それぞれ文法化の、(4-2a)は語用論的な、(4-2b)は意味的な、(4-2c)は形態統語論的な、(4-2d)は音声的な側面である。文法化の前提条件は、ある形式や構文が新たなコンテキストの中で用いられるようになることである。その新しいコンテキストは新しい意味的な解釈を伴いやすいので、新しい（文法的な）意味の台頭(4-2a)もまた文法化の前提条件になる。それに対して、残りの(4-2b-d)のパラメーターは、(4-2a)の「拡張」によりもたらされるもので、いずれももともと言語形式が持っていた特質の喪失が関与している。具体的には(4-2b)は意味内容の喪失、(4-2c)は形態統語的な特徴の喪失、(4-2d)は音声的実体の喪失である(Heine, Kuteva 2005: 15)。文法化した言語形式はすべてのパラメーターを満たすことが理想的であるが、一部のパラメーターに限られることも少なくない(Heine, Kuteva 2005: 89)。

Heine (2003: 580)は、以下(4-3)に示すスワヒリ語の「欲する」を意味する動詞が未来時制の時制標識に発展する文法化のプロセスを例に説明している。

(4-3) Swahili (Bantu, Niger-Congo)¹⁷⁸: (Heine 2003: 580)

a. a- taka ku- ja
C1.PRS want INF come
“He wants to come”

b. a- taka- ye ku- ja
C1 FUT C1.REL INF come
“He who will come”

c. a- ta- ku- ja
C1 FUT INF come
“He will come”

言語形式（動詞-taka「欲する」）は、新たなコンテキストでも用いられるようになること（典型的に人間主語をとるが、無生物主語もとるようになる）を通してその用法が拡張される。それに伴ってもととの語彙的な意味は“漂白化”され、脱意味化が生じる。その新しい用法にしたがって、本来の用法に特徴的な文法カテゴリー上の特性を失うことで、脱カテゴリー化を経験する（独立した語としてのステータスとその他、動詞の持つ特性の大半を失い、別の動詞に対する接辞となる）。そして、その言語形式はより頻繁に、より多くのコンテキストで用いられる傾向が強まることで、その形式の使用がより予測可能なものになり、結果的に音声的実体の消失（-taka が未来形の標識として用いられる場合に-ta-となる）、すなわち浸食にもつながる¹⁷⁹。ただし、文法化の初期の段階では、語彙的な意味から文法的な意味への変化があったとしても、その変化に伴う語用論的、形態統語論的、あるいは音声的な変化というものは見えにくい傾向がある。

文法的でない形式（語彙的な要素）から文法的な形式への変化は、一度に変化するものではなく、一連の小さな変化を繰り返しながら進む、いわば連続的なプロセスであると考えられる。たとえば、Hopper, Traugott (2003: 6-7)はそれを指して連続体(*clines*)という用語を用い、次のように説明している：「たとえば、身体部位をあらわす *back* のような語彙的な名詞は *in/at the back of* のなか

¹⁷⁸ グロスと英訳はそのまま引用する。ただし、形式は本論文における方法にそろえる形で修正する。なお、C1 = noun class 1 をあらわす(Heine 2003: 600)。

¹⁷⁹ 「欲する」を意味する動詞が未来形の標識となることは通言語的に広く観察される文法化の例であるというが(Heine 2003: 594)、ブルガリア語もこのスワヒリ語と全く同じタイプの文法化を経験している(**hoštetъ* > *ще/šte*)。

で空間的な関係を表すようになり、副詞になりやすく、そしておそらく最終的には前置詞や格接辞にすらなる。 <...> 語彙的名詞から、関係を表す表現、副詞や前置詞、そしておそらくは格接辞への発展は、私たちが連続体(cline)で意味するところの例である。」そして、その連続体的な変化はおおよそ次のような段階を経ると考えている。

(4-4) content item > grammatical word > clitic > inflectional affix
(Hopper, Traugott 2003: 7)

それぞれの間で明確な境界線が存在するわけではないが、おおまかにこの線上で左から右に進むほどより文法的な形式であることがあらわされている。また、この連続体は通時的にも、共時的にも理解されうる(cf. Hopper, Traugott 2003: 6; Heine 2003: 589)。

一方、Heine (2003: 589-590)は、「文法的変化はオーバーラップするような構造を示す」ため、連続体にかわって「文法化連鎖(grammaticalization chain)」という用語の使用を提唱している。その理由は、文法的形式の変化には、元となる意味や形 A から、B の意味や形に直接変化するわけではなく、A と B が互いに共存することで、曖昧な状態を作り出す中間的な段階が常に関与するためである(A > A/B > B)。つまり、Heine (2003: 579)によれば、文法化のプロセスは、次の3つの段階を経ると考えられる。

- (4-5) a. 文法化のために採用される A という言語表現がある。
- b. この言語表現が二つ目の用法 B を獲得し、その結果 A と B の間で曖昧性が生じる。
- c. 最終的に、A は失われ、B だけが残る。

すべての文法化の例が(4-5c)の段階まで達するわけではなく、(4-5b)の段階でとどまるようなこともある。その一方で、いったん(4-5c)の段階まで進むと、2つ目の用法である B は慣用的に用いられるようになる。つまり、新しい文法カテゴリーへと変化する。このプロセスの結果、文法化は連鎖のように(chain-like)行われていくようになる(Heine 2003: 579)。

Heine (2003: 590)は、以下(4-6)に示すように、スワヒリ語の-taka「欲する」という動詞が「～するところ(be about to)」をあらわすアスペクト標識へ変化((4-3)の未来形の例とは別である)する事例を例に出している。

(4-6) Swahili (Bantu, Niger-Congo)¹⁸⁰: (Heine 2003: 590)

a. A- na- taka ku- ni- ita
C1 PRS want INF me call
“He wants to call me”

b. A- na- taka ku- fa
C1 PRS want/PROX INF die
i “He wants to die”
ii “He is about to die”

c. M- ti u- na- taka ku- anguka
C3 tree C3 PRS PROX INF fall
“The tree is about to fall”

語彙的な意味がある段階(4-6a)は主語が人間である場合に見られるのに対して、文法化してアスペクト標識となっている段階(4-6c)は、典型的には無生物が主語である場合にみられる。このとき、人間が主語であっても、述語の表す意味によって、語彙的な意味のままとらえられる場合も、文法的なマーカーとしてとらえる場合もあり、それによって曖昧さが生じうる中間の段階(4-6b)が存在する。この橋渡しの段階の介在こそがオーバーラップの典型例であるという。

文法化理論における大きな問題点としてよく取り上げられるのは、変化の方向性である。

一般的に文法化のプロセスは、具体的/語彙的な意味から、抽象的/文法的な意味へと発展する一方向的な性質(unidirectionality)を持つものと考えられている(cf. Hopper, Traugott 2003: 16)。この一方向性仮説は、類型論的見地からの研究に基づいた仮説であり、文法的な形式の起源が語彙的な形式にあるというような言語変化の方向性は広く知られており、多くの例も実際に見つかっている。

その一方で、この仮説に反すると考えられる例もいくぶん報告されている(cf. Heine 2003: 582)。しかし、Heine (2003: 582)は、まずそのような例がごくわずかであり、しかもその一方向仮説に反証すると考えられるような例がいずれも文法化による変化のプロセスと反対の例ではないということ、さらにそれらの例が特異であり、文法カテゴリーの発生と変化の方向性の点で通言語的な一

¹⁸⁰ グロスと英訳はそのまま引用する。このとき、PROX = proximative aspect, C3 = noun class 3 をあらわす(Heine 2003: 600)。

般化が不可能なため、文法化の一方向性仮説を否定するものとは考えていない。

たとえば、文法化のパラメーター(4-2)のうち、一方向性にそぐわないように思われる例として、文法化を経験する際にみられる音声的実態の消失をあげることができる。特に言語接触の場合に引き起こされる文法化に際して、新しい言語形式に移行する途中の段階で、借用された言語形式と元から存在する言語形式が共存するプロセスを経ることがある。一見すると音声的実体は消失どころか増加しているとみることができるだろう。しかし、実際のところこれはあくまで過渡的なオーバーラップの段階にあたるものであり、最終的には新しい形式によって置き換えられることで音声的実体の消失につながる(Heine, Kuteva 2005: 17-18)。

本論文でもおおむねこの Heine (2003)らの考え方に従い、文法化のプロセスは一般的に一方向的であると考え、一方向性仮説の検証は本論文の主要な問題ではないため、ここでは文法化理論における基礎的な考え方である一方向性仮説の持ちうる問題を指摘するだけにとどめる。

以後、本章では、ここで述べた文法化の特性や、文法化の程度をはかるパラメーターなどをもとに、文法化理論の観点から、標準ブルガリア語やブルガリア語諸方言、そしてブラネシュティ方言にみられる補語の接語重複の分析を行う。特に、ブラネシュティ方言における接語重複の文法化が、ルーマニア語との言語接触を経て推し進められた可能性について、これらの分析を通して、検討する。

4.1.2. 接語重複の文法化

Heine, Kuteva (2005: 192-194)は、バルカン諸語に見られるいわゆるバルカニズムを文法化の観点から分析しているが、補語の接語重複についても次のように分析している。

接語重複の構造中で、人称代名詞接語形は、直示的及び語用論的な特性を失うという文法化パラメーター中の(4-2b)「脱意味化」、及び代名詞から統語的にかなり予測可能な一致標識への変化を伴う(4-2c)「脱カテゴリー化」を経験する(Heine, Kuteva 2005: 192-194)。つまり、代名詞から、より一層文法的な形式である一致標識への変化がみられると考えている。

本節(4.1.2.)では、(4-2)にある文法化のパラメーターを考慮しながら、同現象の形態統語的な特徴の分析を行うことを通して、ブルガリア語の補語の接語重複の文法化の可能性について検討する。このとき、ブルガリア語と方言連続体を成し、同現象の文法化がより進んでいることが知られるマケドニア語との比較のなかで分析をおこなうことで、両者の相違点や共通点を明らかにする過程で、接語重複の文法化について検証する。

4.1.2.1. ブルガリア語とマケドニア語

4.1.2.1.1. 概要

ブルガリア語とマケドニア語は、スラヴ語派中で南スラヴ語群に分類され、特にこの二つの言語は南スラヴ語群中でもっとも近い関係にあり、いわゆる方言連続体(dialect continuum)を成す¹⁸¹。この二つの南スラヴ語には、ともに補語の接語重複が観察されるが、それらの用法やふるまいは大きく異なる。そこで、ブルガリア語とマケドニア語における同現象の差異に着目し、文法化の観点からその差異の要因について、標準語のみならず方言のレベルでも考察する。

以下(4-7)は、命題的な意味が同じである標準マケドニア語[MK]と標準ブルガリア語[BG]の文である。

(4-7) a.	<u>My</u>	<u>го</u>	давам	<u>МОЛИВОТ</u>
	<u>Му..</u>	<u>го</u>	davam	<u>molivot</u>
	he-DAT.CL	it-M.ACC.CL	give-PRS.1.SG	pencil-M.SG+DEF.M.SG
	<u>на.....момчето.</u>		[MK]	
	<u>na.....momčeto.</u>			
	DM	boy-M.SG+DEF.M.SG		

¹⁸¹ このような言語状況と、歴史的な背景から、ブルガリア語において、標準マケドニア語及びマケドニア語の諸方言は、それぞれブルガリア語の地域標準語とブルガリア語の方言とみなされることがある。

「(私は) その少年にその鉛筆を与える。」 (Friedman 2008: 36)

b. Давам	(<u>му</u>	<u>го</u>)	<u>МОЛИВА</u>
Davam	(<u>mu</u>	<u>go</u>)	<u>moliva</u>
give-PRS.1.SG	he-DAT.CL	it-M.ACC.CL	pencil-M.SG+DEF.M.SG
на...момчето. [BG]			
na...momčeto.			
DM boy-M.SG+DEF.M.SG			

「(私は) その少年にその鉛筆を与える。」

標準マケドニア語では、定の直接補語である моливот/molivot 「その鉛筆」と定の間接補語の на момчето/na momčeto 「その男の子に」の両方とも接語重複が義務的であるのに対して、標準ブルガリア語では、可能ではあるが、ふつうは接語重複しない。このように、マケドニア語とブルガリア語の間では、補語の接語重複の実現に際して、一方は義務的であるのに対して、もう一方は随意的であるというような違いが見られる。

4.1.2.1.2. 標準マケドニア語の記述

次に、それぞれの標準的な文法書では、補語の接語重複についてどのような記述がなされているかを見る。

まずマケドニア語については、標準マケドニア語の文法書として知られる Конески (1967)、及び標準マケドニア語の統語論に詳しい Манова-Ѓуркова (2000)にみられる補語の接語重複の記述を整理する。

直接補語について、Конески (1967: 261-263)は「[直接]補語の位置に、後置定冠詞付きの名詞（あるいは、固有名詞のように別の手段で定である名詞）が立つ時は、動詞に隣接した位置には、同じ役割として対応する人称代名詞の短形¹⁸²も必ずおかれる」と述べ、その例外はいくつかの決まった表現や詩においてみられるのみで、それ以外における人称代名詞接語形の欠如は、一般的に「言語[規範]の重大な違反」と感ぜられるという(Конески 1967: 216)。さらに、定冠詞を伴わない名詞の接語重複の存在についても言及されている。

また、間接補語について、Конески (1967: 266)は「人称代名詞の[二重]使用は、定冠詞を持たない名詞の時も規則的である」と述べ、「この場合に人称代名詞を用いないことは極めてまれとなるであろう」とさえ指摘している。

¹⁸² 接語形のことを指す。

Манова-Ѓуркова (2000: 206-215)は、標準マケドニア語における接語重複についてより詳細に述べている。基本的には、Конески (1967)と同じで、直接補語は定の名詞句である場合には規則的に重複することを指摘する(cf. also Lunt 1952: 38)。さらに、不定冠詞 еден/eden や不定代名詞 некој/некој「ある」を伴い不定である直接補語の重複についても、比較的まれであるが用いられうることも述べている(Манова-Ѓуркова 2000: 211)。逆に、「定冠詞か、あるいは定を標示するもの(例えば、指示代名詞など)、あるいは不定を標示するもの(еден/eden, некој/некој「ある」)を持たずに用いられる名詞句は、直接補語の機能を持つとき、人称代名詞短形で重複されることはない」と Манова-Ѓуркова (2000: 212)は総括している。一方、「間接補語は、直接補語よりもより規則的に重複される」ことを指摘し、еден/eden を伴い不定となる名詞句の場合には直接補語の場合と比べて重複がより一般的であるだけでなく、直接補語では重複されえないような名詞句(例えば疑問詞 кој/кој「誰」や様々な代名詞)の場合でさえも重複されることが述べられている(Манова-Ѓуркова 2000: 214-215)。

以上、標準的な文法書の記述で明らかのように、少なくとも標準マケドニア語における補語の接語重複は、一般にかなり高い義務性を有していることがわかる。

4. 1. 2. 1. 3. 標準ブルガリア語の記述

次に、標準ブルガリア語の記述を整理する。

科学アカデミー発行の現代標準ブルガリア語の文法書である Попов et al. (1983: 187)によれば、接語重複は「口語に特徴的な統語的現象」であり、また接語重複を使用することは「文章語における口語的な要素を強める」ことになるといふ。Мирчев (1963: 224)は、文章語ではふつう避けられるとさえ述べている(cf. also Leafgren 1997)。

これに加えて、標準ブルガリア語の補語の接語重複に関する多くの先行研究(Цивьян 1965: 34; Лопашов 1978: 28; Маслов 1982: 304-30; Franks, King 2000: 251)が示すように、標準ブルガリア語では補語の接語重複の使用は一般的に随意的であることが知られる。

その一方で、Попов et al. (1983: 187-188)は、格変化を失った標準ブルガリア語は、語順が比較的自由なこともあり、主語と補語の区別があいまいになることがあるが、補語の接語重複がその曖昧さの軽減に役立つことについても指摘することで、補語の接語重複が持ちうる機能についても言及している。

以上の事より、標準ブルガリア語における補語の接語重複は、口語に特徴的なものであり、また文章語では避けられる傾向にあることが示されている。ま

たそれゆえ、接語重複の実現は随意的な傾向がある。

4.1.2.1.4. まとめ

標準マケドニア語と標準ブルガリア語とで、補語の接語重複のふるまいが大きく異なることは明確である。標準マケドニア語では全体的に義務的な様相を呈し、その使用が文法的に条件づけられている。それに対して、標準ブルガリア語ではふつう随意的に用いられるものであり、文法的に条件づけられることはほとんどない¹⁸³。また、接語重複自体は、話し言葉に特徴的な現象で、書き言葉においてはその使用がまれとなる傾向がある。

標準ブルガリア語における補語の接語重複は、たとえば Асенова (2002: 108) や Guentchéva (1994: 159) などによる「補語をトピック化するための統語的な手段」という指摘からも明らかのように、文法的というよりは、一般的に語用論的に条件づけられている現象である。また、補語の接語重複の“随意性”は、このため生じていると考えることができるであろう。つまり、接語重複するかどうかは、文法によってではなく、話者が補語をトピックとして標示するかどうかの意向によって決定されるため、一見“随意的”にみえるのである。標準ブルガリア語における補語の接語重複にみられるこの特徴は、トピックであるかどうかに関係なく広く接語重複がなされる標準マケドニア語とは大きく異なる点であると言えよう。

バルカン諸語にみられる補語の接語重複の総合的研究を行った Лопашов (1978: 124) は、標準ブルガリア語と標準マケドニア語を含むバルカン諸語における補語の接語重複は基本的に同一の現象であり、言語間でみられる差異は文法化の程度の違いによりもたらされることを指摘している。つまり、標準マケドニア語と標準ブルガリア語の間に見られる補語の接語重複の用法やふるまいにみられる差異もまた、文法化の程度の違いによってもたらされていると考えられるのである。

以下、文法化の観点から、標準マケドニア語と標準ブルガリア語にみられる補語の接語重複を分析していく。

¹⁸³ ただし、文法的に条件づけられた補語の接語重複も標準ブルガリア語にみられる。いわゆる「文法化重複」である（詳しくは、2.2.3.3. 「接語重複の義務性」を見よ）。文法化重複は、次に示す述語を伴った場合に起こる：対格/与格の経験者(experiencer)の項を要求する心理・身体的状態を表す述語、モーダルな述語、存在/不在を表す述語など(cf. Krapova, Cinque 2008)。

4.1.2.2. 人称代名詞接語形の位置

まず、人称代名詞接語形が文中でとる位置に着目する。

標準マケドニア語と標準ブルガリア語を比較した際に、人称代名詞接語形の語順に関して、両者の間で違いが見られる。

標準ブルガリア語では、人称代名詞接語形は基本的に動詞に隣接した位置に現れ¹⁸⁴、通常はその動詞と一つの韻律的なまとまりを成す。ただし、動詞に対して先行した位置と後続した位置の両方を占めることが可能であり、そのどちらかを占めるかは、動詞と人称代名詞接語形のまとまり（本論文では、2.2.2.2.1. 「概要」でも述べたように、これを動詞句と呼ぶ）が文中のどの位置を占めるかによる。一般的に、動詞句中で人称代名詞接語形は動詞に先行した位置を占めるが、標準ブルガリア語の人称代名詞接語形のエンクリティック的な特性ゆえに、先行する語にもたれかかることができず、文頭の位置を占めることができない。したがって、動詞句が文頭におかれるような場合には、人称代名詞接語形は動詞に後続する位置におかれる(4-9)。以下、本節(4.1.2.2.)では、人称代名詞接語形の与格と対格の接語群に波線を、動詞に実線を付す。

- (4-8) a. Вера ми го даде вчера.
 Vera mi go dade včera.
 Vera I-DAT.CL he-ACC.CL give-AOR.3.SG yesterday
- b. Вчера ми го даде Вера.
 Včera mi go dade Vera.
- c. Вчера Вера ми го даде.
 Včera Vera mi go dade.
- d. *Вера ми го вчера даде.
 *Vera mi go včera dade.
- e. *Ми го даде Вера вчера.
 *Mi go dade Vera včera.

¹⁸⁴ ただし、必ずしもそうではない。疑問の助詞である ли/li がかかわる場合には、この助詞が動詞の直後に置かれるため、人称代名詞接語形はそれに後続する位置を占めることになる。

f. *Вера даде ми го вчера.

*Vera dade mi go včera.

「昨日ヴェラは私にそれを与えた。」 (Franks, King 2000: 63)

(4-9) Даде ми го Вера вчера.

Dade mi go Vera včera.

give-AOR.3.SG I-DAT.CL it-ACC.CL Vera yesterday

「昨日ヴェラは私にそれを与えた。」 (Franks, King 2000: 63)

このとき、文法的に正しい(4-8a)～(4-8c)では、接語群が動詞に対して隣接しており、また文頭には別の要素があるため動詞句は文頭の位置に置かれず、接語群は動詞に先行する位置をとっている。一方で、(4-8d)では接語群が動詞に隣接していないので非文となる。また、(4-8e)では接語群が文頭の位置を占めており、(4-8f)では動詞句が文頭に置かれてはいないのに接語群が動詞に後続しているため、非文となる。

標準ブルガリア語では、この人称代名詞接語形の語順の規則は、非定形動詞を含め、動詞のほとんどすべての形態に及ぶ (cf. 2.2.2.2. 「語順の特徴」)。例外は、副動詞の場合であり、このときに限っては、この語順の規則が必ずしも適用されるわけではない。人称代名詞接語形と副動詞が句を成す場合に、その句が文頭におかれなくても、人称代名詞接語形は動詞に対して後続することがあり、またそれが好まれさえするという (Franks, King 2000: 65)。

一方で、標準マケドニア語は、人称代名詞接語形が動詞に隣接した位置を占める点ではブルガリア語と同様である。しかし、基本的にプロクリティック的な性質を有するので、少なくとも定形動詞(*finite verb*)については常に動詞に先行する。この点で標準マケドニア語は標準ブルガリア語と大きく異なる。

ただし、命令形はこの規則にしたがわないことがある。命令形の場合、人称代名詞接語形は動詞に後続するのが一般的である。ただし、(4-10)にあるように否定の助詞 *не/ne* を伴って否定命令となる場合には、命令形の動詞に対して先行した位置を取りうるが(4-10a)、標準ブルガリア語と異なり、そうでなくてもよい(4-10b)。

(4-10) a. Не ми го носи! [MK, BG]

Ne mi go nosi!

NEG I-DAT.CL it-ACC.CL bring-IMP-2.SG

b. He носи ми.....го! [MK, *BG]

Ne nosi mi.....go!

NEG bring-IMP.2.SG I-DAT.CL it-ACC.CL

「私にそれを持ってくるな。」 (Franks, King 2000: 83)

(4-10a)では、人称代名詞接語形の接語群が命令形の動詞に先行しているが、文頭には否定の助詞 **не/ne** があるため、この語順は標準ブルガリア語でも可能である。一方で、(4-10b)のように否定の助詞 **не/ne** があるにもかかわらず、命令形の動詞に後続した位置を人称代名詞接語形が取ることは標準ブルガリア語では非文法的な語順だが、マケドニア語では可能な語順であるとされる (Franks, King 2000: 83)。

以上のように、標準ブルガリア語と標準マケドニア語における人称代名詞接語形が文中で占める位置を比較すると、両者は次の点で大きな差異がみられる。

標準ブルガリア語では、動詞に対して先行することも後続することも可能であるが、それを決定する要因となるのは人称代名詞接語形が文中で占める位置である。その一方で、標準マケドニア語では、一般的に定形動詞に対して先行するが、命令形の場合には後続する語順を取ることも可能となる。

つまり、標準ブルガリア語の人称代名詞接語形の語順は文中での位置により決定されるのに対して、標準マケドニア語のそれは文中での位置ではなく、動詞そのものの形態によって決定されるのである。(4-4)のスケール上では、標準マケドニア語の人称代名詞接語形は、標準ブルガリア語のそれよりも右にあるものと考えらる。

4.1.2.3. 他動詞性の標示

標準マケドニア語及び標準ブルガリア語ではふつう、他動詞と自動詞の区別は、形式の上で明確に標示される。一般的には自動詞の方が、再帰代名詞接語形対格由来の **ce/se** という標識を伴うことで明示的に示される。しかし、実際には必ずしもそうではない。たとえば、以下(4-11b)の標準ブルガリア語の例では、動詞 **спря/spr'a** は自動詞として用いられているが、**ce/se** を伴っていない。

(4-11)a. Спря трамвая. (Aronson 2007: 18) [BG]

Spr'a tramvaja.

stop-AOR.3.SG street_car.M.SG+DEF.M.SG-OBL

「(彼は) 路面電車を止めた。」

以下(4-12)は標準マケドニア語の例である。

(4-12) a. Ja започна работата. [MK]
 Ja запоќна rabotata.
 it-F.SG.ACC.CL start-AOR.3.SG work-F.SG+DEF.F.SG
 「(彼は) その仕事を始めた。」

b. Започна работата. [MK]
 Запоќна rabotata.
 start-AOR.3.SG work-F.SG+DEF.F.SG
 「その仕事が始まった。」

(4-12)において用いられている動詞 *започна/zapoќna* 「始まる/始める」は(4-12a)及び(4-12b)の両方で同じ動詞形態をとっている。また、標準マケドニア語では後置定冠詞に形式上で格の区別はないので、*работа/rabota* 「仕事」に用いられる後置定冠詞はいずれも *-ra/-ta* である (もともと標準ブルガリア語でも女性の後置定冠詞には格の区別がない)。それでも、*започна/zapoќna* は、(4-12a)では他動詞として、(4-12b)では自動詞として用いられていることが明確である。(4-12a)では、定である直接補語 *работата/rabotata* 「その仕事」(N)と人称代名詞接語形の *ja/ja* (Ncl)が同時に用いられている (つまり、接語重複している)。一方で、(4-12b)では *ja/ja* (Ncl)がない (つまり、接語重複していない)。すでに4.1.2.1. 「ブルガリア語とマケドニア語」で見たように、標準マケドニア語では定の直接補語の接語重複は義務的であるので、接語重複していない(4-12b)の *работата/rabotata* を直接補語としてみることはできず、この場合はむしろ動詞 *започна/zapoќna* の主語と判断される。つまり、標準マケドニア語で、自動詞と他動詞の形式上の区別を行っているのは接語重複している人称代名詞接語形 (Ncl)である。このようにして、標準マケドニア語では接語重複によって、他動詞か自動詞かの曖昧さはほとんどの場合において生じないことになる。

標準ブルガリア語においても、同様に接語重複により同様に意味の曖昧性が回避されうるが、接語重複は“随意的”であるため、定である直接補語及びほとんどの間接補語で接語重複が必ず実現する標準マケドニア語と異なり、接語重複によって曖昧性が回避される例は極めて限られてくる。そのため、標準ブルガリア語では、人称代名詞接語形が他動詞性を標示することはまれである。とはいえ、接語重複によって二重に使用される人称代名詞接語形は、一定の場合には当該の動詞が他動詞として用いられていることを形態的に示す要素となりうるだろう。

一方で、標準マケドニア語では、接語重複する人称代名詞接語形(Ncl)が、かなりの程度で他動詞性の標識となっているということは、Цыхун (1968: 86)の「他動詞性の形式的な標識となるのは、動詞に隣接しておかれる代名詞接語である。対格の接語形がないと当該の動詞は文中で自動詞として現れる」という指摘からも明らかである。標準マケドニア語では、さらに、本来的に自動詞であるような移動をあらわす動詞や状態を表す動詞さえも、以下(4-13)にあるように、人称代名詞接語形を伴うことで、他動詞として用いられる(Цыхун 1968: 119)。

(4-13)a. Блаже седна до него. [МК]
 Blaže sedna do nego.
 Blaže sit_down-AOR-3.SG next_to he-ACC
 「ブラジェは彼の隣に座った。」(Цыхун 1968: 86)

b. Кога го седна девојчето [МК]
 Koga го sedna devojčeto
 when he-N.SG.ACC.CL sit_down-AOR.3.SG girl-N.SG+DEF.N.SG
 на балите...
 na balite...
 on bale-PL+DEF.PL
 「その娘を藁の俵の上に座らせたとき...」(Цыхун 1968: 86)

(4-13)では同じ седна/sedna という動詞が用いられている。この動詞は、人称代名詞接語形が用いられていない(4-13a)では自動詞「座った」と解釈される一方で、人称代名詞接語形 го/go が用いられている(4-13b)では他動詞「座らせた」と解釈される。

さらに、標準マケドニア語では本来的な再帰動詞(собственно-возвратные глаголы)¹⁸⁷でさえも人称代名詞接語形の標示によって他動詞性を獲得する(Цыхун 1968: 119)。再帰代名詞に代わり、人称代名詞接語形の各格形がこの位置に立つことができ、そうすることで、以下(4-14)にあるように、се смее/se smee 「笑う」のような本来的な再帰動詞でさえも他動詞として用いられうる¹⁸⁸。

¹⁸⁷ ce/se を伴わない形を持たない動詞（つまり、ce/se を持つ形しか存在しない動詞）のことを指す。たとえば、標準マケドニア語の се смее/se smee 「笑う」は再帰代名詞 ce/se が欠如した形*смее/*smee がない。

¹⁸⁸ 次の(i)にあるように、се смее/se smee 「笑う」のような動詞が、再帰代名詞 ce/se や人称代名詞接語形を持たない場合は非文法的とみなされる。それゆえ、

(4-14)Го	смеам	детето.	[МК]
Go	smeam	deteto.	
he-N.SG.ACC.CL	laugh-PRS.1.SG	child-N.SG+DEF.N.SG	

「(私は) その子を笑う。」(Цыхун 1968: 119)

(4-12)の例に加え、本来的な自動詞や再帰動詞が関与する(4-13)や(4-14)の場合でも、接語重複によって用いられる人称代名詞接語形が他動詞性の標識となっている事実は、標準マケドニア語の接語重複が新たな文法的な機能(他動詞性の標示)を獲得していることを示している。

以上の事から明らかなように、他動詞と自動詞が形態的に区別されない動詞が存在するが、標準ブルガリア語でも標準マケドニア語でも、それによって生ずる曖昧性を回避する手段が存在する。標準マケドニア語ではほとんど義務的な接語重複により、標準ブルガリア語では随意的ではあるがやはり接語重複により、主語と補語の区別がなされるために¹⁸⁹、理解が保たれるのである。つまり、自動詞の方が *ce/se* を伴って形態的に有標となるような場合以外にも、他動詞の方が、補語との一致標識である人称代名詞接語形(Ncl)の存在によって形式の上で有標となることがある。

以上の議論を踏まえると、とりわけ標準マケドニア語では、ほとんど義務的な接語重複が、動詞の他動詞性を明示的に標示するという文法的な機能を持っていると見ることができる。

4.1.2.4. 多人称一致動詞

すでに 4.1.2.2. 「人称代名詞接語形の位置」で見たように、標準マケドニア語では、人称代名詞接語形がプロクリティックな性質をもち、定形動詞では常に動詞に先行した位置で与格・対格の順で接語群を成し、常に後続する動詞と

このタイプの動詞は、人称代名詞接語形の使用が義務的ではない、ふつうの他動詞とは明らかに異なる。たとえば、*читам/čitam* 「読む」なら、*читам книга/čitam kniga* 「本を読む」も可能だが、(i)は言えない。

(i) *Смееш	дете.	[МК]
*Smeeš	dete.	
laugh-PRS.2.SG	child	

¹⁸⁹ 標準ブルガリア語の場合、接語重複が随意的であるため、人称代名詞接語形は主語と補語の区別に対して補足的な手段としかかなりえない(Цыхун 1968: 111, 117)。

一つの韻律的なまとまりを形成する。また、標準マケドニア語の動詞には、他動詞と自動詞が同一の形態で曖昧さが生じるが、ほとんど義務的に実現する補語の接語重複により、その曖昧性は大方の場合回避される。

以上の二つの特徴を踏まえると、人称代名詞接語形は、動詞に対する接辞となっており、それは動詞において示される他動詞性の形式的な標示でもある。Цыхун (1968: 120)は、これを動詞の文法カテゴリーの人称とみなして、「目的語の人称カテゴリー(категория объектного грамматического лица)」と呼んでいる(cf. also Цивьян 1979: 207)。つまり、標準マケドニア語の他動詞は、以下(4-15)に示すように、主語との人称・数での一致は当然の事、補語とも人称・数で一致して変化する、いわゆる多人称一致動詞(polypersonal agreement verb)¹⁹⁰と見ることができる(cf. Aronson 1997: 38-39; 2007: 24-27; Friedman 2008: 40)。

(4-15)Му-го-дад-ов [МК]
Mu-go-dad-ov
he-DAT.CL+it-ACC.CL+give-AOR.1.SG
「私は彼にそれを与えた」(Aronson 2007: 24)

(4-15)に示されているように、動詞語幹 дад/dad に後続する位置に主語との一致を表す語尾-ов/-ov が付される一方で、それに先行する位置では順に間接補語(му-/mu-)、直接補語(го-/go-)との一致を表す接辞がそれぞれ付されているとみることができ、これらをすべて合わせて 1 つの多人称一致動詞として再分析できる。このような解釈の利点について Aronson (1997: 39)は、接語重複の使用の形態統語的及び意味的な動機(他動詞と自動詞の曖昧さの解消)を提示することができるとしている。

また、再分析の結果、標準マケドニア語の動詞のパラダイムは大きく 2 つのタイプにわけることができるだろう。

他動詞とも自動詞とも言わないいわば他動性について無標のパラダイム I (4-16)と、他動性について有標なパラダイム II (4-17)である。パラダイム I には、直接補語を取ることができるが取らなくてもよい動詞に加え、そもそも直接補語を取ることができない自動詞が入る。一方で、パラダイム II には定か

¹⁹⁰ また、Цивьян (1979: 207)も「補語の活用」(объектное спряжение)と呼んでいる。マケドニア語の統語論について論じている Манова-Ѓуркова (2000: 207-208)も Цивьян の指摘を踏まえて、同じように објектна конјугација「補語の活用」として、この考え方を受けいれている。このような補語の活用がある言語としては、例えばハンガリー語などがある(cf. Aronson 2007)。

特定の直接補語を持つ動詞が入る(Aronson 2007: 25-26)。以下に、*читам/čitam* 「読む」という動詞を例にして両方の変化を示す。

(4-16) パラダイム I [MK] (Aronson 2007: 25)

a. *чита -м* (книга)
čita -m (kniga)
 read PRS.1.SG book
 「(私は) (本を) 読む」

b. *чита -ш* (книга)
čita -š (kniga)
 read PRS.2.SG book
 「(あなたは) 読む」

c. *чита -∅* (книга)
čita -∅ (kniga)
 read ∅ book
 「(彼/彼女は) 読む」

(4-17) パラダイム II [MK] (Aronson 2007: 25)

a. *ја- чита -м* (книгата)
ја- čita -m (knigata)
it-F.SG-ACC.CL read PRS.1.SG book-F.SG+DEF.F.SG
 「(私は) (その本を) 読む」

b. *ја- чита -ш* (книгата)
ја- čita -š (knigata)
it-F.SG-ACC.CL read PRS.2.SG book-F.SG+DEF.F.SG
 「(あなたは) (その本を) 読む」

c. *ја- чита -∅* (книгата)
ја- čita -∅ (knigata)
it-F.SG-ACC.CL read PRS.3.SG book-F.SG+DEF.F.SG
 「(彼/彼女は) (その本を) 読む」

このように、標準マケドニア語では、接語重複は義務的であるうえに、人称代

名詞接語形の語順がほとんど固定されているため、補語とも一致する多人称一致動詞としての再分析が可能となる。

その一方で、標準ブルガリア語では、接語重複が随意的であるうえに、人称代名詞接語形の語順が固定されていないことから、多人称一致動詞と解釈することは難しい段階にあると考えられる。とはいえ、標準ブルガリア語でも補語の接語重複の使用が拡大する傾向にあることを示す例も見いだされるので(cf. Суган 2012)、少なくとも現時点では、標準マケドニア語と同じ状況に向かう傾向を示しているということはあるだろう(cf. Aronson 1997: 38; Цыхун 1968: 121)。

さて、ここまでみてきたことを総合すると、少なくとも標準マケドニア語では、接語重複する人称代名詞接語形(Ncl)は、音声及び形態統語的な特徴をかんがみると、独立した代名詞としてみるよりは、補語と一致する動詞接辞として再分析することができると考えられる。これはまさしく、(4-2)で示した Heine, Kuteva (2005)の提唱する文法化のパラメーターのうちの(4-2b)脱意味化(代名詞が持つ直示的・語用論的な特性の喪失)と(4-2c)脱カテゴリー化(代名詞から補語の一致標識への変化)である。

また、標準マケドニア語の接語重複には、接語重複が文法化を経験した場合にみられる特徴(語順の固定化¹⁹¹、接語重複の義務化、そして補語との一致を示す標識への変化を伴うパラダイム化(cf. Lehmann 1995))を多く見出すことができる。標準マケドニア語の接語重複がかなりの程度文法化していることは、このことから確認できる。

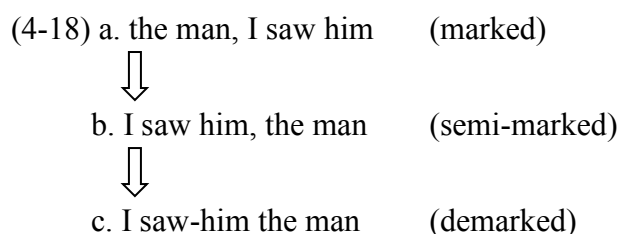
一方で、標準ブルガリア語では、脱意味化や脱カテゴリー化が形式の上ではつきりとあらわれていない段階にあるため、接語重複の文法化の程度は低い状況にあるといえる。

¹⁹¹ Цыхун (1968: 112)もまた、補語の接語重複の際の人称代名詞接語形の語順と文法化の度合いの関連性について指摘している。文頭においてプロクリティックな語順がみられる場合(標準マケドニア語)には、その人称代名詞接語形はすでに補語の文法的なマーカーとなっていることを示す一方で、動詞に対してプロクリティックにもエンクリティックにもなりうる場合(標準ブルガリア語)には、文法化の程度が低い(Цыхунの用語でいうところの“半文法化(полу-грамматикализация)”されている)ことを示すと彼は考えている。

4.1.2.5. 再分析の過程

前節(4.1.2.4.)において、標準マケドニア語にて接語重複する人称代名詞接語形は、補語を標示する動詞に接辞化した標識として再分析可能であるが、標準ブルガリア語ではその段階には到達していないという事を示した。本節(4.1.2.5.)では、接語重複の再分析がどのように始まり、進行していくのかという点について論じる。

動詞前の補語の接語重複は、トピック標示のために動詞前に置かれた補語が、前方照応的な人称代名詞で再標示する構造を持つ。類型論的な見地から Givón (1976: 156-157)は、動詞前でトピック標示された補語(N)が無標化するにしたがって、同一指示の人称代名詞(Ncl)がいかに再分析されていくかを次の図式(4-18)を用いて示している¹⁹²。



(4-18a)において、動詞前におかれてトピック標示された補語 *the man* を伴う語用論的に有標な構造が、中間的な(4-18b)の段階を経て、(4-18c)にあるような無標な構造に移行することが示されている。最終的に、(4-18c)の段階では、補語 *the man* が基本語順の動詞後の位置におさまリ、語用論的に無標な補語として再解釈される一方で、人称代名詞 *him* は、代名詞から補語の一致標識の役割を果たす動詞接辞に変化している。

このような段階的な変化は、文法化の程度とともに推移していくものと考えられる。トピック標示の機能を持った補語の接語重複が、語用論の点で徐々に無標化していくことにより、それは様々なコンテキストでもちいられるようになる(文法化のパラメーターの拡張)。そして、人称代名詞は、(4-18a)から(4-18c)に移行していく過程で、脱意味化や脱カテゴリー化を徐々に示すようになる。(4-18c)の段階では非接語である代名詞が動詞接辞になる点で浸食(音声的弱化)のパラメーターもみられる(cf. Hopper, Traugott 2003: 142)。

このように、再分析の進行とともに、文法化も進行していく。最終的に(4-18c)では、文法化のパラメーターすべてが確認できることから明らかなように、(4-18)ではトピック標示をもたらず接語重複が文法化するプロセスが示されている

¹⁹² 変更部分は、本論文筆者による。

と言える。

野町(2011: 33)は、再分析が文法化のパラメーターとして有効であると指摘しており、実際に(4-18)では人称代名詞 *him* の再分析が関与していて、(4-18)の再分析のプロセスが文法化の発展と関連があることを示している¹⁹³。

標準マケドニア語と標準ブルガリア語における状況を(4-18)のプロセスに当てはめるならば、マケドニア語はより(4-18c)に近い段階に到達している一方で、ブルガリア語は(4-18a)により近い段階にあると考えることができる。

またこれと同時に、類型論的な見地から示されている(4-18)のプロセスは、補語の接語重複が、もともと補語をトピック標示するという語用論的な機能を持った現象から始まっていることを示している。

このとき、標準ブルガリア語の補語の接語重複が、補語をトピック標示するという語用論的な機能を持った操作であることを想起する必要がある。つまり、標準ブルガリア語がまだ(4-18a)に近い段階にあることは、標準ブルガリア語の補語の接語重複が語用論的な要因によって左右されるということからも確認できる。その一方で、標準マケドニア語の補語の接語重複が、トピック標示とはかわりなく、文法的に義務的に行われる事実は、それが(4-18c)に近い段階にあることを示唆している。

補語の接語重複は、もともと補語(N)をトピック標示するという語用論的な手段として始まり、それが人称代名詞接語形(Ncl)の再分析の過程を経て補語と一致する文法的な標識に変化することで、より文法的な手段に発展する (cf. Friedman 1994: 105, 109)。そして、補語の接語重複の文法化に関して、標準マケドニア語は進んだ段階に、標準ブルガリア語はまだあまり進んでいない段階にあると考えられる。

¹⁹³ ただし、再分析が関与する場合にすべからず文法化がみられるわけではない(Hopper, Traugott 2003: 58-59; Heine 2003: 592-593)。例えば、(4-18)のプロセスの中で *the man* は、トピック標示された補語から、語用論的に無標な補語に再分析されているが、このとき文法化は伴っていない。

4.1.2.6. まとめ

標準マケドニア語と標準ブルガリア語における補語の接語重複について、文法化の観点を中心に論じた。補語の接語重複は、補語をトピック標示するという語用論的な手段としてはじまる。人称代名詞接語形(Ncl)が、代名詞から文法的な一致標識の役割を持った動詞接辞に発展するという再分析のプロセスを経て、接語重複は文法化に至る。Heine, Kuteva (2005)による文法化のパラメーターをいずれも伴うので、この再分析のプロセスには文法化が明らかに関与していると考えられる。

標準マケドニア語の補語の接語重複は、補語がトピックであるかどうかにはほとんど関わりがなく行われることから、極めて再分析が進んだ状況にある。他方、標準ブルガリア語の接語重複には補語のトピック性がふつう関与することから、人称代名詞接語形の再分析はあまり進んでいない。これは、文法化の程度の違いに換言でき、マケドニア語の方がブルガリア語に比べて文法化がより進んだ状況にあるといえることができる(cf. Лопашов 1978: 124; cf. also Цыхун 1968)。

4.1.3. 方言と接語重複の文法化

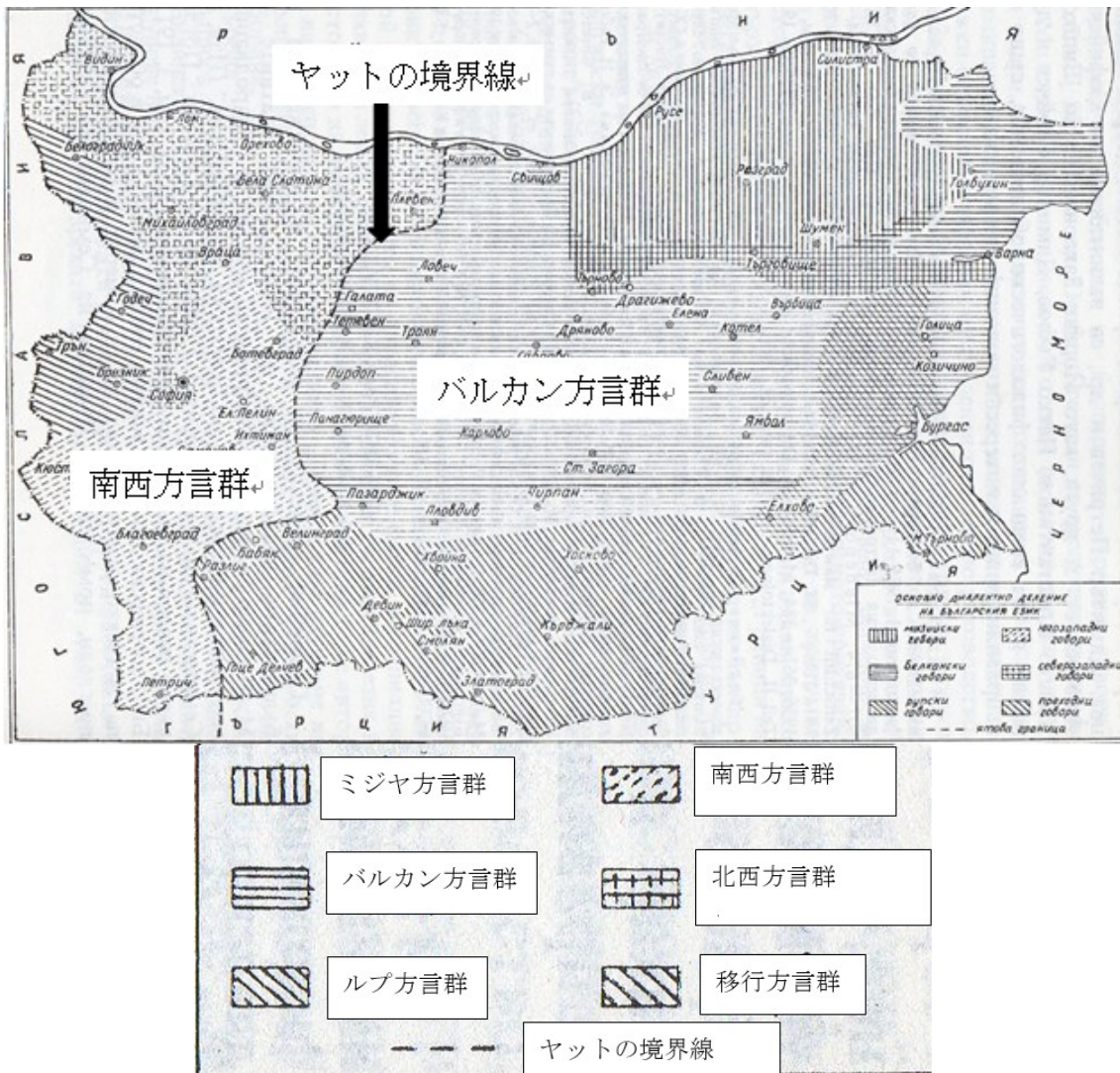
前節(4.1.2.)において、標準マケドニア語と標準ブルガリア語の補語の接語重複は、文法化の程度において大きな相違があることを見た。しかし、なぜ非常に近い関係にある標準マケドニア語と標準ブルガリア語との間に、この現象のふるまいの点でここまでの差異が生じたのであろうか。ここまで標準語を対象にして補語の接語重複の文法化について論じたが、この2つの言語の諸方言に目を向けると、文法化の程度の点で、様々な段階が存在すると考えられることがわかる。以下では、諸方言における補語の接語重複のヴァリエーションの分布について検討する。またその際に、文法化をもたらす要因の一つとしての言語接触についても言及する。

また、本節(4.1.3.)では、「ブルガリア語」や「マケドニア語」といった場合、それぞれの標準語と諸方言を包括する総体を指して用いることとする。

4.1.3.1. 方言区分

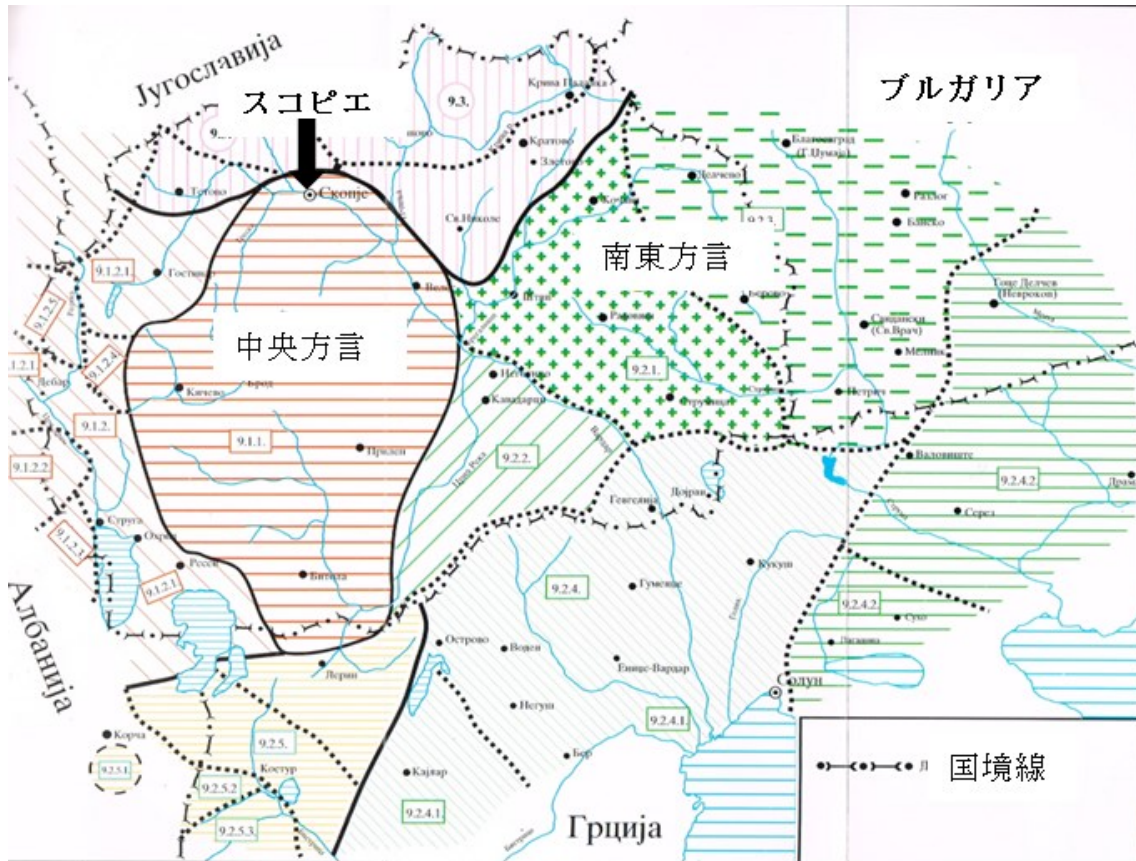
まずは、ブルガリア語とマケドニア語の方言分類について確認する。

ブルガリア語は、伝統的にはヤットの境界線をはさんで、東方言と西方言に分類される (cf. 1.7.2. 「ブルガリア語の方言」)。【地図 4-1】の中で、東方言中の中央に分布する方言であるバルカン方言群 (横線で示されている部分) は、標準ブルガリア語の基盤となった方言である。また、西方言中の南西方言 (右上から左下に向かって破線で示されている部分) は、隣国マケドニア (旧ユーゴスラヴィア) 共和国と隣接する方言地帯であり、マケドニア共和国の南東方言と共通する言語特徴を多く有する。

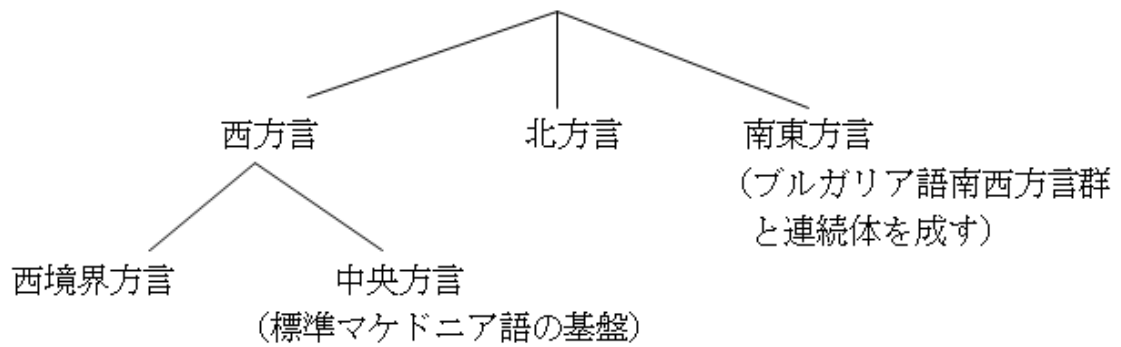


【地図 4-1】ブルガリア語の方言分布図(Стойков 1993: 418)

一方、マケドニア語は、西方言、南東方言、北方言の3つの方言区分がなされる(Видоевски 1998)(cf. 【図 4-1】)。【地図 4-2】「マケドニア語の方言分布図」中の、黒い太線はそれらの方言区分を分ける境界線である。西方言は、中央方言(横線で示された部分)と西境界方言(左上から右下にかけての斜線で示された部分)に下位分類される。このうち中央方言は、標準マケドニア語の基盤となった方言である。南東方言には、隣接するブルガリア語の南西方言と共有する特徴が多い(実際に、ブルガリア共和国内にもマケドニア語の方言が及んでいることが【地図 4-2】中で示されていることからわかる)。



【地図 4-2】 マケドニア語の方言分布図 (Видоевски 1998)



【図 4-1】 マケドニア語の方言区分

4.1.3.2. 接語重複の方言分布

補語の接語重複の方言分布については、先行研究において様々な指摘が見られる。

まず、ブルガリア語では、補語の接語重複はすべての方言に見出される現象であるが(Стойков 1993: 261)、アカデミー文法である Попов et al. (1983: 187)は、それが特に西方言に特徴的であると指摘している(cf. also Мирчев 1963: 224)。このように、ブルガリア語諸方言中では、補語の接語重複が東方言よりも西方言において頻繁に起こるといふ、方言的な差異が存在する。

他方、マケドニア語については、古くは Селищев (1918: 250)の指摘に見出すことができ、それによると補語の接語重複はマケドニア語諸方言に特徴的な現象であり、彼は補語の接語重複を「典型的にマケドニア的な特徴(типично македонские черты)」とみなしている。しかしその一方で、ヴァルダル川の東に位置する地域の方言では、その「典型的にマケドニア的な特徴」が見られないことがあるという。ヴァルダル川は、マケドニア共和国の北部では、おおよそ西方言を北方言と南東方言から分け隔てる境界線に沿っている。したがって、ヴァルダル川より東に分布する南東方言では、西方言と比較して、接語重複が頻繁には観察されないということがわかる。Видоевски (1960/61: 23, 26)は「西方言における二重補語の使用¹⁹⁴は規則的な現象である」一方で、「東マケドニアの諸方言では二重補語の使用は一貫的でない」と述べている。ゆえに、マケドニア語では、西方言で補語の接語重複が規則的であるのに対して、東方言では必ずしもそうではないという、方言間の違いがみられる。

これらの事実を総合すると、補語の接語重複のふるまいに関して、マケドニア語からブルガリア語にかけて連続性があることが示唆されていると考えることができる。マケドニア語諸方言とブルガリア語諸方言を方言連続体として一つのまとまりとしてみた場合、補語の接語重複は、規則的に行われる南西(マケドニア語西方言)から、それよりは一貫性を欠く東マケドニア及びそれと地理的に連続する南西ブルガリアを経て、より一層接語重複がまれとなる北東(ブルガリア語東方言)にかけて徐々に制限的になる¹⁹⁵。換言するならば、南西では補語の接語重複は文法化の程度が高いが、北東では低いことが示唆されることになる。

¹⁹⁴ 接語重複のこと。

¹⁹⁵ Цыхун (1968: 131)もまた「このバルカン的特徴(注:補語の接語重複のこと)の体系的特性は、バルカン・スラヴ圏(注:ブルガリア語とマケドニア語の方言連続体を指す用語)の枠内で南・南西に向かうにしたがって強まり、北・北東に向かうにしたがって弱まる」と指摘している。

(4-19) 補語の接語重複の諸方言における文法化の程度の推移¹⁹⁶

マケドニア語南西方言 > マケドニア語南東方言～ブルガリア語南西方言 > ブルガリア語北東方言

4.1.3.3. 方言地図による分析

前節(4.1.3.2.)で示した先行研究における指摘を踏まえて、本節(4.1.3.3.)では Sobolev et al. (2005) による『バルカン諸語の小方言地図 (Малый диалектологический атлас балканских языков)』をもとにして、(4-19)のような方言分布が見られるかどうかについて分析を行う。この方言地図はバルカン諸語を対象としているが、本研究で問題となるのはマケドニア語とブルガリア語なので、ブルガリア語とマケドニア語以外のバルカン諸語は除外し、地図中で着目する地点は以下(4-20)の3点に絞ることとする。

(4-20) a. ペシュタニ

マケドニア共和国、オフリド地方 (南西地域)
西マケドニア方言

b. ゲガ

ブルガリア共和国、ピリン・マケドニア (南西地域)
南西ブルガリア方言

c. ラヴナ

ブルガリア共和国、ミジヤ (北東地域)
北東ブルガリア方言

これら3つの地点は、南西の(4-20a)から、両国の国境に近い中間地点(4-20b)を経て、北東の(4-20c)まで、マケドニア語とブルガリア語の方言連続体中の主要な段階を踏まえた地点となっている。そのため、ブルガリア語・マケドニア語の諸方言の中でも、この3点のみに着目する。

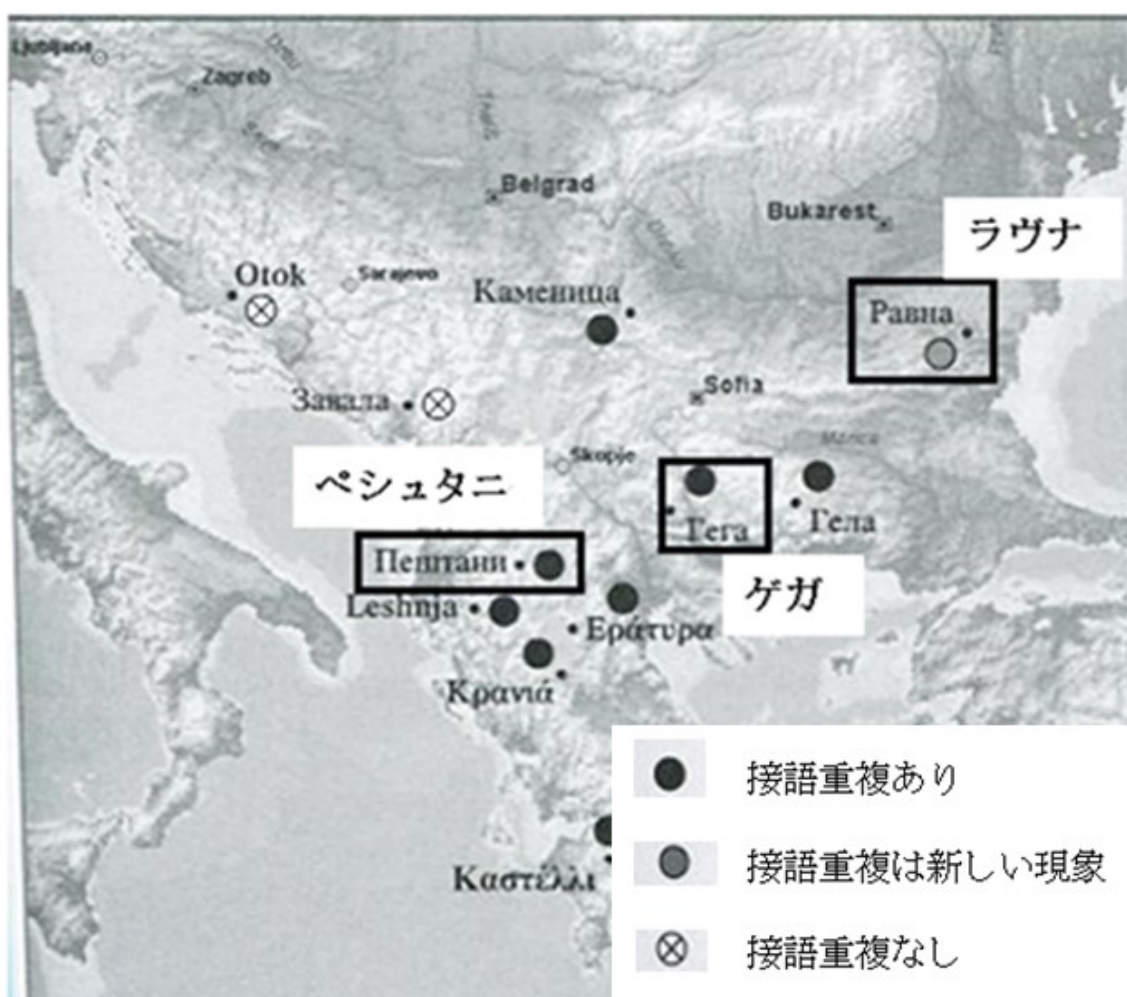
(4-19)のような分布が事実であるならば、補語の接語重複は(4-20a)から(4-20c)にかけて稀な現象になっていくことが仮定される。当該の方言地図では、一定の条件下で調査対象となる現象が実現するかどうかを示されている。

分析に際して、補語の接語重複が行われる際に関与する2つの要因を念頭に置く必要がある。それは、補語の定性と文中での位置である。補語の接語重複は

¹⁹⁶ ここでは、スケール上で右にある方言よりも左にある方言の方が、文法化の程度が高いことをあらわす。

トピック化と関係した現象である。類型論的な見地から、トピック化された補語は定であったり、文中で動詞前の位置を占めやすいことが知られる(cf. Givón 1976 のトピック性の普遍的階層)。もし補語の接語重複が高い程度で文法化しているとすれば、補語が定であったり、動詞に対して先行する位置をとるか否かに関係なく接語重複することが期待される。その一方で、もし文法化の程度が低いとすれば、補語の接語重複の実現は語用論的な観点から、制限的になり、補語の定性や文中での位置によって厳しく条件づけられることになるであろう。これらのことは、補語の接語重複の文法化の程度をはかるうえで、手掛かりとすることができると考えられる。この点を踏まえて、以下では補語の接語重複が関係している方言地図を順に引用して示し、それぞれ分析を行う。

以下【地図 4-3】は、定の名詞(N)によって表された直接補語の接語重複が行われる可能性について表している。



【地図 4-3】 定の名詞によって表された直接補語の接語重複の実現の可能性 (Соболев et al. 2005: 93, 地図№38)

【地図 4-3】から明らかになるのは、補語の接語重複は3つの地点においてみられるが、北東のラヴナではより新しい現象であるという¹⁹⁷。

また、補語の接語重複は、文中における補語の位置に関係なく行われる。以下にそれぞれ例を引用する。

(4-21) ペシュタニ (Соболев et al. 2005: 92)

a. Го гледав чоекот. (後置)
Go gledav čoeokot.
 he-ACC.CL see-IMPF.1.SG person-M.SG+DEF.M.SG
 「(私は) その人を見ていた。」

b. Вуйкото не можам да го (前置)
Vujkoto ne možam da go
 uncle-N.SG+DEF.N.SG NEG can-PRS.1.SG SMP he-N.SG.ACC.CL
 прегонам.
 pregonam.
 drive_away-PRS.1.SG
 「そのおじのことは、(私は) 追いだすことができない。」

(4-22) ゲガ (Соболев et al. 2005: 92)

a. Јаз го видох офчаро. (後置)
 Jaz go vidoh ofčaro.
 I-NOM he-ACC.CL see-AOR.1.SG shepherd-M.SG+DEF.M.SG
 「私はその羊飼いを見た。」

b. Писмото го получих фчера. (前置)
Pismoto go polučih fčera.
 letter-N.SG+DEF.N.SG it-N.SG.ACC.CL receive-AOR.1.SG yesterday
 「その手紙は昨日受け取った。」

(4-23) ラヴナ (Соболев et al. 2005: 92)

a. Фчера е вид'еу с'естра ти. (後置)
 Včera e vid'ew s'estra ti.
 yesterday she-ACC.CL see-AOR.1.SG sister-F.SG you-DAT.CL

¹⁹⁷ 補語の接語重複の通時的研究を行った Русек (1963: 142)も、補語の接語重複が東方言では遅くに発達した現象であることを指摘している。

「昨日（私は）あなたの姉妹を見た。」

b. П'исмоту	гу	получиў.	(前置)
P'ismotu	gu	polučiw.	
letter-N.SG+DEF.N.SG	it-N.SG.ACC.CL	receive-AOR.1.SG	

「その手紙は（私は）受け取った。」

ここで引用した例はいずれも重複を伴うものであるが、Соболев et al. (2005)では、重複が行われぬ例も示されているので、3つの地点において、補語の接語重複は義務的ではなく、定性が関与していても重複が行われぬ場合もある。

以下【地図 4-4】は、不定冠詞または不定代名詞を伴った名詞によって表された直接補語の接語重複が行われる可能性を示している。



【地図 4-4】 不定冠詞または不定代名詞を伴った名詞によって表された直接補語の接語重複の実現の可能性
 (Соболев et al. 2005: 103, 地図№ 43)

【地図 4-4】によると、ペシュタニの方言では補語の接語重複は可能であるか、または行われるのが一般的であるという。それに対して、残りの 2 つの地点では接語重複は行われぬ。また、ペシュタニの方言では文中で占める位置に関係なく不定の補語の接語重複が行われうることが、以下(4-24)からも明らかである。

(4-24) ペシュタニ (Соболев et al. 2005: 102)

a. Чера го видоф еден офчар. (後置)

Čera go vidof eden ofčar.

yesterday he-ACC.CL see-AOR.1.SG IDF.M.SG shepherd-M.SG

「昨日 (私は) ある羊飼いを見た。」

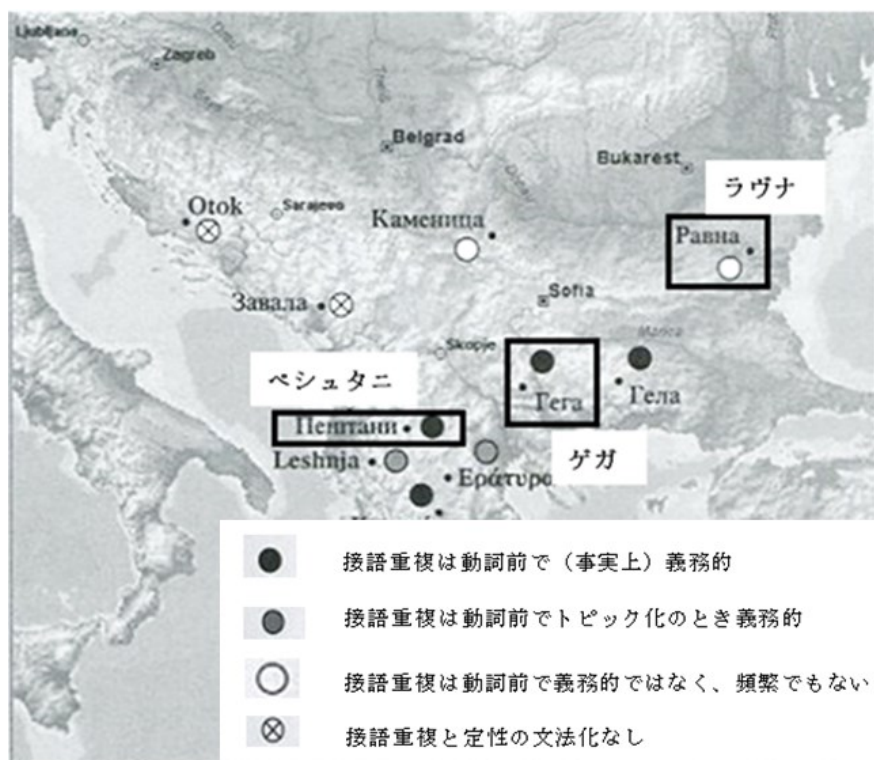
b. Еден зайак го ф’ашчал. (前置)

Eden zajak go f’aščal.

IDF.M.SG rabbit-M.SG it-M.SG.ACC.CL catch-EVID.M.SG

「うさぎをつかまえたらしい。」

以下【地図 4-5】は、動詞に対して前置される直接補語の接語重複の義務性をあらわすものである。



【地図 4-5】 動詞に対して前置される直接補語の接語重複の義務性 (Соболев et al. 2005: 113, 地図№ 48)

ペシュタニとゲガの方言では、動詞に対して前置される直接補語の接語重複は、補語が定である場合に義務的であり、また補語が不定である場合にも可能である。その一方で、ラヴナの方では補語が定である場合に接語重複は可能であるが義務的ではなく、頻繁でもない。

(4-25) ペシュタニ (Соболев et al. 2005: 112)

a. <u>Вуйкото</u>	не	можам	да	<u>го</u>	(定)
<u>Vujkoto</u>	ne	možam	da	<u>go</u>	
uncle-N.SG+DEF.N.SG	NEG	can-PRS.1.SG	SMP	he-N.SG.ACC.CL	
прегонам.					
pregonam.					
drive_away-PRS.1.SG					
「そのおじのことは、(私は) 追いだすことができない。」					

b. <u>еден</u>	<u>офчар</u>	<u>го</u>	нашле	(不定)
<u>eden</u>	<u>ofčar</u>	<u>go</u>	našle	
IDF.M.SG	shepherd-M.SG	he-M.SG.ACC.CL	find-EVID.PL	
да пасит	офци.			
da pasit	ofci.			
SMP graze-PRS.3.PL	sheep-PL			
「羊に草を食べさせている羊飼いを見つけた。」				

(4-26) ゲガ (Соболев et al. 2005: 112)

a. <u>Кучето</u>	одавнѣ	не	б'ах	(定)
<u>Kučeto</u>	odavnǎ	ne	b'ah	
dog-N.SG+DEF.N.SG	for_a_long_time	NEG	be-IMPF.1.SG	
<u>го</u>	чул.			
<u>go</u>	čul.			
it-N.SG.ACC.CL	hear-PPP.M.SG			
「その犬 (の声) は長い間 (私は) 聞いていなかった。」				

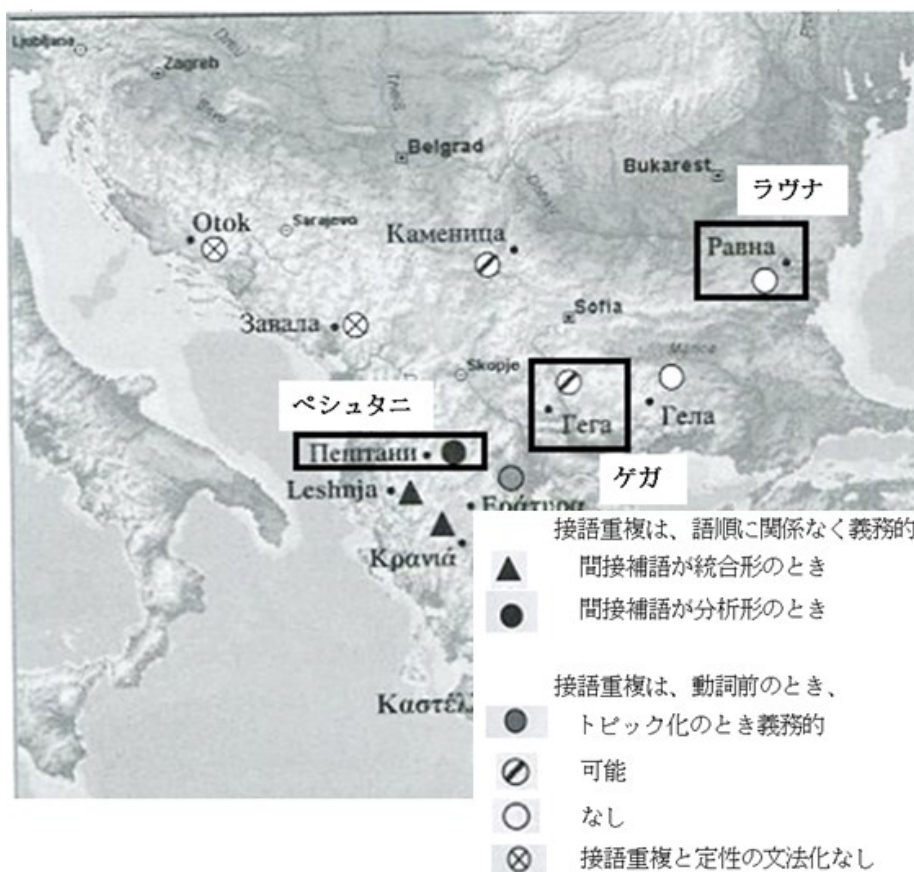
b. <u>Два</u>	<u>орли</u>	дѣ	<u>и</u>	поранѣ.	(不定)
<u>Dva</u>	<u>orli</u>	dǎ	<u>i</u>	poranǎ.	
two	eagle	SMP	they-ACC.CL	feed-PRS.1.SG	
「二匹の鷲に餌を与えなくてはならない。」					

(4-27) ラヴナ (Соболев et al. 2005: 112)

a. Писмоту получиў фчерь. (重複なし)
 Pismotu polučiw fčeră.
 letter+the receive-AOR.1.SG yesterday
 「その手紙は (私は) 昨日受け取った。」

b. Д'ецатъ в'еднъж г'и б'еше (重複あり)
 D'ecată v'ednăž g'i b'eše
 child-PL+DEF.PL once they-ACC.PL be-IMPF.3.SG
 зъвел у гурьтъ.
 zăvel u gurătă.
 take-PPP.M.SG to forest-F.SG+DEF.F.SG
 「その子供たちはかつて森につれていかれたそうだ。」

以下【地図 4-6】は、定の間接補語の接語重複の義務性について表している。



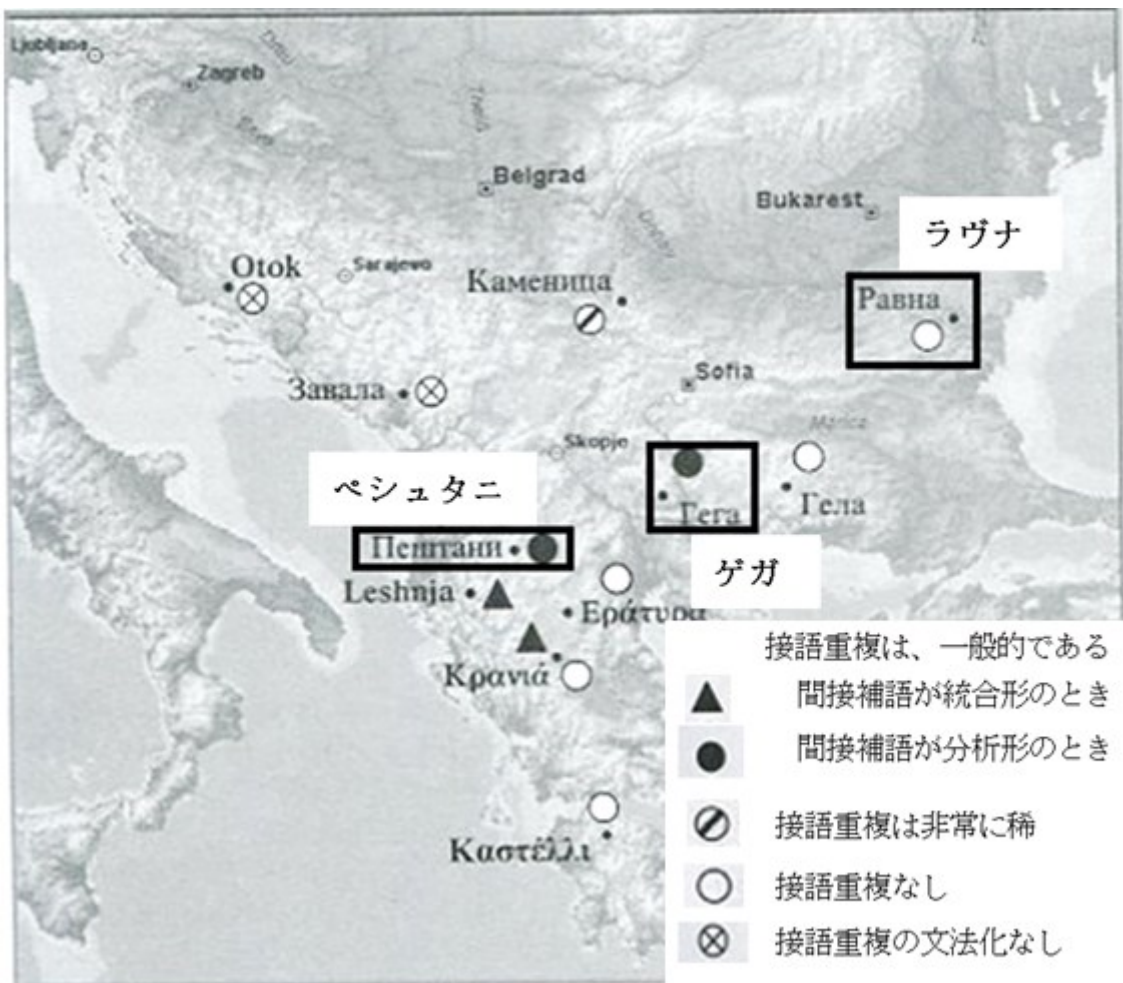
【地図 4-6】 定の間接補語の接語重複の義務性
 (Соболев et al. 2005: 137, 地図№ 60)

(4-30) ラヴナ (Соболев et al. 2005: 136)

a. На башт'ит'е думал'и... (重複なし)
 Na bašt'it'e dumał'i...
 DM father-PL+DEF.PL say-EVID.PL
 「父たちに言ったそうだ。」

b. На фс'акого дадоўм'е по една. (重複なし)
 Na fs'akogo dadowm'e po edna.
 DM every-OBL give-AOR.1.PL by one-F.SG
 「(私たちは) 全員に一つずつ与えた。」

以下【地図 4-7】は、不定の名詞によって表された間接補語の接語重複が行われる可能性について表している。



【地図 4-7】 不定の名詞によって表された間接補語の接語重複の実現の可能性(Соболев et al. 2005: 135, 地図№ 59)

ペシュタニとゲガの方言において、不定冠詞を伴った間接補語の接語重複は規則的に見られる現象である。他方で、ラヴナの方言ではこの場合の接語重複は一切行われない。

(4-40) ペシュタニ (Соболев et al. 2005: 134)

Кога	<u>му</u>	го	кажаф	овой	збор
Koga	<u>mu</u>	go	kažaf	ovoj	zbor
when	he-DAT.CL	he-ACC.CL	tell-IMP.F.1.SG	this	word
	<u>на еден</u>	<u>комшија</u>	...		
	<u>na eden</u>	<u>komšija</u>	...		
	DM	IDF.M.SG	neighbor-M.SG		

「ある隣人にこの言葉を伝えたとき...」

(4-41) ゲガ (Соболев et al. 2005: 134)

a. Кажах му на еден човек. (後置)
 Kažah mu na edin čovek.
 tell-AOR.1.SG he-DAT.CL DM IDF.M.SG person-M.SG
 「(私は) その人に言った。」

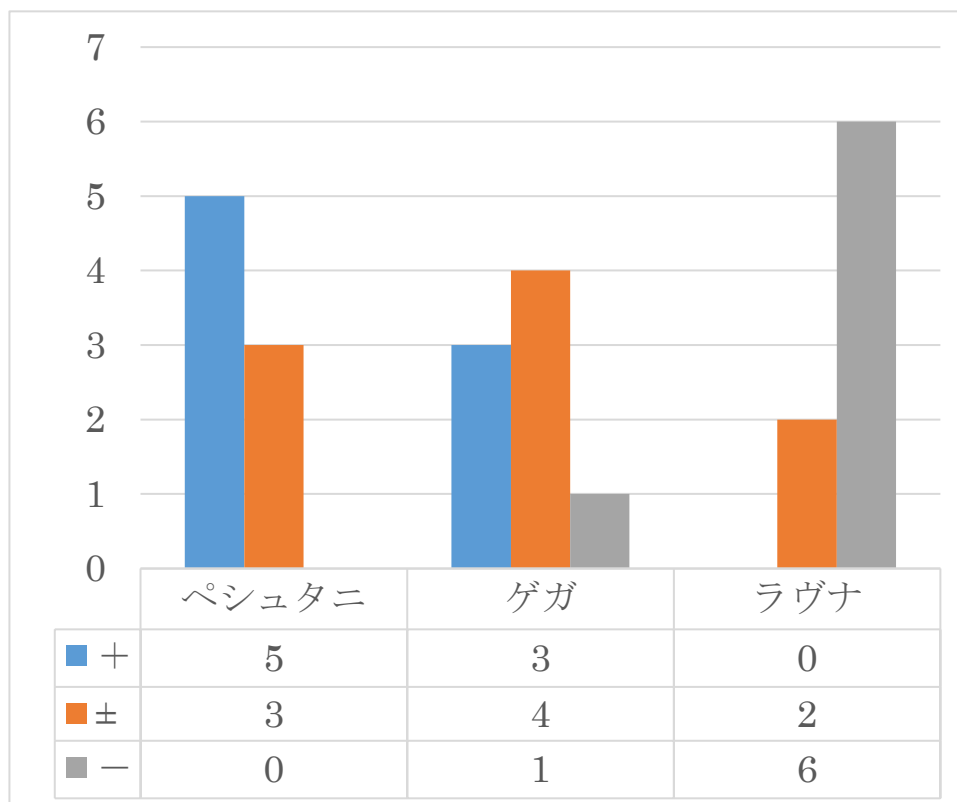
b. На еден войник дошел му (前置)
Na edin vojniki došel mu
 DM IDF.M.SG warrior-M.SG come-EVID.M.SG he-DAT.CL
 ред да...
 red da...
 turn-M.SG SMP
 「その戦士が...する番になった」

以上で、当該の 3 つの地点の方言において補語の接語重複が、一定の条件下 (動詞前/動詞後や定/不定) で行われるかどうかについてみた。これをまとめると、次の【表 4-1】のようになる¹⁹⁹。また、【表 4-1】をグラフで図示すると、【図 4-1】のようになる。

¹⁹⁹ このとき、+ は補語の接語重複が義務的であることを、- は補語の接語重複が行われないことを、± は補語の接語重複が随意的であることを表す。また、動詞前と動詞後は、それぞれ省略して前と後と表記する。

【表 4-1】 補語の接語重複が行われるかどうか（動詞前/動詞後や定/不定）

ペシュタニ	直接補語	間接補語
前 定	+	+
後 定	±	+
前 不定	±	+
後 不定	±	+
ゲガ	直接補語	間接補語
前 定	+	±
後 定	±	±
前 不定	±	+
後 不定	-	+
ラヴナ	直接補語	間接補語
前 定	±	-
後 定	±	-
前 不定	-	-
後 不定	-	-



【図 4-1】 上記【表 4-1】の結果の図示

Соболев et al. (2005)による『バルカン諸語の小方言地図』を用いた補語の接語重複の方言分布に関する分析の結果、補語の接語重複が一定の条件下において行われるかどうかは方言間で異なることがわかった。

マケドニア共和国の南西に位置するペシュタニの方言では、補語の接語重複が動詞に対して前置されるかどうか、定であるかどうかにかかわらず補語の接語重複はおこなわれるということが出来る。しかも、間接補語が関わる場合には、接語重複はあらゆる場合で義務的である。また、補語がトピックでない場合であっても、接語重複が可能、あるいは義務的であることから、ペシュタニの方言における接語重複の文法化の程度は高いことがわかる。

その一方で、ブルガリア共和国の北東に位置するラヴナの方言では、補語の接語重複がおこなわれることはまれである。定である直接補語の接語重複は行われうるが、不定の補語の接語重複は行われないうことからも、重複するかどうかは語用論的な要因によって条件づけられているということがみてとれる。これらのことから補語の接語重複はトピック化と深い関係にあると考えられ、ラヴナの方言における接語重複は文法化の程度が低いということがいえる。

ゲガは、この2つの地点の中間に位置し、その方言はブルガリア語南西方言群に属し、ペシュタニの方言が含まれる最南西方言群よりも東に分布する。そのゲガの方言では、補語の接語重複は比較的頻繁に見られ、いくつかの場合では接語重複は義務的すらある。だが、ペシュタニの方言ほど補語の接語重複が義務的でない。たとえば直接補語が不定で動詞に対して後置されるような場合に、ペシュタニの方言で接語重複は可能であるのに対して、ゲガの方言では接語重複は行われないう。

以上を踏まえると、最南西のペシュタニの方言から北東のラヴナの方言にかけて、補語の接語重複の文法化の程度が段階的に低くなっていることがわかる (cf. 菅井 2014a)。このように、ペシュタニの方言からラヴナの方言にかけての方言連続体には、文法化の程度の推移が反映されている。ペシュタニの方言では文法化の程度が極めて高いのに対して、ラヴナは語用論的な要因に条件づけられ文法化の程度が低い。中間地点にあたるゲガの方言は、ペシュタニの方言よりは接語重複が制限的で文法化の程度は低いと考えられる一方で、北東のラヴナの方言よりは文法化の程度が高いと考えられる。つまり、ゲガの方言の文法化の程度は、ブルガリア語とマケドニア語の方言連続体の両端にあたる2つの地点のちょうど中間となるような段階にあることがわかる。

このように、ペシュタニの方言からラヴナの方言にかけてみられる接語重複の実現の推移は、まさしく前節(4.1.2.5.)でみた文法化の程度の段階的な推移、すなわち語用論的な手段から文法的な手段への変化の過程と共通しているという

こともできる。ゆえに、文法化の段階的な変化の推移は、ブルガリア語とマケドニア語の方言連続体において見出すことができることが確認できた(cf. Friedman 1994: 110)²⁰⁰。

4.1.3.4. バルカンの多言語環境

前節(4.1.3.2.)の分析でも明らかにしたように、南西マケドニアは、マケドニア語及びブルガリア語の方言連続体中で、補語の接語重複の文法化が最も進んだ地域である。この地域で補語の接語重複の文法化が進んだ背景には、特殊な言語状況があると考えられる。

バルカン半島の中でも、マケドニアは、オスマン帝国支配下の時代以来、民族の混住地域の典型として知られる。例えば、柴(2006: 93)によれば、「この地域²⁰¹の住民は言語面からみても宗教上も、きわめて多様であった。<...> 多い順に列挙すると、住民はスラヴ人、トルコ人、ギリシア人、アルバニア人、ヴラフ、ユダヤ人、ロマなどであり、概して混住していた(下線部は本論文筆者による)」。

なかでもとりわけ、現在のマケドニア共和国の南西地域及びその周辺地域は、バルカンの多言語環境の中心地として知られ、マケドニア語、アルバニア語、アルーマニア語の話者を中心とした人々が、比較的狭い地域に混住しており、緊密な言語接触は数世紀にもわたって続いた(Lindstedt 2000; Friedman 1994; 2008)。

このような背景を踏まえて、補語の接語重複に目を向けてみたい。バルカン諸語の諸方言を対象に補語の接語重複の研究を行った Friedman (2008: 59)は、西マケドニアの地域におおいかぶさるように分布する、マケドニア語西方言、アルーマニア語北方言、アルバニア語ゲグ方言に見られる諸特徴が、単なる並行的な発展とするにはあまりに類似しすぎているという事実を指摘し、これが言語接触によってもたらされた地域的な現象であると論じている²⁰²。Lindstedt (2000: 238-241)によれば、多言語話者の混住地であるかつてのバルカンでは、絶対的なリン

²⁰⁰ Friedman (1994: 110)も同様の主張を行うが、方言地図などを用いた分析を行っておらず、本節(4.1.3.2.)では方言地図の分析を通して彼の主張を実証的に論じた。

²⁰¹ 現在のマケドニア共和国が該当するヴァルダル・マケドニアのみならず、ブルガリア共和国に所属するピリン・マケドニアや、ギリシャに所属するエーゲ・マケドニアなどすべてを含めた歴史的な「マケドニア」全域を指している。

²⁰² Асенова (1989: 84)もまた、補語の接語重複などのバルカニズムが方言レベルでの言語接触によって生じたことを指摘している。彼女は、「基本的に、方言よりも標準語のほうが隣接する言語とより多くの相違を示す」と述べている(cf. Асенова 2002: 117)。

グワ・フランカが認められず、個々人が、自身のグループのアイデンティティの象徴としての母語以外に、複数の言語を十分な程度身に着けていたという社会言語学的な情勢が存在していたという。このような状況下では、異なった言語の母語話者同士が意思疎通を図る際に、より明確な相互理解のために明示的な標示を伴う文法・統語構造を志向することで文法化が推し進められたことは想像に難くない(cf. Friedman 1994; 2008; Matras 2011; cf. also Givón 1976)。このようにして、もともと語用論的な手段である補語の接語重複が、より明確な相互理解に貢献しうる文法的な手段へと発展していったと考えられる(Тополињска 1991: 125; Friedman 1994: 109-110; 2008: 59; Lindstedt 2000: 241)。つまり、南西マケドニア地域の西マケドニア語方言における補語の接語重複は、長期間に及ぶ緊密な言語接触によって、文法化が促進されたと考えられるのである。北東ブルガリア地域と比べて圧倒的な多民族混住地域ゆえに多言語環境である南西マケドニア地域において接語重複の文法化がもっとも進んでいる事実は、補語の接語重複の文法化の促進に際して言語接触が果たした役割が少なくないことを十分に示唆していると言えよう。

一般的に、言語接触により文法化などの言語変化が引き起こされやすいことはよく知られているし(cf. Heine, Kuteva 2005; Matras 2011 etc.)、そもそもバルカニズムが多言語環境における長期間の言語接触によってもたらされたとする説(cf. Тополињска 1991; Lindstedt 2000 etc.)は、現在広く支持されている。さらに、バルカンの中でも南西マケドニアが、バルカニズムの中心地である²⁰³ことには、Lindstedt (2000: 234)や Tomić (2006: 28)、Асенова (1989: 12-13, 83; 2002: 17, 116; 2016: 16-17)など多くの研究者が言及している。

以上のことをまとめると、南西マケドニアにおける補語の接語重複の文法化の理由は、同地域の多言語環境における言語接触に求めることができるであろう。対して、このバルカン言語圏現象の中心地からもっとも遠く離れたブルガリア北東地域では、マケドニア南西地域とは異なり、複雑な言語接触がもたらされるような言語環境になかったために(Friedman 1994: 109)、補語の接語重複の文法化が強く推し進められることはなく、一般的に語用論的な手段としてとどまっ

²⁰³ 南西マケドニア地域から北西方面にあたるマケドニアと隣接するセルビア語方言(トルラク方言)においても接語重複の使用は制限的になる(接語重複するのは人称代名詞非接語形(N)の場合だけ)ことが知られる(Кръпова 2016: 52-53; cf. also Friedman 2008: 46-47; Селищев 1918: 252-253)。南西マケドニア地域から北東方面(ブルガリア)及び北西方面(セルビア)に向かうにしたがって、補語の接語重複などのバルカニズムの実現はより制限的な様相を呈するようになる。逆に、このことから、南西マケドニア地域がバルカニズムの中心地であることが示唆されていると言えよう。

ていると考えられる。本論文の研究対象であるブラネシュティ方言もまた、ブルガリア北東地域に分布するミジャ方言群の一種であることを想起する必要がある。

4.1.3.5. まとめ

ブルガリア語とマケドニア語は方言連続体を成すことが知られるが、その方言連続体を成す諸方言においては補語の接語重複のあらわれ方が異なり、その文法化の度合いも異なる。それがどのような分布を成すかについて、*Соболев et al. (2005)*による『バルカン諸語の小方言地図』をもとに分析を行った。

その分析の結果、南西マケドニアのペシュタニの方言においては、どのような条件下でも接語重複がほとんど一貫して行われるのに対して、北東ブルガリアのラヴナ方言では、トピックと関連する要素がかかわる場合（特に定性）には接語重複が行われやすくなる傾向が幾分見られるものの、全体的にかなり稀な現象であるということがわかった。両者の中間地点に位置する南西ブルガリアのゲガ方言では、北東ブルガリアに比べると接語重複の義務性が高いが、南西マケドニアと比べると、一部制限的な傾向も見られる。以上のことから、北東ブルガリアでは接語重複は語用論的に条件づけられているのに対して、南西マケドニアではそれとは関わりなくほとんど義務的に接語重複が行われることが明らかになった。つまり、補語の接語重複は、北東から南西にかけて、文法化の程度の点で段階的に推移するような様相を呈することが確認できる。また、最も文法化の程度が高くなる南西マケドニアが、バルカン随一の多民族多言語環境であり、オスマン帝国支配下の時代から数世紀にもわたって緊密な言語接触が行われてきている事実から、言語接触が補語の接語重複の文法化を促進した主要な要因の一つであるということができよう（cf. *Лопашов 1978; Friedman 1994; 2008; Lindstedt 2000; Асенова 2002*）。

南西マケドニアから北東ブルガリアにかけて分布する補語の接語重複の段階的な変異が文法化の程度の違いによるものであることを明らかにすることを通して、北東ブルガリアにおける補語の接語重複は文法化の程度が低いことが示された。

北東ブルガリアから、2世紀近く前にドナウ川を越えてルーマニアに移住したブルガリア人の中には、いまだにブルガリア人のアイデンティティを持ち、自分たちのブルガリア語の方言を保持する人々がわずかながら残っている。これらルーマニアに移住したブルガリア人たちは、この2世紀近くという長い年月の間、数世代にわたって自らのブルガリア語方言を保持してきたが、それは当然ながら移住地の公用語であるルーマニア語との言語接触に常にさらされてきた。北東ブルガリアに分布するミジャ方言群の一種であるブラネシュティ方言の補

語の接語重複もまた、ルーマニア語との言語接触によって²⁰⁴、ブルガリア国内にとどまったミジヤ方言群よりも文法化が進んでいることが仮定される。

次節(4.2.)以降では、ブラネシュティ方言の補語の接語重複を、言語接触と文法化の観点から分析する。

²⁰⁴ ルーマニア語のほうが、標準ブルガリア語よりも接語重複の文法化の程度が高いことは、Лопашов (1978: 122)なども指摘するところである(cf. also 菅井 2012a)。しかし、なぜルーマニア語では標準ブルガリア語よりも文法化の程度が高いのかということについては明確ではないので、この点は今後の課題とする。

4.2. 言語接触と文法化

4.2.1. 理論的背景

異なる言語間で形式や意味、構造上の類似点が見られる場合に、それが生じた理由は様々であると考えられる。同じ言語系統の場合には、言語同士にみられる共通する特徴によるものであるかもしれない。異なる言語系統の場合には、言語普遍的な変化の傾向によるものであるかもしれないし、言語接触を原因とするものであるかもしれないし、あるいは単に偶発的に生じた可能性もあるだろう。

このとき、言語接触について、Weinreich (1968: 1)にしたがい、「二つ以上の言語が同一人物によって二者択一的に用いられている場合、それらの言語は接触しているという。したがって、言語使用者個人が接触の場所である」と考える。

本節(4.2.1.)では、言語接触により生じた言語変化について論じるにあたって、ある言語の文法的な意味や構造が、いかにして別の言語に転移され、その言語において文法化するかについて、その理論的背景についてまず確認する。そして、その理論的前提をもとにして、ブラネシュティ方言の補語の接語重複の文法化が、ルーマニア語との言語接触の影響により、いかに促進されたかについて論じる。

まず、ある言語から別の言語へ転移されうるものとして、次の(4-42)をあげることができるだろう。

(4-42) 言語転移の種類 (Heine, Kuteva 2005: 2)

- a. 形式、つまり音や、音の組み合わせ
- b. 意味（文法的意味や機能を含む）または意味の組み合わせ
- c. 形式・意味の単位²⁰⁵または形式・意味の単位の組み合わせ
- d. 統語的關係、つまり、意味のある要素の順番
- e. (a)から(d)のあらゆる組み合わせ

特に *пъ/pă* を伴う補語の接語重複の言語転移の可能性を論じるにあたって関係してくるのは、文法的形式の意味や機能が関与する(4-42b)である。

Weinreich (1968: 30-31)は、言語転移のうち(4-42b)～(4-42d)について論じているが、その中で特に(4-42b)に関しては、「(言語) B の特定の形態素が (言語) A の特定の形態素と同一となることで、言語 A の文法をモデルとした (言語) B の形態素の機能における変化 (拡大、縮小)」と表現している。その結果として、「言語 B の既存のカテゴリーのセットが、言語 A をモデルにして、新しい形態

²⁰⁵ いわゆる形態素のことを念頭に置いている。

素であらわされるようになったり、あるいは完全に新しい義務的なカテゴリーが作られたりさえする；また、既存のカテゴリーが、別の言語をモデルとして、取り除かれたりする」と説明している。また、Weinreich (1968)は、言語転移のもととなるモデル言語(model language)に対して、転移先の複製言語(replica language)という用語²⁰⁶を用いている。本論文でもこの用語を採用して、以下議論を進めていく。

さて、(4-42b)にあるような文法的意味や機能の転移について、Heine, Kuteva (2005: 2-3)は、Aikhenvald (2002)による北西ブラジルのタリアナ語(Tariana)とポルトガル語の関係を例に次のように説明している。まず、タリアナ語は、ブラジルの公用語であるポルトガル語と緊密な言語接触の状態にあり、多くの影響をポルトガル語から受けているという。タリアナ語の若い世代の話者はポルトガル語の疑問代名詞が関係節のマーカ―(relative clause marker)としても用いられるということに気づき、ポルトガル語をモデルとして、タリアナ語でも疑問代名詞を関係節のマーカ―として用いるようになる。そのようにすることで、以下の例²⁰⁷にあるように、年配の話者に特徴的な(4-43)にかわって、ポルトガル語の(4-44)を複製しようとして試みて、新しい(4-45)（つまり、疑問代名詞を関係節のマーカ―として使う）を用いるようになる。

(4-43) Tariana (Heine, Kuteva 2005: 3)

ka-yeka-kani	hĩ	kayu-na	na-sape.
REL-know-PAST.REL.PL	DEM.ANIM	thus-REM.P.VIS	3.PL-speak

“Those who knew used to talk like this.”

(4-44) Portuguese (Heine, Kuteva 2005: 3)

quem	sabia,	falava	assim.
who	knew	spoke	like_this

“Those who knew, spoke like this.”

²⁰⁶ Heine, Kuteva (2005: 4)も指摘するように、モデル言語と複製言語という用語は相対的な概念である。ある言語 A が、別の言語 B との関係においてモデル言語になる一方で、さらに別の言語 C との関係では複製言語になることもある。または、言語 A が、言語 B との関係において、同時にモデル言語と複製言語になることもある。

²⁰⁷ 例(4-43)～(4-45)は、Heine, Kuteva (2005: 3)が Aikhenvald (2002: 183)から引用したものである。ここでは、グロスや英訳も含め、Heine, Kuteva (2005: 3)から引用した。なお、DEM = demonstrative, ANIM = animate, REM.P.VIS = remote past visual である。

(4-45) Younger Tariana speakers (Heine, Kuteva 2005: 3)

kwana	ka-yeka-kani	hĩ	kayu-na
who	REL-know-PAST.REL.PL	DEM.ANIM	thus-REM.P.VIS

na-sape.
3.PL-speak

“Those who knew used to talk like this.”

この例で観察される言語転移が、形式・意味の単位の単なる借用(4-42c)ではなく、文法的意味・機能の転移(4-42b)であることは明らかである。ポルトガル語で疑問代名詞 *quem* が関係節のマーカースとして用いられるという事実をもとに、タリアナ語においても、疑問代名詞 *kwana* の用法を関係節のマーカースに拡張するプロセスを実行することで、結果的にポルトガル語と同等の組み合わせ(疑問代名詞+関係節マーカース)を作り上げている(その他の例については例えば Weinreich 1968: 39-42; 三谷 1995; Matras 2011 等を見よ)。Heine, Kuteva (2005: 3-4)によれば、このような言語転移は、緊密な言語接触の状況下にある言語間では極めて一般的であるという。またそのような状況下で、話者はモデル言語にみられるものと同等の関係性を複製言語において発展させようとする傾向があるという。

Weinreich (1968: 40-41)は、このような言語転移、すなわち文法的意味や機能の複製について、「ある言語のコミュニティは、二重言語話者らの発話を手掛かりにして、その言語における形態素の機能を体系的に拡張していくことで、それぞれの形式の用法を変化させるばかりでなく、別の言語をモデルとして、義務的なカテゴリーの新しい完全なパラダイムを発展させることもできる」と述べている。彼の述べている「機能の体系的な拡張」や「(文法)カテゴリーの新しい完全なパラダイムを発展させる」という説明は、このような現象が単なる“借用”ではないことを示している。つまり、言語転移には、複製言語への単なる借用や翻訳借用ではなく、文法複製を通じた新しい文法構造の構築、すなわち文法化のプロセスを伴う(cf. Heine, Kuteva 2005: 19)。

文法化は、4.1.1. 「文法化をめぐって」でも見たように、語彙的な形式から文法的な形式への変化のプロセスのことであるが、Heine, Kuteva (2005: 21)によれば、実際には、すでに文法的である形式から、より高度に文法的な形式への変化となるケースのほうが頻繁に見られ、そちらの方がより一般的であるという。つまり、言語接触によって生じる言語変化には、複製言語に元から存在するカテゴリーをもとにして、モデル言語と同等の文法的カテゴリーを発展させるというような文法化のプロセスが見られる。

言語接触によって文法の複製が行われる際にみられるプロセスを理解するう

えで、文法的使用パターン(**grammatical use patterns**)という概念を導入する。すでに前節でも述べたように、文法化は段階的な過程を経て発展すると考えられる。ある一定の文法的な機能を持った言語形式が慣用的に用いられる段階に達している場合、それは文法化していると考えられる。その一方で、そのような段階に達していない最初期の段階においてみられる言語使用を文法的使用パターンとして理解する。より具体的に言うと、文法的使用パターンは、次のような特徴を持った言語形式である。

(4-46) 文法的使用パターンの特徴 (Heine, Kuteva 2005: 41)

- a. ある特定の文法的意味と関連付けられる
- b. 談話において頻用される要素であり、それは節、フレーズ、あるいはいくつかの具体的なコンテキストにおいて用いられる単一的な形式から作られる。
- c. その用法は随意的である、すなわち、その文法的な意味を表すために用いられうるが、必ず用いられなければならないわけではない。
- d. 文法複製の最初期の段階にみられる主要な構成単位である。

このような特徴を持った文法的使用パターンは、最初期の段階では談話での使用が制限的であり、文法的な機能との関係性も希薄である。しかし、談話のなかでその使用パターンが繰り返し用いられていく中で、頻用される言語形式となり、次第に確固たる文法カテゴリーへと発展していく。言語接触によって文法カテゴリーの複製が行われる際には、接触言語のモデルがもととなって複製される。言語接触によって完全に新しい使用パターンが生じることもあるが、類型論的な観点からより頻繁にみられるのは、モデル言語に見られるものに対応する使用パターンが、その使用が制限的であったとしても、すでに存在しているケースである(cf. Heine, Kuteva 2005)。つまり、全く何もないところから発展するのではなく、むしろすでに複製言語側に存在している使用パターンがもととなって発展するという。

さて、複製言語において、限定的な使用パターン(**minor use patterns**)が、言語接触による文法複製を通じて、主要な使用パターン(**major use patterns**)に発展していく過程を Heine, Kuteva (2005: 45)は次のように表している。すなわち、既存の使用パターンがより頻繁に用いられるようになり、新たなコンテキストとも共起するようになる。それにしたがって、新しい文法的機能と関連付けられるようになっていく。つまり、ある特定の使用パターンが頻用されることは、文法化のような言語変化を引き起こす要因となるのである(cf. Bybee 2003)。頻用の結果、新しいコンテキストで用いられるようになることはまさしく文法化のパラメー

ター(4-2)における拡張にあたり、文法的機能の獲得はその拡張の結果として生じるものである。したがって、ある言語に既存の限定的な使用パターンが、言語接触の結果、モデル言語の使用パターンを手本として頻用されるようになり、主要な使用パターンに変化していく。そして、次第に新しいコンテキストにも当該の使用パターンの用法が拡張することで、その言語形式は新しい文法的機能を獲得する。文法化は、このようにして言語接触によって生じる文法複製に関与することになる。

たとえば、Heine, Kuteva (2005: 47-48)は、言語接触が関与する文法的使用パターンについて北米に分布するドイツ語方言を例に論じている。北米に分布するドイツ語方言には、英語の代動詞 *do* の使用パターンをモデルとして複製されたと考えられる使用パターンが見られるという。ドイツ語動詞の *tun* (英語の *do*) の使用パターンは、ドイツ本国のドイツ語方言では特定のコンテキストに限定され、頻用されることはない。しかし、たとえばカナダのペンシルベニアドイツ語にみられる *duh* (英語の *do*) という動詞は、英語の代動詞 *do* にみられる使用パターンをモデルとして、頻繁に用いられるようになっているという。しかし、英語ほどその用法が一般化されるような段階にまでは発展していないことは、英語とは異なりその使用が現在時制に限られるなど、制限的にしか用いられないことからわかる(cf. Burridge 1995)。ペンシルベニアドイツ語の *duh* の使用パターンは、英語との言語接触を通じて頻繁に用いられるようにはなったものの、新たなコンテキストにも適用されることで文法的な機能とはっきりとつながりを持つような状態には至っていない。つまり、ここにみられるのは、言語接触によって生じる言語変化の初期段階の様相であり、それは文法カテゴリーに達する以前の段階である。ゆえに、文法的使用パターンという概念を用いることで、文法化の前段階(カナダのペンシルベニアドイツ語を例にとるならば、モデル言語である英語の使用パターンに基づいたものが限られたコンテキストのなかで頻用されるという段階)を指し示すことができる。

語用論的に動機づけられた談話中の使用パターンは、文法的機能を持った言語形式として慣用化していく。いったん主要な使用パターンが誕生すると、語用論的に動機づけられた形式から文法的な形式への変化、すなわち新しい文法カテゴリーの誕生につながっていく。このような言語変化は、すでに述べたように、段階的なものであり、徐々に進行する。文法カテゴリーの誕生に先立つ最初期の段階は初期カテゴリー(*incipient categories*)と呼び、次のような特徴を持っているとされる。

(4-47) 初期カテゴリーの特徴 (Heine, Kuteva 2005: 71)

- a. 初期カテゴリーにおいて、以前 (=元) (earlier (=source))と現在 (=目標) (present (=target))の意味の境界は曖昧である、つまり、元の意味としての解釈も一般的に可能である。
- b. その使用は、使われても使われなくてもよいという意味で、随意的である。これが意味するのは、そのカテゴリーによって表される文法的意味は、義務的に標示されるわけではない。
- c. 形態統語論的に元のカテゴリーと識別することが大体においてできず、その使用は生起したコンテキストに限定される。
- d. 音声的にそれぞれ元のカテゴリーと識別ができない。
- e. 対応するモデル言語のカテゴリーよりも使用頻度が低い。
- f. その言語の話者 (や文法家) によって文法の別個の実体としては一般的に認識されない。それらが存在するかどうかという問題には、意見の相違がある傾向がある。
- g. したがって、「純粹主義的な」文法家や言語計画組織は、その存在を否定しがちで、その用法は正式な教育において反対される。

Heine, Kuteva (2005: 71-72)は、ドイツ語と言語接触のあるスラヴ諸語 (ソルブ語、チェコ語、スロヴェニア語) における冠詞の発達を例に初期カテゴリーについて論じている。これらの言語では、指示代名詞を定性の標示に、数詞の 1 を不定性の標示に用いる傾向が見られ、しかもその使用パターンが初期カテゴリーの特徴を獲得していると考えている。

まず、ほとんどの場合で、元の意味 (指示代名詞や数詞 1 としての意味) と目標の意味 (定性・不定性の標示) の間の違いが曖昧である(4-47a)。そして、当該の言語形式が必ずしも目標の意味 (定性の標示) でとらえられるわけでもなく、その一方でそれを用いないことが必ずしも目標の意味が表されていないということを含意するわけではない(4-47b)。また、当該の指示代名詞と数詞はともに、形式の上で代名詞的にも形容詞的にもふるまうという点で、両者を形式上で区別することはできない(4-47c)。上ソルブ語以外のドイツ語と接触のあるスラヴ諸語では、元の形式との区別はできない(4-47d)。そして、これらのスラヴ諸語にみられる“冠詞”は、モデルとなっていると考えられるドイツ語の冠詞と比べると使用頻度はずっと低い(4-47e)。実際に、話し言葉では極めて一般的であるにもかかわらず、現代の書き言葉や教育の場ではその使用が抑えられているという。ただし、上ソルブ語では、指示代名詞 *tón* が定冠詞として用いられる場合に限りアクセントを持たなかったり、数詞 1 が *jedyn* であるのに対して、不定冠詞は単音節の *jen* という形で置き換えられるというような音声的な弱化が観察された

りする。そのため、(4-47d)はソルブ語には当てはまらない。上ソルブ語で見られるこの特徴は、他のドイツ語と接触のあるスラヴ諸語と比較して当該言語における冠詞の文法化が一步推し進められていることを意味する。

このように、モデル言語をもとに文法複製された使用パターンが、談話のなかで繰り返し用いられるようになる過程で、限定的な使用パターンから主要な使用パターンに移行していく。それに伴い形式の面では、文法カテゴリーの初期段階にあたる初期カテゴリーの形式的特徴が見いだされるようになる。この初期カテゴリーは、文法化の初期段階に当たると考えられるため、ある特定の使用パターンが、初期カテゴリー的な形式上の特徴を獲得することは新しい文法カテゴリーへ発展するうえでの必須条件でもある(Heine, Kuteva 2005: 74)。

またこれと同時に、文法複製に際しては、無から使用パターンが生成されるよりも²⁰⁸、複製言語に既存の使用パターンが高い頻度で用いられるようになることを通して新しいコンテキストでの用法を拡張していくことが多い。

言語接触による言語変化の代表例として知られるバルカン言語圏現象の一つに、不定形を接続法の定形動詞によって置換するという現象が知られるが、Matras (1998: 90)はバルカン諸語における同現象について、「関係するすべての言語が定形動詞[による表現]の選択肢をかつての体系(すなわち接触以前)に少なくとも一定の環境において持ち合わせており、不定形の消失がその選択肢の段階的な拡張と最終的な一般化に関与しているという点は意義深い」と述べている。つまり、接触以前のバルカン諸語では定形動詞による形式は限られたコンテキストにおいて存在しており、この既存の使用パターンが、言語接触を通じた頻用により、不定形が用いられていたコンテキストにも拡張し、最終的に不定形にとって代わる²⁰⁹というプロセスを経ている。

言語接触による文法的意味や機能の言語転移は、複製言語の話者がモデル言語にみられるのと同等のものを再現しようとする動機によってもたらされる。文法を複製するプロセスは段階的なものであるが、それは文法的使用パターンの頻度によってはかることができる。通常の場合、複製言語で極めて限定的なコンテキストでしかみられない文法的使用パターンが、モデル言語の使用パターンにもとづいて、頻繁に用いられるようになり、さらに新しいコンテキストにもその用法が拡大する。新たなコンテキストへの使用範囲の拡大は、新しい文法的

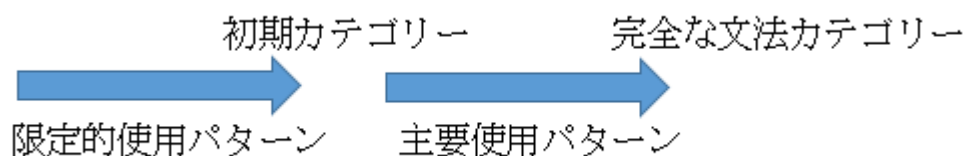
²⁰⁸ このような場合も少数ながら存在することが指摘されている(cf. Heine, Kuteva 2005: 77)。

²⁰⁹ すべてのバルカン諸語で不定形が失われたわけではないが(たとえばルーマニア語では不定形は残っており、その用法も限定的ではあるが生きている)、その用法はかつてと比較して格段に制限され、多くの場合において定形動詞による形式に取って代わられている。

意味との関連性を生み出すようになる。この段階では、当該の言語形式はまだ文法カテゴリーとしての確固たる地位を持つものではないが、それでも文法的意味・機能との弱いつながりを見出すことができると考えられる。そのような言語形式は(4-47)で示した初期カテゴリーの特徴を有するといえる。そしてこの初期カテゴリーは確固たる文法カテゴリーへの発展の前段階を成すので、さらに文法化のプロセスが推し進められることで、いずれは明確な文法カテゴリーが誕生することが期待される (cf. 【図 4-2】)。

このようにして、モデル言語の使用パターンや文法カテゴリーは、複製言語において、新たな文法カテゴリーの誕生という言語変化をもたらさう。そして、このような言語接触による文法複製の過程においては、普遍的な文法化のプロセスが決定的に関与するのである。

【図 4-2】 文法複製の際の使用パターンとカテゴリーの関係
(cf. Heine, Kuteva 2005: 75)



4.2.2. ブラネシュティ方言の場合

Friedman (1994: 109)は、バルカン諸語における補語の接語重複が「語用論的に条件づけられた構造から始まり、それがそれぞれの言語で様々な程度に文法化した」と述べている。それと同時に、「その語用論的なデバイスの文法化のプロセスはそれ自体、[バルカン・スラヴ語の]方言のヴァリエーションに反映されている」とも指摘している。

実際に、標準ブルガリア語にみられる補語の接語重複は、全体的に語用論的に条件づけられているのに対して、標準マケドニア語ではより文法化されているということ(cf. 4.1.2. 「接語重複と文法化」)、そして標準マケドニア語の補語の接語重複の文法化の程度の高さは、多くのマケドニア語諸方言が分布している多言語環境が要因であることについて指摘した(cf. 4.1.3.3. 「バルカンの多言語環境」)。語用論的な手段からより文法的な手段への変化には、南西マケドニア地域にみられる緊密で複雑な言語接触が強く関与していると考えられる。

一般的に、ある言語あるいは方言が言語接触を通して変化を被ったかどうかを調べるためには、その言語の変化の過程を知ることができる通時的なデータに当たる必要がある。ただ、ブラネシュティ方言にはそのようなデータが基本的

に存在しないため²¹⁰、言語接触による言語変化の様相を明らかにするためには、基本的に共時的な観点から得られる証拠に頼らなくてはならない。すでに 3.1. 「ブラネシュティと方言」の節で述べたように、ブラネシュティ方言はブルガリアの北東に分布するミジヤ方言群（特に、グレーベン方言）が基盤となっていることが明らかになっているため、ブルガリア国内のミジヤ方言群と比較することが一定程度において有効であると考えられる。なぜなら、ルーマニア語と緊密な言語接触の状態に置かれる前のブラネシュティ方言の体系は、ブルガリア国内のミジヤ方言群に見出すことができると考えられるためである。したがって、これとブラネシュティ方言を比較することで、言語接触によってブラネシュティ方言にどのような言語変化が生じたかを明らかにすることができるだろう。

補語の接語重複は、まず 4.1.3. 「方言と接語重複の文法化」の節で指摘したように、東方言ではまれな現象である(cf. Мирчев 1963; Попов et al. 1983)。さらに 4.1.3.2. 「方言地図による分析」において Соболев et al. (2005)による『バルカン諸語の小方言地図』の分析を通して明らかにしたように、南西に位置するペシュタニやゲガの方言と比較して、北東に位置するラヴナの方言（ミジヤ方言群の一種）では、補語の接語重複は語用論的に条件づけられた現象であるため、その使用は随意的である。しかしながら、同系統であるブラネシュティ方言では、補語の接語重複は話者によって頻繁に用いられる現象であり、一定の場合においては義務的ではある。

特に注目すべきは、義務的な接語重複が要求されるのが、前置詞 *пъ/рă* を伴う場合であるということである。この前置詞は、Младенов (1993: 381-382)や Димчев (1974: 256-257)も指摘するように、ルーマニア語との言語接触によってもたらされた前置詞 *pe* の借用語である。Heine, Kuteva (2005: 21)によれば、「語彙的な借用が関与する場合には、転移がおこったことを立証することは通常、かなり容易である」という。ルーマニア語から借用された *пъ/рă* が、ブラネシュティ方言の補語の接語重複に観察されるということは、言語接触の結果、ルーマニア語をモデルとして、*пъ/рă* を伴った補語の接語重複が、ブラネシュティ方言に文法複製された可能性を強く示唆する。

実際のところ、ブラネシュティ方言にみられる *пъ/рă* を伴う補語の接語重複が示す特徴は、ルーマニア語のそれと類似している。たとえば、ルーマニア語では、以下(4-48)にあるように、人称代名詞非接語形対格によってあらわされる直接補語(N)は前置詞 *pe* を必ず伴い、補語の文中の位置に関係なく義務的に接語重複す

²¹⁰ 代々歌い継がれてきた民衆歌謡などは、古い特徴を残す傾向があるため、ある程度手掛かりにはなる。ブラネシュティ方言については、たとえば、人称代名詞接語形の語順について述べた部分でこの可能性を指摘している(cf. 3.2.1.2. 「語順」)。

る(cf. Guțu Romalo, V. et al. 2008: 402)

(4-48) a. Pe mine m- a recunoscut.
AM I-ACC I-ACC.CL have-PRS.3.SG recognized

b. M- a recunoscut pe mine.
I-ACC.CL have-PRS.3.SG recognized AM I-ACC

「(彼/彼女は)私のことを認識した。」(Guțu Romalo, V. et al. 2008: 402)

(4-48)に示されているように、pe mine「私を」であらわされる直接補語は、動詞前でも(4-48a)、動詞後でも(4-48b)、義務的に接語重複する。

ブラネシュティ方言においても、3.2.2.3.「пъ/păと接語重複」で行った分析のなかで明らかにしたように、人称代名詞非接語形対格によって直接補語(N)があらわされる場合、пъ/păを必ず伴い、接語重複はほとんど義務的となる。

また、ルーマニア語では、動詞後の位置²¹¹を占める直接補語(N)が接語重複するためには、peを伴うことが必須条件である。したがって、以下(4-49)にあるように、動詞後の直接補語の接語重複は、peを伴う場合にのみ可能となる(cf. Guțu Romalo, V. et al. 2008: 402; 鈴木 2006: 161-162)²¹²。

(4-49) a. I- a îmbrăcat pe copii.
they-ACC.CL have-PRS.3.SG dressed AM child-PL

「(彼/彼女は)その子供に服を着せた。」

(Guțu Romalo, V. et al. 2008: 402)

b. A îmbrăcat copiii.
have-PRS.3.SG dressed child-PL+DEF.PL

「(彼/彼女は)その子らに新しい服を着せた」

(4-49a)と(4-49b)の対比は、peの有無が、接語重複が行われるかどうかを左右していることを示している。いずれも、補語は動詞後の位置にあるわけだが、前者はpeを伴い、後者は伴わない。このとき、peを伴う名詞句が直接補語である(4-49a)のみ接語重複が行われている。

²¹¹ RD の位置は念頭に置かない。

²¹² ただし、人間を表す否定代名詞や不定代名詞、疑問代名詞は、peの使用が義務づけられているにもかかわらず、接語重複はおこなわれない(Guțu Romalo, V. et al. 2008: 403; 鈴木 2006: 162)。

ブラネシュティ方言で、**пъ/рă** を伴わない直接補語は、動詞後よりも動詞前のときに、より頻繁に接語重複する (cf. 3.2.2.3.3. 【表 3-9】)。これはブルガリア国内のブルガリア語諸方言が一般的に示す特徴とも合致するが (cf. Krapova, Tisheva 2006; Тишева, Кръпова 2009)、その背景には、接語重複がトピック化と密接に結びついた現象であるということがある。

また、そもそも **пъ/рă** が存在しないブルガリア北東に分布するラヴナの方言 (ミジヤ方言群) では、【地図 4-5】 が示すように、動詞前の直接補語は接語重複しうるが、それは極めて制限的である。このように、ブルガリア国内のミジヤ方言群では、トピックに関与しやすい動詞前にある直接補語でさえも接語重複は制限的なのである。

一方、ブラネシュティ方言で、**пъ/рă** を伴う直接補語は、動詞前よりも、動詞後のときに接語重複する例が明らかに多い (cf. 3.2.2.3.3. 【表 3-9】)。そもそも、動詞後の直接補語が接語重複するのは、ほとんどすべての例 (全 158 例中 152 例) で **пъ/рă** を伴う場合である (3.2.5.1. 【表 3-13】 を参照)。しかも、**пъ/рă** を伴わない動詞後の直接補語は、1 例(3-66f)を除いて RD の位置で行われるものであるから (cf. 3.2.5. (3-66))、動詞後 (RD の位置を除く) の直接補語の接語重複には、全体的に **пъ/рă** の使用が義務的であるといえる。これは、ルーマニア語と共通する。

以上に述べたように、ブラネシュティ方言は、国内のミジヤ方言群とは明らかに異なる新しい特徴を獲得したと考えられるが、その特徴はルーマニア語と共通している。

以上をまとめると次の【表 4-2】 のようになる。

【表 4-2】 ルーマニア語とブラネシュティ方言の接語重複の特徴の比較

	ルーマニア語	ブラネシュティ方言 (ルーマニア国内のミジヤ方言群)
人称代名詞 非接語形対 格のとき	前置詞 pe を伴い、 接語重複が義務的	前置詞 пъ/рă を伴い、接語重複がほ とんど義務的
人称代名詞 以外の名詞 句のとき	動詞後(RD を除く) では、 pe を伴う場 合に限り、接語重複 が行われうる	動詞後(RD を除く)では、 пъ/рă を伴 う場合に限り、接語重複が行われう る

以上より、少なくとも **пъ/pă** を伴う直接補語の接語重複は、ルーマニア語の **pe** を伴った直接補語の接語重複をモデルとして、ブラネシュティ方言に複製されたといえる。また、人称代名詞非接語形対格の場合にみられる義務的な接語重複は、言語接触の結果、文法化が促進されたとみることができる。

それでは、ルーマニア語の **pe** を伴う接語重複がいかにしてブラネシュティ方言に複製されたのだろうか。

ルーマニア語との緊密な言語接触が始まる以前から、ブラネシュティ方言に補語の接語重複が存在したことは、ミジャ方言群を含む東方言の通時的および共時的なデータから明らかである。ただし、その用法が極めて制限的であったことは、様々な資料が示すところである。いわば、接触以前のブラネシュティ方言にみられる補語の接語重複は、文法的な機能との結びつきがほとんどなく、談話において用いられうる語用論的な機能をもったものにすぎなかったと考えられる。前節(4.2.1.)で用いた用語を使うと、接触以前のブラネシュティ方言の補語の接語重複は、制限的な使用パターンに過ぎなかった。つまり、接語重複が行われるのは、補語がトピックとなるようなコンテキストに限られており、決して頻用される主要な使用パターンではなかった。

一方で、ルーマニア語では、補語の接語重複の文法化は一般的に標準ブルガリア語よりも進行しており(cf. Лопашов 1978; 菅井 2012a)、それゆえにより頻繁に、そしてより広範なコンテキストにおいて接語重複が用いられる。ブラネシュティ方言がそのようなルーマニア語と言語接触した結果、ルーマニア語で主要な使用パターンである補語の接語重複をモデルとして、ブラネシュティ方言の話者が既存の使用パターンを頻用するようになり、さらにはその使用の範囲を拡張するようになっていったことは想像に難くない。その過程で、ブラネシュティ方言の話者は、ルーマニア語で直接補語を標示する **pe** の存在に“気づき”、これをその文法的な意味・機能とともにブラネシュティ方言に取り込むことを通じて、**пъ/pă** を伴う直接補語の接語重複を複製した。このようなプロセスは、ブラネシュティ方言の話者が、ルーマニア語にある **pe** を伴った直接補語の接語重複と同様のものをブラネシュティ方言にも作り出そうとする志向によってもたらされる。

文法複製の結果、ブラネシュティ方言は、ルーマニア語の **pe** を伴う直接補語の接語重複と類似した用法を獲得していく。例えばトピックが関与しないようなコンテキストにおいても接語重複が行われるようになる。これが意味するのは、ブラネシュティ方言における **пъ/pă** を伴った接語重複という使用パターンは、より頻繁に用いられるようになることで、より広範なコンテキストに拡大したということである。そして、それによって、接語重複が行われる際に義務的に関与していたと考えられる語用論的な制約(トピックであること)が必ずしも介

在しなくなったと考えられる。トピックである要素に特徴的な動詞前の位置ではなく、基本語順の位置と考えられる動詞後の位置にある補語が、*пъ/pǎ* を伴う場合に限って、接語重複されるようになってきているのはその表れである。特に、人称代名詞非接語形対格によってあらわされた直接補語の場合にはほとんど義務的に接語重複することからも、このプロセスが大きく進んだと考えられ、接語重複が語用論的な手段から文法的な手段に変化したとみることができる²¹³。それ以外の名詞句によってあらわされた直接補語の接語重複は、接語重複が一般的に随意的であることから想定できるように、人称代名詞非接語形対格であらわれた直接補語の場合ほどは進行していない。

とはいえ、人称代名詞非接語形以外の名詞句によってあらわされた直接補語の接語重複は、ブルガリア国内のミジヤ方言群にあるような制限的な使用パターンからは脱して、主要な使用パターンに移行しているといえる。文法的な機能との関係性は比較的希薄ながら、文法カテゴリーの初期段階にみられるような特徴を有していることは、(4-47)で示した初期カテゴリーの特徴の(4-47a)から(4-47e)のすべてが該当することからも明白である²¹⁴。まず、人称代名詞接語形は、もともとの代名詞(ソースとなるカテゴリー)としても、補語の一致標識(ターゲットとなるカテゴリー)としてもその意味の解釈が可能であり、両者の差異は曖昧である(4-47a)。補語の標示という文法的な意味は、接語重複が随意的に行われるため、義務的に標示されるものではない(4-47b)。また、形態統語論的に代名詞としても、補語の一致標識の機能を持った動詞の接辞としても解釈が可能で、ソースとターゲットのカテゴリー間の形式上の区別をすることは難しく(4-47c)、音声的実体の消失についても見られないため、元のカテゴリーとの識別はやはり困難である(4-47d)。それに加え、対応するモデル言語にあたるルーマニア語にみられる義務的な使用(4-49)と異なり、ブラネシュティ方言では随意的な使用であるため、使用頻度が低いと言える(4-47e)。

直接補語が *pe* を伴って接語重複するルーマニア語の影響で、ブラネシュティ方言においても *пъ/pǎ* を伴った直接補語の接語重複が談話中で頻用されるようになり、その結果、語用論的な制約が必ずしも満たされるものではなく、接

²¹³ 人称代名詞が直接補語(N)である場合にこのような状況がみられるのは、人称代名詞がトピックになりやすいからこそ、トピックを標示する手段としての接語重複が頻繁に行われて、トピック以外のものにも広まりやすかったためと考えられる。人称代名詞であらわされた補語(N)の接語重複が、そのほかの名詞句であらわされた場合と比較して、特別なふるまいを示すことは、標準ブルガリア語はもとより、バルカン諸語一般にいえる(cf. Лопашов 1978)。

²¹⁴ ブラネシュティ方言の現地での使用状況、及び当方言の研究状況を鑑みて、(4-47f)と(4-47g)は除外する。

語重複の用法の拡大がもたらされた。またそれに伴って文法的な意味との結びつきが増加したと考えられるのである。

4.2.3. まとめ

以上の論考の結果、次のことが明らかになった。すなわち、ブラネシュティ方言にみられる補語の接語重複のうち、**пъ/pă** を伴った補語の接語重複は、ルーマニア語との言語接触の結果、ルーマニア語の **pe** を伴う補語の接語重複をモデルとした文法複製が行われ、語用論的に制限的な使用パターンから、より広範のコンテクストに適用されうる主要な使用パターンへと変化した。

このとき、**пъ/pă** をとりうる名詞句のなかでも、人称代名詞非接語形対格によってあらわされた直接補語とそれ以外の名詞句によってあらわされた直接補語とで補語の接語重複の変化の度合いに差異が生じていることに注意すべきである。このような変化は一度におこるものではなく、あくまでも段階的に進行するものである。そのため、両者（人称代名詞非接語形とそれ以外の名詞句）にみられる差は、それらが異なった段階にあることを示している。前者は、その特徴を鑑みるに、語用論的な手段から、文法的な手段へと変化を遂げたと考えられる。その一方で、後者はルーマニア語の **pe** を伴う直接補語の接語重複と類似した用法が観察されるものの、ほとんど義務的に接語重複する人称代名詞非接語形対格であらわされた直接補語(N)の場合に比して、接語重複は随意的であり、文法的な機能との結びつきもまだ希薄な段階にある。しかし、少なくとも初期カテゴリーの段階には達していることは、それが持つ特徴から想定することができる。

次節(4.3.)では、本節(4.2.)で展開した主張、すなわちルーマニア語との言語接触によって文法化が促進されたという考え方に立脚して、ブラネシュティ方言における **пъ/pă** を伴う補語の接語重複が文法化されているのかを文法化のパラメーターを用いて検証する。そのうえで、文法化の程度に着目し、人称代名詞非接語形対格で表された直接補語とそれ以外の名詞句でそれぞれどの程度において文法化が進行しているのかということをも明らかにする。

4.3. ブラネシュティ方言の接語重複の文法化

4.3.1. 文法化のパラメーター

前の 4.1.2. 「接語重複の文法化」では、標準ブルガリア語の接語重複の文法化を検証したが、本節(4.3.1.)では、ブラネシュティ方言にみられる補語の接語重複がいかにかに文法化されているかについて、Heine, Kuteva (2007)による文法化のパラメーターを用いた分析を試みる。以下(4-50)にそのパラメーターを再掲する。

(4-50) (=4-2) 文法化のパラメーター (Heine, Kuteva 2007: 34)

- a. 拡張、すなわち言語表現が新たな文脈で用いられるときに、新しい文法的意味が台頭すること
- b. 脱意味化（あるいは「意味的漂白」）、すなわち意味内容の喪失（あるいは一般化）
- c. 脱カテゴリー化、すなわち単語あるいは文法化の程度が低い形式が形態統語的な特徴を消失
- d. 浸食（あるいは「音声的弱化」）、すなわち音声的実体の消失

まず、ブラネシュティ方言では、補語の接語重複の使用は明らかに新しい文脈にまで拡張しているといえる(4-50a)。なぜなら、言語接触以前の状態を示すブルガリア国内のミジヤ方言群では補語の接語重複が行われない場合でさえも、ブラネシュティ方言では補語の接語重複が行われているためである。ブラネシュティ方言では、補語がトピック性と関与しないような場合や、論理強勢を持ったり、またはときにはフォーカスを標示する語彙的なマーカー²¹⁵も伴ってフォーカス²¹⁶と考えられる場合であっても、補語の接語重複が行われる例が少なからず見られる(cf. 3.3.1.)。以下の(4-51)は直接補語が、(4-52)は間接補語が、フォーカスを標示するマーカー (*и/i* または *саму/sàmu*) を伴って、フォーカスとなると考えられる例である。いずれも動詞後の補語が関与している。

(4-51) a.

Ўтре	ше	<u>йь</u>	зѣмѣм	и	<u>пѣ</u>	<u>НЕЙЬ.</u>
Ùtre	še	<u>jǎ</u>	zǎmǎm	i	<u>pǎ</u>	<u>NEJǎ.</u>
tomorrow	FUT	she-ACC.CL	take-PRS.1.SG	also	AM	she-ACC

「明日、(私は) 彼女も連れていく。」 (Rus_131005_002/25.20)

²¹⁵ たとえば、*само/samo* 「～だけ」、*и/i* 「～もまた、～さえ」、*дори/dori*; *даже/daže* 「～さえ」、*особено/osobeno* 「特に」などがそれにあたる（cf. Tisheva, Dzhonova 2003; Leafgren 2002: 25; Ницолова 2008: 152; Крапова, Cinque 2008: 268）。

²¹⁶ フォーカスについては、2.2.2.1. 「形態と用法」の脚注 38 を見よ。

b. Мъ пукàниўо сàму пъ МÈНЕ.
Мă pukàniwo sàmu pă MÈNE.
 I-ACC.CL invite-AOR.3.PL only AM I-ACC
 「私だけが招待された。」 (DD1_120504_003/37.30)

(4-52) a. Àс му кàзвѣм и нъ НÈЛУ.
 Às mü kàzväm i nă NÈLU.
 I-NOM he-DAT.CL say-PRS.1.SG also DM Nelu
 「私はネルにも言っている。」 (BV2_121031_001/1.14.56)

b. Дъ му нъпràйъ и нъ НÈГУ дъ
 Dă mu năprājă i nă NÈGU dă
 SMP he-DAT.CL make-PRS.1.SG also DM he-ACC SMP
 <...> пийете двàмъ.
 <...> pijete dvămă.
 drink-PRS.2.PL two_persons
 「(私は) 彼にも (コーヒーを) 作ってあげましょう。(あなたたち)
 二人が (一緒に) 飲むように。」 (BA1_131004_001/1.03.35)

すでに述べたように(cf. 4.1.3.), 北東に分布するミジヤ方言群では、補語の接語重複の使用は、トピック性と関与するようなコンテキストに限られていた。しかし、ルーマニア語との言語接触を通じて、補語の接語重複が頻用されるなかで、新しいコンテキスト、すなわちフォーカス性が関与するコンテキストにまで拡張したと考えられる (cf. 【表 4-3】)。したがって、ブラネシュティ方言の接語重複には、文法化のパラメーターの拡張(4-50a)を見出すことができる。コンテキストの拡大とそれに伴う新しい意味の出現は、一度に急におこるのではなく、以下の【表 4-3】にあるような段階的な変化のプロセスを経る。

ブルガリア国内のミジヤ方言群では、トピック性が補語の接語重複に深く関与しているという点で、同現象が観察されるコンテキストは制限的である (【表 4-3】 段階 I)。それに対して、現在のブラネシュティ方言は(4-51)や(4-52)にみられるように、補語の接語重複と補語のフォーカス標示が共起していることから、少なくとも段階 I を脱して段階 II に到達しているとみることができる。一方で、段階 III にあるかどうかについては、議論の余地が残る。なぜなら、接語重複とフォーカス標示された補語が共起する例は、補語(N)が人称代名詞非接語形であらわされている場合を除いて、生起頻度が高いとはいいがたいためである。前章の 3.3. 「補語の接語重複の機能」でも論じたように、ブラネシュティ方言の補語

の接語重複は、トピック標示と共起する場合のほうがより一般的である。そのため、新しいコンテキスト（フォーカス標示との共起）が生じてはいるが、それは元のコンテキストと同等に頻繁になるほど一般化していないと考えられる。ゆえに、全体的には段階Ⅱにあるとみるのが妥当であろう。

ただし、フォーカスとの共起がふつうに見られるのは人称代名詞非接語形(N)によってあらわされる直接補語の場合に限られるため、この場合の接語重複は、段階Ⅲに近いところまで到達していると推定できる。

【表 4-3】「コンテキストの拡大と意味」

段階	生起頻度	コンテキスト	意味
I	低い	制限的 (e.g. トピック性の関与)	補語のトピック標示
II		新しいコンテキストへの拡大 (e.g. フォーカス性が関与する場合)	補語のトピック標示に加えて、フォーカス標示も許容するようになる
III	高い	元のコンテキストでも、新しいコンテキストでも生起する	補語のトピック標示も、フォーカス標示も一般的になる

次に、ブラネシュティ方言の人称代名詞接語形の形態統語論的特徴に着目すると、その語順が、関係する動詞に対してほとんど固定されている。人称代名詞接語形は定形動詞に対してはほとんど常に、音韻論的にも統語論的にもプロクリティックであり、それは人称代名詞接語形が文頭やポーズのあとに置かれる事実からもわかる。標準ブルガリア語では一般的に、文中の位置によって動詞に対して前置されたり後置されたりするのが、ブラネシュティ方言の人称代名詞接語形(Ncl)の場合は、動詞に対して前置される語順が固定されている(cf. Cyran 2015b)。

(4-53) a. Мъ _____ зè и пѣ мѣне нѣ Букурѣш.
Мă _____ zè i ră mène nă Bukurěš.
 I-ACC.CL take-AOR.3.SG also AM I-ACC to Bucharest
 「私もブカレストに連れていかれた。」(TO2_150211_002/9.32)

b. Тѣ _____ видеѣо пѣ тѣбе кѣчитѣ?
Tă _____ videwo ră tēbe kŭčită?
 you-ACC.CL see-AOR.3.PL AM you-ACC dog-PL+DEF.PL

「犬たちはあなたのことを見たか。」 (BV3_130927_002/2.30.01)

- (4-54) a. My _____ пуйаўъ там и нь нèгу бългърски.
Mu _____ pujãwã там i nã nègu bălgãrski.
 he-DAT.CL sing-AOR.1.SG there also DM he-ACC Bulgarian
 「(私は) そこで彼にもブルガリア語で歌った。」
 (BV3_131003_001/1.44.36)

- b. Ми _____ дўмъ нь мène, „Хайди, чи дувèчеръ гàтъ“.
Mi _____ dũmã nã mène, „Hãidi, či duvècerã gãtã“.
 I-DAT.CL say-PRS.3.SG DM I-ACC come_on because this_evening ready
 「(姉は) 私に言ったの『ほら、今晚には準備万端なんだから』って。」
 (TMita2_150217_001/20.19)

ブラネシュティ方言の人称代名詞接語形は対格(4-53)と与格(4-54)の両方の場合
 で、文中はもちろんのこと、文頭の位置を占めるような場合でも、動詞の直前の
 位置におかれる。このとき、人称代名詞接語形と動詞の間には別の要素が介入し
 えないため、常に動詞に隣接した位置を占めることになる²¹⁷(cf. Цыхун 1968: 123-
 124)。

このように、人称代名詞接語形が動詞の前で接辞化して固定化するのは、人称
 代名詞接語形が、語順の上で比較的自由的な振る舞いを見せる代名詞から、動詞に
 対する接辞という形態素に変化したことを示している²¹⁸。つまり、このプロセス
 には、脱カテゴリー化(4-50c)を見出すことができる。

また、人称代名詞接語形の接辞への変化の可能性を示唆する現象として、次の
 (4-55)のような例も見られた。

- (4-55) И мène пò- ми харèсўъ нь Петрòфски,
 I mène pò- mi harèswã nã Petròfski,
 also I-DAT COMP I-DAT.CL like-PRS.3.SG DM Petrofski

²¹⁷ 標準ブルガリア語では、すでに述べたように (cf. 2.2.2.2.2. 「例外的な語
 順」)、疑問の助詞 ли/li が動詞の直後に置かれるため、これが用いられるとき、
 人称代名詞接語形は動詞に対して隣接した語順を取りえないことと比較せよ。

²¹⁸ Heine, Kuteva (2005: 40)が示す脱カテゴリー化の特徴のうちの「統語論上の
 自由の消失」がこれにあたる。Цыхун (1968: 124-126)もまた、動詞に対して前
 置される形で人称代名詞接語形の語順が固定する傾向には、その人称代名詞接
 語形の文法化が関与していることを指摘している。

<u>пò-</u>	<u>ми</u>	<u>харесѹъ</u>	декѹт	нѹ	Сòфийѹ.
<u>pò-</u>	<u>mi</u>	<u>harèswǎ</u>	dekǎt	nǎ	Sòfijǎ.
COMP	I-DAT.CL	like-PRS.3.SG	than	DM	Sofia

「私もペトロフスキの（言葉）が好き、ソフィアのより好き。」

(BV3_131003_001/15.42)

(4-55)の例では、人称代名詞接語形 *ми/mi* は動詞に対して前置されているが、それに先行する位置に比較級を形成する *пò-/pò-* がみられる。この比較級形成のための助詞は、形容詞や副詞に対して用いられるのが一般的であるが、話し言葉などではそれ以外の品詞にも用いられうる (cf. Ницолова 2008: 128-129)²¹⁹。(4-55)では動詞 *харесѹъ/harèsǎw* に対して用いられ、「“より”気に入っている」と理解できる。注目すべきは *пò-/pò-* がとる語順である。関係する語（ここでは動詞）の直前におかれることなく、代わりに人称代名詞接語形がその位置を占め、*пò-/pò-* はそれよりも前におかれている。このことは、人称代名詞接語形と動詞の間に別の要素が入り込むことができないことを示唆しており、両者の間に語境界がなくなっている、つまり(4-55)の例における人称代名詞接語形 *ми/mi* は、次の(4-56)の図式にあるように、統語論的観点から動詞と一体化したものとみることができ²²⁰。前置詞句に対して比較級を形成する *пò-/pò-* が用いられている(4-57)と比較せよ。

(4-56) [по / ми харесѹъ/
[po / mi hareswǎ/]

²¹⁹ 「名詞、いくつかの代名詞、分詞、定形動詞、前置詞句などに内在する特徴の程度」(Ницолова 2008: 129)をあらわすために、*по-/po-* が用いられることがある。(4-57)の前置詞句以外の標準ブルガリア語の例を Ницолова (2008: 129) から引用し以下に挙げる。

(i) По мѹж бѹди!
Po mǎž bǎdi!
COMP man-M.SG be-IMP.2.SG
「もっと男らしくあれ！」

(ii) Ти по знаеш кое трябва и
Ti po znaeš кое tr'abva i
you-NOM COMP know-PRS.2.SG which-N.SG it_is_necessary and
кое не трябва.
кое ne tr'abva.
which NEG it_is_necessary

「君は何が必要で何が必要でないかをもっとよく知っている。」

²²⁰ この例で、語境界はスラッシュを用いて示す。

(4-57) 標準ブルガリア語

- a. Да седнем по в средата!
Da sednem po v sredata!
SMP sit_down-PRS.1.PL COMP in middle-F.SG+DEF.F.SG
「もっと真ん中に座りましょう！」(Ницолова 2008: 129)

- b. [по / в средата/]
[po / v sredata/]

このような人称代名詞接語形がみせる語順は、人称代名詞接語形が独立した語であるというよりは、動詞に対して接辞化した要素となっていることを示している。つまり、ブラネシュティ方言において人称代名詞接語形の脱カテゴリー化が生じていることを表している。

次に、脱意味化(4-50b)について見る。脱カテゴリー化によって、代名詞の形態統語論的な特徴が失われることと同時に、代名詞に特有の意味特徴、すなわち直示的及び前方照応的な機能の消失がおこる。これが意味するのは脱カテゴリー化と並行して、脱意味化(4-50b)が引き起こされているということである。この結果、ブラネシュティ方言の人称代名詞接語形は、意味論的にも形態統語論的にも、本来の代名詞から、補語の一致標識の機能をもった動詞接辞に変化したと考えられる²²¹。

また、このようにして動詞における補語の“人称変化”、あるいは補語の“活用”とみることができるようになることから²²²、動詞のパラダイムとしての再解釈も一定程度可能になるだろう。つまり、ブラネシュティ方言の動詞は、主語との一致を表す語尾変化に加えて、補語との一致を表す“語頭”変化のパラダイムが成り立ち、多人称一致動詞として再分析することが一定程度において可能となる²²³。

最後に、以上の3つの文法化のパラメーターに加えて、ブラネシュティ方言

²²¹ Цыхун (1968: 118-121)は、標準マケドニア語について、同様のことを指摘している。

²²² 標準マケドニア語においてみられる同様の現象については、Цыхун (1968: 120); Цивьян (1979: 207); Манова-Гуркова (2000: 207-208)が述べている。言語類型論的な見地からは Givón (1976: 154-160)などが指摘している。

²²³ 標準マケドニア語の場合については、4.1.2.4. 「多人称一致動詞」を見よ。Aronson (1997: 38-39; 2004: 24-27); Friedman (2008: 40)も参照のこと。

も留意すべきである。たとえば、人称代名詞接語形の語順について扱った3.2.1.2. 「語順」においても言及したように、一部の話者の発話では人称代名詞接語形は必ずしも動詞前に置かれるわけではない。標準ブルガリア語と同様に、文頭に来てしまうような場合には、動詞後に置かれることで、動詞に対する語順が固定していないようなケースもみられる。また、音声的実体に関する浸食のパラメーターは全体的に見てもそれを満たす例は限られている。文法化を経験した言語形式は理想的にはすべてのパラメーターを示すが、一部のパラメーターに限られることも少なくない。浸食については、Heine, Kuteva (2007: 42)が指摘するように「文法化のプロセスにおいて通常最後に適用され²²⁵、文法化がおこるための必要条件ではない」²²⁶ため、浸食のパラメーターを満たしていないとみられる例が存在するからといって、ブラネシュティ方言の補語の接語重複の文法化が否定されるわけではない。

本節(4.3.1.)における、文法化のパラメーター(4-50)を用いた分析の結果明らかになったブラネシュティ方言の補語の接語重複が示す様々な特徴は、それが多かれ少なかれ文法化を経験していることを示していると言える。

4.3.2. 文法化の程度—ルーマニア語との対照分析—

前節までで、ブラネシュティ方言の補語の接語重複は多かれ少なかれ文法化のプロセスを経ているということ(4.3.1. 「文法化のパラメーター」)、そして前置詞 *пъ/pă* が関与するか否か、さらには *пъ/pă* が関与する場合のなかでも、人称代名詞非接語形対格によってあらわされた直接補語とそれ以外の名詞句によってあらわされた直接補語の場合とで文法化の程度に差異が生じているということ(4.2.2. 「ブラネシュティ方言の場合」)を明らかにした。

本節(4.3.2.)では、ルーマニア語をモデルとした文法複製の結果、ブラネシュティ方言に新しく誕生したと考えられる *пъ/pă* を伴う直接補語の接語重複の文法化の程度について検討を行う。特に、直接補語が人称代名詞非接語形対格によってあらわされる場合とそれ以外の名詞句によってあらわされる場合とでどのように異なるかに注目する。また、その過程で、複製のモデルとなったルーマニア語の *pe* を伴う直接補語の接語重複との対照分析も行う。

²²⁵ ゆえに、ある言語表現の文法化が進行していればいるほど、音声的実体の消失が関与する傾向があるとも考えることができる(cf. Heine, Kuteva 2007: 46)

²²⁶ たとえば、ドイツ語の *haben* という動詞は、おおよそ 1000 年も助動詞としても用いられるという歴史を持ちながら元の語彙的な動詞と区別することができないことからわかるように、音声的な実態の消失を伴う浸食を経験していない(Heine, Kuteva 2007: 42)。

4.3.2.1. ブラネシュティ方言の接語重複の文法化の程度

文法化のプロセスはいくつかの段階を経ながら、徐々に進行すると考えられている(cf. Hopper, Traugott 2003: 6-7 etc.; 本論文 4.1. 「文法化」)。補語の接語重複の文法化のプロセスも同様である。言語類型論的な立場から、Givón (1976: 154-160)は、主語と補語の文法的一致の誕生と発展について論じている。彼によれば、動詞の補語との一致の誕生と発達には、主語の場合と同様に、トピック移動(topic-shift construction)が頻用されることで再分析が促され、最終的にそれが無標化(de-marking)するというプロセスが関係しているという。かつてのトピック化された補語(topic-shifted N)は“単なる”補語(N)に、前方照応的な人称代名詞(N)は補語の一致標識(Ncl)にそれぞれ再分析される。このようにして、補語の一致標識への変化のプロセス(つまり、文法化のプロセス)には再分析が関与する(cf. Hopper, Traugott 2003: 58-59; but see also Heine 2003: 592-594)。Givón (1976: 157)は、再分析を通じたトピック移動の無標化のプロセス、つまり補語の一致標識の誕生と変化を、次の(4-59)の図式で表している。

(4-59) (=4-18)

- | | | |
|-----------------------|----------------------------|-----------------------|
| a. the man, I saw him | 「動詞前 (TS) ²²⁷ 」 | (有標 (“marked”)) |
| ↓ | | |
| b. I saw him, the man | 「動詞後 (AT)」 | (半有標 (“semi-marked”)) |
| ↓ | | |
| c. I saw-him the man | 「ニュートラル」 | (無標 (“demarked”)) |

(4-59)の図式において、(4-59a)が有標な構文で、(4-59c)が無標化された構文である。(4-59a)ではトピック化された補語である the man (topic-shifted N)が、(4-59c)では単なる補語(N)として再分析される(topic-shifted N → N)。一方で、人称代名詞 him は、(4-59a)での人称代名詞 (N)から、動詞に接辞化した補語の一致標識(Ncl)として再分析される(N → Ncl)。再分析された補語に対する一致標識が誕生した(4-59c)の段階は、人称代名詞の文法化が完了した段階にあたる。

また、Givón (1976: 156)は、(4-59b)について、少なくとも SVO 言語については、動詞後がこのプロセス中において中間的な位置を占めることで、仲介段階としての重要な役割を果たすと主張している。人称代名詞が補語の一致標識へ変化していく文法化のプロセスには、形式の上でこのような段階的な変化が関与する。

²²⁷ TS は topic-shift、AT は afterthought-topic の略であり、Givón (1976)の用いている術語である。ここでは、本論文で用いている用語に合わせてそれぞれ「動詞前」と「動詞後」とした。

ブラネシュティ方言の補語の接語重複についても、Givón (1976)が示すものと全く同じプロセスを経ていると考えられる。пъ/рă を伴う直接補語（そのなかでも、人称代名詞非接語形対格によってあらわされる場合とそれ以外の名詞句であらわされる場合が分別される）と пъ/рă を伴わない補語にみられる接語重複の振る舞いの違いは、(4-59)で図式化した再分析による文法化のプロセスのなかで、それぞれが異なった段階に位置していることによって生じている。

まず、пъ/рă を伴わない補語の接語重複については、すでに 3.2.2.3. 「пъ/рă と接語重複」で示したように、動詞前のときに頻繁に行われる。また、動詞前の接語重複は、3.3. 「補語の接語重複の機能」でも論じたように、語用論的な観点からはトピック化する機能を持つ(cf. Guentchéva 1994; Асенова 2002)。したがって、このような語用論的な機能を持った動詞前の補語の接語重複が頻繁であることは、пъ/рă を伴わない補語の接語重複が、Givón (1976)によって示された文法化のプロセスのなかで、語用論的に有標である(4-59a)の段階にあることを意味する。

その一方で、пъ/рă を伴う直接補語については、動詞前よりも動詞後で頻繁に接語重複する。この事実は、пъ/рă を伴う直接補語の接語重複が、(4-59a)の段階を脱しており、пъ/рă を伴わないものと比べて、文法化が一段先に推し進められているということの反映に他ならない。

それでは、пъ/рă を伴う接語重複のうち、人称代名詞非接語形対格によってあらわされた直接補語の場合と、それ以外の名詞句によってあらわされた直接補語の場合とではどのような差があるだろうか。

人称代名詞非接語形対格によってあらわされた直接補語の接語重複の場合、補語自体のトピック性の有無にかかわることなく、義務的に接語重複する。実際に、補語がフォーカスである場合においても接語重複が行われる例が多々見られる。このような事実から、пъ/рă を伴う人称代名詞非接語形対格を直接補語として持つ接語重複については、トピック性が関与する語用論的に有標なものが無標化するプロセスがかなり進行しており、(4-59c)に近い段階に達していると考えられる。

その一方で、それ以外の名詞句によってあらわされた直接補語の場合、пъ/рă を伴わない補語とは異なり、接語重複は明らかに頻繁に行われるが、義務的に行われる程には至っていない。その点において、(4-59c)にまで到達しているとはいえないだろう。

また、イントネーション上の休止も文法化の程度をはかる上で有益である。すでに 3.2.5. 「動詞後」において述べたように、動詞後の пъ/рă を伴う直接補語は、イントネーション上の休止によって文の残りの部分から分断されない。補語と

b. Pe copii i- a îmbrăcat.
 AM child-PL they-ACC.CL have-PRS.3.SG dressed

「(彼/彼女は) 子供たちに服を着せた。」 (Guțu Romalo et al. 2008: 402)

このように、pe を伴う限り、動詞後であっても、直接補語の接語重複は義務的に行われる(4-60a)。

しかし、pe を伴わない場合、動詞後の直接補語の接語重複は行われぬ。次の(4-61)を見よ。

(4-61) a. Am văzut colegul.
 have-PRS.1.SG/PL seen colleague-M.SG+DEF.M.SG

「(私/たちは) 同僚に会った。」 (Стоянова 2008: 48)

b. L- am văzut pe coleg.
 he-ACC.CL have-PRS.1.SG/PL seen AM colleague-M.SG

「(私/たちは) 同僚に会った。」 (Стоянова 2008: 48)

(4-61a)と(4-61b)の例を対比すると、動詞後の直接補語は、pe を伴う場合にのみ接語重複することがわかる²²⁸。換言すると、pe の使用は、動詞後の補語の接語重複が行われるための必要条件である。しかし、人間を表す疑問代名詞 (cine「誰」) や否定代名詞 (nimeni「誰も～ない」)、不定代名詞 (cineva「誰か」) などは、動詞後で直接補語として用いられる場合、pe を必ず伴うが、接語重複は行われぬ(cf. Guțu Romalo et al. 2008: 403)。ゆえに、動詞後におかれた直接補語が接語重複するうえで、pe の使用は必要条件であるが、十分条件ではない(cf. 鈴木 2006: 161-162)。

²²⁸ 不定冠詞などを伴う名詞句が直接補語である場合であっても、以下(ib)にあるように pe を伴うと、義務的ではないが、「通常は人称代名詞接語形によって重複される」 (Guțu Romalo et al. 2008: 399)。この事実からも、動詞後の直接補語の接語重複は、pe の存在によって“引き起こされる”傾向があることがわかる。

(i) a. Caut un student.
 look_for-PRS.1.SG a-M.SG student-M.SG

b. (Îl) caut pe un student.
 he-M.SG.ACC.CL look_for-PRS.1.SG AM a-M.SG student-M.SG
 「(私は) ある学生を探している。」 (Guțu Romalo et al. 2008: 399)

一方で、pe を伴わない名詞句（人称代名詞を除く）は、動詞前の場合に限り接語重複が行われうる(cf. Guțu Romalo et al. 2008: 401-403)。次の(4-62)と対比せよ。

(4-62) a. Am vizitat Parisul.
 have-PRS.1.SG/PL visited Paris-M.SG+DEF.M.SG
 「(私/たちは) パリを訪れた。」 (Guțu Romalo et al. 2008: 402)

b. Parisul Ț-am vizitat
 Paris-M.SG+DEF.M.SG it-M.SG.ACC.CL have-PRS.1.SG/PL visited
 anul trecut.
 year-M.SG+DEF.M.SG passed
 「(私/たちは) パリなら去年訪れた。」 (Guțu Romalo et al. 2008: 402)

(4-62)で直接補語となっている名詞句は、人間を表していないので、そもそも pe を伴うことがない。また、接語重複するためには、当該の名詞句は定冠詞を伴って定である必要がある。このように、接語重複が行われるのは、動詞前におかれ、定である直接補語に限られているという事実は、pe を伴わない場合の接語重複にはトピック標示が関与していることを示唆している。換言すると、pe を伴わない直接補語の接語重複の使用は、トピック標示と結びついており、いわば語用論的に条件づけられている。

その一方で、pe を伴う動詞後の直接補語の使用が語用論的に条件づけられるものでないことは、それが疑問詞を伴った疑問文に対する答えにもなりえることからわかる。接語重複する動詞後の直接補語が pe を伴う例(4-63)と、伴わない例(4-64)を比較せよ。

(4-63) a. – Pe cine ai văzut?
 AM who have-PRS.2.SG seen
 「(あなたは) 誰を見たか。」

b. – Ț-am văzut pe Petru.
 he-ACC.CL have-PRS.1.SG seen AM Petru
 「(私は) ペトルを見た。」 (鈴木 2006: 160-161)

(4-64) a. – Ce voi primi?
 what FUT.1.SG receive-INF
 「(私は) 何を受け取るだろうか。」

b. – *Îl vei primi, răspunsul oficial.
 it-N.SG.ACC.CL FUT.2.SG receive-INF response-N.SG+DEF.N.SG official
 「(あなたは) 受け取るでしょう、公式の返答を」(鈴木 2006: 167)

pe を伴う(4-63b)の直接補語 Petru 「ペトル」は、(4-63a)の Pe cine 「誰を」に対する返答として適切であることから、当該の直接補語の名詞句 pe Petru は、トピックではなく、フォーカスであることがわかる。つまり、pe を伴う動詞後の直接補語は、トピック化とはかかわりなく、接語重複していると言える。この事実は、接語重複する動詞後の直接補語を伴う(4-63b)が、Givón (1976: 157)による(4-59)の再分析のプロセスのうち語用論的に有標な(4-59b)の段階を脱しており、高い程度で文法化していることを意味している。

その一方で、pe を伴うことがそもそも不可能である(4-64b)の直接補語 răspunsul oficial 「公式の返答」は、イントネーション上の休止（コンマで表されている）を伴っていることから、RD の位置にあると考えられる。この文が、(4-64a)の Ce 「何を」に対する返答として不適切であることから、(4-64b)における răspunsul oficial 「公式の返答」は、(4-63b)とは異なり、新情報にはなりえない要素、つまりトピックである。したがって、(4-64b)の接語重複は、語用論的に有標な、補語をトピック化する接語重複であることがわかる。

以上より、ルーマニア語では、pe を伴わない（または伴うことができない）直接補語に比べて、pe を伴う直接補語の接語重複のほうが文法化の程度が高いといえる。なぜなら、pe を伴う場合の接語重複は、再分析が進み、語用論的にほとんど無標化された(4-59c)の段階にまで達していると考えられるからである。

4.3.2.3. ブラネシュティ方言との対照

次に、ブラネシュティ方言との対照を試みる。

まず、ブラネシュティ方言では、*pe* を伴わない補語の接語重複は、動詞前のときに頻繁に行われる。これは、ルーマニア語において *pe* を伴わない直接補語の接語重複が動詞前の場合にのみ実現するという状況と類似している。しかし、これはルーマニア語からの影響というよりは、動詞前の補語の接語重複が、トピック化のための典型的な形態統語論的手段であるがゆえの言語一般的な傾

向と考えるべきであろう。逆に言うと、両言語における *пъ/pă* あるいは *pe* を伴わない直接補語の接語重複が、一般的に動詞前で定である場合に行われるという事実は、この場合の接語重複がかなりの程度において語用論的な手段にとどまっているということの反映とみてとれる。つまり、Givón (1976)による文法化のプロセスの段階でいうならば、ともに(4-59a)の段階にあるものといえることができる。

それに対して、前置詞 *pe* や *пъ/pă* を伴う場合はどうであろうか。ブラネシュティ方言では、*пъ/pă* を伴う直接補語は、動詞後の場合に接語重複する例が頻繁に見られるわけだが、これは明らかにルーマニア語で *pe* を伴った直接補語が動詞後にあるときに行われる接語重複 (たとえば(4-63b)) の複製であり、その文法複製のプロセスを通して当該の接語重複の文法化が推し進められたとみることができる。例えば、次の例を比較せよ。

(4-65) a. L- am văzut pe Ion. [ルーマニア語]
 he-ACC.CL have-PRS.1.SG seen AM Ion
 「(私は) イオンを見た。」

b. Гу вѝдеф пъ Йѝн. [ブラネシュティ方言]
 Gu vѝdef pă Jòn.
 he-ACC.CL see-AOR.1.SG AM Ion
 「(私は) イオンを見た。」 (DG2_121029_001/1.26.54)

(4-65b)のブラネシュティ方言の接語重複は、(4-65a)のルーマニア語のそれと全く同じである。人間を指す定の名詞句によってあらわされる動詞後に置かれた直接補語は、それぞれ *pe* や *пъ/pă* を伴って、接語重複している。両者の差異を指摘するならば、同様の場合にルーマニア語では接語重複はふつう義務的に行われるが²²⁹、ブラネシュティ方言では必ずしもそうではないという点である。そのような差異がみられるのにもかかわらず、動詞後の補語の接語重複が極めて制限的であるブルガリア国内のミジヤ方言群と比較して、ブラネシュティ方言

²²⁹ 少なくとも以前のアカデミー文法の記述では、人称代名詞非接語形対格以外が直接補語である場合には、*pe* による標示があっても、接語重複は随意的とされた(Graur et al. 1963: 145)。しかし、現代ルーマニア語では人名などの固有名詞や定の名詞句である場合の接語重複は義務的とされる(Guțu Romalo et al. 2008: 401-402)。1966年のアカデミー文法と2008年のアカデミー文法との間にみられる、この記述の差異は、ルーマニア語において接語重複の文法化が拡大する方向にあることを示唆するという点で、注目に値する(cf. 菅井 2012a)。

では非常に頻繁に接語重複しており、しかもそれが **пъ/рă** を伴う場合に限るという事実は、ルーマニア語の **pe** を伴う接語重複をモデルとした文法複製が行われたと考えることによって説明ができる。また、**пъ/рă** を伴わない直接補語の接語重複と比べると、**пъ/рă** を伴う接語重複のほうが、文法化の程度が高いということは間違いないと考えられるが、それもまた文法化の程度が高いルーマニア語の **pe** を伴う接語重複の文法複製によってもたらされたと考えたと説明がつく。

さらに、**пъ/рă** を伴う接語重複のなかでも、直接補語が人称代名詞非接語形対格によってあらわされる場合は、明らかに文法化のプロセスがもっとも推し進められている。人称代名詞非接語形対格が直接補語である場合、ルーマニア語では **pe** は義務的に用いられるが、ブラネシュティ方言でも **пъ/рă** の使用はほとんど義務的といってよい。そして、ルーマニア語の **pe** を伴った人称代名詞非接語形対格によってあらわされた直接補語の接語重複が義務的であるのと同様に、ブラネシュティ方言における **пъ/рă** を伴った人称代名詞非接語形対格による直接補語の接語重複もまたほとんど義務的である。一方、両者の違いは、またしても頻度/義務度の差に還元できる。ブラネシュティ方言において、**пъ/рă** が用いられなかったり（1例のみ、3.2.2.2.1.の注を参照）、接語重複の実現がなされなかったりする例もごくまれにみられる(3-45)。しかしながら、ルーマニア語の場合と同様に、ブラネシュティ方言でも人称代名詞非接語形対格が接語重複するときには語用論的な制約がほとんど失われていることは、文法化の程度が極めて高いことを示唆している。ブラネシュティ方言でこの接語重複がほとんど文法的な手段にまで変化を遂げているのは、ルーマニア語と同様のものを作り出そうとする二重言語話者であるブラネシュティ方言話者の志向によってもたらされたと言っているだろう。

ブラネシュティ方言における **пъ/рă** を伴う接語重複が、ルーマニア語における **pe** を伴う接語重複をモデルとした文法複製によって生じたことは以上の議論から明白であるが、両者が完全に同一であるということとはできない。なぜなら、ルーマニア語で **pe** を伴う場合に接語重複が義務的になる場合であっても、ブラネシュティ方言では例外的ではあるものの接語重複が行われないような場合が散見されるためである。

たとえば、人称代名詞非接語形対格以外の名詞句が直接補語である場合には、ルーマニア語では **pe** による標示を受けた直接補語の接語重複が義務的に行われるが、そのような場合であっても、ブラネシュティ方言では接語重複しないということも決してまれではない。次のブラネシュティ方言の例(4-66)と、それに対応するルーマニア語の例(4-67)を対比せよ。

(4-66) Видеф пъ Мърййъ. [ブラネシュティ方言]
 Videf pă Mărijă.
 see-AOR.1.SG AM Maria
 「(私は) マリアを見た。」 (DG_121029_001/1.27.59)

(4-67) a. Am văzut- o pe Maria. [ルーマニア語]
 have-PRS.1.SG/PL seen she-ACC.CL AM Maria
 「(私/たちは) マリアを見た。」

b. *Am văzut pe Maria.

ブラネシュティ方言の(4-66)の例のように、пъ/pă を伴う定の名詞句が接語重複しない例は珍しくない。それに対して、同様の場合にルーマニア語では接語重複が義務的となる(4-67)。以上のことから、ルーマニア語をモデルとした文法複製によってブラネシュティ方言に生じたと考えられる、пъ/pă を伴った直接補語の接語重複は、モデル言語のルーマニア語と完全に同一化する状況には至っていないということがみてとれる。これに関して、Heine, Kuteva (2005: 119)は、モデル言語と比較した際に、複製言語には、(4-68)にあげられるような特徴が見いだされることを指摘している。

(4-68) 複製カテゴリーの特徴 (Heine, Kuteva 2005: 119)

- a. 使用頻度はより低い
- b. より狭い範囲のコンテキストと関連する
- c. 文法的意味との結びつきはより不明確
- d. その使用は、形態統語論的パラメーターによってよりも、談話・語用論的なパラメーターによって決定づけられやすい
- e. その使用は、義務的ではなく、随意的になりやすい

(4-68)に挙げられた特徴が示すように、モデル言語と比べて、複製言語では文法化の程度が低くなる傾向がある。ブラネシュティ方言に見られる文法複製された接語重複(4-66)が、義務的というよりは、随意的であるという事実は、複製カテゴリーが持つ特徴(4-68e)によって説明することができるだろう。

Heine, Kuteva (2005: 120)はまた、言語接触の期間が長ければ長いほど、そして緊密であればあるほど、それだけモデルと複製を分かつ特徴は失われ、最終的には両者が完全に一致するところまで達すると述べている。ブラネシュティ方言の補語の接語重複がこの段階まで到達していないことは、多くの場合で(4-68)の

特徴が観察されることから明白である²³⁰。

また、モデル言語と複製言語の示す差異は、言語転移の方向性の決定にも有益である。ある現象の通時的変化を確認できない場合であっても、複製言語のほうが(4-68)に示された特徴を持つため、どちらがモデルで、どちらが複製かを判定することができる。これを踏まえると、(4-68)の特徴がブラネシュティ方言のほうに見出せることは、**пъ/pă** を伴った直接補語の接語重複が、より文法的なステータスを持つルーマニア語から文法複製されたことの傍証とできるだろう。

以上をまとめると、次のようになる。

まず、ブラネシュティ方言にみられる **пъ/pă** を伴った直接補語（人称代名詞非接語形対格以外の場合）の接語重複は、当該の補語が動詞後の位置を占める場合に頻繁に行われるので、文法化のプロセスの最初期にあたる(4-59a)の段階を脱したと考えられるが、完全に文法化した(4-59c)の段階には達していない。

一方、ブラネシュティ方言では、人称代名詞非接語形対格によってあらわされた直接補語の接語重複のみが、対応するルーマニア語の **pe** を伴う直接補語の接語重複がそうであるように、文法化のプロセスの最終段階にあたる(4-59c)に達しているといえることができる。

ブラネシュティ方言にみられる補語の接語重複の文法化の程度は、次の【表 4-4】のようにまとめることができる。

【表 4-4】 ブラネシュティ方言における補語の接語重複の文法化の程度

段階	文法化の程度	コンテキスト	意味	補語の種類
I	低い	語用論的要因（トピック性）が関与	元の意味（人称代名詞）のみ	пъ/pă を伴わない（名詞句すべて）
II		語用論的要因が部分的に関与	目標の意味（補語のマーカ）の解釈が誕生し、元の意味と競合	пъ/pă を伴う（その他の名詞句）
III	高い	コンテキストの制限なし	目標の意味のみ	пъ/pă を伴う（人称代名詞非接語形対格）

²³⁰ ブラネシュティ方言とルーマニア語の緊密な言語接触の歴史が 200 年程度であることは、言語類型論的に見て、比較的短期間に相当する(Bernd Heine, p.c.)。

4.3.3. まとめ

ブラネシュティ方言の **пъ/pă** を伴う直接補語の接語重複は、対応するルーマニア語の接語重複をモデルとした文法複製が行われることで、その文法化が押し進められた。

このとき、もっとも文法化された接語重複は、**пъ/pă** を義務的にうける人称代名詞非接語形対格が直接補語である場合にみられる。これ以外の名詞句が **пъ/pă** を伴う場合にも、一定程度文法化したと考えられるが、モデル言語であるルーマニア語と同程度までそのプロセスが進展していないことは、その使用の随意性からわかる。少なくとも現段階では、人称代名詞非接語形対格の場合ほど文法化されているとはいえない。しかし、**пъ/pă** を伴わない直接補語の接語重複が、完全に語用論的な手段にとどまっているのと比べると、**пъ/pă** を伴う接語重複は一般的に、ルーマニア語との言語接触を通じて、文法化したといえることができる。

5. おわりに

5.1. 結論

本論文では、ブラネシュティ方言にみられる補語の接語重複の記述と分析を行い、さらに言語接触と文法化の観点からの分析も行った。

第1章では、ブルガリア語とブルガリア語の方言についての概要を述べた。

第2章では、標準ブルガリア語の人称代名詞接語形と、補語の接語重複の特徴を概観した。

人称代名詞接語形は、基本的に動詞に隣接するが、動詞に対して前置されることも、後置されることもある。

補語の接語重複については、まず、それが一般的にトピック標示の機能を持つ現象であることを確認した。そして、補語(N)が動詞前に置かれるか、動詞後に置かれるかで、大きく分けて2つの接語重複の構造（接語重複の結果生じたものを指す）があることを見た。特に動詞前では、HTLDとCLLDが分けられることについても述べた。

第3章では、ブラネシュティ方言の補語の接語重複の形式及び機能の特徴について記述・分析を行った。

まず、3.2.1. 「人称代名詞接語形」においては、ブラネシュティ方言の人称代名詞接語形が持つ特徴を示した。標準語とは異なり、文中の位置にかかわらず、動詞に対して前置される語順が広く用いられ、このような語順がルーマニア語と共通していることを指摘した。

次に、3.2.2. 「前置詞 *пъ/pă*」において、ブラネシュティ方言で用いられるルーマニア語から借用された対格標識の前置詞 *пъ/pă* の分析を行った。

3.2.2.2. 「*пъ/pă* の用法」では、前置詞 *пъ/pă* が有生か定である名詞句に対して用いられうるという用法上の特徴を明らかにした。特に語彙的に常に定で有生である人称代名詞非接語形と *пъ/pă* の共起は義務的であることも述べた。

そして、3.2.2.3. 「*пъ/pă* と接語重複」では、前置詞 *пъ/pă* を伴う直接補語の接語重複が、それを伴わない直接補語の接語重複と異なったふるまいを示すことを指摘した。まず、*пъ/pă* を義務的に伴う人称代名詞非接語形対格が直接補語(N)である場合には、動詞前におかれようが、動詞後におかれようが、接語重複は義務的に行われる。それ以外の名詞句については、*пъ/pă* を伴う場合には、動詞後にあるときに頻繁に接語重複する一方で、*пъ/pă* を伴わない場合は、標準ブルガリア語やブルガリア国内の同系統の方言と同じように、動詞前にあるときに頻

繁に接語重複する。つまり、ブラネシュティ方言では、*пъ/pǎ* を伴う場合に限り、動詞後の補語の接語重複が広く用いられ、標準語やブルガリア国内の方言とは異なった特異なふるまいがみられることを示した。

3.2.3. 「文法化重複」では、ブラネシュティ方言にも、身体・心理的な感覚や状態を表す述語が用いられる際に文法化重複が観察されるとともに、その特徴が標準ブルガリア語と一致していることを述べた。

また、3.2.4. 「動詞前」と 3.2.5. 「動詞後」では、接語重複の構造の分析を試みた。動詞前では HTLD や Na-drop 現象などが見られるという点で、動詞後では RD が制限的である点で、標準ブルガリア語と全体的に共通した特徴がみられるということを明らかにした。逆に標準ブルガリア語との違いは、*пъ/pǎ* が関与する場合にのみ見られることを指摘した。

3.3. 「補語の接語重複の機能」では、ブラネシュティ方言の補語の接語重複の語用論的な機能が、基本的には、標準語やブルガリア国内の方言と同様で、トピック標示であることを明らかにした。しかしながら、フォーカスである補語の接語重複も見られることから、接語重複する補語(N)のトピックとの関係性が薄くなる傾向にあることを指摘した。

第 4 章では、ブラネシュティ方言の接語重複を文法化の観点から分析し、特に *пъ/pǎ* を伴う補語の接語重複が、ルーマニア語との言語接触によって、どのように変化し、そしてどの程度文法化したかについて論じた。

まず、4.1.2. 「接語重複の文法化」では、接語重複の文法化がどのように行われ、どのように進行するのかについて、標準ブルガリア語と標準マケドニア語を例に述べた。

4.1.3. 「方言と接語重複の文法化」では、ブラネシュティ方言と同系統であるブルガリア国内のブルガリア語北東方言（ミジヤ方言群）の接語重複のふるまいを明らかにする目的で、方言地図を用いた分析を行い、北東方言では、接語重複の文法化の程度が低く、語用論的な手段にとどまっていることを示した。

また、それと同時に、補語の接語重複のふるまいが方言のレベルでは多様であるばかりでなく、北東から南西にかけて、接語重複の文法化の程度が段階的に高くなることを確認した。南西マケドニアにおいて補語の接語重複の文法化の程度が最も高いのは、バルカン随一の多民族多言語環境での言語接触が文法化の促進に果たした役割が大きいことを示している。

これらのことから、補語の接語重複の文法化の程度が低い北東方言（ミジヤ方言群）と同系統であるブラネシュティ方言は、ルーマニア語との言語接触によって文法化が推し進められたという仮説を立てて分析を行った（4.3. 「ブラネシュティ方言の接語重複の文法化」）。

まず、4.2.「言語接触と文法化」で、文法化が言語接触によってもたらされる仕組みについて述べるとともに、ブラネシュティ方言にみられる *пъ/pă* を伴う補語の接語重複がルーマニア語の *pe* を伴う補語の接語重複をモデルとした文法複製が行われ、より広範なコンテクストに適用されうる主要な使用パターンに変化していることを指摘した。

次に、4.3.1.「文法化のパラメーター」では、類型論的な見地から提案された文法化のパラメーターを用いて、ブラネシュティ方言の補語の接語重複の文法化を検討したところ、4つの文法化のパラメーターすべて、すなわち新しい文脈への「拡張」、人称代名詞接語形(Ncl)が持つ代名詞の意味特徴の消失である「脱意味化」、人称代名詞接語形の形態統語論的な特徴の消失である「脱カテゴリー化」、そして部分的にはあるが人称代名詞接語形の音声的実体の一部の喪失が関わる「浸食」が見られる。このことから、ブラネシュティ方言の補語の接語重複は、かなりの程度文法化していると考えられることを明らかにした。

そして、4.3.2.「文法化の程度」では、ブラネシュティ方言の接語重複の文法化の程度について論じた。直接補語がどのような名詞句によって表されるかによって文法化の程度が異なると考えられ、実際に、文法化の程度は、直接補語が *пъ/pă* を伴う人称代名詞非接語形対格によってあらわされるときに最も高い。それ以外の名詞句でも *пъ/pă* を伴う場合にのみ接語重複が生起するコンテクストが拡大するなど、再分析を通じた無標化が進行していることが見受けられ、文法化が一定程度進行していることがわかる。

一方で、*пъ/pă* を伴わない補語の接語重複はトピック標示の機能と密接に結びついていることから、語用論的に有標であることは明白である。つまり、*пъ/pă* を伴わない場合の接語重複は、文法化の程度が低い。

ルーマニア語からもたらされた前置詞 *пъ/pă* を伴う場合に限って、補語の接語重複の文法化が進んでいるのは、同現象の文法化がルーマニア語との言語接触によってもたらされたとすることで説明できる。実際に、ブラネシュティ方言にみられる *пъ/pă* を伴う直接補語の接語重複は、ルーマニア語の *pe* を伴う直接補語の接語重複と酷似していることから、ルーマニア語をモデルとした文法複製が行われることで、文法化が促進されたと結論付けた。

以上から、本論文の結論は次のとおりである。

ブラネシュティ方言の補語の接語重複は、ルーマニア語との言語接触によって文法化が推し進められた。

具体的には、ルーマニア語の前置詞 *pe* を伴う接語重複をモデルとして、ブラネシュティ方言に *пъ/pă* を伴う接語重複が複製され、その過程で補語の接語重複の文法化が促進された。特に *пъ/pă* を伴う名詞句（とりわけ、人称代名詞非接語

形対格) が直接補語(N)である場合には、その補語と同一指示である人称代名詞接語形の代名詞から補語の一致標識への再分析が行われ、その結果として接語重複が語用論的に無標な現象へ変化した。このようにして、接語重複は語用論的な手段から文法的な手段へと変化を遂げた。

5.2. 今後の課題と展望

今後の課題として、以下を挙げることができる。

①データの補強

ブラネシュティ方言の補語の接語重複の研究に用いる言語データを補強する必要がある。

特に、データを数量の面で補強することは、言語の現状をより正確に理解するうえで重要である。ある現象について論じるときに、データ中で例数が少ない場合、統計学的に有意とはいえない。たとえば、*пъ/pǎ* と共起する名詞句の中には、少数の例しかみられなかった種類のものもあるので、データを補強してより多くの例を集めることは必須である。いうまでもなく、すでに一定数の数量があるものであっても、例数が多いほど有意性がさらに増すことになる。

以上より、研究データを数量・種類などの点で補強していくことは今後の重要な課題の一つである。

②理論面での研究の深化

本研究は、記述的側面に寄った研究であるため、理論面に関しては基本的に先行研究に依拠し、詳細に詰めることができなかった。今後は、理論的側面を強化することで、本研究に磨きをかけることができるだろう。特に次の2点について理論面での議論を深める余地があると考えられる。

1点目は形式の上での問題で、接語重複の構造についてである(cf. 2.2.4.)。まず、接語重複に関係する要素の統語的位置の問題があげられる。たとえば、HTLD と CLLD について、移動なのか基底生成なのかという議論のほかに、ブラネシュティ方言では両者を区別する形式上の違いはほとんどなくなっていると考えられるが(cf. 2.2.4.2.1.2.)、これが何を意味するかについて考える必要がある。また、動詞後の接語重複はどのような操作で生み出されるものなのか、またこの際にみられるイントネーション上の休止が介在しないという形式的特徴は何を意味するのか、という点も理論面でのより詳細な分析が必要であることは言うまでもない。このように、本論文で棚上げした形式論の上での問題を明らかにしていくことは今後の重要な課題である。

2点目は文法化の一方向仮説についてである(cf. 4.1.1.)。本論文では Heine (2003)の主張にしたがってこの仮説が有効であると考えたが、その妥当性には、異論もあるため(cf. Newmeyer 1998; see also Heine 2003 etc.)、この点についても理論面での整理と裏付けが必要であると考えられる。

③その他、個別の課題

- ・ルーマニア語と言語接触している他のブルガリア語諸方言の研究

他のブルガリア語諸方言、特にルーマニア語と接触のある諸方言との比較は、ブラネシュティ方言における言語接触による言語変化について論じるうえで、重要な示唆を与えると考えられる。本論文では、ブラネシュティ方言だけに研究対象を絞ったが、今後は他のブルガリア語諸方言の研究にも広げることが課題となる。

もしブラネシュティ方言と同じようにルーマニア語との言語接触下にあるブルガリア語諸方言でも同様の言語変化が見られるとしたら、ブラネシュティ方言に関する本論文の主張を支持する傍証となるだろう。もし見られないとしたらどのように異なるのかを明らかにすることで、ブラネシュティ方言の研究はもとより、言語接触による言語変化の研究そのものにも大きな貢献を成しうる。

- ・補語以外の接語重複の研究

本論文では、基本的に補語の接語重複を主な研究対象とし、主語の重複や不一致定語の接語重複については十分な研究を行わなかった(cf. 2.2.3.2.)。特に、不一致定語の接語重複の記述・研究は、標準ブルガリア語においても十分におこなわれていない(Федорина 2015: 87)。今後、形式や機能など様々な側面から研究を進める必要がある。主語の重複や不一致定語の接語重複は、類似した現象である補語の接語重複の理解を深めることにもつながると考えられる。

- ・ルーマニア語の補語の接語重複の研究

言語接触によってブラネシュティ方言に影響を与えたと考えられるルーマニア語の補語の接語重複および *pe* の用法の研究を進めることも重要な課題である。

ルーマニア語の諸方言を対象とした研究、特にブルガリア国内に分布するルーマニア語諸方言(cf. Neagoe, Margarit 2006)の研究は、ブラネシュティ方言とは逆の事例となるため、本論文において論じたブラネシュティ方言の言語接触による言語変化の研究にも、対照研究の観点から有意義であると考えられる。

また、新旧アカデミー文法における記述の変化(古いアカデミー文法では(Graur et al. 1966: 145)、*pe* を伴う人名などの固有名詞や定の名詞句が補語である場合の接語重複が随意的であるとされていたのに対して、新しいアカデミー文法では(Guțu Romalo et al. 2008: 401-402)、それが義務的と

されている)は、ルーマニア語において接語重複が拡大する傾向にあることを示唆している(cf. 4.3.2.3.)。このように接語重複の言語変化を、通時的な観点からより詳細に調査することも今後必要であろう。

参考文献

- Aikhenvald, A. Y. (2002) *Language contact in Amazonia*. New York: Oxford University Press.
- Arnaudova, O. (2002) "Clitic Left Dislocation and Argument Structure in Bulgarian", In J. Toman et al. (eds.), *Annual Workshop on Formal Approaches to Slavic Linguistics. The Second Ann Arbor Meeting 2001*, Ann Arbor MI: Michigan Slavic Publications, 23-46.
- Arnaudova, O., I. Krapova (2007) "Clitic Reduplication in Bulgarian: Towards a Unified Account", In R. Compton et al. (eds.), *Annual Workshop on Formal Approaches to Slavic Linguistics. The Toronto Meeting 2006*, Ann Arbor MI: Michigan Slavic Publications, 1-24.
- Aronson, H. I. (1997) "Transitivity, Reduplication, and Clitics in the Balkan Languages", *Balkanistica*, vol. 10, 20-45.
- _____. (2007) *The Balkan Linguistic League, "Orientalism," and Linguistic Typology*, Ann Arbor/New York: Beech Stave Press.
- Avgustinova, T. (1994) "On Bulgarian Verb Clitics", *Journal of Slavic Linguistics*, vol. 2-1, 29-47.
- Avram, L., M. Coene. (2008) "Romanian possessive clitics revisited", In D. Kallulli, L. Tasmowski (eds.), *Clitic Doubling in the Balkan languages*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 361-387.
- Avram, M. (2001) *Gramatica pentru toți*. București: Humanitas.
- Bolocan, Gh. (1958) "Cu privire la corelația de sonoritate în graiul bulgar din comuna Brănești", *Studii și cercetări lingvistice*, 4, 491-495.
- _____. (1960) "Observații asupra grupurilor consonantice în graiul bulgar din comuna Brănești", *Fonetică și Dialectologie*, vol. II, 105-120.
- _____. (1969) "Graiul bulgarilor din Brănești (Jud. Ilfov). Consonantismul", *Studii de slavistică*, vol. I, 163-223.
- Burridge, K. (1995) "Evidence of grammaticalization in Pennsylvania German", In H. Andersen (ed.), *Historical Linguistics 1993: Selected papers from the 11th International Conference on Historical Linguistics, Los Angeles, 16-20 August 1993 (Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistics Science, 124)*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 59-75.
- Bybee, J. L. (2003) "Mechanisms of change in grammaticalization: The role of frequency", In B. Joseph et al. (eds.), *The Handbook of Historical Linguistics*, 602-623.

- Dobrovie-Sorin, C. (1994) *The syntax of Romanian: comparative studies in Romance*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Franks, S., T. H. King. (2000) *A Handbook of Slavic Clitics*, New York: Oxford University Press.
- Friedman, V. A. (1994) "Variation and Grammaticalization in the Development of Balkanisms", *Chicago Linguistic Society* 30, vol.2, 101-115.
- _____. (2008) "Balkan Object Reduplication in Areal and Dialectological Perspective", In D. Kallulli, L. Tasmowski (eds.), *Clitic Doubling in the Balkan languages*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 25-63.
- _____. (2009) Lability as a scalar Balkanism, In П. Асенова et al. (eds.), *Глаголната система на балканските езици- Наследство и неология, Сборник доклади от Международна научна конференция (ВТУ „Св. св. Кирил и Методий“, 30. IV - 2.V. 2009г.)*, Велико Търново: Faber, 3-69.
- Givón, T. (1971) "Historical Syntax and Synchronic Morphology: An archaeologist's field trip", *Chicago Linguistic Society* 7, 394-415.
- _____. (1976) "Topic, Pronoun, and Grammatical Agreement", In C. N. Li (ed.) *Subject and Topic*, New York: Academic Press, 147-188.
- _____. (1979) *On Understanding Grammar*, New York: Academic Press.
- _____. (1984) *Syntax. A Functional-typological introduction*, vol.I, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- _____. (1989) *Mind, code and context: Essays in Pragmatics*, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- _____. (2001) *Syntax: An Introduction. Volume II*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Graur, Al. et al. (1963) *Gramatica limbii române*, vol.I, Ediția a II-a revăzută și adăugită, București: Editura Academiei Republicii Socialiste România.
- Guentchéva, Z. (1994) *Thématisation de l'objet en bulgare*, Frankfurt: Peter Lang.
- _____. (2008) "Object clitic doubling constructions and topicality in Bulgarian", In D. Kallulli, L. Tasmowski (eds.), *Clitic Doubling in the Balkan languages*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 203-223.
- Guțu Romalo, V. et al. (2008) *Gramatica limbii române II*, Enunțul, Tiraj nou, revizuit, București: Editura Academiei Române.
- Heine, B. (2003) "Grammaticalization", In B. Joseph et al. (eds.), *The Handbook of Historical Linguistics*, 557-601.
- Heine, B., T. Kuteva. (2002) *Word Lexicon of Grammaticalization*, Cambridge: Cambridge University Press.

- _____. (2005) *Language Contact and Grammatical Change*, Cambridge: Cambridge University Press.
- _____. (2007) *The Genesis of Grammar: A Reconstruction*, Oxford: Oxford University Press.
- Hopper, P. J., E. C. Traugott (2003) *Grammaticalization. Second Edition*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Jakobson, R. (1971) "Les Enclitiques Slaves", In *Selected Writings II. Word and Language*, Hague-Paris: Mouton, 16-22.
- Kallulli, K., L. Tasmowski. (2008) "Introduction: Clitic doubling, core syntax and the interfaces", In D. Kallulli, L. Tasmowski (eds.), *Clitic Doubling in the Balkan languages*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 1-32.
- Koneski, B., B. Vidoevski, O. Jašar-Nasteva (1968) "Distribution des balkanismes en Macédonien", In Georgiev, V. et al. (eds.), *Actes du premier congrès international des études balkaniques et sud-est européennes*, VI, Linguistique, Sofia: Editions del'academie Bulgare des sciences, 517-546.
- Krapova, I. (2004) "Word order in Topic-Focus structures in the Balkan languages", *România Orientale*, XVII, 139-161.
- Krapova, I., G. Cinque. (2005) "Two asymmetries between Clitic Left and Clitic Right Dislocation in Bulgarian", In H. Broekhuis et al. (eds.), *Organizing Grammar. Studies in Honor of Henk van Riemsdijk*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 359-364.
- _____. (2008) "Clitic reduplication constructions in Bulgarian". In D. Kallulli, L. Tasmowski (eds.), *Clitic Doubling in the Balkan languages*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 257-287.
- Krapova, I., J. Tiševa. (2006) "Clitic reduplication structures in the Bulgarian dialects". In M. Koletnik, V. Smole (eds.), *Diachronija in sinhronia v dialektoloških raziskavah*, Maribor: Slavistično društvo, 415-422.
- Lambrecht, K. (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Leafgren, J. R. (1997) "Bulgarian Clitic Doubling: Overt Topicality", *Journal of Slavic Linguistics*, vol. 5-1, 117-143.
- _____. (2002) *Degree of Explicitness. Information structure and the packaging of Bulgarian subjects and objects*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Lehman, C. (1995) *Thoughts on grammaticalization*, Munich: Lincom Europa.

- Lindstedt, J. (2000) "Linguistic Balkanization: Contact-induced change by mutual reinforcement", In J. Nerbonne et al. (eds), *Language in Contact (Studies in Slavic and General Linguistics, vol. 28)*, Amsterdam: Rodopi, 231-246.
- Lunt, H. G. (1952) *A Grammar of the Macedonian literary language*, Skopje: Државно Книгоиздателство на НР Македонија.
- Manoliu-Manea, M. (1990) "Case markers and pragmatic strategies: Romanian clitics", In U. Wolfgang et al. (eds.) *Trends in Linguistics. Studies and Monographs 49. Contemporary Morphology*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 183-196.
- Matras, Y. (1998) "Convergent development, grammaticalization, and the problem of "mutual isomorphism" ", In W. Boeder et al. (eds.), *Sprache in Raum und Zeit: In memoriam Johannes Bechert. Vol. II, Beiträge zur empirischen Sprachwissenschaft*, Tübingen: Gunter Narr, 89-103.
- _____. (2011) "Grammaticalisation and language contact", In Y. Matras et al. (eds.), *Handbook of grammaticalization*, Oxford: Oxford University Press, 279-290.
- Meillet, A. (1912) "L'évolution des formes grammaticales", *Scientia (Rivista di Scienza)* 12 (26): 6, 130-158. (Reprinted in Meillet, A. (1951) *Linguistique historique et linguistique générale: Nouveau tirage*, Paris: Librairie C. Klincksieck)
- Miklosich, F. (1861) *Die Slavischen Elemente im Rumänischen*, Wien: Gerold.
- Mihăilă, G. (1960) *Împrumuturi vechi sud-slave în limba română. Studiu lexicosemantic*, București: Editura Academiei Republicii Populare Romîne.
- Neagoe, V., I. Margarit (2006) *Graiuri dacoromâne din nordul Bulgariei: Studiu lingvistic, Texte dialectale, Glosar*, București: Editura Academiei Române.
- Newmeyer, F. (1998) *Language Form and Language Function*, Cambridge: MIT Press.
- Pancheva, R. (2004) "Balkan possessive clitics: The problem case and category", In O. M. Tomić (ed.), *Balkan syntax and semantics*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 175-219.
- Rå Hauge, K. (1999) "The Word Order of Predicate Clitics in Bulgarian", *Journal of Slavic Linguistics*, vol.7-1, 89-137.
- Roman, L. (1984) "Așezări de bulgari și alți sud-dunăreni în Țara Românească (1740-1834)", *Relații româno-bulgare de-a lungul veacurilor. Studii*, vol. II, 126-143.
- Rudin, C. (1986) *Aspects of Bulgarian Syntax: Complementizers and Wh constructions*. Columbus: Slavica Publishers.
- _____. (1990-1991) "Topic and Focus in Bulgarian", *Acta Linguistica Hungarica*, vol.40 (3-4), 429-447.
- _____. (1997) "AgrO and Bulgarian Pronominal Clitics", In M. Lindseth, K. Franks. (eds.), *Annual Workshop on Formal Approaches to Slavic Linguistics. The Indiana*

- Meeting 1996*, Ann Arbor: Michigan Slavic Publications, 224-252.
- Sandfeld, K. (1930) *Linguistique balkanique. Problèmes et résultats*. Paris: Champion.
(Reprinted in Sandfeld, K. (1968) *Linguistique balkanique. Problèmes et résultats*.
Paris: Librairie C. Klincksieck.)
- Schick, I. P. (2000) "Clitic doubling constructions in Balkan-Slavic", In F. Beukema et al.
(eds.), *Clitic Phenomena in European Languages*, Amsterdam: John Benjamins
Publishing Company, 259-292.
- Sobolev, A. N. (2008) "On Some Aromanian Grammatical Patterns in the Balkan
Slavonic Dialects", In Sikimić, B., Ašić, T. (eds.) *The Romance Balkans, Collection
of papers presented at the international conference The Romance Balkans, 4-6
November 2006*, Belgrade: Institute for Balkan Studies, Serbian Academy of
Sciences and Arts, 113-121.
- Stanchev, S. B. (2007) "Pragmatics, word order and cross-reference", In C. Butler et al.
(eds.), *Functional Perspectives on Grammar and Discourse: In honour of Angela
Downing*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 288-256.
- Stateva, P. (2002) "Possessive clitics and the structure of nominal expressions", *Lingua*,
vol.112(8), 647-690.
- Talev, I. (1973) *Some Problems of the Second South Slavic Influence in Russia
(Slavistische Beiträge, vol. 67)*, München: Verlag Otto Sagner.
- Tisheva, Y. (2007) "On Right Dislocation and Marginalization in Bulgarian", In P. Kosta
et al. (eds.), *Linguistic Investigation into Formal Description of Slavic Languages*,
Frankfurt am Main: Peter Lang International Verlag der Wissenschaften, 389-397.
- Tiševa, J., M. Džonova (2002) "Information Structure and TreeBanks", *Proceedings of
The First Workshop on TreeBanks and Linguistic Theories*, 231-252.
- _____. (2003) "Lexical Markers on the Informational Structure Level",
In D. Birnbaum et al. (eds.), *Computational Approaches to the Study of Early and
Modern Slavic languages and Texts*, Sofia: Boyan Penev Publishing Center, 53-76.
- Thomason, S. G., T. Kaufman (1988) *Language contact, creolization, and genetic
linguistics*, Berkeley/Los Angeles/London: University of California Press.
- Tomić, O. M. (2006) *Balkan Sprachbund Morpho-syntactic Features*, Dordrecht:
Springer.
- Vakareliyska, C. (1994) "Na-drop in Bulgarian", *Journal of Slavic Linguistics*, vol. 2-1,
121-150.
- Weinreich, U. (1968) *Languages in contact: Findings and problems*, Hague/Paris:
Mouton.

- Алексова, В. (2004) *Румънска диалектология*, София: УИ „Св. Климент Охридски“.
- Андрейчин, Л. et al. (1977) *Граматика на българския език*, София: Наука и изкуство.
- Андрейчин, Л. (1978) *Основна българска граматика*, София: Наука и изкуство.
- Антонова- Василева, Л. et al. (2014) *Карта на диалектната делитба на българския език*, София: Академично издателство „Проф. Марин Дринов“.
- Асенова, П. (1989) *Балканско езиковедие: Основни проблеми на балканския езиков съюз*, София: Наука и изкуство.
- _____. (2002) *Балканско езиковедие: Основни проблеми на балканския езиков съюз*, Велико Търново: Faber.
- _____. (2016) *Избрани статии по балканско езиковедие*, София: АПП Аля.
- Болокан, Г. (1968a) Болгарский говор села Брэнешть: Вокализм, *Revue roumaine de linguistique*, vol. 13(2), 147-164.
- _____. (1968b) Явление румыно-болгарского двуязычия, In В. Иванов et al. (eds.) *Actes du premier congrès international des études balkaniques et sud-est européennes*, VI, Linguistique, Sofia: Editions de l'academie Bulgare des sciences, 473-479.
- Видоевски, Б. (1960/61) Основни дијалектни групи во Македонија, *Македонски јазик*. 11/12, 12-32.
- _____. (1998) *Дијалектите на македонскиот јазик*, т.1, Скопје: Македонска академија на науките и уметностите.
- _____. (1999a) *Дијалектите на македонскиот јазик*, т.2, Скопје: Македонска академија на науките и уметностите.
- _____. (1999b) *Дијалектите на македонскиот јазик*, т.3, Скопје: Македонска академија на науките и уметностите.
- Георгиева, Е. (1974) *Словоред на простото изречение в българския книжовен език*, София: БАН.
- Гълъбов, Ив. (1986) *Избрани трудове по езиковедие*, София: Наука и изкуство.
- Джонова, М.(2004) Конструкции от типа ‘Аз ми се струва’ в българската разговорната реч. *Проблеми на българската разговорна реч*, кн. 6, 107-116.
- _____. (2007) Удвояване на допълнението в говора на българските павликяни. In П. Асенова (ed.), *Българските острови на Балканите*, София: Figura, 170-179.
- _____. (2009) *Удвояване на допълнението в книжовната и в разговорна реч*. MS.
- Димчев, К. (1969) Говорът на българите от с. Валя Драгулуй, СР Румъния: Фонемна система, *Годишник на Софийския университет, Фак. слав. филол.*, 63, 185-286.

- _____. (1974) Морфологично-синтактични модели, установени под румънско влияние в българския говор на с. Валя Драгулуй (Румъния), In Л. Андрейчин (ed.), *В памет на професор Стойко Стойков (1912-1969) Езиковедски изследвания*, София: БАН, 255-259.
- Еников, Зл. (1983) *История на Калипетрово. Силистренски окръг*, Калипетрово: Кметство с. Калипетрово.
- Жечев, Н. (1983) Към историята на изучаването на българските емигрантски заселища в Румъния през Възраждането. (По случай 100 години от рождението на акад. Стоян Романски), *Българска етнография*, кн. III, 51-60.
- Зализняк, А. А. (2008) *Древнерусские энклитики*, Москва: Языки славянских культур.
- Иванчев, Св. (1957) Наблюдения върху употребата на члена в български език, *Български език*, 6, 499-524. (Reprinted in Св. Иванчев (1978) *Приноси в българското в българското и славянското езикознание*, София: Наука и изкуство, 128-152.)
- _____. (1968) Проблеми на актуалното членение на изречението, *Славянска филология*, 10, Езикознание, 39-53. (Reprinted in Св. Иванчев (1978) *Приноси в българското в българското и славянското езикознание*, София: Наука и изкуство, 157-172.)
- Конески, Б. (1967) *Граматика на македонскиот литературен јазик*, Дел I и II, Скопје: Култура.
- Кочев, Ив. (1969) *Гребенският говор в Силистренско: С особен оглед към лексикалната му система. (Трудове по българска диалектология, кн. V)*, София: Издателство на БАН.
- Кочев, Ив. et al. (2001) *Български диалектен атлас, обобщаващ том, I-III Фонетика, акцентология, лексика*, София: Книгоиздателска къща „Труд“.
- Кръпова, И. (2016) За типологическия метод в балканското езикознание, In Е. Търпоманова et al. (eds.), *Балканското езикознание днес: Сборник в чест на 75-годишния юбилей на проф. д.ф.н. Петя Асенова*, София: УИ „Св. Климент Охридски“, 49-58.
- Лопашов, Ю. А. (1973) К вопросу о типах местоименных повторов дополнения и их употреблении в литературном новогреческом и других балканских языках, In С. Б. Бернштейн, Г. П. Клепикова (eds.), *Балканское языкознание*, Москва: Наука, 81-92.
- _____. (1978) *Местоименные повторы дополнения в балканских языках*, Ленинград: Наука.

- Манова-Гуркова, Л. (2000) *Синтакса на македонскиот стандарден јазик*, Скопје: МАГОР.
- Маслов, Ю. С. (1982) *Грамматика на българския език*, София: Наука и изкуство.
- Мельничук, А. С. (1971) Синтагматические условия употребления кратких и полных местоимений в болгарском языке, In Н. И. Толстой, Е. В. Чешко (eds.), *Исследования по славянскому языкознанию, Сборник в честь шестидесятилетия профессора С. Б. Бернштейна*, Москва: Наука, 189-196.
- Милетич, Л. (1989) *Източнобългарските говори*, София: Издателство на БАН. (Translated from L. Miletič (1903) *Das Ostbulgarische*, Wien: A. Hölder)
- Минчева, А. (1969) Опит за интерпретация на модела на удвоените допълнения в българския език, *Известия на института за български език*, кн. XVII, 3-50.
- Мирчев, К. (1963) *Историческа граматика на българския език*, София: Наука и изкуство.
- Младенов, М. Сл. (1984) Характеристика на говорите в Добруджа. In Т. Бояджиев (ed.), *Помагало по българска диалектология*, София: Издателство на БАН, 100-127.
- _____. (1986) Към характеристиката на добруджанските диалекти, In Е. Георгиева, Н. Тодорова (eds.), *Българските народни говори (Поредица знания за езика, т. VI)*, София: Държавно издателство „Народна просвета“, 38-41.
- _____. (1993) *Българските говори в Румъния*, София: Издателство на БАН.
- _____. (2008) Няколко лексикални румънски заемки в североизточните български говори (По данни от Българския диалектен атлас, т. II, 1966), In Г. Колев et al. (eds.), *Диалектология, Балканистика, Етнолингвистика, Лингвистично наследство*, София: УИ „Св. Климент Охридски“. (Translated from М. Младенов (1970) Несколько лексических румынских заимствований в северо-восточных болгарских говорах (по данным Болгарского диалектного атласа, т. II, 1966), *Балканско езиковедие*, 2, 27-30.)
- Мурдаров, Вл. et al. (2012) *Официален правописен речник на българския език*, София: Просвета.
- Ницолова, Р. (1986) *Българските местоимения*, София: Наука и изкуство.
- _____. (2008) *Българска граматика: Морфология*, София: УИ „Св. Климент Охридски“.
- _____. (2013) Някои особености на българските посесивни конструкции в сравнение с чешкия език, In М. Младенова et al. (eds.), *Славянските езици отблизо, Сборник в чест на 70-годишнината на доц. Янко Бъчваров*, София:

- УИ „Св. Климент Охридски“, 183-195.
- Попов, К. (1973) Стилно-граматическа употреба на удвоеното допълнение в българския книжовен език, *По някои основни въпроси на българския книжовен език*, София: Народна просвета, 170-186.
- Попов, К. et al. (1983) *Грамматика на съвременния български книжовен език*, Том III, Синтаксис, София: Издателство на БАН.
- Романски, Ст. (1930) *Българите във Влашко и Молдова: Документи*, София: Държавна печатница.
- Русек, Й. (1963) По въпроса за хронологията на удвояване на допълненията в българския език, *Български език*, 13(2), 141-143.
- Селищев, А. М. (1918) *Очерки по македонской диалектологии*, Казань: Лито-Типография Т-во «Умид». (Reprinted in Селищев, А. М. (1981) *Очерци по македонската диалектология, Фототипно издание*, София: Наука и изкуство.)
- Соболев, А. Н. et al. (2005) *Малый диалектологический атлас балканских языков*, Том I, Категории имени существительного, München: Biblion Verlag München.
- Станков, В. (1982) За дателните местоименни клитики в българския език, *Български език*, 6, 494-502.
- Стойков, Ст. et al. (1966) *Български диалектен атлас. II. Североизточна България*, София: Издателство на БАН.
- Стойков, Ст. (1967) *Банатският говор (Трудове по българска диалектология, кн. 3)*, София: Издателство на БАН.
- _____. (1968) *Лексиката на банатския говор (Трудове по българска диалектология, кн. 4)*, София: Издателство на БАН.
- _____. (1970) Българският говор в с. Бълен-Сърб (СР Румъния), *Български език*, 20(2-3), 138-146.
- _____. (1993) *Българска диалектология*, София: Издателство на БАН.
- Стоянов, Ст. et al. (1983) *Грамматика на съвременния български книжовен език*, Том II, Морфология, София: Издателство на БАН.
- Стоянова, Д. (2008) *Румънска граматика*, София: Наука и изкуство.
- Сугай, К. (2012) Удвояване на допълнението и фокусът в българския език, In А. Бурова et al. (eds.), *Време и история в славянските езици, литератури и култури*, Том първи. Езикознание, София: УИ „Св. Климент Охридски“, 55-62.
- _____. (2014) Удвояване на допълнението в българския говор на с. Брънеш, Румъния, *Проблеми на социолингвистиката*, XI, 115-120.
- _____. (2015a) Към въпроса за удвояването на прякото допълнение в българския говор в Румъния (Анализ в съпоставка с румънския език), In М. Младенова et

- al. (eds.), *Движение и пространство в славянските езици, литератури и култури. Сборник от Дванадесетите международни славистични четения, София, 9-10 май 2014*, Том първи, София: УИ „Св. Климент Охридски“, 94-102.
- _____. (2015b) За някои специфични характеристики на местоименните клитики в гребенския говор в Румъния, *Българска реч*, 10(2), 102-109.
- _____. (2016a) Към въпроса за постпозитивните определения в гребенския преселнически говор в Румъния. In А. Кочева (ed.), *Професор Иван Кочев – Живот, отдаден на езикознанието, Юбилеен сборник*, София: Издателство на БАН „Проф. Марин Дринов“, 108-113.
- _____. (2016b) Структура удвоения допълнения по модели левой дислокации в българском переселенческом диалекте в Румынии, *Славянский альманах*, 2016, Вып. 3-4, 344-354.
- _____. (2017) Структура и прагматична функция на удвояването в гребенския преселнически говор, In Стефанов, М. et al. (eds.), *Мултикултурализъм и многоезичие, Сборник с доклади от Тринадесетите международни славистични четения - София, 21-23 април 2016 г.*, Том I. Лингвистика, Велико Търново: Издателство „Фабер“, 211-221.
- Тетовска-Троева, М. (1986) Мизийски говори, In Е. Георгиева, Н. Тодорова (eds.), *Българските народни говори (Поредица знания за езика, т. VI)*, София: Държавно издателство „Народна просвета“, 34-37.
- Тетовска-Троева, М. et al. (2016) *Български диалектен атлас, обобщаващ том, IV, Морфология*, София: Издателство на БАН „Проф. Марин Дринов“.
- Тишева, Й. (2009) За словоредните модели на българското просто изречение. *Отговорността пред езика, Summa cum pietate, Studia litterarum, Сборник, посветен на 65-годишнината на проф. д-р. Кина Вачкова*, кн. 3, 244-255.
- _____. (2014) *Прагматика и устна реч. Как говори съвременният българин*, том II, София: Фонд научни изследвания.
- Тишева, Й., М. Джонова. (2006) Старият “нов” топик. In М. Младенова et al. (eds.), *Славистика и общество*, София: Херон прес, 231-237.
- Тишева, Й., И. Кръпова. (2009) Конструкции с удвоено допълнение в българските диалекти. In Б. Вълчев et al. (eds.), *Езиковедски изследвания в чест на чл.-кор. проф. д-р Тодор Бояджиев, проф. д-р Венче Попова и проф. Петър Пашов*, София: УИ “Св. Климент Охридски”, 209-220.
- Топалова-Симеонова, Х. (1965) Предлог *на* в българските диалекти, *Известия на Института за български език*, 12, 67-105.
- Тополињска, З. (1991) За прагматичната и семантичната мотивација на

морфосинтаксички балканизми, *Прилози*, XVI, 1, Скопје: Македонска академија на науките и уметностите, Одделение за лингвистика и литературна наука, 117-127.

_____ (1995) *Македонските дијалекти во Егејска Македонија*, кн.1, Синтакса, Том I, Скопје: Македонска академија на науките и уметностите.

Федорина, Г. А. (2015) Удвоение определения с притежательным значением в болгарском языке. *Славяноведение*, 2015, 1, 87-92.

Цивьян, Т. В. (1965) *Имя существительное в балканских языках*, Москва: Наука.

_____. (1979) *Синтаксическая структура балканского языкового союза*, Москва: Наука.

Цонев, Б. (1984) *История на българския език*, II, София: Наука и изкуство.

Цыхун, Г. А. (1968) *Синтаксис местоименных клитик в южнославянских языках*, Минск: Наука и техника.

Шклифов, Б. (1973) *Костурският говор, принос към проучването на югозападните български говори (Трудове по българска диалектология, кн. 8)*, София: Издателство на БАН.

- 佐藤純一 (1983)「バルカン言語圏問題研究の歴史と課題」『バルカン諸言語における言語圏現象の総合的研究(昭和 57 年度科学研究費補助金(一般研究 B)研究成果報告書)』東京大学教養学部, 1-7.
- 柴宜弘 (2006)『図説バルカンの歴史(改訂新版)』東京:河出書房新社
- 菅井健太 (2012a)「ルーマニア語における目的語の接語重複と文法化—ブルガリア語との対照から—」『ロマンス語研究』No.45, ロマンズ語学会, 65-74.
- _____. (2012b)「ブルガリア語方言における定語の語順に関する一考察—ルーマニア・ブラネシュティ村の方言を例に—」『スラヴ文化研究』第 11 号, 東京外国語大学ロシア語研究室, 98-135.
- _____. (2012c)「ブルガリア語における“先取り式”接語重複について」『スラヴィアーナ』No.4(26), 日本スラヴ人文学会, 11-33.
- _____. (2014a)「ブルガリア語及びマケドニア語における目的語の接語重複について—標準語と方言、文法化の観点から—」『スラヴィアーナ』No.5(27), 日本スラヴ人文学会, 47-68.
- _____. (2014b)「ブルガリア語北東方言における人称代名詞クリティック形について—ブラネシュティ村、ヴァリャ・ドラグルイ村の方言を例に—」『スラヴ文化研究』第 12 号, 東京外国語大学ロシア語研究室, 34-52.
- _____. (2014c)「ブルガリア語方言における目的語の接語重複と前置詞 *ПЪ* について—ルーマニア・ブラネシュティ村の方言を例に—」『スラヴ学論集』第 17 号, 日本スラヴ学研究会, 129-150.
- _____. (2015)「ロシア語の代名詞重複の構造について—ブルガリア語との対照の観点から—」『ロシア語研究』第 25 号, ロシア語研究会「木二会」, 27-42.
- 鈴木信吾著, 千田憲訳 (2006)「イタリア語における接語重複の構文:ルーマニア語との対照」, 敦賀陽一郎他編『言語情報学研究報告』11, 東京外国語大学大学院地域文化研究科, 157-193.
- 角田太作 (1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版
- トゥルベツコイ, N.S.著, 米重文樹訳述・解説 (1992)「N.S.トゥルベツコイ『バベルの塔と言語混合』(訳述・解説)」『岡山大学言語学論叢』第 2 号, 15-35.
- 野町素己 (2010)「バルカン半島の諸言語とバルカン言語学」『ロシア・中欧・バルカン世界のことばと文化』東京:成文堂, 97-116.
- _____. (2011)「スロヴェニア語の構文「*dobiti*+受動過去分詞」について—文法化の観点からの分析と試論—」『西スラヴ学論集』Vol.14, 日本西スラヴ学研究会, 30-51.
- 服部文昭 (1983)「ブルガリア語の基本的統語構造」『バルカン諸言語における言語圏現象の総合的研究(昭和 57 年度科学研究費補助金(一般研究 B)研究

成果報告書)』東京大学教養学部, 41-51.

三谷恵子 (1995) 「言語接触と言語の構造—ソルブ語に見られるドイツ語の影響のケースを中心に—」『Slavistika』第 11 号, 東京大学大学院スラヴ語スラヴ文学研究室, 657-665.

謝辞

本論文の執筆に際しては、多くの方々のご指導やご協力をいただきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

まず、主任指導教員である匹田剛先生には、原稿の初期段階から何度も繰り返し目を通していただき、内容から形式に至るまで数え切れないほどのご助言やご指摘をいただきました。また、長時間にわたる議論に何度もお付き合いいただきました。副指導教員である川口裕司先生と風間伸次郎先生には、博士論文の原稿に目を通していただき、論文の形式や言語学の観点から貴重なご意見やご指摘をいただきました。

ソフィア大学での指導教官であるティシェヴァ教授(проф. д-р Й. Тишева)とジョノヴァ准教授(доц. д-р М. Джонова)には、ブルガリア語学の観点から本研究に対する様々なご助言をいただくとともに、研究相談に何度ものっていただきました。また、ブルガリア科学アカデミーブルガリア語研究所のケレミドチエヴァ教授(проф. д-р Сл. Керемидчиева)からは、ブルガリア語方言学者の立場から、フィールドワークの方法論のご指導を仰ぐことができました。

本論文を書き上げることができたのには、学部から博士後期課程 1 年目まで主任指導教官としてお世話になった中澤英彦先生、ブルガリア語・バルカン諸語の研究の道へいざない、様々な点でご支援くださった佐藤純一先生と寺島憲治先生、ルーマニア語学・言語学の観点から絶え間ないご指導やご助言をくださった鈴木信五先生にも多くを負っています。また、野町素己先生には、文献に関する貴重な情報をいただきました。

東京外国語大学ロシア語研究室の先輩、後輩、同僚のみなさんには、日頃から研究に関する議論に付き合ってくださいました。特に、水上裕之さんと後藤雄介さんには、博士論文の原稿の校正作業にもご協力いただきました。Мария Чалъкова さんには、校正作業に加えて、母語話者の観点から多くの有益なご指摘をいただきました。

最後に、ブラネシュティ村のインフォーマントやコーディネーターの方々には、本研究の根本である言語資料の収集ができませんでした。本論文の執筆中に亡くなってしまったインフォーマントや重い病気にかかってしまったインフォーマントもいるなかで、ブラネシュティ村の言語文化の記録に、本研究の成果が少しでも貢献することができるのであればこれ以上の喜びはありません。

本論文の執筆には、日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」(東京外国語大学組織的若手研究者等海外派遣プログラム「国際連携による非英語圏ヨーロッパ諸地域に関する若手人文学研究者海外派遣プログラム

(2012年度短期派遣EUROPA))、日本学術振興会「平成25年度『卓越した大学院拠点形成支援補助金』(東京外国語大学「学会発表や調査に係る旅費支援」)、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター「2017年度鈴木・中村奨励研究員」、及び経団連国際教育交流財団(2014年度日本人大学院生奨学金)の支援を受けました。ここに感謝の意を表します。

資料

ブルガリア語ブラネシュティ方言における補語の接語重複

一言語接触と文法化

本研究のために書き起こしたブラネシュティ方言の言語データを参考資料として添付する。

補語の接語重複の例をすべて、動詞前（直接補語と間接補語）、動詞後（直接補語と間接補語）の順に示す。なお、接語重複している N と Ncl には実線を引く。

表記方法については、本文と同様のやり方に従う。ただし、(???) は聞き取ることができない箇所を表す。

以下は、本資料の例数をまとめた一覧表である。

動詞前

	直接補語		
	人称代名詞	その他の名詞句	合計
пъ/рă を伴う	22	26	48
пъ/рă を伴わない	2 ²³¹	43	45
合計	24	69	93
	間接補語		
	人称代名詞	その他の名詞句	合計
нъ/нă を伴う	24	2	26
нъ/нă を伴わない	60	2	62
合計	84	4	88

動詞後

	直接補語		
	人称代名詞	その他の名詞句	合計
пъ/рă を伴う	86	66	152
пъ/рă を伴わない	—	5	5
合計	86	71	157
	間接補語		
	人称代名詞	その他の名詞句	合計
нъ/нă を伴う	50	20	70
нъ/нă を伴わない	9	—	9
合計	59	20	79

²³¹ 2 例中、1 例は人称代名詞主格形が用いられる HTLD の例である。対格ではなく主格形であるため、そもそも пъ/рă は用いられえない。

動詞前

直接補語

(全 93 例)

● 人称代名詞 (全 24 例)

➤ пъ/рă を伴う (22 例)

[Пъ тебе те боли?] ПЪ МÈНЕ МЪ були.

[Pă tebe te boli?] РĂ MÈNE mă buli.

[AM you-ACC you hurt AM I-ACC I-ACC.CL hurt-PRS.3.SG

He иштъ дъ май пұшь.

Ne ištă dă maj püşă.

NEG want-PRS.1.SG SMP more smoke-PRS.1.SG

「[あなたは痛いですか。] 私は痛い。もうタバコを吸いたくない。」

(RUS_150211_001/9.38)

Am, пъ тебе кат ни тъ пузнаўът...

Am, pă тебе кат ni tă puznawăt...

but AM you-ACC since NEG you-ACC.CL know-PRS.3.PL

「でも、あなたのことは (誰も) 知らないから...」 (TF2_150219_001/1.38.12)

Пъ негу гу (???) нъ спиталу.

Pă negu gu (???) nă spitălu.

AM he-ACC he-ACC.CL (???) at hospital-DEF.M.SG

「彼は、病院で???された。」 (TMita2_150217_001/2.04.57)

Пъ мène мъ пузейăскъ.

Pă mène mă puzejăskă.

AM I-ACC I-ACC.CL take_a_photo-PRS.3.SG

「私のことを写真に撮る。」 (TO2_150211_002/57.51)

Ши сига пъ т'ап ги зàмъм...
 Ši sigà pă t'ap gi zàmăm...
 and now AM they-ACC they-ACC.CL take-PRS.1.SG
 「そして今、彼らを連れていく」 (TM1_120509_003/15.39)

...и пъ мѐне шъ мъ издѐ пушкърййтъ там.
 ...i pă mène šă mă izdè puškărijătă tàm.
 ...also AM I-ACC FUT I-ACC.CL finish-PRS.3.SG prison-F.SG+DEF.F.SG. there
 「私のことも牢屋が苦しめることになる。」 (TM1_120509_003/1.49.55)

Пъ мѐне ни мъ устàiу мл'òгу нь шкуўàль...
Pă mène ni mă ustaiw ml'ògu nă škuwâlă...
 AM I-ACC NEG I-ACC.CL leave-AOR.3.PL for_a_long_time at school
 「私は、学校に長く行かせてもらえなかった。」 (BV1_120509_003/37.12)

Амъ пъ мѐне българите кàту²³² сѐки²³³ гудйна мъ
 Амă pă mène bălgarite kàtu sèki gudina mă
 but AM I-ACC Bulgarian-PL+DEF.PL every every-M.SG year-F.SG I-ACC.CL
 подвикаўо у стòлницата нàште, на Букурѐшт...
 podvikawo u stòlnicata năšte, na Bukurêšt...
 invite-aor.3.pl to capital_city our to Bucharest
 「でも私のことは、ブルガリア人たちは首都のブカレストへ毎年招待した。」
 (DD1_120504_003/16.18)

Да! Сàму ПЪ МѐНЕ мъ пукàниўо.
 Da! Sàmu ПĂ МѐНЕ mă pukàniwo.
 yes only AM I-ACC I-ACC.CL invite-AOR.3.PL
 「そうだ！私だけが招待されたんだ。」 (DD1_120504_003/37.30)

²³² kàту/kàtu < ката/kata 「毎」の意味を持つギリシャ語起源の不変化の形容詞。

²³³ сѐки/sèki 「毎」が、修飾する女性名詞に一致した女性形ではなく、男性形であるのは、ルーマニア語で「年」を意味する語が男性名詞であるためと考えられる。

...пъ Ил'анъ и пъ мѣн мъ пукàниўо тàm.
 ...pǎ Il'anǎ i pǎ mèn mǎ pukàniwo tàm.
 ...AM Iyana and AM I-ACC I-ACC.CL invite-AOR.3.PL there
 「イリヤナと私がそこへ招待された。」 (DD1_120504_003/37.30)

Ти пъ нàс ни...
 Tì pǎ nàs ni...
 you-NOM AM we-ACC we-ACC.CL
 「あなたは私たちを...」 (DD1_120504_003/1.05.56)

Амъ, пъ нѣгу # вѣкаўо гу нь Мъкѣтъ...
 Amǎ pǎ nègu # vikawo gu nǎ Mǎkitǎ...
 but, AM he-ACC call-AOR.3.PL he-ACC.CL to Makita...
 「でも、彼はマキタに呼ばれた。」 (DD1_120504_003/3.02.57)

Амъ àс пъ т'àф # пумòгнъф²³⁴ ги мл'òгу.
 Amǎ às pǎ t'ǎf # pumògnǎf gi ml'ògu.
 but I-NOM AM they-ACC help-AOR.1.SG they-ACC.CL much
 「でも、私は彼らをたくさん手助けした。」 (DD1_120504_003/3.05.26)

А, пъ нѣйъ йъ йштеш?
 A, pǎ nèjǎ jǎ išteš?
 Ah AM it-F.SG.ACC it-F.SG.ACC.CL want-PRS.2.SG
 「ああ、それ（歌）をお望みななのね。」 (BV2_121031_001/53.49)

Пъ мѣне мъ пузнàваўо мл'òгу хòръ.
Pǎ mène mǎ puznàvawo ml'ògu hòrǎ.
 AM I-ACC I-ACC.CL know-IMPF.3.PL many people
 「私のことは、たくさんの人が知っていた。」 (DD2_121102_001/23.41)

²³⁴ 「助ける」を意味する動詞が対格の補語をとるのは、接触言語であるルーマニア語の影響であると考えられる（ルーマニア語では対格を要求する）。

Сèки гудина пъ мène мъ пукàниўо нь тàm.
 Sèki gudina pǎ mène mǎ pukàniwo nǎ tàm.
 every year AM I-ACC I-ACC.CL invite-AOR.3.PL to there
 「毎年、私はそこへ招待されていた。」 (DD2_121102_001/3.20.14)

A пъ нèгу гу... гу кàръши жинà му.
 A pǎ nègu gu... gu kàrǎši žinà mu.
 but AM he-ACC he-ACC.CL he-ACC.CL drive-IMPF.3.SG wife he-DAT.CL
 「彼のことは、奥さんが運転していた。」 (DM_130927_002/2.03.07)

Пъ тèф ги пòмн'е.
Pǎ tèf gi pòm'n'e.
 AM they-ACC they-ACC.CL remember-PRS.1.SG
 「(わたしは) 彼らのことは覚えている。」 (BV3_131003_001/11.22)

Ам, ам, тўка и пъ нèгу гу пòмн'ь.
 Am, am, tũka i pǎ nègu gu pòm'n'ǎ.
 but but here also AM he-ACC he-ACC.CL remember-PRS.1.SG
 「でも、ここでは彼のことも覚えている。」 (BV3_131003_001/11.20)

Ам пъ т'àф ги гўждьф дь, дь учèt.
 Am pǎ t'áf gi gũždǎf dǎ, dǎ učèt.
 but AM they-ACC they-ACC.CL put-AOR.1.SG SMP SMP study-PRS.3.PL
 「彼らは (息子たちは) 学校にやったんだ。」 (DM_130927_002/1.28.06)

Пъ мène мъ пузнàвьш, нй мь пузнàвьш?
Pǎ mène mǎ puznàvǎš, ni mǎ puznàvǎš?
 AM I-ACC I-ACC.CL know-PRS.2.SG NEG I-ACC.CL know-PRS.2.SG
 「私のことは知っているか、知らないか。」 (RUS_131005_002/46.11)

Фанъ дъ пузнàўъ пь Марин, пузнàўъ
Fànǎ dǎ puznàwǎ pǎ Marìn, puznàwǎ
start-AOR.3.SG SMP recognize-PRS.3.SG AM Marin recognize-PRS.3.SG

пъ мàйкъ му, пъ мèn мъ пузнàўъ.

pǎ màjkǎ mu, pǎ mèn mǎ puznàwǎ.

AM mother he-DAT.CL AM I-ACC I-ACC.CL recognize-PRS.3.SG

「(その赤ん坊は) マリンのことを、自分の母親のことを、そして私のことを認識するようになった。」(DD2_121102_001/4.54.31)

➤ **пъ/рă** を伴わない (2 例)

И	<u>т'ап</u> ,	<u>ги</u>	зèŷo,	пràйŷo	нèшту...
I	<u>t'ap</u> ,	<u>gi</u>	zèwo,	prajwo	něstu...
also	they-ACC	they-ACC.CL	take-AOR.3.PL	do-AOR.3.PL	something

「彼らも連れていかれ、何かされた。」 (DD2_121102_001/2.14.50)

<u>Hac[sic!]</u> ²³⁵	#	нй	<u>мъ</u>	бèши	стрàm.
<u>Nas[sic!]</u>	#	нй	<u>mă</u>	běši	stràm.
I-NOM		NEG	I-ACC.CL	be-IMPF.3.SG	shame

「私は恥ずかしくなかった。」 (BV3_131003_001/1.45.55)

²³⁵ 期待される形は、主格形の Ac/As であり、いわゆる HTLD の例と考える。

● その他の名詞句 (全 69 例)

➤ **пъ/рă** を伴う (26 例)

Às, нъ²³⁶ тès, койèтту ни в'арўът у Гòспот, <...>
 Às, нă тès, kojèтtu ni v'arwăt u Gòspot, <...>
 I-NOM DM this-PL REL-PL NEG believe-PRS.3.PL in Lord
 нй ги штък.
 ni gi štăk.
 NEG they-ACC.CL want-PRS.1.SG

「私は、主を信じない人々は、望まない。」 (BV4_150217_002/11.05)

Пъ стръинте тès нйч не ги бййт.
Pă străinte тès nič ne gi bijăt.
 AM foreigner-PL+DEF.PL this-PL at_all NEG they-ACC.CL hit-PRS.3.PL
 「外国人たちはまったく叩かれない。」 (TF2_150219_001/1.38.03)

Пъ хоръта, дèту бйўо крѣи Фукушимйнь,
Pă hòrăta, dètu biwo krăi Fukušimină,
 AM person-PL+DEF.PL REL be-EVID.3.PL around Fukushima
ги дрѣпнаўо нь дрўгийъ стръни.
gi drăpnawo nă drùgijă străni.
 they-ACC.CL pull-AOR.3.PL at other-PL country-PL
 「福島のそばにいた人たちは、他の国に連れていかれた。」
 (DD1_120504_003/1.02.22)

Пъ тўй мунчè # дунèsъў гү тўк нь мène.
Pă tũj munčè # dunèsăw gu tũk nă mène.
 AM this-N.SG boy-N.SG bring-AOR.1.SG it-N.SG.ACC.CL here at I-ACC
 「この子のことは、(私は) ここ私のもとに連れてきた。」
 (DD1_120504_003/3.06.01)

²³⁶ **пъ/рă** の翻訳借用の例と考えるため、ここに含める (cf. 3.2.2.1. 「基本的な特徴」を参照)。以下、**пъ/рă** の翻訳借用として用いられていると考えられる **нъ/nă** を伴う例については、同様の対応 (対格標識の扱い) をとる。

Пъ „Дòбръ зьннй мь“ йь нъучй?
Pǎ „Dòbrǎ zǎnnì mǎ“ jǎ nǎučì?
 AM “Dobrǎ take-IMP.2.SG I-ACC.CL it-F²³⁷.SG.ACC.CL learn-AOR.2.SG
 『ドブラ・ザンニ・マ (歌の名前)』を覚えたか。」 (BV2_121031_001/55.13)

Пъ мумйчиту дь ни гу устайш
Pǎ mumičitu dǎ ni gu ustaiš
 AM girl-N.SG+DEF.N.SG SMP NEG it-N.SG.ACC.CL leave-PRS.2.SG
 дь тръгни тò нь нйкъде.
 dǎ trǎgni tò nǎ nīkāde.
 SMP start-PRS.3.SG she-N.SG.NOM to nowhere
 「その女の子がどこにも行ってしまわないようにしなさい。」
 (TM2_121029_001/33.22)

Пъ тòйтъ мàйкъ, пъ тòй тèйку
Pǎ tòjtǎ màjkǎ pǎ tòj tèjku
 AM your-F.SG+DEF.F.SG mother-F.SG AM your-M.SG father-M.SG
 дь ми ги дунсеш ън пузà.
 dǎ mi gì dunsesh ǎn puzà.
 SMP I-DAT.CL they-ACC.CL bring-PRS.2.SG in photo
 「あなたの母と父の写真を持ってきなさい。」 (BV2_121031_001/46.21)

Пъ туй мунчè, пъ Мърин и вèште двè,
Pǎ tuij munče, pǎ Mǎrin i vèšte dvè,
 AM this-N.SG boy-N.SG AM Marin and more two-N.SG
 пуснаў гу у Йапòнийъ.
 pùsnaw gu u Japònijǎ.
 let_go-AOR.3.PL it-N.SGACC.CL in Japan
 「この子は、マリンともう二人の子は日本に行かされた。」
 (DD2_121102_001/1.06.32)

237 「歌」を意味する語が女性名詞であるため、当該の Nel は女性形となっていると考えられる。

A пъ гòспуд'ъ нìкуй ни гү вìде.
 A рă гòспуд'ă nìkuj ni gu vide.
 but AM Lord-M.SG+DEF.M.SG nobody-NOM NEG he-ACC.CL see-AOR.3.SG
 「主のことは誰も見ていない。」 (DD2_121102_001/3.49.50)

Амъ пъ гòспуд'ъ кòй гү ньпраи?
 Амă рă гòспуд'ă kòj gu năprai?
 but AM Lord-M.SG+DEF.M.SG who-NOM he-ACC.CL make-AOR.3.SG
 「では主は誰が創造したのか。」 (DD2_121102_001/3.50.11)

Амъ пъ натùръта тѣс кòй йъ ньпраи?
 Амă рă natùrăta tăs kòj jă năprai?
 but AM Nature-F.SG+DEF.F.SG this-F.SG who-NOM it-F.SG.ACC.CL make-AOR.3.SG
 「しかし、この自然は誰が創造したのか。」 (DD2_121102_001/3.50.33)

Амъ пъ гòспуд'ъ кòй гү нь...
 Амă рă гòспуд'ă kòj gu nă...
 but AM Lord-M.SG+DEF.M.SG who-NOM he-ACC.CL make
 Амъ пъ гòспуд'ъ кòй гү ньпраи?
 Амă рă гòспуд'ă kòj gu năprai?
 but AM Lord-M.SG+DEF.M.SG who-NOM he-ACC.CL make-AOR.3.SG
 「でも、主のことは誰が彼を...主のことは誰が創造したのか。」
 (DD2_121102_001/3.51.31)

Амъ пъ натùръта кòй йъ ньпраи?
 Амă рă natùrăta kòj jă năprai?
 but AM Nature-F.SG+DEF.F.SG who-NOM it-F.SG.ACC.CL make-AOR.3.SG
 「しかし、自然は誰が創造したのか。」 (DD2_121102_001/3.51.45)

Амъ пъ тòс тъй, амъ àс <...> ни мужйў
 Amă pă tòs tăj, amă às <...> ni mužiw
 but AM this-M.SG well but I NEG can-AOR.1.SG
 дъ гү ръзбиръ.
 dă gu răzbiră.
 SMP he-ACC.CL understand-PRS.1.SG

「しかし、この者は、私は理解することができなかった。」

(DD2_121102_001/4.05.49)

Амъ пъ Толстой, ни мужйў дъ гү ръзбиръ.
 Amă pă Tolstoj, ni mužiw dă gu răzbiră.
 but AM Tolstoy NEG can-AOR.1.SG SMP he-ACC.CL understand-PRS.1.SG

「でも、トルストイのことは、私は理解できなかった。」(DD2_121102_001/4.06.37)

Пъ тèз ги йштъ ÀС.
Pă tèz gi ištă ÀS.
 AM this-PL they-ACC.CL want-PRS.1.SG I-NOM

「これらは私が欲しい。」(DM_130927_002/1.21.26)

Пъ унès мáлките ги вйд'ъ?
Pă unès mălkite gi vid'ă?
 AM that-PL little-PL+DEF.PL they-ACC.CL see-AOR.2.SG

「あの小さな（馬）は見たか。」(BA1_131004_001/1.48.44)

Пък пъ Мйрчу, пъ бъйату гү нъпрайф
 Păk pă Mirču, pă băjātu gu năprajf
 while AM Mirču AM boy-M.SG+DEF.M.SG he-ACC.N.SG.CL make-AOR.1.SG
 нъ двайсе чèтер гòдин.
 nă dvajse čèter gòdin.
 at 20 4 year-PL

「一方で、ミルチュは、男の子のほうは24歳の時に生んだ。」

(BA_131004_001/53.22)

Пъ Марин Тарантил нѝ гү вѝкѝ?

Pă Marin Tarantil ni gu vikă?

AM Marin Tarantil NEG he-ACC.CL call-AOR.2.SG

「マリン・タランティルは、(あなたは) 呼ばなかったのか。」

(BV3_131005_002/47.15)

Пъ тѝс ги венчѝф.

Pă tès gi venčàf.

AM they-ACC they-ACC.CL marry-AOR.1.SG

「(わたしは) 彼らを結婚させた。」 (GG_Party_131006_001/19.20)

Am, пъ „Màlka mumà“ йъ знѝм, пъ сѝте.

Am, pă „Màlka mumà“ jă znàm, pă sète.

but AM „little-F.SG girl-F.SG it-F²³⁸.SG.ACC.CL know-PRS.1.SG AM all-PL+DEF.PL

「(わたしは) 『マルカ・モマ (小さな女の子)』は知っている、全部知っている。」

(BV3_Party_131006_001/1.15.44)

И пъ пипѝр’те тѝй ги нѝкѝсѝъш

I pă pipèr’te tij gi năkiswăš

also AM pepper-PL+DEF.PL this-PL they-ACC.CL soak-PRS.2.SG

нѝ удѝта.

nă udăta.

in water-F.SG+DEF.F.SG

「このピーマンも水に浸します。」 (BV3_Party_131006_001/2.39.26)

²³⁸ 「歌」を意味する語が女性名詞であるため、当該の Ncl は女性形となっていると考えられる。

Пъ нѐйнту _____ мумичи ше гу нъпраи
Pǎ nějntu _____ mumiči še gu nǎprai
 AM her-N.SG+DEF.N.SG girl-N.SG FUT it-N.SG.ACC.CL make-AOR.3.SG
 снаà.
 snaà.
 daughter-in-law

「彼女の娘を義理の娘にするでしょう。」 (BV3_Party_131006_001/2.58.30)

Пъ жинàтъ _____ тѣс, койѐту... тѹкъ,
Pǎ žinătǎ _____ tǎs, kojètu... tũkǎ,
 AM woman-F.SG+DEF.F.SG this-F.SG REL here
 ше ѝе нъпрайъ инѣ... инѣ снаà...
 še je nǎprǎjǎ inǎ... inǎ snaà...
 FUT she-ACC.CL make-PRS.1.SG IDF.F.SG IDF.F.SG daughter-in-law-F.SG

「(わたしは) ここにいるこの女性を義理の娘にします。」

(BV3_Party_131006_001/2.58.27)

Дъ ни тѣ удàри мѣшинтъ.
 Dǎ ni tǎ udàri măšintǎ.
 SMP NEG you-ACC.CL hit-PRS.3.SG car-F.SG+DEF.F.SG
Пъ инѣ _____ жинѣ _____ ѣ _____ удàри тѹкъ.
Pǎ inǎ _____ žinǎ _____ jǎ _____ udàri tũkǎ.
 AM IDF.F.SG woman-F.SG she-F.SG.ACC.CL hit-AOR.3.SG here

「車にひかれないように気をつけなさい。ある女性はここでひかれた。」

(BV3_131003_001/2.43.03)

Mòjtu _____ мунчѐ, kàt бѐши màлку,
Mòjtu _____ munčè, kàt běši màlku,
 my-N.SG+DEF.N.SG boy-N.SG when be-IMPF.3.SG little-N.SG
гу нòс'еф тàm нь Бѣжнàр'те.
gu nòs'ef там нă Băžnàr'te.
 it-N.SG.ACC.CL take-IMPF.1.SG there to Băžnar'te.

「私の子は、小さかったころ、バジナル地区に連れて行っていた。」

(TMita2_150217_001/2.19.16)

Църкъ # тì йъ пузнàвъш пъ Църкъ?
Cirkă # tì jä ruznàvăș pǎ Cirkă?
 Tsirka you-NOM she-ACC.CL know-PRS.2.SG AM Tsirka

「ツィルカは、お前はツィルカは知っているか。」 (AG2_150212_002/1.37.36)

Къштãтã _____ тãс тòй йъ ньпràи.
Kăštãtã _____ tãs tòj jä năprài.
 house-F.SG+DEF.F.SG this-F.SG he-NOM it-F.SG.ACC.CL make-AOR.3.SG

「この家は、彼が建てた。」 (TM1_121509_003/1.04.03)

Сѐте _____ фѣбрици ги дистрùѳа.
Sète _____ făbrici gi distrùwa.
 all-PL+DEF.PL factory-PL they-ACC.CL distribute-PRS.3.SG

「全ての工場は配置されている。」 (BV1_120509_003/51.30)

Сѐте _____ пràзници ни ги държìм.
Sète _____ pràznicì ni gi dăržim.
 all-PL+DEF.PL holiday-PL NEG they-ACC.CL keep-PRS.1.PL

「(私たちは) 全ての祝日を保持しているわけではない。」

(BV1_120509_003/55.26)

Рунните, ги пйшеў пь сèте.
Runninte, gi pišew pǎ sète.
 parents-PL they-ACC.CL write-IMPF.1.SG AM all-PL+DEF.PL
 「親戚（の名前）は全員書いたものだ。」 (BV1_120509_003/1.05.36)

Сèте пèsни хòр'ата тр'абўаўо
Sète pèsni hòr'ata tr'ǎbwawo
 all-PL+DEF.PL song-PL person-PL+DEF.PL it_is_necessary-EVID.3.PL
 дь ги знаят.
 dǎ gi znàjăt.
 SMP they-ACC.CL know-PRS.3.PL
 「全ての歌は、その人々が知っているようだ。」 (DD1_120504_003/10.21)

Бойниците та'п, избрəўо ги.
Bojnícite tǎ'p, izbrǎwo gi.
 soldier-PL+DEF.PL they-ACC.CL select-AOR.3.PL they-ACC.CL
 「それらの兵士たちは選抜された。」 (DD1_120504_003/13.21)

Òрь рьбòтни, òрь сьз глава, òрь сьз рйци,
Òrǎ rǎbòtni, òrǎ sǎz glavǎ, òrǎ sǎz rici,
 person-PL working-PL person-PL with head person-PL with hand-PL
 избрəўо ги, пўснаўо ги там.
 izbrǎwo gi, pùsnawo gi там.
 select-AOR.3.PL they-ACC.CL let_go-AOR.3.PL they-ACC.CL there
 「働き者の人、頭のある人、手のある人が選抜され、そこへ行かされた。」
 (DD1_120504_003/13.46)

Ино̀ мумиченце малку тѣй,
Inò mumičence màlku tǎj,
 IDf.N.SG little_girl-N.SG small-N.SG so
 пуснаѿо гу съз инò сѣмун хл'ап.
 pùsnwo gu sǎz inò sǎmùn hl'ap.
 let_go-AOR.3.PL it-N.SG.ACC.CL with a loaf bread
 「ある小さな女の子は一斤のパンをもって行かされた。」
 (DD1_120504_003/2.01.39)

Нашт'е майки, когату прайѿу хл'абу,
 Našt'e màjki, kogàtu prǎjwu hl'abu,
 our-PL+DEF.PL mother-PL when make-IMPf.3.PL bread-M.SG+DEF.M.SG
 брѣшнòту, зѣмѣѿу гу...
 brǎšnòtu, zǎmǎwu gu...
 wheat-N.SG+DEF.N.SG take-IMPf.3.PL it-N.SG.ACC.CL
 「私たちの母は、パンを作るときに、小麦粉を取って...」
 (DD1_120504_003/2.14.47)

Идин рѿс, тр'абѣѿо дѣ гу
Idin rùs, tr'abǎwo dǎ gu
 IDf.M.SG Russian it_is_necessary-IMPf.3.SG SMP he-ACC.CL
 жудикъ тѿкъ.
 žudikǎ tǔkǎ
 judge-PRS.3.PL here
 「あるロシア人は、ここで裁かれなければならなかった。」
 (TM2_121029_001/1.10.19)

Тѣс ги знаш.
Tès gi znáš.
 this-PL they-ACC.CL know-PRS.2.SG
 「これらは (あなたは) 知っている。」 (TM2_121029_001/1.28.00)

Наште _____ местà, тўòйтò и мòйтò,
Nàšte _____ mestà, twòjtò i mòjtò,
our-PL+DEF.PL place-PL your-N.SG+DEF.N.SG and my-N.SG+DEF.N.SG
ги продàдоў.
gi prodàdow.
they-ACC.CL sell-AOR.3.PL

「私たちの土地を、あなたのもわたしのも、売ってしまった。」

(TM2_121029_001/1.20.14)

Амъ̀ тès трì пèsен ги знàйми.
Amằ tès trì pèsen gi znàjmi.
but this-PL three song-PL they-ACC.CL know-PRS.1.PL

「しかし、(わたしたちは) この3つの歌は知っている。」

(BV2_121031_001/1.02.27)

Тès, Г'òрги, свети Пётър, аз ги знàм,
Tès, G'òrgi, sveti Pètär, аз gi znàm,
this-PL George st. Peter I-NOM they-ACC.CL know-PRS.1.SG

ам нй знàм, нй съ ду крайу.

am ni znàm, ni să du kràwu.

but NEG know-PRS.1.SG NEG be-PRS.3.PL till end-M.SG+DEF.M.SG

「この、(聖) ゲオルギヤ聖ペタル (の歌) は知っているが、(歌の) 最後までは知らない。」

(BV2_121031_001/1.31.07)

И п'ès'инте тйй ги знàм.
I p'ès'inte tij gi znàm.
also song-PL+DEF.PL they-NOM they-ACC.CL know-PRS.1.SG

「それらの歌も (私は) 知っている。」 (BV2_121031_001/2.32.42)

Гълъбите ги ги сèеш тѝ.
Gălăbite gi gi sèeš ti.
 corn-PL+DEF.PL they-ACC.CL they-ACC.CL sow-PRS.2.SG you-NOM
 「トウモロコシはあなたが種まきする。」 (BV2_121031_001/2.38.41)

Тò млàду мунчè, повѝкаў гу тўк.
Tò mlàdu munčè, povikaw gu tùk.
 it-N.SG young-N.SG boy-N.SG call-AOR.1.SG it-N.SG.ACC.CL here
 「(わたしは) その若い男の子をここに呼んだ。」 (DD2_121102_001/28.25)

Хòрѝта, <...> тòй чув'èк # гòре тàм # гу чѝтът.
 Hòrăta, <...> tòj čuv'ek # gòre tàm # gu čităt.
 person-PL+DEF.PL he-NOM person-M.SG up there he-ACC.CL respect-PRS.3.PL
 「人々は天上のそのお方を尊んでいる。」 (DD2_121102_001/49.31)

Бѝўо хòрѝ, дèту тѝй парѝ, дàдоа ги
 Bïwo hòră, dètu tij pari, dàdoa gi
 be-IMPF.3.PL person-PL REL they-NOM money-PL give-AOR.3.PL they-ACC.CL
 нь америкàнците...
 nă amerikàncite...
 to American-PL
 「これらの金をアメリカ人たちに与えた者がいた。」 (DD2_121102_001/2.18.39)

Гермàнците # разлѝчиўо ги у чèтер странѝ.
Germàncite # razlăčiwo gi u četer strani.
 German-PL+DEF.PL separate-AOR.3.PL they-ACC.CL to 4 country-PL
 「ドイツ人たちは、4つの国に分割された。」 (DD2_121102_001/2.19.53)

Арма̀та йъ ньпра̀иф²³⁹ нь Клуж.
Armata ja nãprãif nã Klùž.
army-F.SG+DEF.F.SG it-F.SG.ACC.CL do-AOR.1.SG in Cluj
「(わたしは) クルージュで兵役をした。」 (DM_130927_002/1.14.53)

Два̀йсе п̀ет по̀гона²⁴⁰, аз ги с̀еѐф
Dvãise p̀et pogona, аз gi s̀eef
25 pogon-COU I-NOM they-ACC.CL sow-IMPF.1.SG
с̀с к̀нте.
sãs kònte.
with horse-PL+DEF.PL
「25 ポゴンは、(わたしは) 馬を使って種まきした。」 (DM_130927_002/1.22.31)

Ши г̀я̀льби́те ги ди́гъѳо нь тав̀ан дъ ги
Ši gãlãbite gi diğãwo nã tavàn dã gi
and corn-PL+DEF.PL they-ACC.CL lift-IMPF.1.PL DM ceiling SMP they-ACC.CL
к̀риѳо ут кому̀ни́стите,
kriwo ut komunìstite,
hide-PRS.1.SG from communist-PL+DEF.PL
дъ ни ги ньмѐрът.
dã ni gi nãmèrãt.
SMP NEG they-ACC.CL find-PRS.3.PL
「トウモロコシは天井の上に上げた、共産主義者から隠し、彼らが見つけないよ
うに」 (DM_130927_002/1.22.47)

Три-чѐтър па̀кѳтъ т̀ъй, ги да̀ѳаф нь т'̀аф.
Tri-čètãr pakëtã tãj, gi dãwaf nã t'ãf.
3, 4 pack-COU so they-ACC.CL give-IMPF.1.SG DM they-ACC
「3, 4 パック、(わたしは) 彼らに与えていた。」 (DM_130927_002/1.23.31)

²³⁹ ルーマニア語の表現、a face armată 「兵役をする」の翻訳借用。

²⁴⁰ 畑の大きさをはかる単位、おおよそ1ポゴン=1デカール。

Cète _____ пуйезји ги _____ з̀на̀м.
Sète _____ pujeziì gi _____ znàm.
 all-PL+DEF.PL poetry-PL they-ACC.CL know-PRS.1.SG
 「(わたしは) 詩は全部知っている。」 (BV3_131003_001/10.35)

...̀ба̀тѝсти ̀тѝй _____ ̀ги _____ ̀й̀штѝў _____ н̀ь ̀бу̀й̀ѐнѝцу...
 ...batisti tij _____ gi _____ ištiw _____ nă bujènicu...
 ...batiste-PL they-NOM they-ACC.CL want-IMPF.1.SG to Buenek
 「このバチストは、ブエネク²⁴¹のために欲しかった。」 (BV3_131003_001/1.09.50)

Ѝн̀г̀л̀ѐз̀ъ̀та _____ а̀з _____ не _____ ̀й̀ъ _____ ш̀т̀ъ̀,
Inglèzăta _____ àz _____ ne _____ jă _____ ștằ,
 English-F.SG+DEF.F.SG I-NOM NEG it-F.SG.ACC.CL want-PRS.1.SG
 чи _____ ни _____ ̀й̀ъ _____ з̀на̀м.
 čì _____ ni _____ jă _____ znàm.
 because NEG it-F.SG.ACC.CL know-PRS.1.SG
 「英語のことは私は欲さない、なぜなら知らないから。」
 (BV3_131003_001/2.47.54)

Т̀ѐс _____ ̀ги _____ ф̀ър̀л`ами _____ с`ѝг̀а̀н̀ъ̀.
Tès _____ gi _____ făr'l'ami _____ s'igănă.
 this-PL they-ACC.CL throw_away-PRS.1.PL now
 「これらは (私たちは) 今は捨てています。」 (BA1_131004_001/53.41)

М̀ум̀ѝчѝту... _____ т̀о̀й _____ ̀о²⁴² _____ п̀у̀ра̀сти.
Mumičitu... _____ tøj _____ o _____ purăsti.
 girl-N.SG+DEF.N.SG he-NOM it-F.SG.ACC.CL bring_up-AOR.3.SG
 「その女の子は、彼が育て上げた。」 (AG1_131004_001/1.37.32)

²⁴¹ 復活大祭の一週間前に健康と豊穰を祈って行われる東ブルガリアの習慣。

²⁴² ルーマニア語の人称代名詞非接語形対格女性(Ncl)が用いられている。一方で、Nは中性名詞であるが、ここでは意味的な一致を起こして女性形となっているものと考えられる。

Мòйте конè ги вìди?

Mòjte konè gi vidi?

my-PL+DEF.PL horse-PL they-ACC.CL see-AOR.2.SG

「(あなたは) 私の馬は見たか。」 (RUS_131004_001/2.26.58)

Àс йàм бързо, и децàтъ ги

Às jàm bårzo, i decàtã gi

I-NOM eat-PRS.1.SG fast and child-PL+DEF.PL they-ACC.CL

нъпрàиф бързо тъй.

nãpràif bårzo tãj.

make-AOR.1.SG fast so

「私は食べるのが早い、子供もすぐに作った。」 (RUS_1310005_001/26.59)

間接補語
(全 88 例)

● 人称代名詞 (全 84 例)

➤ нь/нă を伴う (24 例)

Ни зѐўми мл'òгу тѝй, чи нь нăс ни
 Ni zèwmi ml'ògu tăj, čì nă nàs nì
 NEG take-AOR.1.PL many so because DM we-ACC we-ACC.CL
 зѐмѝт <...> дицăтѝ.
 zèmăt <...> dicătă.
 take-AOR.3.PL child-PL+DEF.PL

「(わたしたちは) そんなにたくさん買わなかった、なぜなら私たちには子供たちが買ってきてくれるから。」 (BA2_150212_002/1.28.02)

Нь мѐне ми харѐсѝѝ чорбѝ съз бòп.
Nă mène mì harèswă čorbă săz bòp.
 DM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG soup with beans

「わたしは豆入りチョルバ (スープ) が好きだ。」 (RUS_150211_001/5.08)

Нь мѐне ми харѐсѝѝ съз сòл'.
Nă mène mì harèswă săz sòl'.
 DM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG with salt

「塩が入っているのが好きだ。」 (RUS_150211_001/23.32)

[Ha men mi харесѝ чорбата.]
 [Na men mì haresă čorbata.]
 [DM I-ACC I-DAT.CL like-AOR.3.SG soup-F.SG.+DEF.F.SG]
 И НЬ МѐН ми харѐсѝѝ.
 I NĂ MÈN mì harèswă.
 also DM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG

「[わたしはチョルバが気に入りました。]私も好きなんだ。」
 (RUS_150211_001/17.04)

<...> màj frumòs, нъ нèгу му dàўът.
 <...> màj frumòs, nǎ nègu mu dàwăt.
 more beautiful DM he-ACC he-DAT.CL give-PRS.3.PL
 「彼にはもっと美しいのが与えられる。」 (TF2_150219_001/9.46)

Нъ нèгу му... нъпраиў дèсет милиòнь... пèнсийъ.
Nǎ nègu mu... nǎpraiw dèset miliònǎ... pènsijǎ.
 DM he-ACC he-DAT.CL make-AOR.3.PL 10 million-COUT pension
 「彼には 1000 万の年金が与えられた。」 (TM1_120509_003/15.24)

Дà, НЪ ТÈБЕ дъ ти гу дàm.
 Dà, Nǎ TÈBE dǎ tì gu dàm.
 yes DM you-ACC SMP you-DAT.CL it-ACC.CL give-PRS.1.SG
 「そうよ、あなたにそれをあげたいの。」 (TM1_120509_003/1.20.47)

Нъ мène, прàвиў ми ракийъ.
Nǎ mène, pràviw mì rakijǎ.
 DM I-ACC make-AOR.3.PL I-DAT.CL rakia
 「私にラキアを作ってくれた。」 (BV1_120509_003/1.10.38)

Амъ̀ àс нъ т'àф им кàзьф.
 Amǎ̀ às nǎ t'áf im kàzǎf.
 but I-NOM DM they-ACC they-DAT.CL tell-AOR.1.SG
 「でも、私は彼らには言った。」 (DD1_120504_003/21.51)

Амъ̀ нъ нàс ни ни тр'àбъ нйшту...
 Amǎ̀ nǎ nàs ni nì tr'ábǎ ništu...
 but DM we-ACC NEG we-DAT.CL it_is_necessary nothing
 「しかし、私たちには何も必要ない。」 (DD1_120504_003/1.25.45)

Нъ тебе, тр'абъ б̀ануви дъ ти дъд̀е... зъ п̀т'ъ.
Nă t̀ebe, tr'abă b̀anuvi dă t̃i dăd̀e... ză păt'.
 DM you-ACC it_is_necessary money SMP you-DAT.CL give-PRS.3.SG for road
 「あなたには、(親が) 旅行のお金も与えなくてはならない。」
 (BV2_121031_001/2.04.07)

Нъ м̀ене ми д̀умъ „д̀етту“.
Nă m̀ene mi dũmă „d̀ettu“.
 DM I-ACC I-DAT.CL say-AOR.3.SG „child-N.SG+DEF.N.SG“
 「私は『子供』と言われた。」 (BV2_121031_001/2.52.45)

Нъ м̀ене ми хар̀есъъ т̀ый мл'̀огу п̀т'ъ...
Nă m̀ene mi har̀eswă tăj ml'̀ogu păt'ă...
 DM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG so much way-M.SG+DEF.M.SG
 「私はその道がとても好きだ。」 (DD2_121102_001/3.57.38)

Нъ м̀ене ми хар̀есъъ.
Nă m̀ene mi har̀eswă.
 DM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG
 「私は好きだ。」 (RUS_130927_002/15.11)

И нъ м̀ене ми п̀аре ўбе.
 I nă m̀ene mi p̀are ùbe.
 also DM I-ACC I-DAT.CL it_seems good
 「私にも良いように思われる。」 (BV2_121031_001/12.42)

А нъ н̀егу му и студ̀ену...
 А nă ǹegu mu i stud̀enu...
 but DM he-ACC he-DAT.CL be-PRS.3.SG cold
 「彼は寒い。」 (BV2_121031_001/3.00.05)

И нъ мѣне ми харѣсѹъ.
 I nǎ měne mī harèswǎ.
 also DM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG
 「私も気に入った。」 (DM_130927_002/2.26.21)

Àз... нъ мѣне ми арѣсѹъ бѣре.
Àз... nǎ měne mī areswǎ bère.
 I-NOM DM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG beer
 「私は、ビールが好きだ。」 (RUS_130927_002/10.20)

A нъ... мѣне ми харѣсѹъ.
 A nǎ... měne mī harèswǎ.
 but DM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG
 「私は好きだ。」 (RUS_130927_002/29.52)

Нъ мѣне ми харѣсѹъ.
Nǎ měne mī harèswǎ.
 DEF I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG
 「私は好きだ。」 (RUS_130927_002/2.26.21)

Нъ мѣе ми харѣсѹъ тòплу.
Nǎ měe mī harèswǎ tòplu.
 DM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG warm
 「私は暖かいのが好きだ。」 (RUS_130927_002/35.36)

Нъ мѣне ми харѣсѹъ тòпло.
Nǎ měne mī harèswǎ tòplo.
 DM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG warm
 「私は暖かいのが好きだ。」 (RUS_130927_002/36.00)

Нъ mène ми харèsűъ Ниссàн.
Nă mène mi harèswă Nissàn.
 DM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG Nissan
 「私は日産（の車）が好きだ。」 (RUS_130927_002/58.12)

Пъ²⁴³ mène ми имìту Флуўаре.
Pă mène mi imìtu Fluware.
 AM I-ACC I-DAT.CL name-N.SG+DEF.N.SG Floare
 「私の名前はフロワレ。」 (TF2_150219_001/3.42)

²⁴³ 期待される形は нь/nă である。

➤ нь/nă を伴わない²⁴⁴ (60 例)

Àc, àc mène ni mi харèsűъ Сòфийъ.

Às, às mène ni mi harèswă Sòfijă.

I-NOM I-NOM I-ACC NEG I-DAT.CL like-AOR.3.SG Sofia

「私はソフィアが好きではない。」 (BV4_150217_002/3.43)

Знаш kò, mène ni mi харèsűъ kàт приkàзűт

Znăš kò, mène ni mi harèswă kàт prikàzwăt

know-PRS.2.SG what I-ACC NEG I-DAT.CL like-AOR.3.SG when talk-PRS.3.PL

чи ймът нь врътите тъй идин акчент.

či imăt nă vrătite těj idin akčènt.

because have-PRS.3.PL in word-PL+DEF.PL so IDF.M.SG accent-M.SG

「わかる？私は（ソフィアの言葉で）話されるのが好きじゃない。なぜなら、ある種の訛りが言葉にあるから。」 (BV4_150217_002/3.57)

Mène не mi харèsűъ. Миріши нь усцъ.

Mène ne mi harèswă. Miriši nă uscă.

I-ACC NEG I-DAT.CL like-PRS.3.SG smell-PRS.3.SG of sheep

「私は好きじゃない。羊のにおいがする（から）。」 (TF2_150219_001/29.12)

Àc mi харèsűъ, май йам мъмьлйгъ,

Às mi harèswă, māj jàm mămăligă,

I-NOM I-DAT.CL like-PRS.3.SG yet eat-PRS.1.SG mamaliga

гит ньпрайм.

git năprajm.

when make-PRS.1.SG

「私は好きよ、作ったらママリーガは食べるわ。」 (TF2_150219_001/40.36)

²⁴⁴ HTLD によって主格形が用いられている場合もここに含む。この場合、нь/nă はそもそも用いられない。

Àc # ми харèsűъ зь тòйту муми́чи.
Às # mi harèswǎ zǎ tòjtu mumiči.
 I-NOM I-DAT.CL like-PRS.3.SG about your-N.SG+DEF.N.SG girl-N.SG
 「私はあなたの娘が気に入っている。」 (TMita1_150212_004/13.46)

Mène ми арèsűши.
Mène mi arèswǎši.
 I-ACC I-ACC.CL like-IMPF.3.SG
 「私は気に入っていた。」 (TMita2_150217_001/31.11)

Малè mène ми <...> и лòшу.
 Малè mène mi <...> i lòšu.
 dear I-ACC I-DAT.CL be-PRS.3.SG bad
 「まあ、私は調子悪いわ。」 (TO2_150211_002/1.23.00)

Tèbe ти харèsűъ.
Tèbe tì harèswǎ.
 you-DAT you-DAT.CL like-IMPF.3.SG
 「あなたは気に入っている。」 (TO2_150211_002/1.25.44)

Mène ми харèsűъ зь Мими́.
Mène mi harèswǎ zǎ Mimi.
 I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG about Mimi
 「私はミミのことが気に入っています。」 (TO2_150211_002/1.25.54)

Mène ми лòшу, mène ми лòшу.
Mène mi lòšu, mène mi lòšu.
 I-ACC I-DAT.CL bad I-ACC I-DAT.CL bad
 「私は調子悪い、私は調子悪い」 (TO2_150211_002/1.31.01)

Mène mi харèsъўш дъ, дъ приказвѣм ѝркот.
Mène mi harèsáwăș dă, dă prikázvăm ѝrkot.
 I-ACC I-DAT.CL like-IMPF.3.SG SMP SMP talk-PRS.1.SG anything
 「私はなに（について）でもお話しするのが好きだった。」
 (BV1_120509_003/16.30)

Mèn mi kàзь идін...
Mèn mi kàză idin...
 I-ACC I-DAT.CL say-AOR.3.SG ID.F.M.SG
 「私にある人が言った。」 (DD1_120504_003/52.10)

Tòj # mu съ стòри, чи стѣм[sic!]²⁴⁵ н'àкуй крѣд'ец'.
Tòj # mu să stòri, či stăm[sic!] n'ăkuj krăd'ec'.
 he-NOM he-DAT.CL it_seem-PRS.3.SG that be-PRS.1.SG some thief
 「彼には、（私が）なんらかの泥棒と思えた。」 (DD1_120504_003/57.41)

Mèn mi съ стрѹвь, чи...
Mèn mi să strŭvă, či...
 I-ACC I-DAT.CL it_seems-PRS.3.SG that
 「私には...と思える。」 (DD1_120504_003/58.45)

Nègu mu харèsъў дъ рàбути.
Nègu mu harèswă dă răbuti.
 he-ACC he-DAT.CL like-PRS.3.SG SMP work-PRS.3.SG
 「彼は働くのが好きである。」 (DD1_120504_003/1.03.25)

Mène mi съ стрѹва...
Mène mi să strŭva...
 I-ACC I-DAT.CL it_seems-PRS.3.SG
 「私には思われる...」 (DD1_120504_003/2.36.15)

²⁴⁵ 期待される 1 人称単数形は、сѣм/săm である。

Mène ни ми харèsűъ такòс нèшт.
Mène ni mi harèswǎ takòs nèšt.
 I-ACC NEG I-DAT.CL like-PRS.3.SG such thing
 「私はそういうことが好きでない。」 (DD1_120504_003/3.05.17)

Mène кàзь ми госпудин Флорин.
Mène kàzǎ mi gospudin Florin.
 I-ACC tell-AOR.3.SG I-DAT.CL Mr Florin
 「私には、フロリン氏が言った。」 (DD1_120504_003/3.34.46)

И mèn ми пàре рѣű.
 I mèn mi pàre rǎw.
 also I-ACC I-DAT.CL it_seems-PRS.3.SG bad
 「私にも悪いように思われる。」 (TO1_121108_001/25.40)

M'èn ми йште.
M'èn mi ište.
 I-ACC I-DAT.CL want-PRS.3.SG
 「私は望んでいる。」 (TO1_121108_001/48.31)

Mène ми сь стрűвь, чи ни йède сигàна...
Mène mi sǎ strűvǎ, čì ni jède sigàna...
 I-ACC I-DAT.CL it_seems-PRS.3.SG that NEG eat-AOR.2.SG now
 「あなたが今食べなかったように私には思える。」 (BV2_121031_001/32.47)

Àс... ми харèsűъ български...
Àс... mi harèswǎ bălgarski...
 I-NOM I-DAT.CL like-PRS.3.SG Bulgarian
 「私はブルガリア語が好きだ。」 (BV2_121031_001/37.10)

Àc ми харèсѹъ. Àc приказѹъм със сѣчките.
Às mi harèswă. Às prikàzwăm săs sičkite.
 I-NOM I-DAT.CL like-PRS.3.SG I-NOM talk-PRS.1.SG with everyone
 「私は（ブルガリア語で話すのが）好き。みんなとお話する。」
 (BV2_121031_001/37.17)

Àc # ни ми харèсѹъ кàт приказвѹт.
Às # ni mi harèswă кàт prikàzvăt.
 I-NOM NEG I-DAT.CL like-PRS.3.SG when talk-PRS.3.PL
 「私は、（かれらが）話しているときに好きじゃない。」 (BV2_121031_001/49.19)

Mène ми арèсѹъш. Ми арèсѹъш дѣ пуйѣ. <...>
Mène mi arèsăwš. Mi arèsăwš dă puĵă. <...>
 I-ACC I-DAT.CL like-IMPF.3.SG I-DAT.CL like-IMPF.3.SG SMP sing-PRS.1.SG
Àc # ми арèсѹъ òркот дàко и зѣ п'èс'ен,
Às # mi arèswă òrkot dàko i ză p'ès'en,
 I-NOM I-DAT.CL like-PRS.3.SG anything if be-PRS.3.SG about song
 пуйѣ òркот.
 пуĵă òrkot.
 sing-PRS.1.SG anything

「私は好きだった。私は歌うのが好きだった。私は、歌ならば何でも好きだ。なんでも歌う。」 (BV2_121031_001/1.13.35)

M'ène ми арèсѹъш, ми арèсѹъш дѣ учè.
M'ène mi arèsăwăš, mi arèsăwăš dă učè.
 I-ACC I-DAT.CL like-IMPF.3.SG I-DAT.CL like-PRS.3.SG SMP study-PRS.1.SG
 「私は好きだった。学ぶことが好きだった。」 (BV2_121031_001/2.32.25)

Mène ми харèсѹъш дѣ учè пуèзии и чит'àф.
Mène mi harèswăš dă učè puèzii i čit'âf.
 I-ACC I-DAT.CL like-IMPF.3.SG SMP study-PRS.1.SG poetry-PL and read-IMPF.1.SG
 「私は詩を学ぶのが好きで、よく読んだものよ。」 (BV2_121031_001/2.37.29)

И mène mi харèsűъ, и mène mi харèsűъ
 I mène mi harèswǎ, i mene mi harèswǎ
 also I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG also I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG
 дъ приkàзвѣм бѣлгарски.
 dǎ prikàzvǎm bǎlgarski.
 SMP speak-PRS.1.SG Bulgarian

「私も好きよ、私も好き。ブルガリア語で話すのが。」 (BV2_121031_001/2.10.59)

Но оркűàту рàбута mène mi арèsűъш...
 No orkwàtu ràbuta mène mi arèsǎwǎš...
 but any_kind_of work I-ACC I-DAT.CL like-IMPF.3.SG

「でも、どんな仕事も私は好きだった。」 (BV2_121031_001/2.40.38)

M'ène mi студèну. M'ène mi студèну.
M'ène mi studènu. M'ène mi studènu.
 I-ACC I-DAT.CL cold I-ACC I-DAT.CL cold

「私は寒い。私は寒い。」 (BV2_121031_001/2.53.00)

Mène mi ùbe.
Mène mi ùbe.
 I-ACC I-DAT.CL good

「私は大丈夫だ。」 (BV2_121031_001/3.00.05)

Mène mi харèsűъ <...> кугàту...
Mène mi harèswǎ <...> kugàtu...
 I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG when

「私は...するときに好きだ。」 (DD2_121102_001/19.34)

Mène mi харèsűъ мл'òгу бòп, mène mi харèsűъ...
Mène mi harèswă ml'ògu bòp, mène mi harèswă...
 I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG much beans I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG
 「私は豆が大好きだ、私は好きなんだ。」 (DD2_121102_001/2.10.44)

Кугàту, кугàту mène mi кàзьű тàтку,
 Kugàtu, kugàtu mène mi kàzăw tàtku,
 when when I-ACC I-DAT.CL say-AOR.3.PL father
 мòйта мàйка...
 mòjta màjka...
 my-F.SG+DEF.F.SG mother
 「私に父と母が言ったとき...」 (DD2_121102_001/20.26)

Mèn тьй mi кàзьű...
Mèn tăj mi kàză...
 I-ACC so I-DAT.CL tell-AOR.3.SG
 「(かれは) 私にはそのように言った。」 (DD2_121102_001/3.10.18)

Àc # mène mi харèsűъ.
Às # mène mi harèswă.
 I-NOM I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG
 「私は好きだ。」 (DD2_121102_001/3.54.26)

Mène mi харèsűъ мл'òгу <...> астрономийьта тьс.
Mène mi harèswă ml'ògu <...> astronomijăta tăс.
 I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG much astronomy-F.SG+DEF.F.SG this-F.SG
 「私は大好きだ、<...>この天文学というのが。」 (DD2_121102_001/3.55.46)

Mène mi харèсүъ...
Mène mi harèswă...
 I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG
 「私は好きだ。」 (DD2_121102_001/3.56.15)

Mène mi харèсүъ, чи гувàриўми...
Mène mi harèswă, či guvàriwmi...
 I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG because talk-AOR.1.PL
 「(わたしたちが) 話せたので、私はうれしい。」 (DD2_121102_001/4.42.09)

Mène mi харèсүъ <...> ши истòрийъта, <...> истòрийъ,
Mène mi harèswă <...> ši istòrijăta, <...> istòrijă,
 I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG and history-F.SG+DEF.F.SG history
mène mi харèсүъ.
mène mi harèswă.
 I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG
 「私は歴史も好きだ。歴史なら、私は好きだ。」 (DD2_121102_001/4.09.10)

Г'а # как дъ ви какъ # ѝ
Г'а # kàk dă vi kàžă # ì
 she-NOM how SMP you-DAT.CL say-PRS.1.SG she-DAT.CL
 харèсүъш мл'òгу убичаите бългàрс...
 harèswăš ml'ògu ubičàite bǎlgars...
 like-IMPF.3.SG so_much custom-PL+DEF.PL Bulgarian-PL
 「彼女は、何と言ったらいいか、ブルガリアの習慣をととても気に入っていた。」
 (DD2_121102_001/4.22.38)

Mène mi арèсүъ дъ...
Mène mi arèswă dă...
 I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG SMP
 「私は...するのが好きだ。」 (RUS_130927_002/1.53.38)

Mène ni mi těšku, mi харèсўъ дъ гувàр'ъм със
Mène ni mi těšku, mi harèswă dă guvâr'ăm săs
 I-ACC NEG I-DAT.CL hard I-DAT.CL like-PRS.3.SG SMP speak-PRS.1.SG with
 хòръта и рьзбйръм. Амь нй май мòже.
 hòrăta i rǎzbirăm. Amă ni māj mòže.
 person-PL+DEF.PL and understand-PRS.1.SG but NEG more can-PRS.3.SG
 「私はつらくない。私は人々と話して理解するのが好きだから。でももうできな
 い。」 (DD2_121102_001/4.32.34)

И mène pò mi харèсўъ нь Петрòфски,
 I mène pò mi harèswă nă Petròfski,
 also I-DAT COMP I-DAT.CL like-PRS.3.SG DM Petrofski
 пò ми харèсўъ декът нь Сòфийъ.
 pò mi harèswă dekăt nă Sòfijă.
 COMP I-DAT.CL like-PRS.3.SG than DM Sofia
 「私もペトロフスキの（言葉）が好き、ソフィアのより好き。」
 (BV3_131003_001/15.42)

Mène ni mi харèсўъ. <...> Дъ ни знàш гòспод'.
Mène ni mi harèswă. <...> Dă ni znăš gòspod'.
 I-ACC NEG I-DAT.CL like-PRS.3.SG SMP NEG know-PRS.2.SG Lord
 「私は好きじゃない。<...>主を知らないだなんてことは。」
 (BV3_131003_001/31.44)

Mèsu, mène mi харèсўъ мèsу.
 Mèsu, mène mi harèswă мèsу.
 meat I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG meat
 「肉は、私は肉は好きだ。」 (RUS_130927_002/39.11)

... mène ni mi харèсауо изик'о нь Сòфийъ.
 ... mène ni mi harèsawo izik'o nă Sòfijă.
 I-ACC NEG I-DAT.CL like-PRS.3.SG language-M.SG+DEF.M.SG of Sofia
 「私はソフィアという言葉が好きではない。」 (BV3_131003_001/1.46.17)

Mène ni mi харèсўъ.
Mène ni mi harèswă.
 I-ACC NEG I-DAT.CL like-PRS.3.SG
 「私は好きではない。」 (BV3_131003_001/2.04.14)

Mène pò mi харèсўъ.
Mène pò mi harèswă.
 I-ACC COMP- I-DAT.CL like-PRS.3.SG
 「私はもっと好き。」 (BV3_131003_001/2.10.28)

Mène mi и дрàгу зъ нèгу. <...> Рèжи
Mène mi i dràgu ză nègu. <...> Rèži
 I-ACC I-ACC.CL be-PRS.3.SG pleased about it-N.SG.ACC cut-PRS.3.SG
 нòшчита. Рèжи. Mèn, mi e
 nòščita. Rèži. Mèn, mi e
 knife-PL+DEF.PL cut-PRS.3.SG I-ACC I-ACC.CL be-PRS.3.SG
 дрàгу зъ нèгу, чи рèжи.
 dràgu ză nègu, či rèži.
 pleased about it-N.SG.ACC because cut-PRS.3.SG
 「私はそれ(包丁)についてうれしく思っている。包丁がよく切れる。切れるの。
 私は(包丁が)よく切れるからうれしい。」 (BV3_131003_001/2.18.20)

Mène mi харèсўо патладжèнте сьс сїрине.
Mène mi harèsawo patladžènte săs sirine.
 I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG tomato-PL+DEF.PL with cheese
 「私はチーズとトマトが好きだ。」 (BV3_131003_001/2.33.37)

Mène mi харèsűь и мумїчиту.
Mène mi harèswă i mumičitu.
I-ACC I-DAT.CL like-PRS.3.SG also girl-N.SG.+DEF.N.SG
「私は女の子も好きだ。」 (RUS_131004_001/5.25)

Mїe mi e dràgu...
Mїe mi e dràgu...
I-DAT I-DAT.CL be-PRS.3.SG pleased
「私はうれしい。」 (BA1_131004_001/1.56.08)

● その他の名詞句 (全 4 例)

➤ нь/нă を伴う (2 例)

И нь мунчѐту, àс му
 I nă munčëtu, às mu
 also DM boy-N.SG+DEF.N.SG I-NOM it-N.SG.DAT.CL
 kàzŭým cè б̀̀л̀̀г̀̀р̀̀ц̀̀ки.
 kàzwăm sè bălgărcki.
 tell-PRS.1.SG always Bulgarian

「その (息) 子には、私はいつもブルガリア語で話す。」 (TF1_150217_003/13.05)

И нь непоўàта ми ї кàзъŭ.
 I nă nepowàta mi ì kàzăw.
 also DM granddaughter-F.SG+DEF.F.SG I-DAT.CL she-DAT.CL tell-AOR.1.SG

「(わたしは) 私の孫娘にも言った。」 (BV3_131005_002/48.29)

➤ нь/нă を伴わない (2 例)

Т̀̀у̀̀к̀̀ь с'èлуту т̀̀ў̀̀ї нàшту
 T̀̀ukă s'èlutu t̀̀uj nàštu
 here village-N.SG+DEF.N.SG this-N.SG our-N.SG+DEF.N.SG
 т̀̀ў̀̀ї му д̀̀ў̀̀м̀̀ьт.
 t̀̀aj mu d̀̀umăt.
 so it-N.SG.DAT.CL say-PRS.3.PL

「この私たちの村はそういう名前なんですよ。」 (TF1_150217_003/16.26)

Нàшт'е румъ̀̀нци # им дàде
Nàšt'e rumằ̀nci # im dàde
 our-PL+DEF.PL Romanian-PL+DEF.PL they-DAT.CL give-AOR.3.SG
 г̀̀òспуд'ь и з'им'ь...
 gòspud'ă i z'im'ă...
 Lord-M.SG+DEF.M.SG also land

「我らがルーマニア人たちに、主は土地をお与えになった。」

(DD1_120504_003/1.21.18)

動詞後

直接補語

(全 157 例)

● 人称代名詞 (全 86 例)

➤ пъ/рă を伴う (86 例)

Àc <...> тѣ пѣтъф пѣ тѣбе.

Às <...> tă pităf pă tēbe.

I-NOM you-ACC.CL ask-AOR.1.SG AM you-ACC

「私はあなたに尋ねた。」(BA2_150212_002/1.34.49)

Нepòту гу нѣмèри ши дòди

Nepòtu gu nămèri ši dòdi

grandson it-ACC.CL find-AOR.3.SG and come-AOR.3.SG

 ши мѣ зè пѣ мèне.

 ši mă zè pă mène.

 and I-ACC.CL take-AOR.3.SG AM I-ACC

「孫がそれ (犬) を見つけた。そしてやって来て、私を連れ出した。」

(DT2_150219_001/21.38)

Дѣ гу зѣним пѣ нèгу, чи и фрумòс.

Dă gu zănim pă nègu, čī i frumòs.

SMP it-ACC.CL take-PRS.1.PL AM it-ACC because be-PRS.3.SG beautiful

「それ (犬) を連れて行きましょう、とてもすてきだから。」

(DT2_150219_001/21.40)

Нѣ ги знàм пѣ т'àф тѣй ùбе.

Nì gi znàm pă t'áf tăj ùbe.

NEG they-ACC.CL know-PRS.1.SG AM they-ACC so good

「彼らのことをそんなによく知らない。」(TMita2_150217_001/49.28)

Чи гѹ зѣўми съз нàс и пѣ нѣгѹ.
 Či gu zèwmi sǎz nàs i pǎ nègu.
 and he-ACC.CL take-AOR.1.PL with we-ACC also AM he-ACC
 「私たちと一緒に彼も連れ出した。」 (TMita2_150217_001/1.06.00)

Тòлкос гòдин съз кòгъ дѣ прикàзўѣм.
 Tòlkos gòdin sǎz kògǎ dǎ prikazwǎm.
 so_many year-PL+DEF.PL with who-OBL SMP talk-PRS.1.SG
 Нѣмѣм съз кòгъ.
 Nëmǎm sǎz kògǎ.
 not_have-PRS.1.SG with who-OBL

Сегàнъ мàй тѣ нѣмѣриф пѣ тѣбе.
 Segànǎ māj tǎ nǎmèrif pǎ tèbe.
 now more you-ACC.CL find-AOR.1.SG AM you-ACC
 「そんなにも長い間、だれと話せばいいのか。だれも（話す相手が）いない。今
 となって、（ブルガリア語を話す）お前をさらに見つけた。」
 (TMita2_150217_001/15.45)

Тугис ца̀ль нòш съд'ѣ дѣ ги
 Tugis cǎlǎ nòš sǎd'ǎ dǎ gi
 then whole-F.SG. night-F.SG stay-PRS.3.SG SMP they-ACC.CL
 вард'ѣ пѣ т'àф.
 vard'ǎ pǎ t'ǎf.
 protect-PRS.1.SG AM they-ACC

「そうしたら、一晩中彼らを守るために起きていることになるでしょう。」
 (TMita2_150217_001/1.12.28)

Ѐштеш дѣ тѣ зькòле пѣ тѣбе?
 Īšteš dǎ tǎ zǎkòle pǎ tèbe?
 want-PRS.2.SG SMP you-ACC.CL jugulate-PRS.1.SG AM you-ACC
 「お前も首を切られたいのか。」 (TMita2_150217_001/1.16.35)

Унѝз др̀угѝтъ пуб'̀агнѝ,
 Unǎz dr̀ugǎtǎ pub'̀agnǎ,
 that-F.SG another-F.SG+DEF.F.SG break_into_a_run-AOR.3.SG

дѝ ѝѝ др̀ше и пѝ нѝѝ...
 dǎ jǎ dr̀še i pǎ nǎjǎ...
 SMP she-ACC.CL hold-PRS.3.SG also AM she-ACC

「もう一人の女性（姉）は、彼女（妹）のことを取り返すために走りだした。」

(TMita2_150217_001/1.16.33)

Зѝ к̀ò мѝ з̀нес̀ет тѝй пѝ м̀ене т̀укѝ.
 Zǎ k̀ò mǎ zǎnes̀et tǐj pǎ m̀ene t̀ukǎ.
 why I-ACC.CL carry-PRS.3.PL they-NOM AM I-ACC here

「どうして彼らは私のことをここに運んでいるのか。」

(TMita2_150217_001/1.53.46)

Туг̀ис мѝ з̀н̀есе б̀рат ми пѝ м̀ене у д̀ум̀а.
 Tug̀is mǎ zǎǹese br̀at mi pǎ m̀ene u d̀um̀a.
 then I-ACC.CL carry-AOR.3.SG brother I-DAT.CL AM I-ACC to home

「それで、私の兄が私のことを家まで運んでくれた。」

(TMita2_150217_001/2.04.57)

И мѝ п̀итѝ пѝ м̀ене к̀ь „утк̀д̀е си“.
 I mǎ p̀itǎ pǎ m̀ene kǎ „utkǎd̀e si“.
 and I-ACC.CL ask-AOR.3.SG AM I-ACC that from_where be-PRS.2.SG

「それで、『(あなたは) どこから来た』と私に尋ねました。」

(DT1_150217_003/15.26)

Мѝ з̀е и пѝ м̀ене нѝ Букур̀еш.
 Mǎ z̀e i pǎ m̀ene nǎ Bukur̀eš.
 I-ACC.CL take-AOR.3.SG also AM I-ACC to Bucharest

「私もブカレストへ連れて行かれた。」 (TO2_150211_002/9.32)

Чи утгъждь мойту мумчи
 Či uttāzďā mōjtu mumči
 and go-PRS.3.SG my-N.SG+DEF.N.SG boy-N.SG
 и мъ устàўъ пъ мène тук.
 i mă ustāwă pă mène tük.
 and I-ACC.CL leave-PRS.3.SG AM I-ACC here

「それで、私の（息）子が行って、私をここへおいていく。」

(TO2_150211_002/1.02.25)

Ни мъ штèш пъ мène.
 Ni mă štěš pă mène.
 NEG I-ACC.CL want-PRS.2.SG AM I-ACC

「(あなたは) 私のことを望まない。」 (TO2_150211_002/1.28.31)

Дъ тъ нъучи и пъ тебе. Сигур.
 Dă tă năučì i pă tebe. Sigur.
 SMP you-ACC.CL teach-PRS.3.SG also AM you-ACC of_course

「あなた自身にも (ブルガリア語を) 教えなさい (i.e.あなたも学びなさい)。もちろん。」 (TO2_150211_002/1.58.08)

Нъучи йъ и пъ нейъ.
 Năučì jă i pă nejă.
 teach-IMP.2.SG she-ACC.CL also AM she-ACC.CL

「彼女にも教えなさい。」 (TO2_150211_002/1.58.10)

Àс ше гу вѣкъм и пъ нèгу.
 Às še gu vikām i pă nègu.
 I-NOM FUT he-ACC.CL call-PRS.1.SG also AM he-ACC

「私は彼も呼びます。」 (TM1_120509_003/19.27)

Ше му кàжеш нь Флорìн... <...> дъ мъ
 Še mu kàžeš nă Florin... <...> dă mă
 FUT he-DAT.CL tell-PRS.2.SG to Florin SMP I-ACC.CL
 пйтъ пъ мène.
 pità pă mène.
 ask-PRS.3.SG AM I-ACC

「(あなたが) フロリンに言いなさい、私に (彼が) 尋ねるように。」
 (TM1_120509_003/31.30)

... шъ гу ньпраи пъ нèгу...
 ... šă gu năprài pă nègu...
 FUT it-N.SG.ACC make-PRS.3.SG AM it-N.SG.ACC

「(彼は) それを作るだろう。」 (TM1_120509_003/1.49.55)

Пйтъй гу и пъ нèгу.
 Pităj gu i pă nègu.
 ask-IMP.2.SG he-ACC.CL also AM he-ACC

「彼にも尋ねなさい。」 (TM1_120509_003/2.05.47)

Сène ни дунèсуѳ и пъ нàс
 Sène ni dunèsuw i pă nàs
 later we-ACC.CL bring-AOR.3.PL also AM we-ACC
 нь оперèтъ у Букурèш.
 nă operetă u Bukurêš.
 to operetta-F.SG+DEF.F.SG in Bucharest

「あとで、私たちはブカレストのオペレッタに連れて行かれた。」
 (BV1_120509_003/8.59)

Не ги йштъ пъ т'àф.
 Ne gi ištă pă t'âf.
 NEG they-ACC.CL want-PRS.1.SG AM they-ACC

「(わたしは) 彼らを望まない。」 (BV1_120509_003/13.10)

Tòj, tòj йь йштеў пъ нейь.
 Tòj, tòj jà ištew pǎ nèjà.
 he-NOM he-NOM she-ACC.CL want-EVID-M.SG AM she-ACC
 「彼は彼女を望んでいたようなの。」 (BV1_120509_003/22.52)

... чи гу сòчиў пъ негу.
 ... ċi gu sòciw pǎ nègu.
 and it-N.SG.ACC point-AOR.1.SG AM it-N.SG.ACC
 「(わたしは) それを指し示した。」 (BV1_120509_003/1.11.07)

... п̀к дь тр̀гнеш дь ги н̀п̀у̀стиш
 ... p̀k dǎ trǎgneš dǎ gi nǎp̀stiš
 but SMP start-PRS.2.SG SMP they-ACC.CL leave-PRS.2.SG
пъ т'̀ф, сьмйчки т̀м.
pǎ t'̀f, sǎmički t̀m.
 AM they-ACC alone-PL there
 「(あなたは) 出かけて行って、彼ら (両親) をそこに一人ぼっちにさせる。」
 (BV1_120509_003/1.38.17)

Àмь дь д̀деш дь ни слуг̀ў̀шьш и...
 Àmǎ dǎ d̀deš dǎ ni slug̀wǎš i...
 but SMP come-PRS.2.SG SMP we-ACC.CL serve-PRS.2.SG also
 и пъ н̀с, н̀ т̀рци.
 i pǎ ǹs, nǎ t̀rci.
 also AM we-ACC DM Turkish-PL
 「我々トルコ人にも仕えに来るがよい。」 (DD1_120504_003/26.15)

Мь пук̀аниўо с̀аму пъ м̀ене.
 Mǎ puk̀aniwo s̀amu pǎ m̀ene.
 I-ACC.CL invite-AOR.3.PL only AM I-ACC
 「招待されたのは私だけだ。」 (DD1_120504_003/37.30)

... и мъ пузнàваўу тий пъ мèn.
 ... i mǎ puznàvawu tij pǎ mèn.
 and I-ACC.CL recognize-AOR.3.PL you AM I-ACC
 「私のことを彼らは認識した。」 (DD1_120504_003/2.04.34)

Зьгуй кугату ходиўми у Бьлгарийь там,
 Zàtùj kugàtu hòdiwmi u Bǎlgàrijǎ tàm,
 so when go-AOR.1.PL to Bulgaria there
мъ пукàниў пъ мène.
mǎ pukàniw pǎ mènè.
 I-ACC.CL invite-AOR.3.PL AM I-ACC
 「だから、(わたしたちが) ブルガリアへ行ったとき、私が招待された。」
 (DD1_120504_003/2.46.09)

Мл'òгу ги пумòгнѣф пъ т'àф.
 Ml'ògu gì pumògnǎf pǎ t'áf.
 much he-ACC.CL help-AOR.1.SG AM they-ACC
 「(私は) 彼らをたくさん助けた。」 (DD1_120504_003/3.05.31)

Идин чув'èк ут тук нèгуў тейку дунèсь
 Idìn čuv'èk ut tùk nèguw tèjku dunèsǎ
 IDF.M.SG person-M.SG from here his-M.SG+DEF.M.SG father-M.SG bring-AOR.3.SG
гу и пъ нèгу дь учй.
gu i pǎ nègu dǎ učì.
 he-ACC.CL also AM he-ACC SMP study-PRS.3.SG
 「このある人の父は、彼のことを勉強のためにここに連れてきた。」
 (DD1_120504_003/3.26.55)

Тй мъ пйтѣш пъ мène зь н'èшту.
 Tì mǎ pitàš pǎ mènè zǎ n'èštu.
 you-NOM I-ACC.CL ask-PRS.2.SG AM I-ACC about something
 「あなたは私に何かについて尋ねる。」 (DD1_120504_003/3.41.00)

Kòy тѣ дунѣсь пѣ тебе тѹк?
 Kòj tǎ duněsǎ pǎ tebe tük?
 who-NOM you-ACC.CL bring-AOR.3.SG AM you-ACC here
 「だれがおまえをここに連れてきたのか。」 (BP_120503_003/14.49)

Kòy тѣ дунѣсь пѣ тебе?
 Kòj tǎ duněsǎ pǎ tebe
 who-NOM you-ACC.CL bring-AOR.3.SG AM you-ACC
 「だれがおまえを連れてきたのか。」 (BP_120503_003/14.54)

Ше гѹ пупѣташ пѣ нѣгѹ, чи тòй знàй.
 Še gu pupitaš pǎ nēgu, čī tòj znāj.
 FUT he-ACC.CL ask-PRS.2.SG AM he-ACC because he-NOM know-PRS.3.SG
 「彼に聞きなさい、彼は知っているから。」 (TM2_121029_001/1.20.15)

Ше тѣ чàкъм ÀC # пѣ тебе дѣ дòдиш тàм.
 Še tǎ čakǎm ÀS # pǎ tebe dǎ dòdiš tám.
 FUT you-ACC.CL wait-PRS.1.SG I-NOM AM you-ACC SMP come-PRS.2.SG there
 「私があなを待っていよう、あなたがそこへ来るのを。」
 (DG2_121029_001/1.26.30)

Гѣт мѣ чѹўѣ пѣ мѣн...
 Gít mǎ čùwǎ pǎ mèn...
 when I-ACC.CL hear-PRS.3.SG AM I-ACC
 「わたし（の話しているの）を聞いたとき、」 (TO1_121108_001/8.49)

Mòjtu мумѣче гѹ зè пѣ нѣгѹ.
 Mòjtu mumiče gu zè pǎ nēgu.
 my-N.SG+DEF.N.SG girl-N.SG+DEF.N.SG he-ACC.CL take-AOR.3.SG AM he-ACC
 「私の娘は、彼を（結婚相手として）とった。」 (TO1_121108_001/1.02.10)

Дъ йъ вѣкъм пъ нѣъ?
 Dǎ jǎ vĭkǎm pǎ nĕǎ?
 SMP she-ACC.CL call-PRS.1.SG AM she-ACC
 「彼女も呼びますか。」 (TO1_121108_001/1.41.10)

Тъ ажътъ тѡй пъ тѣбе.
 Tǎ aǒutǎ tǒj pǎ tĕbe.
 you-ACC.CL help-PRS.3.SG he-NOM AM you-ACC
 「彼はあなたを助けてくれる。」 (TO1_121108_001/1.47.39)

Тажътъ пъ тѣбе дъ мѡй
 Tajutǎ pǎ tĕbe dǎ mǎj
 you-ACC.CL+help-PRS.3.SG AM you-ACC SMP more
 дѡйди нъ мѣне.
 dǒjdi nǎ mĕne.
 come-PRS.2.SG to I-ACC

「(彼は) あなたがまた私のところ来ることができるよう助けてくれるでしょう。」 (TO1_121108_001/1.47.40)

Когѡ гѡ ѡмпуз’аскъ пъ нѣгѡ?
 Kogġ gġ ǎmpuz’askǎ pǎ nĕgġ?
 when he-ACC.CL take_a_photo-AOR.2.SG AM he-ACC
 「(あなたは) いつ彼を撮影したのか。」 (BV2_121031_001/5.02)

Тѡй мъ пѡтъѡъ пъ мѣне.
 Tġj mǎ pitǎwǎ pǎ mĕne.
 they-NOM I-ACC.CL ask-AOR.3.PL AM I-ACC
 「彼らは私に尋ねた。」 (BV2_121031_001/1.03.32)

Нү май гу испийү пь негу.
 Nù màj gu ispiw pǎ nègu.
 NEG yet it-N.SG.ACC.CL drink_up-AOR.1.SG AM it-N.SG.ACC
 「まだそれを飲み終えていなかった。」 (BV2_121031_001/1.13.55)

Пь... ть вйждъм пь тебе.
 Pǎ... tǎ viždǎm pǎ тебе.
 AM you-ACC.CL see-PRS.1.SG AM you-ACC
 「あなたのことは見える。」 (BV2_121031_001/1.20.32)

Ше ть упикъ пь тебе.
 Še tǎ upikǎ pǎ тебе.
 FUT you-ACC.CL bake-PRS.1.SG AM you-ACC
 「あなた（魚）を焼いてやる。」 (BV2_121031_001/1.40.11)

... дь гу ньпрайтъ поп и пь негу.
 ... dǎ gu nǎprǎjtǎ pòp i pǎ nègu.
 SMP he-ACC.CL make-PRS.3.PL priest-M.SG also AM he-ACC
 「彼もお坊さんにするために...」 (BV2_121031_001/2.14.30)

Ть бийми пь тебе сигà...
 Tǎ bijmi pǎ тебе sigà...
 you-ACC.CL beat-PRS.1.PL AM you-ACC now
 「(わたしたちは) 今あなたをたたきます。」 (BV2_121031_001/2.23.43)

Ше ть бийми пь тебе нь м'асту нь т'áf.
 Še tǎ bijmi pǎ тебе nǎ m'astu nǎ t'áf.
 FUT you-ACC.CL beat-PRS.1.PL AM you-ACC on place of they-ACC.CL
 「(わたしたちは) 彼らの代わりにあなたをたたきます。」
 (BV2_121031_001/2.23.45)

Тий как мъ наскъ пъ мène.
 Tij kàk mǎ nàskǎ pǎ mène.
 they-NOM how I-ACC.CL give_a_birth-AOR.3.PL AM I-ACC
 「彼ら（両親）がどのように私を生んでくれたか。」(BV2_121031_001/2.51.22)

Ни знай как дъ тъ
 Ni znàj kàg dǎ tǎ
 NEG know-PRS.3.SG how SMP you-ACC.CL
 пуз'аскъ пъ тебе.
 puz'askǎ pǎ tebe.
 take_a_photo-PRS.3.SG AM you-ACC
 「(彼女は)あなたを(カメラで)撮る方法を知らない。」(BV2_121031_001/3.19.27)

... имъ там жене, шъ ги
 ... imǎ tam žene, šǎ gi
 have-PRS.3.SG there woman-PL FUT they-ACC.CL
 вйкъми пъ т'аф...
 vikāmi pǎ t'áf...
 call-PRS.1.PL AM they-ACC.CL
 「そこに女性たちがいるから、彼らを（わたしたちが）呼びましょう。」
 (BV2_121031_001/2.29)

Òpътъ мъ утлъчиўо пъ мèn # цар'.
 Òrǎtǎ mǎ utlǎčiwó pǎ mèn # cǎr'.
 person-PL+DEF.PL I-ACC.CL appoint-AOR.3.PL AM I-ACC king
 「人々は私をリーダーに選んだ。」(DD2_121102_001/21.07)

Àс ги нъучъф пъ т'ап.
 Às gi nǎučǎf pǎ t'ap.
 I-NOM they-ACC.CL master-AOR.1.SG AM they-ACC
 「私はそれらをマスターした。」(DD2_121102_001/22.20)

... и о̀рътъ мъ чѝтаѳо пъ мѣн.
 ... i òrătă mă čitawo pă mèn.
 and person-PL+DEF.PL I-ACC.CL respect-IMPF.3.PL AM I-ACC
 「人々は私のことを尊敬していた。」 (DD2_121102_001/25.12)

Уттăдем дь гу вид'ъ # пъ нѣгу.
 Uttadəem dă gu vid'ă # pă nègu.
 go-PRS.1.SG SMP he-ACC.CL see-PRS.1.SG AM he-ACC
 「(わたしは) 彼に会いに行きます。」 (DD2_121102_001/29.43)

Руснѣците зѣѳо ги пъ т'ăф.
 Rusnăcite zèwo gi pă t'ăf.
 Russian-PL+DEF.PL take-AOR.3.PL they-ACC.CL AM they-ACC
 「ロシア人たちはそれらをとらえた。」 (DD2_121102_001/1.14.20)

Ут Румѣнийъ и мъ пукăниѳо и пъ мѣн.
 Ut Rumănijă i mă pukăniwo i pă mèn.
 from Romania also I-ACC.CL invite-AOR.3.PL also AM I-ACC
 「ルーマニアからは、私も招待された。」 (DD2_121102_001/3.20.35)

Мъ зѣѳо пъ мѣне тăм крѣй т'ăф.
Мă zèwo pă мѣне tàm krăj t'ăf.
 I-ACC.CL take-AOR.3.PL AM I-ACC there beside they-ACC
 「私は彼らのもとへ連れて行かれた。」 (DM_130927_002/1.14.17)

Йъ вѣкъм пъ нѣйъ, т'ă.
Јă vikăm pă nèjă, t'ă.
 she-ACC.CL call-PRS.1.SG AM she-ACC she-NOM
 「(わたしは) 彼女を呼ぶ。」 (DM_130927_002/1.39.12)

Гу зъмъми пь негу.
 Gu zǎmămi pǎ nègu.
 he-ACC.CL take-PRS.1.PL AM he-ACC

「(わたしたちは) 彼を連れて行く。」 (DM_130927_002/1.45.45)

Зъмъй гу пь негу.
 Zǎmăj gu pǎ nègu.
 take-IMP.2.SG it-N.SG.ACC.CL AM it-N.SG.ACC

「それを取りなさい。」 (DM_130927_002/2.05.16)

Въсиль рёкъ дъ йъ вйкъм и пь нёйъ
 Vāsīlā rēkā dǎ jǎ vikām i pǎ nejǎ.
 Vasila say-AOR.3.SG SMP she-ACC.CL call-PRS.1.SG also AM she-ACC

Гйд дòдът òрътъ тйй тук.
 Gid dòdāt òrǎtǎ tǐj tük.
 when come-PRS.3.PL person-PL+DEF.PL they-NOM here

「ヴァシーラが、あの人々がここに来たら、彼女を (わたしが) 呼ぶように、と言った。」 (BV3_131003_001/26.35)

Тй ни (окрут'аскъш?) пь нас сёте.
 Тi ni (okrut'askāš?) pǎ nās sēte.
 you-NOM we-ACC.CL (???) AM we-ACC all-PL+DEF.PL

「あなたは私たちみんなを ??? する。」 (BV3_131003_001/32.12)

Тòй йъ знàй пь нёйъ?
 Тòj jǎ znāj pǎ nejǎ?
 he-NOM she-ACC.CL AM know-PRS.3.SG AM she-ACC

Пь жинъта нёйъ?
 Pǎ žinǎta nejǎ?
 AM woman-F.SG+DEF.F.SG she-ACC

「彼は彼女のことを知っているのか。あの女性を。」 (BV3_131003_001/51.19)

Тъ видеўо пъ тебе кучитъ?
Tă videwo pă tebe kùčită?
 you-ACC.CL see-AOR.3.PL AM you-ACC dog-PL+DEF.PL
 「お前のことを犬たちが見たか。」 (BV3_131003_001/2.30.01)

Дъкù ше дòдът унès, дъ мъ вйкъ
 Dăkù še dòdăt unès, dă mă vikă
 if FUT come-PRS.3.PL that-PL SMP I-ACC.CL call-PRS.3.SG
 и пъ мène.
 i pă mène.
 also AM I-ACC

「もし彼らが来るのなら、(彼が) 私を呼ぶように。」 (BV3_131003_001/2.42.00)

Дъ... мъ вйкъ и пъ мène <...> тъй ше ричè.
 Dă... mă vikă i pă mène <...> tăj še ričè.
 SMP I-ACC.CL call-PRS.3.SG also AM I-ACC so FUT say-PRS.2.SG

「(彼が) 私を呼ぶように、そういう風に言いなさい。」 (BV3_131003_001/2.42.03)

Тъй ше мъ научй и пъ мène!
 Tăj še mă nauči i pă mène!
 so FUT I-ACC.CL teach-PRS.2.SG also AM I-ACC

「そうやって私にも (日本語を) 教えてくれる。」 (BV3_131003_001/3.07.30)

Ги напұсти пъ т'аф сьмйчки,
Gi napùsti pă t'af sămički,
 they-ACC.CL leave-AOR.2.SG AM they-ACC alone-PL
 тй дòди тукъ.
 ti dòdi tükă.
 you-NOM come-AOR.2.SG here

「彼らを一人にして、あなたはここへ来た。」 (BV3_131003_001/3.25.22)

Гу намèр'ъш пѣ нèгу.
 Gu namèr'ăš pǎ nègu.
 he-ACC.CL find-PRS.2.SG AM he-ACC
 「(あなたは) 彼を見つける。」 (BV3_131003_001/3.29.41)

Ше тѣ чакъ пѣ тèбе и нѣ Калипèтрово.
 Še tǎ čakǎ pǎ tèbe i nǎ Kalipètrovo.
 FUT you-ACC.CL wait_for-PRS.3.SG AM you-ACC also in Kalipetrovo
 「(彼は) あなたをカリペトロヴォでも待っている。」 (RUS_131004_001/10.20)

Стòй тук. Гу вѣкъм и пѣ нèгу.
 Stòj tük. Gu vikǎm i pǎ nègu.
 stay-IMP.2.SG here he-ACC.CL call-PRS.1.SG also AM he-ACC
 「ここにいなさい。彼のことと呼ぶから。」 (BA1_131004_001/20.55)

Дѣ гу вѣкъш пѣ нèгу дѣ пѣем
 Dǎ gu vikǎš pǎ nègu dǎ pǐjem
 SMP he-ACC.CL call-PRS.2.SG AM he-ACC SMP drink-PRS.1.PL
 кѣфè с мèне.
 kǎfè s mène.
 coffee with I-ACC

「わたしとコーヒーを飲むために彼を呼んでくれますか。」
 (BA1_131004_001/1.14.40)

Приказъй бѣлгарски, зътуй тѣ вѣкъф
 Prikàzāj bălgarski, zătuj tǎ vikǎf
 talk-IMP.2.SG Bulgarian so you-ACC.CL call-AOR.1.SG
 пѣ тèбе тукъ.
 pǎ tèbe tükǎ.
 AM you-ACC here

「ブルガリア語で話さない、そのためにあなたをここへ呼んだのだから。」
 (BA1_131004_001/1.20.43)

À, не ги вид'ъ пъ т'аф.
 À, ne gi vid'ă pă t'ăf.
 ah NEG they-ACC.CL see-AOR.2.SG AM they-ACC
 「ああ、彼らを見なかったのね。」 (BA1_131004_001/1.48.49)

Ймаши инà <...> дòкторицьтъ, койъ мь
 Ìmaši inà <...> dòktořicătă, kojă mă
 have-IMPF.3.SG IDF.F.SG female_doctor-F.SG+DEF.F.SG REL I-ACC.CL
 тръп'аскъ пъ мène.
 trăp'askă pă mène.
 (???) AM I-ACC
 「わたしを???した女医さんがいた。」 (BA1_131004_001/1.59.57)

... пъ фс'акъде мь дунèсьў пъ мène.
 ... pă fs'akăde mă dunèsăw pă mène.
 to everywhere I-ACC.CL bring-AOR.3.PL AM I-ACC
 「(彼らは) わたしをあらゆるところに連れて行ってくれた。」
 (GG_131005_002/12.49)

Венъшки ни мь пумòгнь пъ мène.
 Venăški ni mă pumògnă pă mène.
 once NEG I-ACC.CL help-AOR.3.SG AM I-ACC
 「一度も私を助けてくれなかった。」 (GG_131005_002/15.32)

Àс ше утивъм сиганъ дъ гувòри съз нейъ
 Às še utivăm sigănă dă guvòri săz nejă
 I-NOM FUT go-PRS.1.SG now SMP speak-PRS.1.SG with she-ACC
 дъ йа зъмъм и пъ нейъ үтре, да?
 dă ja zămăm i pă nejă ùtre, da?
 SMP she-ACC.CL take-PRS.1.SG also AM she-ACC tomorrow yes
 「私は今行って、彼女と話す。明日彼女を連れて来るためにね。」
 (RUS_131005_002/20.26)

Ûtre ше йъ зъмъм и пъ нейъ.
 Ûtre še jă zămăm i pă nējă.
 tomorrow FUT she-ACC.CL take-PRS.1.SG also AM she-ACC
 「明日、彼女も連れて来よう。」 (RUS_131005_002/25.50)

Ше гу вѣкъм и пъ негу.
 Še gu vĕkăm i pă nĕgu.
 FUT he-ACC.CL call-PRS.1.SG also AM he-ACC
 「(わたしは) 彼も呼ぶつもりだ。」 (RUS_131005_002/47.17)

Àс ше ги зъмъм пъ т'аф нь чѣтер.
 Às še gi zămăm pă t'af nă čĕter.
 I-NOM FUT they-ACC.CL take-PRS.1.SG AM they-ACC at four
 「私は彼らを4時に連れて来るつもりだ。」 (RUS_131005_002/53.58)

Зъннй мъ тй пъ мене.
 Zănni mă tĭ pă mĕne.
 take-IMP I-ACC.CL you-NOM AM I-ACC
 「あなた、私を連れて行きなさい。」 (BV3_131006_001/2.31.55)

Ги пуканеѹо пъ т'ап българите...
 Gi pukănewo pă t'ap bălgarite...
 they-ACC.CL invite-AOR.3.PL AM they-ACC Bulgarian-PL+DEF.PL
 「ブルガリア人たちは彼らを招待した。」 (DD2_121102_001/3.20.35)

● その他の名詞句 (全 71 例)

➤ пъ/рă を伴う (66 例)

Църкъ # тѝ йѣ пузнàвъш пѣ Църкъ?

Cirkă # tì ǰă puznàvâš pă Cirkă?

Tsirka you-NOM she-ACC.CL know-PRS.2.SG AM Tsirka

「ツィルカは、お前はツィルカは知っているか。」 (AG2_150212_002/1.37.36)

Зънѝ гѝ тѝ пѣ... пѣ тѣс.

Zăni gì tì pă... pă tès.

take-IMP.2.SG they-ACC.CL you-NOM AM AM this-PL

「おまえはそれらを取りなさい。」 (RUS_130211_001/36.20)

Дàку йѣ зѣмниш съз свàдбѣ

Dăku ǰă zămniš săz svàdbă

if she-ACC.CL take-PRS.2.SG with wedding_ceremony

пѣ мумѝчиту...

pă mumičitu...

AM girl-N.SG+DEF.N.SG

「もしその女の子と結婚するのなら...」 (TF2_150219_001/18.43)

И ѹбе, чи гѝ ѝмѣми и

I ùbe, čì gì imămi i

be-PRS.3.SG good that they-ACC.CL have-PRS.1.PL also

пѣ пѣрѝте тѣс, пѣнсийтъ тѣс.

pă părite tès, pënsijătă tăs.

AM money-PL+DEF.PL this-PL pension-F.SG+DEF.F.SG this-F.SG

「(わたしたちは) このお金、年金もあってよかった。」 (TMita2_150217_001/32.40)

Гу знàм пѣ дѣртиу.

Gu znàm pă durtiu.

he know-PRS.1.SG AM old-M.SG+DEF.M.SG

「(わたしは) その老人を知っている。」 (TMita2_150217_001/40.59)

Дъ и ги бъркъ пъ сѣте.
 Dă i gi bărkă pă sète.
 SMP and they-ACC.CL mess_up-AOR.3.SG AM all-PL+DEF.PL
 「しかも、全員を混乱させた。」 (TMita2_150217_001/1.01.32)

Дъ йъ вѣкъм пъ Дорѣнь?
 Dă jă vikăm pă Dorină?
 SMP she-ACC.CL call-PRS.1.SG AM Dorina
 「ドリナを呼びましょうか。」 (TO2_150211_002/12.59)

Kātu rĕkă mōjtu mumiči, či gu
 Kātu rĕkā mòjtu mumiči, či gu
 when say-AOR.3.SG my-N.SG+DEF.N.SG girl-N.SG that he-ACC.CL
 зъни пъ чил'ăку...
 zăni pă čil'ăku...
 take-PRS.3.SG AM person-M.SG+DEF.M.SG
 「私の娘が彼を（結婚相手として）とりたいたったとき...」
 (TO2_150211_002/1.28.06)

... чи гу убл'ăкъ пъ д'ăду...
 ... či gu ubl'ăkā pă d'ădu...
 and he-ACC.CL dress-AOR.1.SG AM grandfather
 「おじいさんに服を着せて...」 (TO2_150211_002/1.39.21)

... чи ги събрăў пъ сѣте
 ... či gi săbrăw pă sète
 and they-ACC.CL gather-AOR.1.SG AM all-PL+DEF.PL
 нъ иннұ м'ăсту...
 nă innù m'ăstu...
 to ID.F.N.SG place-N.SG
 「それから、全員を一つの場所に集めて...」 (TM1_120509_003/14.56)

... kàktu и гү йуб'àскъ
 ... kàktu i гу jub'askă
 as_well_as also it-N.SG.ACC.CL love-PRS.3.SG
 и пѣ дѣтту.
 i pǎ dèttu.
 also AM child-N.SG+DEF.N.SG

「(彼は) その子のことも愛しているので...」 (TM1_120509_003/25.41)

Kàt гү купй пѣ тòз гүл'ам тѣй...
 Kàt гу kupi pǎ tòz gul'am táj...
 when it-M.SG.ACC.CL buy-AOR.3.SG AM this-M.SG big-M.SG so

「この大きいのを (彼が) 買ったとき...」 (TM1_120509_003/1.13.26)

Гйту гү рудй майкѣтъ
 Gitu гу rudi mǎjkătǎ
 when it-N.SG.ACC.CL give_a_birth-AOR.3.SG mother-F.SG+DEF.F.SG
 пѣ дѣтту...
 pǎ dèttu...
 AM child-N.SG+DEF.N.SG

「母が子供を産んだとき...」 (TM1_120509_003/1.31.28)

Йѣ зѣ пѣ дѣштерѣ ми.
 Jǎ zѣ pǎ dǎšterè mī.
 she-ACC.CL take-AOR.3.SG AM daughter I-DAT.CL

「(彼は) 私の娘を娶った。」 (TM1_120509_003/1.54.06)

Пѣк тòй йѣ йштеш пѣ Дòбрѣ.
 Pǎk tøj jǎ išteš pǎ Dòbrǎ.
 but he-NOM she-ACC.CL want-IMPF.3.SG AM Dobrǎ

「でも彼はドブラを欲していた。」 (BV1_120509_002/19.28)

Руннйнте, ги пйшеў пъ сèте.
 Runninte, gi pišew pǎ sète.
 parents-PL they-ACC.CL write-IMPF.1.SG AM all-PL+DEF.PL
 「親戚（の名前）は全員書いたものだ。」 (BV1_120509_003/1.05.36)

Ъмй мужàўь дь ги утфьрл'ът пъ тỳрците.
 Āmi mužàwǎ dǎ gi utfǎrl'ăt pǎ tùrcite.
 well can-AOR.3.PL SMP they-ACC.CL cast_aside-PRS.3.PL AM Turkish-PL+DEF.PL
 「(ロシア人たちは) トルコ人たちを排除することができた。」
 (DD1_120504_003/24.33)

Kàt тỳрците ги... ги умьчиўо
 Kàt tùrcite gi... gi umǎčiwo
 when Turkish-PL+DEF.PL they-ACC.CL they-ACC.CL torture-AOR.3.PL
пъ руснàците...
pǎ rusnàcite...
 AM Russian-PL
 「トルコ人がロシア人を苦しめたとき...」 (DD1_120504_003/25.35)

Ги дьрпъў нь дрùгийь стрьнй # пъ хòрътъ.
Gi dǎrpǎw nǎ drùgijǎ strǎni # pǎ hòrǎtǎ.
 they-ACC.CL pull-AOR.3.PL to other-PL+DEF.PL side-PL AM person-PL
 「その人たちは別の所に連れていかれた。」 (DD1_120504_003/1.02.13)

Къквй премийà ги чàкът пъ тès детèтъ?
 Kǎkvi premijà gi čakăt pǎ tès detètǎ?
 what_kind_of-PL prize-PL they-ACC.CL wait_for-PRS.3.PL AM this-PL child-PL
 「どんなご褒美がこの子たちを待っているのか。」 (DD1_120504_003/1.14.18)

Н'емците съз българите... ги позе̑yo
 N'èmcite săz bălgărite... gi rozèwo
 German-PL+DEF.PL with Bulgarian-PL+DEF.PL they-ACC.CL capture-AOR.3.PL
пъ на̀шт'е _____ румъ̀нци.
pă năšt'e _____ rumănci.
 AM our-PL+DEF.PL Romanian-PL

「ドイツ人とブルガリア人は、我らのルーマニア人を捕えた。」

(DD1_120504_003/1.31.30)

Дунесъ̑ гу _____ пъ ту̑й _____ дет̑е.
 Dunēsāw gu _____ pă tuj _____ detè.
 bring-AOR.1.SG it-N.SG.ACC.CL AM this-N.SG child-N.SG

「(私は) この子を連れてきた。」 (DD1_120504_003/2.38.25)

... зар̑т к̑кòту гу _____ интерес̑у̑ъ _____ пъ фс̑еки _____ чув'èк.
 ... zarăt kăkòtu gu _____ interesuwă _____ pă fsèki _____ čuv'èk.
 for what he-ACC.CL interest-PRS.3.SG AM every-M.SG person-M.SG

「だれもが関心を抱くようなことのために。」 (DD1_120504_003/3.41.27)

Дък̑у ги уст̑аш, ше _____ ги _____ з̑е
 Dăkù gi ustăș, še _____ gi _____ zè
 if they-ACC.CL leave-PRS.2.SG FUT they-ACC.CL take-PRS.3.SG

пъ с̑ете _____ з̑ь вен̑ъшки.

pă sète _____ ză venășki.

AM all-PL+DEF.PL for once

「もしそれを置いておいたら、(彼は) 一度にそれを全部たべてしまうでしょう。」

(TM2_121029_001/6.58)

Ги _____ зн̑ам _____ пъ с̑ете... <...> _____ кув̑интеле _____ то̑ате.
Gi _____ znàm _____ pă sète... <...> _____ kuvintele _____ toâte.
 they-ACC.CL know-PRS.1.SG AM all-PL+DEF.PL word-N.PL+DEF.N.PL all-N.PL

「(わたしは) 全部知っている...全部の単語を。」 (TM2_121029_001/8.40)

Ше ги рѣзбул'а пѣ унѣз дръгийѣта.
 Še gi răzbul'a pǎ uněz drùgijăta.
 FUT they-ACC.CL make_ill-PRS.3.SG AM that-PL other-PL
 「(その子が) ほかの子供たちに病気を移す。」 (TM2_121029_001/51.14)

Гу вѣдеф пѣ Йон.
 Gu videf pǎ Ion.
 he-ACC.CL see-AOR.1.SG AM Ion
 「(私は) イオンに会った。」 (DG2_121029_001/1.26.54)

Как гу пузнà пѣ чил'àку онзи
 Kàk gu ruznà pǎ čil'àku onzi
 how he-ACC.CL know-AOR.2.SG AM person-M.SG+DEF.M.SG that-M.SG
 уд Брѣнѣш...
 ud Brăneș...
 from Brănești
 「どうやってブラネシュティのあの人は知ったのか。」 (TO1_121108_001/3.17)

Нѣ йѣ рѣчи суўѣкрѣтъ
 Nì jǎ răci suwăkrătă
 NEG she-ACC.CL like-PRS.3.SG mother-in-law+DEF.F.SG
 пѣ мѡйтѣ дѣштерѣ.
 pǎ mòjtă dășterè.
 AM my-F.SG+DEF.F.SG daughter
 「姑は私の娘のことを気に入らなかった。」 (TO1_121108_001/33.04)

Чѣне гу пѣшкъ пѣ Вѣсѣску.
 Čène gu pùškă pǎ Văsèsku.
 later he-ACC.CL shoot-PRS.3.SG AM Vasescu
 「あとで、ヴァセスクのことを撃った。」 (TO1_121108_001/32.25)

Утиф съз нѣь нѣ чѣркѹъ, чи гу нѣмѣри
 Utif săz nĕă nă čĕrkwă, čĭ gu nămĕri
 go-AOR.1.SG with she-ACC to church and he-ACC.CL find-AOR.1.SG
пѣ пòпу тàm.
пă рòру тàm.
 AM priest-M.SG+DEF.M.SG there
 「(わたしは) 彼女と教会へ行って、そこでそのお坊さんを見つけた。」
 (TO1_121108_001/1.21.24)

Àз гу зѣф... пѣ Нѣлу.
 Àz gu zĕf... пă Nĕlu.
 I-NOM he-ACC.CL take-AOR.1.SG AM Nelu
 「わたしはネル (男性) を連れ出した。」 (BV2_121031_001/22.10)

Нѣ гу ѣмѣф пѣ Нѣлу. Тѹкъ сѣм ас,
 Nĭ gu ĩmăf пă Nĕlu. Tùkă săm às,
 NEG he-ACC.CL have-IMPF.1.SG AM Nelu here be-PRS.1.SG I-NOM
 тѹкъ и мòйтѣ сѣстрѣ.
 tùkă i mòjtă sistră.
 here be-PRS.3.SG my-F.SG+DEF.F.SG sister-F.SG
 「(そのとき) ネルはいなかった。ここには私。ここには姉がいる。」
 (BV2_121031_001/21.16)

Ше гу вѣкъм пѣ Нѣлу.
 Še gu vikăm пă Nĕlu.
 FUT he-ACC.CL call-PRS.1.SG AM Nelu
 「(わたしは) ネルを呼ぶ。」 (BV2_121031_001/1.05.03)

... гу зѣвѣѹаш пѣ дѣтту...
 ... gu zăvĕwaš пă dĕttu...
 it-N.SG.ACC.CL cover-PRS.2.SG AM child-N.SG+DEF.N.SG
 「子供を (タオルで) 包み...」 (BV2_121031_001/1.33.21)

Ни ги нъ̀учиф пъ̀ с̀ете т̀ьй,
 Ni gi nằučif pằ s̀ete tằj,
 NEG they-ACC.CL learn-AOR.1.SG AM all-PL+DEF.PL so
 ут д̀ьртите т̀ес...
 ut dằrtite tès...
 from old-PL+DEF.PL this-PL

「(私は) 全部 (の歌) を年寄りたちから学んだわけではなかった。」
 (BV2_121031_001/1.43.32)

Дв̀амъ тр̀имъ, б̀иемо гу пъ̀ гуспуд̀ин Ст̀ойчу.
 Dvămă trîmă, biemo gu pằ guspudin Stojču.
 two_person three_person beat-PRS.1.PL he-ACC.CL AM Mr Stojču
 「(わたしたちは) 2人、3人でストイチュ氏を叩く。」 (DD2_121102_001/10.47)

Ам̀ь аз ги в̀айт̀ьм пъ̀ т̀ес, куй̀ет
 Amă az gi văjtăm pằ tès, kujèt
 but I-NOM they-ACC.CL feel_sorry-PRS.1.SG AM this-PL REL
 й̀мьт дец̀а м̀алки.
 imăt decă malki.
 have-PRS.3.PL child-PL small-PL

「でも、私は小さい子を持っている人たちに同情する。」
 (BV2_121031_001/2.44.13)

Ѝ а̀с ги ч̀итаф пъ̀ х̀орьт̀ь.
 I às gi čitaf pằ hõrătă.
 also I-NOM they-ACC.CL respect-IMP.1.SG AM person-PL
 「私も人々を敬っていた。」 (DD2_121102_001/25.15)

Ког̀ату гу уб̀ий̀о пъ̀ Чау̀ш̀еска...
 Kogātu gu ubiwo pằ Čaușeska...
 when he-ACC.CL kill-AOR.3.PL AM Ceaușescu...
 「チャウシェスクが殺されたとき...」 (DD2_121102_001/1.56.39)

Нѝ ѹбе <...> дѣ ги ѡнприѹнѡм'и нѝѡ
 Ni ùbe <...> dă gi ănpriùnăm'i niȝ
 NEG good <...> SMP they-ACC.CL join-PRS.1.PL we-NOM
пѣ тѣс млăтте нăште <...> дѣ си
pă tēs mlătte năște <...> dă si
 AM this-PL young-PL+DEF.PL our-PL+DEF.PL SMP REF.DAT.CL
 пѣръстѣт дицăтѣ.
 părăstăt dicătă.
 grow_up-PRS.3.PL child-PL

「この私たちの若い子どもたちが成長する上で、彼らを一緒にしてはよくない。」
 (BV2_121031_001/2.49.23)

Румѡнците убѝѹо гу
 Rumăncite ubiwo gu
 Romanian-PL+DEF.PL kill-AOR.3.PL he-ACC.CL
пѣ нѣѝн'у Чаушѣску.
pă nĕjn'u Čaușĕsku.
 AM her-M.SG+DEF.M.SG Ceaușescu

「ルーマニア人たちは（ルーマニアの）チャウシェスクを殺した。」
 (DD2_121102_001/51.58)

Чѝтай гу пѣ чув'ѣку.
 Čitaj gu pă čuv'ĕku.
 respect-IMP.2.SG he-ACC.CL AM person-M.SG+DEF.M.SG
 「その人を敬いなさい。」 (DD2_121102_001/3.10.32)

... ши купѝ ги пѣ мѡѝте.
 ... ři kupi gi pă mŏjte.
 and buy-AOR.3.SG they-ACC.CL AM my-PL+DEF.PL
 「それで（彼は）私の（馬）を買った。」 (DM_130927_002/1.21.13)

T'à ги даўаши дòлу пъ дв'èти д'йцъ.
 T'à gi dàwaši dòlu pă dv'èti d'ică.
 she-NOM they-ACC.CL give-IMPF.3.SG down AM two-N.PL+DEF.N.PL child-N.PL
 「彼女は二匹の（馬の）子供を与えていた。」 (DM_130927_002/1.43.36)

Ги смъкнаўо пъ тès...
Gi smăknawo pă tès...
 they-ACC.CL pull-AOR.3.PL AM this-PL
 「(彼らは) 彼らを引っ張りおろした。」 (DM_130927_002/2.08.01)

Ги вйкъф и пъ унès.
Gi vikăf i pă unès.
 they-ACC.CL call-AOR.1.SG also AM that-PL
 「(わたしは) 彼らも呼んだ。」 (DM_130927_002/2.14.32)

Ги вйкъши пъ сèте млăди укъшти.
Gi vikăši pă sète mlădi ukăšti.
 they-ACC.CL call-IMPF.3.SG AM all-PL+DEF.PL young-PL to_home
 「(彼は) その若い人たちみんなを家に呼んでいた。」 (DM_130927_002/2.17.11)

Дъ дòди по мène дъ гү вйд'ъ и йàс
 Dă dòdi po mène dă gu vid'ă i jàs
 SMP come-PRS.3.SG to I-ACC SMP it-N.SG.ACC.CL see-PRS.1.SG also I-NOM
пъ нèгү мунчè.
pă negu munče.
 AM he-ACC boy-N.SG
 「その男の子を私も見るために、私のところへ（彼を）来させるように。」
 (BV3_131003_001/4.49)

Tòj йъ йштеши пъ дъштър'è му.
 Tòj jà išteši pă dăštâr'è mu.
 he-NOM she-ACC.CL want-IMPF.3.SG AM daughter he-DAT.CL
 「彼は、彼の娘を望んでいた。」 (BV3_131003_001/9.50)

Нй ги знай пъ СÈТЕ пèsни
 Nì gì znàj pă SÈTE pèsni
 NEG they-ACC.CL know-PRS.3.SG AM all-PL+DEF.PL song-PL
 нь буйèници.
 nă bujènici.
 of Buenek

「ブエネクの歌を全部知っているわけではない。」 (BV3_131003_001/1.08.17)

Хъйдъ дъ гу дунсèш тукъ дъ...
 Hăjdă dă gu dunsèš tũkă dă...
 come_on SMP he-ACC.CL bring-PRS.2.SG here SMP
 дъ гу вид'ъ и àс пъ мунчèту нèгу.
 dă gu vid'ă i às pă munčètu nègu.
 SMP it-N.SG.ACC.CL see-PRS.1.SG also I-NOM AM boy-N.SG+DEF.N.SG he-ACC
 「その男の子を私も見るために、その子をここへ連れてきなさい。」
 (BV3_131003_001/5.15)

Ут класъ дòўъ, и ут трèйъ, ги знам
 Ut klàsă dòwă, i ut trèjă, gì znàm
 from class two and from three they-ACC.CL know-PRS.1.SG
пъ сèте пујезий.
pă sète pujeziì.
 AM all-PL+DEF.PL poem-PL
 「(わたしは) (学校の) 2年生、3年生の詩は全部知っている。」
 (BV3_131003_001/10.35)

Нѝ ги знàй пъ сèте пèsни тѝй.
 Ni gi znàj pǎ sète pèsni tǎj.
 NEG they-ACC.CL know-PRS.3.SG AM all-PL+DEF.PL song-PL so
 「すべての歌を知っているわけではない。」 (BV3_131003_001/1.08.18)

Àм àз ги дѝршѝм нѝўм пъ сèте.
 Àm àz gi dǎršǎm nǎum pǎ sète.
 but I-NOM they-ACC.CL hold-PRS.1.SG in_mind AM all-PL+DEF.PL
 「しかし、私はすべてを記憶しているわけではない。」 (BV3_131003_001/1.08.20)

Рèкъ гѝту дòдиш ти дѝ... дѝ дòди
 Rèkǎ gǐtu dòdiš ti dǎ... dǎ dòdi
 say-AOR.3.SG when come-PRS.2.SG you-NOM SMP SMP come-PRS.3.SG
 сѝз нèгу нѝ мèне, дѝ гу вѝд'ѝ
 sǎz nègu nǎ mène, dǎ gu vid'ǎ
 with he-ACC to I-NOM SMP it-N.SG.ACC.CL see-PRS.1.SG
 и àс пъ нèгу мѝнче.
 i às pǎ nègu mùnče.
 also I-NOM AM he-ACC boy-N.SG
 「(彼は) 言った。彼が来たとき、その子と一緒に私のところに来なさい。私もその子を見るために。」 (BV3_131003_001/1.17.26)

Ги нѝрàни пъ сèте.
Gi nǎrǎni pǎ sète.
 they-ACC.CL feed-AOR.3.SG AM all-PL+DEF.PL
 「(彼は) すべて (の動物) に餌をやった。」 (BV3_131003_001/2.23.26)

Джòрджиàнѝ ги гѝди пъ сèте.
 Džordžianǎ gi gǐdi pǎ sète.
 Džordžianǎ they-ACC.CL put-AOR.3.SG AM all-PL+DEF.PL
 「ジョルジアナはそれをすべて置いた。」 (BV3_131003_001/2.27.48)

Àc нѝ йѣ знàм пѣ инглèзѣтъ.
 Às nì jà znàm pǎ inglèzǎtǎ.
 I-NOM NEG she-ACC.CL know-PRS.1.SG AM English-F.SG+DEF.F.SG
 「私は英語を知らない。」 (BV3_131003_001/2.47.54)

Нѣ трѝси гòдин àс йѣ нѣпràйф <...> пѣ Ирѝнѣ.
 Nǎ trǐjsi godin às jà nǎprǎjf <...> pǎ Irinǎ.
 at 30 year-PL I-NOM she-ACC.CL make-AOR.1.SG AM Irina
 「30歳の時に私はイリーナを生んだの」 (BA1_131004_001/53.22)

Гѹ пузнàвѣш пѣ д'àду?
 Gu puznǎvǎš pǎ d'ǎdu?
 he-ACC.CL know-PRS.2.SG AM grandpa
 「(あなたは) そのおじいさんを知っているか。」 (RUS_131005_002/35.52)

Ше вѝдим ùтре дàку мòже <...>
 Še vidim ùtre dǎku mòže <...>
 FUT see-PRS.1.PL tomorrow if can-PRS.3.SG
 дѣ гѝ дунсè пѣ сèте тàм.
 dǎ gì dunsè pǎ sète tàm.
 SMP they-ACC.CL bring-PRS.3.SG AM all-PL+DEF.PL there
 「そこへ全員連れていけるかどうか明日様子を見ましょう。」
 (RUS_131005_002/29.47)

Гѹ пузнàвѣш пѣ Вѣлев?
 Gu puznǎvǎš pǎ Vǎlev?
 he-ACC.CL recognize-PRS.2.SG AM Vǎlev
 「(あなたは) ヴアレフを知っているか。」 (RUS_131005_002/46.52)

He гу пузнàф пь туй мунчè.
 Ne гу puznàf pǎ tuj munčè.
 NEG it-N.SG.ACC.CL recognize-AOR.1.SG AM this-N.SG boy-N.SG

「(わたしは) その男の子のことがわからなかった。」 (GG_131006_001/19.35)

Ўтре àс иштѣм дѣ дòде туйкѣ
 Ûtre às ištām dǎ dòde tũkǎ
 tomorrow I-NOM want-PRS.1.SG SMP come-PRS.1.SG here
 дѣ гу зънѣм пь д'àду Гòгу дѣ утйвѣм
 dǎ гу zǎnām pǎ d'adu Gògu dǎ utivām
 SMP he-ACC.CL take-PRS.1.SG AM grandpa Gogu SMP go-PRS.1.SG
 нѣ мène дѣ идѣм мàлко, дѣ пйем инѣ рѣкййѣ...
 nǎ mène dǎ idèm mǎlko, dǎ piem inǎ rǎkijǎ...
 to I-ACC SMP eat-PRS.1.PL little SMP drink-PRS.1.PL IDF.F.SG rakija-F.SG

「明日、私はゴグじいさんを連れていくためにここに来たい。私のところに行つて、ちょっと食べたり、ラキアを飲んだりするために。」 (RUS_131005_002/10.10)

Ги знàм пь сèте, пь сèте.
Gi znàm pǎ sète, pǎ sète.
 they-ACC.CL know-PRS.1.SG AM all-PL+DEF.PL AM all-PL+DEF.PL

「(わたしは) 全員は知らない。」 (BV3_131006_001/1.13.07)

➤ **пъ/рă** を伴わない (5 例)

Ше утйўъ нъ грòбиштъ дъ гу видиш
 Še utiwǎ nǎ gròbištǎ dǎ gu vidiš
 FUT go-PRS.1.SG to graveyard SMP it-N.SG.ACC.CL see-PRS.2.SG
 # нèгуўту _____ мунчè.
 # nèguwtu _____ munčè.
 his-N.SG+DEF.N.SG boy-N.SG

「墓場へ行って、彼の息子を見に行こう。」 (RUS_130927_002/1.28.47)

Ги вйде тàm # кòнте нъ нèгу?
Gi vide tàm # kònte nǎ nègu?
 they-ACC.CL see-AOR.2.SG there horse-PL+DEF.PL DM he-ACC
 「彼のところで馬を見たか。」 (AG1_131004_001/1.31.53)

Нй м̂й р̂чй, чи нй гу йскъ # Руси.
 Ni mǎj rǎči či ni gu ìskǎ # Rùsi.
 NEG more like-PRS.3.SG because NEG he-ACC.CL want-PRS.3.SG Rusi
 「(彼は) 気に入らなかった、ルシのことがいやだったから。」 (BA1_131004_001/1.49.12)

A чи тугйснъ гўждъ гу... # бр̂шнòту.
 A či tugisnǎ gùždǎ gu... # brǎšnòtu.
 and then then put-PRS.3.SG it-N.SG.ACC.CL wheat-N.SG+DEF.N.SG
 「それから小麦粉を入れて...」 (DD1_120504_003/2.15.29)

Чи учй тàm из'йк'у, сǎў
 Či učì tàm iz'ik'u, sǎw
 so study-AOR.3.SG there language-M.SG+DEF.M.SG or
гу знǎйў пò-нъпрèд, # б̂лг̂рцки?
gu znǎjw pò-nǎpred, # bǎlgǎrcki?
 it-M.SG.ACC.CL know-EVID.M.SG earlier Bulgarian-M.SG
 「そこでその言葉を勉強したのか、あるいはそれを以前から知っていたのか。ブルガリア語を。」 (BV3_131003_001/1.47.44)

間接補語
(全 79 例)

● 人称代名詞 (全 59 例)

➤ нь/nă を伴う (50 例)

Гòгу ишти дъ ни ньпрай нь нàс тàm
 Gògu išti dă ni năpràj nă nàs tàm
 Gogu want-PRS.3.SG SMP we-DAT.CL make DM we-ACC there

идйн ъпартъмèнт дъ съ премèстъ, àс ни штък.
 idin âpartămènt dă sǎ premèstǎ, às ni štăk.

IDF.M.SG apartment-M.SG SMP move-PRS.1.SG I-NOM NEG want-PRS.1.SG

「ゴグは、私が引っ越せるようにあそこにアパートを作りたいが、私はそれを望まない。」 (BA2_150212_002/1.22.16)

Ми купуўът <...> кòту ми тр'абъ нь мène.
 Mu kupùwăt <...> kòtu mi tr'abǎ nă mène.
 I-DAT.CL buy-PRS.3.PL what I-DAT.CL it_is_necessary-PRS.3.SG DM I-ACC

「私が必要なものは買ってきてくれるの。」 (BA2_150212_002/1.28.38)

Хàйди дъ ти ньпрайъ и нь тèбе.
 Hǎjdi dă ti năprǎjǎ i nă tèbe.
 come_on SMP you-DAT.CL make-PRS.1.SG also DM you-DAT.CL

「さあ、あなたにも (コーヒーを) 作ってあげましょう。」

(BA2_150212_002/1.30.40)

Ми кàзьў нь мène.
Ми кàзǎw nă mène.
 you-DAT.CL say-AOR.3.PL DM I-ACC

「(彼らは) 私に言った。」 (TF1_150217_003/6.10)

Kòtu ми tr'àbъ нъ мène...
 Kòtu mi tr'ábă nă mène...
 what I-DAT.CL it_is_necessary DM I-ACC
 「私に必要なものを…」 (TF2_150219_001/37.14)

Àc му думъм нъ нèгу тъй.
 Às mu dùmăm nă nègu tăj.
 I-NOM he-DAT.CL say-PRS.1.SG DM he-ACC so
 「私は彼にそう言っている。」 (TF2_150219_001/54.30)

... и тукъ нѣтатъкъ кò дъ ни тр'àбъ к'инигъ нъ нàс?
 i tũkă nătătăk kò dă ni tr'ábă k'inigă nă nàs?
 ... and here further why SMP we it_is_necessary book DM we-ACC
 「これから先、どうして私たちに本が必要であろうか。」
 (TF2_150219_001/1.12.50)

Ръзбраѣ. Рèкъ, чи ше ми дунсèш нъ мène
 Răzbrăf. Rèkă, či še mi dunsèš nă mène
 understand-AOR.1.SG say-AOR.2.SG that FUT I-DAT.CL bring-PRS.2.SG DM I-ACC
 инъ пòзь.
 ină pòză.
 IDF.F.SG photo-F.SG
 「わかった。(あなたは) 私に写真を持ってきてくれたのね。」
 (TMita1_150212_004/56.36)

Ми думъ нъ мène, „Хайди, чи дувèчеръ гàтъ“.
Mi dùmă nă mène, „Haidi, či duvèčeră gătă“.
 I-DAT.CL say-PRS.3.SG DM I-ACC “come_on because this_evening ready
 「(姉は) 私に言ったの『ほら、今晚には準備万端なんだから』って。」
 (TMita2_150217_001/20.19)

Дай ми нѣ мене тѣкòс.
 Daj mi nǎ mène tǎkòs.
 give-IMP.2.SG I-DAT.CL DM I-ACC such_thing
 「私にそんなものをください。」(TMita2_150217_001/1.03.43)

Дай ми нѣ мѣн.
 Daj mi nǎ mèn.
 give-IMP.2.SG I-DAT.CL DM I-ACC
 「私にください。」(TO2_150211_002/1.38.08)

Дѣ ти дадѣ Гòспот нѣ тебе здравѣ, инѣ
 Dǎ ti dadè Gòspod nǎ tebe zdràvi, inǎ
 SMP you-DAT.CL give-PRS.3.SG Lord DM you-DAT.CL health IDF.F.SG
 жинѣ умовѣтъ, ѹбѣѹ.
 žinǎ umovitǎ, ùbǎw.
 woman-F.SG clever-F.SG beautiful-F.SG
 「主があなたに健康と知的できれいな女性をお与えになりますように。」
 (TMita2_150217_001/2.21.10)

Кàзѹѹй ѹ и нѣ нѣйѹ дѣ знàй.
 Kàzwǎj ì i nǎ nèjǎ dǎ znàj.
 tell-IMP.2.SG she-DAT.CL also DM she-ACC SMP know-PRS.3.SG
 「(彼女が)わかるように彼女にも言ってあげなさい。」(TO2_150211_002/1.57.50)

Дѣ ми дунесеш позѣ нѣ мене с'егѣ?
 Dǎ mi duneseš pozǎ nǎ mène s'egǎ?
 SMP I-DAT.CL bring-PRS.2.SG photo DM I-ACC now
 「わたしに今写真を持ってきてくれるの」(TO2_150211_002/2.03.02)

Ъмбўми дўору гул'ам, чи ми дадоў
 Īmāwmi dwòru gul'am, či mi dàdow
 have-IMPF.1.PL yard big so I-DAT.CL give-AOR.3.PL

и нъ мѐне иннъ пърчѐтъ.

I nǎ mène innǎ pǎrcĕtǎ.

also DM I-ACC a piece

「(わたしたちは) おおきな庭を持っていて、その一部を私にもくれた。」

(TM1_120509_003/13.25)

Ъште дъ ти гу дам нъ тѐбе.
 Īšte dǎ tī gu dām nǎ tèbe.
 want-PRS.1.SG SMP you-DAT.CL it-N.SG.ACC.CL give-PRS.1.SG DM you-ACC

「あなたにそれをあげたい。」 (TM1_120509_003/1.20.47)

ʌз, даку штѐше, ти гу
 ʌz, dǎku štĕše, tī gu
 I-NOM if want-PRS.2.SG you-DAT.CL it-N.SG.ACC.CL
 дам нъ тѐбе...
 dām nǎ tèbe...
 give-PRS.1.SG DM you-ACC

「わたしは、おまえが望むなら、それをおまえにあげたい。」

(TM1_120509_003/1.21.08)

Тõй сѐне ше ми кàже и нъ мѐне.
 Tõj sène še mi kàže i nǎ mène.
 he-NOM later FUT I-DAT.CL tell-PRS.3.SG also DM I-ACC

「彼はあとになって私にも言ってくれるでしょう。」 (TM1_120509_003/1.25.28)

Ми дўмъши нъ мѐне.
Mi dùmǎši nǎ mène.
 I-ACC.CL say-IMPF.3.SG DM I-ACC

「(彼は) 私に言っていた。」 (TM1_120509_003/1.45.15)

Dàй ми нъ мèне!
 Dàj mi nǎ mène!
 give-IMP.2.SG I-DAT.CL DM I-ACC
 「私にください！」 (DD1_120504_003/1.40.10)

Cèty, kòty tr'àbъ дъ
 Sètu, kòtu tr'àbǎ dǎ
 all-N.SG+DEF.N.SG what it_is_necessary-PRS.3.SG SMP
 съ убличè # ì ръздàўъ нъ нèйъ.
 sǎ ubličè # ì răzdàwǎ nǎ nèjǎ.
 REF.ACC.CL wear-PRS.3.SG she-DAT.CL hand_out-PRS.3.SG DM she-ACC
 「(彼女が) 着なくてはならないものはすべて、彼女に分け与えられた。」
 (BV1_120509_003/1.24.44)

Вйкът инъ жинà, чи ì
 Vîkăt inǎ žinà, čì ì
 call-PRS.3.PL IDF.F.SG woman-F.SG and she-DAT.CL
 ръздàўъ нъ нèйъ тàm.
 răzdàwǎ nǎ nèjǎ tàm.
 hand_out-PRS.3.SG DM she-ACC there
 「一人の女性が呼ばれて、そこで彼女に分け与えられた。」
 (BV1_120509_003/1.25.17)

Нй ни тр'àбъ нйшту нъ на̀с
 Nì ni tr'àbǎ ništu nǎ nàs
 NEG we-DAT.CL it_is_necessary-PRS.3.SG nothing DM we-ACC
 нъ йтпòнци́те дъ дъдèш... вàштъ зим'à.
 nǎ jǎpòncite dǎ dǎdèš... vǎštǎ zim'à.
 DM Japanese-PL+DEF.PL SMP give-PRS.2.SG your-F.SG+DEF.F.SG land-F.SG
 「私たち日本人には何も必要ない、あなたがたの土地は。」
 (DD1_120504_003/1.26.04)

Тъй ни kàzъу и нъ на̀с.
 Tǎj nǐ kàzǎwu i nǎ nà̀s.
 so we-DAT.CL tell-AOR.3.PL also DM we-ACC
 「そのように私たちも言われた。」 (DD1_120504_003/3.31.18)

Àс ти kàzvъm нъ тèбе.
 Às tǐ kàzvǎm nǎ tèbe.
 I-NOM you-DAT.CL tell-PRS.1.SG DM you-ACC
 「わたしはあなたに言います。」 (DD1_120504_003/3.41.00)

Тèс ше ми ги устàш нъ мèне?
 Tès še mǐ gi ustǎš nǎ mène?
 this-PL FUT I-DAT.CL they-ACC.CL leave-PRS.2.SG DM I-ACC
 「これらを私に置いていってくれるのか。」 (TM2_121029_001/3.17)

Хàйди, дъ ти дàм нъ тèбе
 Hǎjdi, dǎ tǐ dàm nǎ tèbe
 come_on SMP you-DAT.CL give-PRS.1.SG DM you-ACC
 къ̀штъ̀тъ и дòру.
 kǎštǎtǎ i dòru.
 house-F.SG+DEF.F.SG and yard
 「さあ、あなたに家と庭を与えましょう。」 (TM2_121029_001/1.00.21)

Чи... ни дàди нъ на̀с.
 Či... nǐ dàdi nǎ nà̀s.
 and we-DAT.CL give-AOR.3.SG DM we-ACC
 「それで、(彼は) 私たちに与えた。」 (TM2_121029_001/1.00.38)

Чи ймам ут тѐз дѣ мү дәм
 Či imam ut tѐz dă mү dăm
 and have-PRS.1.SG from this-PL SMP he-DAT.CL give-PRS.1.SG
 и нѣ нѣгү...
 i nă nѣgү...
 also DM he-ACC

「(わたしは) 彼にも与えなくてはならないものがこれらのなかにある。」
 (TM2_121029_001/2.09.17)

Дайте ми нѣ мѣне дѣору.
 Dajte mi nă mѣne dwòru.
 give-IMP.2.SG I-DAT.CL DM I-ACC yard

「わたしに庭をください。」 (TO1_121108_001/59.10)

(???) ми дѣдѣш нѣ МѢНЕ.
 (???) mi dădѣš nă MĚNE.
 I-DAT.CL give-PRS.2.SG DM I-ACC

「(あなたは) 私にくれるように。」 (TO1_121108_001/1.01.32)

Н'амѣ ви дәм нѣ вѣс,
 N'amă vi dăm nă văs,
 NEG.FUT you-DAT.CL give-PRS.1.SG DM you-ACC
 чи вий пийти.
 či vij pijti.
 because you-NOM drink-PRS.2.PL

「あなたたちには与えるつもりはない、なぜならあなたたちは飲むから。」
 (TO1_121108_001/1.08.14)

Зѣнѣйте ми и нѣ мѣне...
 Zănăjte mi i nă mѣne...
 take-IMP.2.PL I-DAT.CL also DM I-ACC

「わたしにも持ってきて。」 (BV2_121031_001/2.54.05)

Тѝ му кàзўъш нѣ нѣгу „д’àду“,
 Тi му кàzwăš nă nĕgu „d’adu“,
 you-NOM he-DAT.CL say-PRS.2.SG DM you-ACC grandpa
 и нѣ бàбѣ ти кàзўъш „бàбо“.

i nă bābā ti kàzwăš „bàbo“.

and DM grandmother you-NOM say-PRS.2.SG grandma

「あなたは彼に『おじいさん』と言ひ、おばあさんには『おばあさん』と言う。」

(BV2_121031_001/2.47.21)

Ше му кàжеш нѣ нѣгу гѝ(т) ше дòдеш.
 Še му kàžeš nă nĕgu gi(t) še dòdeš.
 FUT he-DAT.CL tell-PRS.2.SG DM he-ACC when FUT come-PRS.2.SG

「(あなたは) 彼にあなたが来たときに伝えなさい。」 (BV2_121031_001/3.27.03)

Дѣ ми дѣдѣш нѣ мѣне нѣшту, дѣту дѣ жув’àjem.
 Dă mi dădêš nă mĕne nĕštu, dĕtu dă žuv’ajem.
 SMP I-DAT.CL give-PRS.2.SG DM I-ACC something REL SMP live-PRS.1.PL

「(わたしたちが) 生きるために (必要な) ものを私にください。」

(DD2_121102_001/29.13)

Ї дўмѣ нѣ нѣйѣ „Йàмѣ“.
 Ì dùmă nă nĕjă „Jămă“.
 she-DAT.CL say-PRS.3.SG DM she-ACC Jamă

「彼女は『ヤマ』という名前である。」 (DM_130927_002/1.48.44)

Дѣ ми ги дѣдѣш нѣ мѣне.
 Dă mi gi dădêš nă mĕne.
 SMP I-DAT.CL they-ACC.CL give-PRS.2.SG DM I-ACC

「わたしにそれらをください。」 (RUS_130927_002/1.54.38)

H'âne Mърине, dàй <...> и нь другàр'у Пàнь.
 N'âne Mărine, dàj <...> i nă drugàr'u Pànă.
 uncle-VOC Marin-VOC give-IMP.2.SG also DM Mr Pană
 Дай му и нь негу.
 Daj mu i nă negu.
 give-IMP.2.SG he-DAT.CL also DM he-ACC

「マリンじいさん、パナさんにもあげてください。彼にもあげてください。」

(DM_130927_002/1.23.19)

Му пуйàўъ там и нь негу бългàрски...
 Mu pujaŵă tam i nă negu bălgarski...
 he-DAT.CL sing-AOR.3.PL there also DM he-ACC Bulgarian

「そこで(かれらは)かれにもブルガリア語で歌った。」(BV3_131003_001/1.44.36)

Дай ни и нь нѣс батѣсть.
 Daj ni i nă năš batistă.
 give-IMP.2.SG we-DAT.CL also DM we-ACC cambric

「私たちにも寒冷紗をください。」(BV3_131003_001/2.00.08)

Ни ти харèsўъ нь тебе?
 Ni ti harèswă nă tebe?
 NEG you-DAT.CL like-PRS.3.SG DM you-ACC

「あなたには気に入らないか。」(BV3_131003_001/2.20.01)

Àс нѣмъф... нѣмъф кòй дѣ
 Às nêmfăf... nêmfăf kòj dă
 I-NOM not_have-AOR.1.SG not_have-AOR.1.SG who SMP
 ми ньпраи нь мѣне.
 mi năprai nă mène.
 I-DAT.CL make-PRS.3.SG DM I-ACC

「わたしに作ってくれる人はわたしにはいなかった。」(BA1_131004_001/28.00)

Къжй ми нъ мѐне.

Kǎži mī nǎ mène.

tell-IMP.2.SG I-DAT.CL DM I-ACC

「私にも言ってください。」 (Nec_Party_131006_001/3.27.08)

Йскъм дъ й дам нѐшту

Īskǎm dǎ ì dǎm něštu

want-PRS.1.SG SMP she-DAT.CL give-PRS.1.SG something

и нъ нѐйъ.

i nǎ nějǎ.

also DM she-ACC

「(わたしは) 彼女にも何か与えたい。」 (BA1_131004_001/2.00.40)

Хайдъ дъ ти нъпръйъ инъ кѣфѐ, дѧ? <...>

Hǎjdǎ dǎ ti nǎprǎjǎ inǎ kǎfè, dà? <...>

come_on SMP you-DAT.CL make-PRS.1.SG a coffee yes

Дъ му нъпрайъ и нъ нѐгу дъ йде...

Dǎ mu nǎprǎjǎ i nǎ nègu dǎ ide...

SMP he-DAT.CL make-PRS.1.SG also DM he-ACC SMP come-PRS.3.SG

пийете двѧмъ.

pìjete dvǎmǎ.

drink-PRS.2.PL two_person

「あなたにコーヒーを作ってあげましょうね。彼が(こちらに)来るように彼にも作ってあげましょう。(あなたたち)二人で飲むように。」

(BA1_131004_001/1.03.35)

Г'арѐсѹъ нъ тѐбе?

Г'arèswǎ nǎ tèbe?

you-DAT.CL+like-PRS.3.SG DM you-ACC

「あなたは気に入ったか。」 (BA1_131004_001/2.06.10)

Àc ше му dàм нѣ нèгу инѣ жинѣ
 Às še му dàм нă нèгу инă žină
 I-NOM FUT he-DAT.CL give-PRS.1.SG DM he-ACC IDE.F.SG woman-F.SG
 и тòй нѣ мèне.
 i tòj nă mène.
 and he-NOM DM I-ACC

「わたしは彼に女性を一人与え、彼は私に（与える）。」

(Nec_Party_131006_001/2.56.17)

... му dàўъ и нѣ нèгу <...>
 ... му dàwă i нă нèгу <...>
 he-DAT.CL give-PRS.3.SG also DM he-ACC
Му dàўъ и нѣ нèгу пърì...
Му dàwă i нă нèгу pǎrì...
 he-DAT.CL give-PRS.3.SG also DM he-ACC money-PL

「彼にも与えます。彼にもお金を与えます。」 (BV3_Party_131006_001/3.21.41)

➤ нь/нă を伴わない (9 例)

Пò-бърджи ми иди мѐне дъ приказўми
 Pò-bǎrdži mi idi mène dă prikázwămi
 faster I-DAT.CL come-PRS.3.SG I-DAT SMP talk-PRS.1.SG
 бългърци ут улашки.
 bălgărcki ut ulăški.
 Bulgarian than Romanian

「ルーマニア語よりブルガリア語の方が話すとき早く頭に浮かぶ。」

(TF2_150219_001/54.46)

Пò-бърджи ми иди мѐне
 Pò-bǎrdži mi idi mène
 faster I-DAT.CL come-PRS.3.SG I-DAT
 дъ приказўми бългърци декът улашки.
 dă prikázwămi bălgărcki dekăt ulăški.
 SMP talk-PRS.1.SG Bulgarian than Romanian

「ルーマニア語よりブルガリア語の方が話すとき早く頭に浮かぶ。」

(TF2_150219_001/55.10)

Нй знàм какъф, ам какъф
 Ni znàm kakăf, am kakăf
 NEG know-PRS.1.SG what_kind_of-M.SG but what_kind_of-M.SG
 т'арѐсўь тѐбе?
 t'arèswă tèbe?
 you-DAT.CL+like-PRS.3.SG you-DAT

「どんなのかわからないけど、あんたはどんな (お茶) が好きなの？」

(BV1_120509_002/27.30)

Кòй ти казь тѐбе?
 Kòj tí kăză tèbe?
 who-M.SG you-DAT.CL tell-AOR.3.SG you-DAT

「誰があなたに言ったのか。」 (BV3_131003_001/1.45.04)

Гѝту гу вѝдиш тѝй, инò дѝти тѝй <...>
 Gitu gu vidiš tuj, inò dèti tāj <...>
 when it-N.SG.ACC.CL see-PRS.2.SG this-N.SG IDF.N.SG child-N.SG so
 дѝ тѝ приказъ тѝбе тòлкус из'ик'е...
 dā tī prikazā tēbe tòlkus iz'ik'e...
 SMP you-DAT.CL talk-PRS.3.SG you-ACC so_many language-PL
 「そんなにたくさんの言語をあなたに話す子を（あなたが）見たとき...」
 (BV3_131003_001/3.18.50)

Кàкту тѝ сѝ стòри тѝбе...
 Kàktu tī sǎ stòri tēbe...
 as you-DAT.CL it_seems-AOR.3.SG you-DAT
 「あなたが思ったように」 (BV3_131003_001/2.15.08)

Тѝ харèsѝъ тѝбе бѝлгàръ?
 Tī harèswǎ tēbe bǎlgàrǎ?
 you-DAT.CL like-PRS.3.SG you-ACC Bulgarian
 「あなたはブルガリア語が気に入っているか。」 (BV3_131003_001/3.09.18)

Àс ше гу зѝмнѝ, чи мѝ мѝне
 Às še gu zǎmnǎ, čī mī mène
 I-NOM FUT he-ACC.CL take-PRS.1.SG because I-DAT.CL I-ACC
 Г'òрги лѝкѝ и прилѝкѝ.
 G'orgi likǎ i prilikǎ.
 Georgi well_matched
 「私は彼を（結婚相手として）とります。なぜなら、ゲオルギは（私に）お似合
 いだから。」 (BV3_131003_001/1.53.15)

Нѝ мѝ харèsѝъ мѝне дѝ утѝдѝ сѝз мàкси.
 Nī mī harèswǎ mène dā utidǎ sǎz mǎksi.
 NEG I-DAT.CL like-PRS.3.SG I-ACC SMP go-PRS.1.SG with coach
 「わたしはミニバスで行くのが好きではない。」 (TF2_150219_001/1.17.17)

● その他の名詞句 (全 20 例)

➤ нь/nă を伴う (20 例)

Дъ му кажеш нь... нь Ръси.

Dă mu kážeš nă nă Rùsi.

SMP he-DAT.CL say-PRS.2.SG DM DM Rusi

「ルシ (男性) に言いなさい。」 (BA2_150212_002/52.26)

Пък тѣтику съз инѣ канѣ тѣй гул'амѣ съз вѣну,

Păk tătiku sâz ină kănă tăj gul'amă sâz vînu,

but father with IDE.F.SG pitcher-F.SG so big-F.SG with wine

чи им даўѣши нь сѣте дѣ пѣйт...

či im dăwăši nă sête dă pîjăt...

and they-DAT.CL give-IMPF.3.SG DM all-PL+DEF.PL SMP drink-PRS.3.PL

「お父さんはワインの入った大きなピッチャーをもって、(全員が) 飲むように全員に配っていた。」 (TMita2_150217_001/54.24)

Дѣмѣми ѣ нь мамѣ.

Dëmămi î nă mămă.

say-PRS.1.PL she-DAT.CL DM mum

「(わたしたちは) お母さんに言っている。」 (TO2_150211_002/6.49)

Ше му кажеш нь Флорѣн.

Še mu kážeš nă Florin.

FUT he-DAT.CL tell-PRS.2.SG DM Florin

「(あなたは) フロリンに言うでしょう。」 (TM1_120509_003/31.30)

Му блѣгудѣр'ѣ нь гѣспуд'ѣ штѣто...

Mu blăgudăr'ă nă gòspud'ă štòto...

he-DAT.CL thank-PRS.1.SG DM Lord-M.SG+DEF.M.SG because

「(わたしは) 主に感謝している、なぜなら...」 (DD1_120504_003/1.29.02)

Амѣ̀ мòл'ъ съ̀ гòспуд'ъ дѣ́ им дѣ̀дè здра̀ви, мѣ̀р,
 Amǎ̀ mòl'ǎ sǎ̀ gòspud'ǎ dǎ́ im dǎ̀dè zdràvi, mǐr,
 but pray-PRS.1.SG Lord SMP they-DAT.CL give-PRS.3.SG health peace
нѣ́ хòрѣтъ, дѣ́ съ́ рѣ̀збирѣ́тъ мѣ̀жду т'ǎф.
nǎ̀ hòrǎtǎ́, dǎ́ sǎ́ rǎzbirǎt mǐzdu t'ǎf.
 DM person-PL SMP REF.ACC.CL understand-PRS.3.PL between they-ACC
 「人々に健康と平和をお与えになり、人々が互いに理解できるようになるよう、
 (わたしは) 主に祈っている。」 (DD1_120504_003/3.42.50)

Тѣ́й му дѣ́мь Кòра # нѣ́ мѣ̀гѣ̀зѣ̀ну нèгу.
 Tǎj mu dùmǎ́ Kòra # nǎ́ mǎgǎzǐnu nègu.
 so it-DAT.CL say-PRS.3.SG Kora DM store-M.SG+DEF.M.SG he-ACC.CL
 「あのお店はコラっていうのよ。」 (TM2_121029_001/45.51)

Кѣ́жй му нѣ́ мунчèту нèгу
 Kǎžj mu nǎ́ munčètu nègu
 tell-IMP.2.SG it-N.SG.DAT.CL DM boy-N.SG+DEF.N.SG he-ACC
 дѣ́ мǎй ти нѣ̀мèри пѣ́ н'ǎкуй.
 dǎ́ mǎj tí nǎmèri pǎ́ n'ǎkuj.
 SMP more you-DAT.CL find-PRS.3.SG AM someone
 「あなたのためにだれかを見つけるように、あの男の人に言いなさい。」
 (TO1_121108_001/1.36.14)

Àз му кàзъм и нѣ́ Нèлу.
 Àz mu kàzǎm i nǎ́ Nèlu.
 I-NOM he-DAT.CL tell-PRS.1.SG also DM Nelu
 「わたしはネル (男性) にも言っている。」 (BV2_121031_001/1.14.56)

Àс й рèкъф нѣ́ мǎмѣ́.
 Às i rèkǎf nǎ́ mǎmǎ́.
 I-NOM she-DAT.CL tell-AOR.1.SG DM mum
 「わたしは母にも言った。」 (DM_130927_002/1.38.43)

Дъ му кàжиш нъ Русикъ...

Dă mu kàžiš nă Rusikă...

SMP he-DAT.CL tell-PRS.2.SG DM Rusika

「ルシカ (男性) に (あなたは) 言うように。」 (BV3_131003_001/26.25)

Ричй му нъ Рүсикъ...

Riči mu nă Rusikă...

tell-IMP.2.SG he-DAT.CL DM Rusika

「ルシカ (男性) に言いなさい。」 (BV3_131003_001/26.30)

Му дўмъ нъ Г'òрги.

Му dùmă nă G'òrgi.

he-DAT.CL say-PRS.3.SG DM Georgi

「(彼女は) ゲオルギに言います。」 (BV3_131003_001/1.54.25)

... му дăўаш сèне батйсть нъ мунчèту.

... mu dăwaš sène batistă nă munčetu.

it-N.SG.DAT.CL give-PRS.3.SG later cambric DM boy-N.SG+DEF.N.SG

「あとでその男の子に寒冷紗を与える。」 (BV3_131003_001/2.00.49)

Тъй ше му кàжиш нъ Русикъ.

Tăj še mu kàžiš nă Rusikă.

so FUT he-DAT.CL tell-PRS.2.SG DM Rusika

「そのようにルシカに言いなさい。」 (BV3_131003_001/2.42.00)

И му рèкъф нъ тўй.

I mu rəkāf nă tūj.

and it-DAT.CL say-AOR.1.SG DM this-N.SG

「それで、その人に (わたしは) 言った。」 (DM_130927_002/2.16.04)

Ъскът[sic!]²⁴⁶ дъ й да̀м и йа̀с нѐшту
 Īskăt[sic!] dă ì dà̀m i jàs něštu
 want-PRS.3.PL SMP she-DAT.CL give-PRS.1.SG also I-NOM something
нъ мумѝчи, нъ нѐгугу.
nă mumiči, nă nēgutu.
 DM girl-N.SG DM his-ACC+DEF.N.SG

「私もその人の娘に何かをあげたい。」 (BA1_131004_001/2.00.25)

Àс му рѐкъф нъ ѱ̀нзи бѝлгѝр ут та̀м #
 Às mu rĕkăf nă wònze bălgăr ut tà̀m #
 I-NOM he-DAT.CL say-AOR.1.SG DM that-M.SG Bulgarian-M.SG from there
 дъ д̀ош нъ мѐне...
 dă d̀oš nă mène...
 SMP come-PRS.2.SG DM I-ACC

「わたしはそこから来たブルガリア人に、私のところに来るようにと言った。」
(DG2_121029_001/1.32.29)

Тр'абѝ дъ му дѝш нъ ѱ̀нзи...
 Tr'ăbă dă mu dăš nă wònze...
 it_is_necessary-PRS.3.SG SMP he-DAT.CL give-PRS.2.SG DM that-M.SG

「(あなたは) その人に与えなくてはならない。」 (DG2_121029_001/1.35.21)

Дай му и нъ òнзи.
 Daj mu i nă ònzi.
 give-IMP.2.SG he-DAT.CL also DM that-M.SG

「あの人にもあげてください。」 (DM_130927_002/1.23.19)

²⁴⁶ 期待される形は現在 1 人称単数形の *искам/iskam* である。